

# 川前2遺跡

## 第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第193集



2011

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



かわ まえ

# 川前 2 遺跡

## 第 1・2 次発掘調査報告書

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第193集

平成 23 年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター







2次調査区 竪穴住居跡集中区域 完掘状況（北から）



海獣葡萄鏡出土遺構 S T 181竪穴住居跡床面（北から）



海獣葡萄鏡 径62mm



S T 113出土遺物



S T 186出土遺物



S T 583出土遺物



S T 1 出土遺物



S T 135 出土遺物



S T 574 出土遺物



S T 603 出土遺物





S T 632勾玉



S T 574なご石



土製品



金属製品

# 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、川前2遺跡の調査成果をまとめたものです。

川前2遺跡は、山形県のほぼ中央の山形市と中山町の境界にあります。この付近は山形盆地の中心に当たり、最上川が盆地の北西部を蛇行帯を形成しながら流下しており、盆地南側を須川が北流し、白川と立谷川が合流した後、最上川となって日本海に注いでいます。本遺跡周辺には国指定史跡の嶋遺跡をはじめ、今塚遺跡、服部遺跡、藤治屋敷遺跡、馬洗場B遺跡、洪江遺跡、向河原遺跡など、古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺跡が数多く点在し、古くから人々がこの地で生活を営んでいたことがうかがえます。

この度、須川河川改修事業（下流部）にかかわり、川前2遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、旧河川跡、溝跡、土坑などが検出され、奈良時代の小型海獣葡萄鏡や、奈良・平安時代の須恵器や土師器、鉄製品などの遺物が出土し、当時の集落を考える上で、多大な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓蒙や普及、学術研究や教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、調査において御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成23年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 相馬周一郎

# 凡 例

- 1 本書は、須川河川改修事業（下流部）に係る「川前2遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本書の編集は、小林圭一と吉田満が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、鎌上勝則、安部実、阿部明彦、黒坂雅人、伊藤邦弘が監修した。本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第1章 第1節	黒沼昭夫
第1章 第2節	黒沼昭夫 小林圭一
第1章 第3・4節	小林圭一
第Ⅱ～Ⅳ章	小林圭一
第Ⅴ章 第1・2節	小林圭一
第Ⅴ章 第3節	吉田満

- 5 位置図等に付す座標値は、日本測地系（改正測量法以前）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次のとおりである。

S T…堅穴住居跡	S K…土坑	S D…溝跡	S P…ピット	S G…河川跡
S E…井戸跡	S X…性格不明遺構	E L…カマド跡	E P…住居内ピット	E K…住居内土坑
R P…登録土器	R M…登録鉄製品	R Q…登録石製品	P…土器	S…石

- 7 遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書の番号として踏襲した。
- 8 遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。
- 9 基本層序および遺構覆土の色調記載については、1999年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。
- 10 発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々から御協力と御助言をいただいた。（敬称略）  
今尾文昭 卜部行弘 大西貴夫 川本耕三 佐藤敏幸 高橋誠明 樋口隆康 村田晃一  
大崎市古川出土文化財管理センター 奈良県立橿原考古学研究所 東北歴史博物館
- 11 遺構実測図並びに遺物実測図については、図版としてまとめ、通し番号を付与した。

# 調査要項

遺跡名	川前2遺跡		
遺跡番号	平成13年度登録		
所在地	山形県山形市大字中野日字赤坂ほか		
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所		
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
受託期間	平成14年4月1日～平成19年3月31日		
	平成21年4月1日～平成22年3月31日		
	平成22年4月1日～平成23年3月31日		
現地調査	平成14年5月7日～平成14年11月8日（第1次調査）		
	平成15年5月6日～平成15年10月31日（第2次調査）		
調査担当者	平成14年度	調査第一課長	野尻侃
		主任調査研究員	黒坂雅人
		調査研究員	黒沼昭夫（調査主任）
		調査研究員	渡辺淳一
		調査員	多田和弘
	平成15年度	副調査員	衣袋忠雄
		調査第三課長	阿部明彦
		主任調査研究員	氏家信行
		調査研究員	黒沼昭夫（調査主任）
		調査員	須賀井明子
	平成16年度	副調査員	粕谷孝
		調査第三課長	渋谷孝雄
		調査研究員	黒沼昭夫（調査主任）
		調査研究員	高桑弘美
	平成17年度	調査員	須賀井明子
		調査研究部長	佐藤庄一
		調査研究員	高桑弘美（調査主任）
	平成18年度	調査研究部長	尾形與典
		調査研究員	高桑弘美（調査主任）
		調査員	吉田満
平成21年度	整理課長	安部実	
	課長補佐	黒坂雅人	
	主任調査研究員	小林圭一（調査主任）	
	調査員	吉田満	

	平成22年度	整理課長	安部実				
		課長補佐	黒坂雅人				
		専門調査研究員	小林圭一(調査主任)				
		調査員	吉田満				
調査指導	山形県教育庁社会教育課文化財保護室(平成14~17年度)						
	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室(平成18年度)						
	山形県教育庁文化財保護推進課(平成21~22年度)						
調査協力	山形市教育委員会						
	中山町教育委員会						
	山形県教育庁村山教育事務所						
業務委託	遺構写真実測業務 株式会社シン技術コンサル						
	遺構図面編集業務 株式会社セビナス						
	出土品写真撮影・編集業務 株式会社アサヒ印刷						
	遺物保存処理業務 元興寺文化財保存処理センター						
	釜石文化財保存処理センター						
	基準点測量業務 株式会社大洋測量設計社						
	理化学分析業務 バリノ・サーヴェイ株式会社						
発掘作業員	阿部賢一	荒井良悦	池野秀夫	伊藤久章	井上弥市郎	岩田正雄	氏家健輔
	大江國康	大沼健三	工藤貞次郎	小林弘	近藤智康	今野保男	佐藤武
	佐藤友昭	設案要一	清水金吾	鈴木秀善	高橋次夫	田中寛一	土屋千光
	東海林仁助	富樫一由	長岡忠	橋間定夫	布施広幸	峯田武典	渡辺藤一
	渡辺利喜雄	板垣牧子	井上和子	太田和子	沖津みさ子	金沢弘子	玄地豊子
	佐藤久子	洪間すゐの	白鳥保子	山口陽子	吉田啓子	新野幸枝	神保精治
	菅原一雄	鈴木秀雄	百瀬桂治	山川章衛	浦山勇	草刈利男	松井清司
	五十嵐尉公	伊藤憲	佐藤良三	渋谷常夫	樋渡勇吉	村山良三	阿部喜一
	浦山四郎	小関勝敏	渡辺喜久男	小沼真由美	佐藤孝子	高橋敏子	森田知恵
	鈴木光郎	椎名重一郎	石井恵子	原田元子	金澤麻美	庄司友晴	荒木由美子
	菅野せつ子						
整理作業員	山田澄子	青木明理	永井利子	中嶋美恵子	高橋加寿子	鈴木由実	船川令人
	山口敦子						

# 目 次

I	調査の経緯	
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	1
3	整理作業の経過	3
4	グリッドの設定	3
II	遺跡の位置と環境	
1	地理的環境	4
2	歴史的環境	4
III	第1次調査の成果	
1	第1次調査の概要	11
2	第1次調査の堅穴住居跡	11
3	第1次調査の井戸跡	29
4	第1次調査の土坑	30
5	第1次調査のその他の遺構	30
IV	第2次調査の成果	
1	第2次調査の概要	32
2	第2次調査の堅穴住居跡	32
3	第2次調査の掘立柱建物跡	49
4	第2次調査の井戸跡	50
5	第2次調査の溝跡	50
6	第2次調査の土坑	51
V	理化学的分析	
1	自然科学分析(1)	53
2	自然科学分析(2)	75
3	須恵器の理化学的分析	80
4	破鏡の理化学的分析	91
VI	総括	
1	遺跡の総括	94
2	検出遺構について	94
3	出土遺物について	96
	引用・参考文献	105
	報告書抄録	巻末
	遺構全体図	付図

## 表

表1 川前2 遺跡周辺の遺跡	7	表25 1次遺物観察表(10)	139
表2 分析試料一覧	62	表26 1次遺物観察表(11)	140
表3 放射性炭素年代測定結果	61	表27 1次遺物観察表(12)	141
表4 暦年校正結果	61	表28 1次遺物観察表(13)	142
表5 珪藻分析結果(1)	63	表29 1次遺物観察表(14)	143
表6 珪藻分析結果(2)	64	表30 1次遺物観察表(15)	144
表7 花粉分析結果	66	表31 1次遺物観察表(16)	145
表8 植物珪酸体分析結果	65	表32 1次遺物観察表(17)	146
表9 樹種同定結果	61	表33 1次土製品観察表	147
表10 種実・微細物分析結果	61	表34 1次石製品観察表	147
表11 放射性炭素年代測定および同定結果	75	表35 1次金属製品観察表	147
表12 リン・カルシウム分析結果	78	表36 2次遺物観察表(1)	148
表13 試料一覧	80	表37 2次遺物観察表(2)	149
表14 薄片観察結果	82	表38 2次遺物観察表(3)	150
表15 蛍光X線分析結果	86	表39 2次遺物観察表(4)	151
表16 1次遺物観察表(1)	130	表40 2次遺物観察表(5)	152
表17 1次遺物観察表(2)	131	表41 2次遺物観察表(6)	153
表18 1次遺物観察表(3)	132	表42 2次遺物観察表(7)	154
表19 1次遺物観察表(4)	133	表43 2次遺物観察表(8)	155
表20 1次遺物観察表(5)	134	表44 2次遺物観察表(9)	156
表21 1次遺物観察表(6)	135	表45 2次土製品観察表	157
表22 1次遺物観察表(7)	136	表46 2次石製品観察表	157
表23 1次遺物観察表(8)	137	表47 2次金属製品観察表	158
表24 1次遺物観察表(9)	138		

## 挿 図

第1 図 調査概要図	2	第16 図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(%)および砂の粒徑組成	84
第2 図 山形盆地地形分類図	5	第17 図 碎屑物・基質・孔隙の割合	85
第3 図 川前2 遺跡周辺の遺跡	6	第18 図 胎土化学組成散布図	87
第4 図 座標配置図	9	第19 図 胎土薄片(1)	88
第5 図 グリッド配置図	10	第20 図 胎土薄片(2)	89
第6 図 主要珪藻化石群集の層位分布	67	第21 図 胎土薄片(3)	90
第7 図 遺構覆土の植物珪酸体群集と珪化組織片の産状	68	第22 図 破鏡表面のXRFスペクトル	92
第8 図 土層断面の植物珪酸体群集と珪化組織片の産状	66	第23 図 山形盆地の地形分類と川前2 遺跡関連遺跡	106
第9 図 珪藻化石・花粉化石	69	第24 図 川前2 遺跡時期別遺構分布図(1)	107
第10 図 植物珪酸体(1)	70	第25 図 川前2 遺跡時期別遺構分布図(2)	108
第11 図 植物珪酸体(2)・種実遺体	71	第26 図 川前2 遺跡時期別遺構分布図(3)	109
第12 図 炭化材(1)	72	第27 図 出入口と推定される施設を有する掘立柱建物跡	110
第13 図 炭化材(2)	73	第28 図 土器分類集成図(1)	111
第14 図 炭化材(3)	74	第29 図 土器分類集成図(2)	112
第15 図 炭化材・種実遺体	79		

第 30 図	土器分類集成図 (3)	113	第 39 図	住居跡出土土器の変遷 (3)	122
第 31 図	土器分類集成図 (4)	114	第 40 図	住居跡出土土器の変遷 (4)	123
第 32 図	土器分類集成図 (5)	115	第 41 図	住居跡出土土器の変遷 (5)	124
第 33 図	土器分類集成図 (6)	116	第 42 図	住居跡出土土器の変遷 (6)	125
第 34 図	土器分類集成図 (7)	117	第 43 図	食器具の変遷 (1)	126
第 35 図	土器分類集成図 (8)	118	第 44 図	煮炊具の変遷 (1)	127
第 36 図	文字資料集成図	119	第 45 図	食器具の変遷 (2)	128
第 37 図	住居跡出土土器の変遷 (1)	120	第 46 図	煮炊具の変遷 (2)	129
第 38 図	住居跡出土土器の変遷 (2)	121			

## 図 版

図版 1	第 1・2 次調査遺構配置図	161	図版33	S T 116 実測図	196
図版 2	第 1・2 次調査遺構配置図 (1)	163	図版34	S T 118 実測図	197
図版 3	第 1・2 次調査遺構配置図 (2)	164	図版35	S T 121・124・S X 122 実測図	198
図版 4	第 1・2 次調査遺構配置図 (3)	165	図版36	S T 119・120・123・S D 125 実測図	199
図版 5	第 1・2 次調査遺構配置図 (4)	166	図版37	S T 70 実測図	201
図版 6	S T 99・97・98・2 実測図	167	図版38	S T 130・133 実測図	202
図版 7	S T 1・S X 89 実測図	168	図版39	S T 63・68 実測図	203
図版 8	S T 3 実測図	169	図版40	S T 64 実測図	204
図版 9	S T 9・8 実測図	170	図版41	S T 65・66 実測図	205
図版10	S T 5・S X 105 実測図	171	図版42	S T 129・S D 158・S K 160 実測図	206
図版11	S T 4・88 実測図	172	図版43	S T 61・145・161・S D 136 実測図	207
図版12	S T 7 実測図	173	図版44	S T 108 実測図	209
図版13	S T 6 実測図	174	図版45	S T 16 実測図	210
図版14	S T 83 実測図	175	図版46	S E 80 実測図	211
図版15	S T 82・85 実測図	176	図版47	S E 180 実測図	212
図版16	S T 10 実測図	177	図版48	S K 90 実測図	213
図版17	S T 11・12 実測図	178	図版49	S K 509・S X 507 実測図	214
図版18	S T 81・84 実測図	179	図版50	S H 179 実測図	215
図版19	S T 86・91・186 実測図	180	図版51	S T 542・570・S D 527 実測図	216
図版20	S T 77 実測図	181	図版52	S T 535・1 実測図	217
図版21	S T 74・76 実測図	182	図版53	S T 535・2 実測図	218
図版22	S T 13・78 実測図	183	図版54	S T 549・1 実測図	219
図版23	S T 14 実測図	185	図版55	S T 549・2 実測図	220
図版24	S T 15 実測図	186	図版56	S T 558・1 実測図	221
図版25	S T 72・73・20 実測図	187	図版57	S T 558・2 実測図	222
図版26	S T 17 実測図	189	図版58	S T 551 実測図	223
図版27	S T 135・19 実測図	190	図版59	S T 552・S K 647 実測図	224
図版28	S T 178・182 実測図	191	図版60	S T 550・646 実測図	225
図版29	S T 18 実測図	192	図版61	S T 550 カマド 実測図	226
図版30	S T 113・112 実測図	193	図版62	S T 635・554 実測図	227
図版31	S T 111 実測図	194	図版63	S T 555・1 実測図	228
図版32	S T 114・115・117・127 実測図	195	図版64	S T 555・2 実測図	229



国版65	S T 651実測図	230	国版108	S T 597実測図	275
国版66	S T 651実測図	231	国版109	S T 622 - 1 実測図	277
国版67	S T 560実測図	232	国版110	S T 622 - 2 実測図	278
国版68	S T 618実測図	233	国版111	S T 627 - 1 実測図	279
国版69	S T 553・648実測図	234	国版112	S T 627 - 2 実測図	280
国版70	S T 584実測図	235	国版113	S T 632・633実測図	281
国版71	S T 585 - 1 実測図	236	国版114	S T 628実測図	283
国版72	S T 585 - 2 実測図	237	国版115	S T 181 - 1 実測図	284
国版73	S T 572・573実測図	238	国版116	S T 181 - 2 実測図	285
国版74	S T 574・S D 575実測図	239	国版117	S B 600実測図	286
国版75	S T 612実測図	241	国版118	S B 701実測図	287
国版76	S T 614 - 1 実測図	242	国版119	S E 655実測図	288
国版77	S T 614 - 2 実測図	243	国版120	S D 523・524・525・529・709実測図	289
国版78	S T 615 - 1 実測図	244	国版121	S D 598実測図	290
国版79	S T 615 - 2 実測図	245	国版122	S K 545・546・666実測図	291
国版80	S T 589 - 1 実測図	246	国版123	S K 658・608実測図	292
国版81	S T 589 - 2 実測図	247	国版124	S K 629・630実測図	293
国版82	S T 590・588実測図	248	国版125	第1次遺物実測図(1)	294
国版83	S T 586・587実測図	249	国版126	第1次遺物実測図(2)	295
国版84	S T 582 - 1 実測図	250	国版127	第1次遺物実測図(3)	296
国版85	S T 582 - 2 実測図	251	国版128	第1次遺物実測図(4)	297
国版86	S T 616・617実測図	252	国版129	第1次遺物実測図(5)	298
国版87	S T 619・620実測図	253	国版130	第1次遺物実測図(6)	299
国版88	S T 619・620カマド・621・S K 650実測図	254	国版131	第1次遺物実測図(7)	300
国版89	S T 583 - 1 実測図	255	国版132	第1次遺物実測図(8)	301
国版90	S T 583 - 2 実測図	256	国版133	第1次遺物実測図(9)	302
国版91	S T 707・595実測図	257	国版134	第1次遺物実測図(10)	303
国版92	S T 610・S K 649実測図	258	国版135	第1次遺物実測図(11)	304
国版93	S T 591実測図	259	国版136	第1次遺物実測図(12)	305
国版94	S T 687・686実測図	260	国版137	第1次遺物実測図(13)	306
国版95	S T 592実測図	261	国版138	第1次遺物実測図(14)	307
国版96	S T 593実測図	262	国版139	第1次遺物実測図(15)	308
国版97	S T 684実測図	263	国版140	第1次遺物実測図(16)	309
国版98	S T 680 - 1 実測図	264	国版141	第1次遺物実測図(17)	310
国版99	S T 680 - 2 実測図	265	国版142	第1次遺物実測図(18)	311
国版100	S T 602 - 1 実測図	266	国版143	第1次遺物実測図(19)	312
国版101	S T 602 - 2 実測図	267	国版144	第1次遺物実測図(20)	313
国版102	S T 604・682実測図	268	国版145	第1次遺物実測図(21)	314
国版103	S T 604カマド実測図	269	国版146	第1次遺物実測図(22)	315
国版104	S T 607実測図	270	国版147	第1次遺物実測図(23)	316
国版105	S T 603 - 1 実測図	271	国版148	第1次遺物実測図(24)	317
国版106	S T 603 - 2 実測図	273	国版149	第1次遺物実測図(25)	318
国版107	S T 703・S D 704・S T 631実測図	274	国版150	第1次遺物実測図(26)	319

国版151 第1次遣物実測図 (27)	320	国版194 第2次遣物実測図 (1)	363
国版152 第1次遣物実測図 (28)	321	国版195 第2次遣物実測図 (2)	364
国版153 第1次遣物実測図 (29)	322	国版196 第2次遣物実測図 (3)	365
国版154 第1次遣物実測図 (30)	323	国版197 第2次遣物実測図 (4)	366
国版155 第1次遣物実測図 (31)	324	国版198 第2次遣物実測図 (5)	367
国版156 第1次遣物実測図 (32)	325	国版199 第2次遣物実測図 (6)	368
国版157 第1次遣物実測図 (33)	326	国版200 第2次遣物実測図 (7)	369
国版158 第1次遣物実測図 (34)	327	国版201 第2次遣物実測図 (8)	370
国版159 第1次遣物実測図 (35)	328	国版202 第2次遣物実測図 (9)	371
国版160 第1次遣物実測図 (36)	329	国版203 第2次遣物実測図 (10)	372
国版161 第1次遣物実測図 (37)	330	国版204 第2次遣物実測図 (11)	373
国版162 第1次遣物実測図 (38)	331	国版205 第2次遣物実測図 (12)	374
国版163 第1次遣物実測図 (39)	332	国版206 第2次遣物実測図 (13)	375
国版164 第1次遣物実測図 (40)	333	国版207 第2次遣物実測図 (14)	376
国版165 第1次遣物実測図 (41)	334	国版208 第2次遣物実測図 (15)	377
国版166 第1次遣物実測図 (42)	335	国版209 第2次遣物実測図 (16)	378
国版167 第1次遣物実測図 (43)	336	国版210 第2次遣物実測図 (17)	379
国版168 第1次遣物実測図 (44)	337	国版211 第2次遣物実測図 (18)	380
国版169 第1次遣物実測図 (45)	338	国版212 第2次遣物実測図 (19)	381
国版170 第1次遣物実測図 (46)	339	国版213 第2次遣物実測図 (20)	382
国版171 第1次遣物実測図 (47)	340	国版214 第2次遣物実測図 (21)	383
国版172 第1次遣物実測図 (48)	341	国版215 第2次遣物実測図 (22)	384
国版173 第1次遣物実測図 (49)	342	国版216 第2次遣物実測図 (23)	385
国版174 第1次遣物実測図 (50)	343	国版217 第2次遣物実測図 (24)	386
国版175 第1次遣物実測図 (51)	344	国版218 第2次遣物実測図 (25)	387
国版176 第1次遣物実測図 (52)	345	国版219 第2次遣物実測図 (26)	388
国版177 第1次遣物実測図 (53)	346	国版220 第2次遣物実測図 (27)	389
国版178 第1次遣物実測図 (54)	347	国版221 第2次遣物実測図 (28)	390
国版179 第1次遣物実測図 (55)	348	国版222 第2次遣物実測図 (29)	391
国版180 第1次遣物実測図 (56)	349	国版223 第2次遣物実測図 (30)	392
国版181 第1次遣物実測図 (57)	350	国版224 第2次遣物実測図 (31)	393
国版182 第1次遣物実測図 (58)	351	国版225 第2次遣物実測図 (32)	394
国版183 第1次遣物実測図 (59)	352	国版226 第2次遣物実測図 (33)	395
国版184 第1次遣物実測図 (60)	353	国版227 第2次遣物実測図 (34)	396
国版185 第1次遣物実測図 (61)	354	国版228 第2次遣物実測図 (35)	397
国版186 第1次遣物実測図 (62)	355	国版229 第2次遣物実測図 (36)	398
国版187 第1次遣物実測図 (63)	356	国版230 第2次遣物実測図 (37)	399
国版188 第1次遣物実測図 (64)	357	国版231 第2次遣物実測図 (38)	400
国版189 第1次遣物実測図 (65)	358	国版232 第2次遣物実測図 (39)	401
国版190 第1次遣物実測図 (66)	359	国版233 第2次遣物実測図 (40)	402
国版191 第1次遣物実測図 (67)	360	国版234 第2次遣物実測図 (41)	403
国版192 第1次遣物実測図 (68)	361	国版235 第2次遣物実測図 (42)	404
国版193 第1次遣物実測図 (69)	362	国版236 第2次遣物実測図 (43)	405

## 写真図版

巻頭写真1 2次調査区  
 巻頭写真2 S T 181海獣歯骨鏡  
 巻頭写真3 S T 113出土遺物  
 巻頭写真4 S T 186・583出土遺物  
 巻頭写真5 S T 1・135・574・603出土遺物  
 巻頭写真6 土製品、S T 574金二石、S T 632均玉  
 金属製品  
 写真図版1 道跡透景、調査区近景  
 写真図版2 1次調査区南端、S T 2・97・98・99  
 写真図版3 S T 1  
 写真図版4 S T 3・4・5  
 写真図版5 S T 4・5・88  
 写真図版6 S T 5・7  
 写真図版7 S T 6・8  
 写真図版8 S T 82・83・85  
 写真図版9 S T 10・11・12・81・84  
 写真図版10 S T 10・11・12・81  
 写真図版11 S T 181、S E 80  
 写真図版12 S T 74・76・77  
 写真図版13 S T 76・86・91  
 写真図版14 S T 74・76  
 写真図版15 S T 13・78  
 写真図版16 S T 14・15  
 写真図版17 S T 186  
 写真図版18 S T 20・72・73  
 写真図版19 S T 16・17・20・72  
 写真図版20 S T 18・108  
 写真図版21 S T 19・135  
 写真図版22 S T 111・112  
 写真図版23 S T 113  
 写真図版24 S T 114・115・117・127  
 写真図版25 S T 116  
 写真図版26 S T 118・119、S D 125  
 写真図版27 S T 123  
 写真図版28 S T 120・121・124  
 写真図版29 S T 70  
 写真図版30 S T 63・64・65・129  
 写真図版31 S T 129  
 写真図版32 S T 63  
 写真図版33 S T 64

写真図版34 S T 65  
 写真図版35 S T 66  
 写真図版36 S T 68  
 写真図版37 S T 61・161  
 写真図版38 S E 180、S H 179  
 写真図版39 S X 507  
 写真図版40 2次調査区南側  
 写真図版41 S T 535  
 写真図版42 S T 558  
 写真図版43 S T 549・551・552・558  
 写真図版44 S T 550  
 写真図版45 S T 554・555  
 写真図版46 S T 554・651・654、S E 655  
 写真図版47 S T 553・560  
 写真図版48 S T 584・585・612  
 写真図版49 2次調査区 中央道構集中域  
 写真図版50 S T 574  
 写真図版51 S T 583  
 写真図版52 S T 582・586・587  
 写真図版53 S T 586・588・589  
 写真図版54 S T 591・687  
 写真図版55 S T 590・591・686・687  
 写真図版56 S T 614  
 写真図版57 S T 615  
 写真図版58 2次調査区 中央道構集中域  
 写真図版59 S T 619・620・621  
 写真図版60 S T 610・616・618・619・620・648、  
 S X 649  
 写真図版61 S T 592・593・680・684  
 写真図版62 S T 592・597  
 写真図版63 S T 597  
 写真図版64 S T 595・684  
 写真図版65 S T 602・604・607  
 写真図版66 S T 602・603・604・682  
 写真図版67 2次調査区北端部  
 写真図版68 S T 622・627  
 写真図版69 S T 622・627  
 写真図版70 S T 628・632、S K 658  
 写真図版71 S T 631・632・633  
 写真図版72 S B 600

写真図版73	S B 600・701	写真図版98	第1次出土遺物 (23)
写真図版74	S D 575・598、S K 650	写真図版99	第1次出土遺物 (24)
写真図版75	S E 655、S K 608・629・630・658	写真図版100	第1次出土遺物 (25)
写真図版76	第1次出土遺物 (1)	写真図版101	第1次出土遺物 (26)
写真図版77	第1次出土遺物 (2)	写真図版102	第1次出土遺物 (27)
写真図版78	第1次出土遺物 (3)	写真図版103	第1次出土遺物 (28)
写真図版79	第1次出土遺物 (4)	写真図版104	第2次出土遺物 (1)
写真図版80	第1次出土遺物 (5)	写真図版105	第2次出土遺物 (2)
写真図版81	第1次出土遺物 (6)	写真図版106	第2次出土遺物 (3)
写真図版82	第1次出土遺物 (7)	写真図版107	第2次出土遺物 (4)
写真図版83	第1次出土遺物 (8)	写真図版108	第2次出土遺物 (5)
写真図版84	第1次出土遺物 (9)	写真図版109	第2次出土遺物 (6)
写真図版85	第1次出土遺物 (10)	写真図版110	第2次出土遺物 (7)
写真図版86	第1次出土遺物 (11)	写真図版111	第2次出土遺物 (8)
写真図版87	第1次出土遺物 (12)	写真図版112	第2次出土遺物 (9)
写真図版88	第1次出土遺物 (13)	写真図版113	第2次出土遺物 (10)
写真図版89	第1次出土遺物 (14)	写真図版114	第2次出土遺物 (11)
写真図版90	第1次出土遺物 (15)	写真図版115	第2次出土遺物 (12)
写真図版91	第1次出土遺物 (16)	写真図版116	第2次出土遺物 (13)
写真図版92	第1次出土遺物 (17)	写真図版117	第2次出土遺物 (14)
写真図版93	第1次出土遺物 (18)	写真図版118	第2次出土遺物 (15)
写真図版94	第1次出土遺物 (19)	写真図版119	第2次出土遺物 (16)
写真図版95	第1次出土遺物 (20)	写真図版120	第2次出土遺物 (17)
写真図版96	第1次出土遺物 (21)	写真図版121	第2次出土遺物 (18)
写真図版97	第1次出土遺物 (22)	写真図版122	第2次出土遺物 (19)



# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経緯

川前2遺跡は、山形市と中山町にまたがっている。調査区南端から北寄り110mほどに行政区域の境界が存し、北側の下流域が山形市大字中野目字赤坂地内、南側の上流域が東村山郡中山町大字長崎文新田地内にあたる。本遺跡は調査区東側を北流する須川左岸の自然堤防上に立地するが、現在の最上川との合流点からは2km上流に当たる。須川は古くより水運の栄えた河川で、その流域には「船町」等その名残をとどめた地名が残されている。調査区の北方100mで白川（馬見ヶ崎川と高瀬川が合流）、同600mで立谷川と合流し、最上川へ注いでいる。この一帯は上記のように河川の合流点が集中するため、増水時には冠水の頻発地域となっており、治水対策が喫緊の課題となってきた。

平成14年度に、国土交通省東北地方整備局山形工事事務所（当時）による須川河川改修事業（下流部）が計画された。改修事業の内容は、堤防本体の拡幅と嵩上げ、河川敷内の土取りのための掘削などであり、蛇行によって狭く浅くなっている河道を、掘削することによって広く直線的に導き、流下能力を向上させることを目的としている。これに先立ち山形県教育委員会では、平成13年5月9日に現地踏査、同年6月13・14日、7月19日、9月4～7日の3回にわたって、事業予定地について詳細分布調査（試掘調査）を実施し、トレンチ計32本が設定された。その結果、竪穴住居跡や土坑等が検出され、奈良・平安時代の集落遺跡の「川前2遺跡」として、新規に登録されるに至った（山形県教育委員会2003）。

試掘調査の結果を踏まえて、山形県教育委員会と事業主体者である国土交通省東北地方整備局山形工事事務所との間で、遺跡の取り扱いについて協議が行われた。その結果、同事業との関連で削平されると判断された、川前2遺跡の8,500m<sup>2</sup>について緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることで協議が整い、平成14年度に財団法人山形県埋蔵文化財センターが、国土交通省東北地方整備局山形工事事務所の委託を受けて、発掘調査を実施す

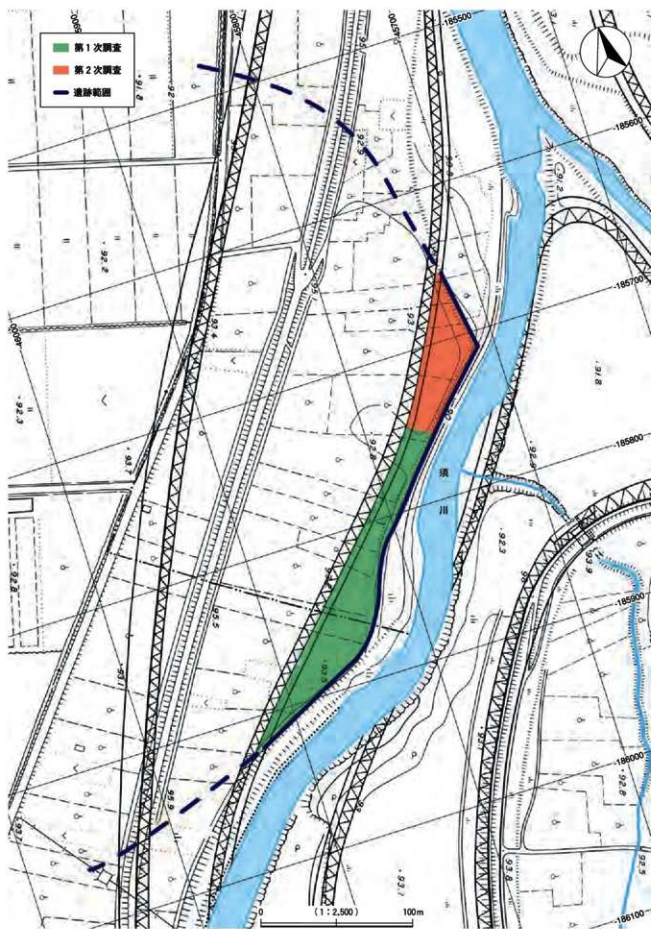
ることとなった。なお、同じ須川河川改修事業（下流部）としては、平成14年に達磨寺遺跡（山形県埋蔵文化財センター2004c）の発掘調査、平成17年に土敷免遺跡（山形県埋蔵文化財センター2007）の発掘調査、平成19・20年に川前2遺跡第3・4次調査が実施されている。

## 2 調査の経過

平成14年4月23日（火）、中山町大字長崎に所在する中山町中央公民館において、川前2遺跡の発掘調査に係る関係する機関の担当者が参集して、同遺跡に係る発掘調査の打合せが開催され、発掘調査に至る経過報告や調査体制、調査の方法等が確認された。それを受けて第1次調査に当たる平成14年度の調査は、平成14年5月7日（火）から11月1日（金）までの実質119日間の予定で、工事で掘削される8,500m<sup>2</sup>を対象として実施することとなった。5月7日に調査事務所にて器材を搬入し、現地調査を開始した。調査区域は長軸（南西～北東軸）375m、短軸（北西～南東軸）25～35mの細長い眼鏡状である。5月9日（木）～6月6日（木）にかけて重機による調査対象地域全面の表土除去作業を行い、遺構確認面まで掘り下げた。表土除去が終了した区域から順次、ジョレン等の道具を使用して遺構検出作業を実施し、竪穴住居跡・井戸跡・溝跡・河川跡等を確認した。

6月17日（月）より、須川上流側に当たる調査区の南側から検出した遺構の調査を開始した。その後、記録作業等の進捗状況を考え、順次北側へと調査を進めていった。出土した遺物のうち台帳に登録した遺物に対しては、出土地点・レベル等の記録を行い取り上げた。また検出した遺構については、写真撮影、土層断面図・遺構平面図作成などの記録作業を実施しながら調査を進めていった。

調査開始以前の川前2遺跡は、奈良・平安時代の集落跡と見られていた。しかし調査を進めていく過程で、古墳時代の遺物が出土し、古墳時代と奈良・平安時代の生活面が重層した複合遺跡であることが判明した。この結果をもとに7月4日（木）、山形県教育委員会と国土交



第1図 調査概要図

通省東北地方整備局山形工事事務所（当時）との間で、川前2遺跡の調査計画に関する協議が持たれた。平成15年度以降も引き続き調査を実施することと、平成14年度は奈良・平安時代の遺構面の6割程度の面積を調査することで協議が整った。

10月22日（火）には、遺構の空中写真測量を実施し、その後古墳時代の遺構面を確認する作業を行い、当初予定された調査期間を1週間延長して、11月8日（金）に現地調査を終了した。実働124日間となった。平成14年度の調査面積は最終的に5,500㎡となり、調査区の南側、調査面積の約2/3を終了し、調査した堅穴住居跡は65棟に達した。なお、10月18日（金）に現地で調査説明会を開催したところ、約45名の参加者があった。またS T 181住居跡から出土した海獣葡萄鏡は、11月1日（金）に取り上げ、同住居跡の調査は第2次調査でも継続した。第1次調査で出土した遺物の文化財認定数は148箱である。

第2次調査については、平成15年4月21日（月）、前年と同様に中山町中央公民館において、川前2遺跡第2次調査に係る遺跡発掘調査の打合せを開催した。それを受けて第2次調査は、調査区北側の範囲3,000㎡の面積を、平成15年5月6日（火）～10月31日（金）までの実働120日間で行うこととなった。表土除去については前年度に完了していたため、器材搬入後直ぐに遺構検出と遺構調査に着手し、前年度と同様の手順で調査を進めていった。調査の過程で、遺構調査面よりも下に、古墳時代の生活面が存在することが判明し、現地でも国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所と今後の調査計画に関する協議を行った。その結果、第2次調査終了後に一旦現地を埋め戻して、次年度以降改めて下層の発掘調査を実施することで協議が整った。

10月24日（金）には、遺構の空中写真撮影を実施し、10月31日（金）に現地調査を終了した。調査終了後は調査区の埋め戻し作業に着手し、12月26日（金）に埋め戻しを完了した。なお9月27日（土）に現地でも第2次調査の説明会を開催したところ、約80名の参加者があった。第2次調査で調査した堅穴住居跡は61棟で、出土した遺物の文化財認定数は130箱である。

その後、下層の古墳時代の遺構面の発掘調査は、平成19（2007）年に第3次調査、同20（2008）年に第4次調

査が実施されており、未買収区域を除く川前2遺跡の現地の調査は完了している。

### 3 整理作業の経過

遺物の水洗及び注記などの基礎的な整理作業は、第1次調査は平成14年11月～平成15年3月、第2次調査は平成15年11月～平成16年3月まで実施し、本格的な整理作業は平成16年4月から開始した。両次の調査で大量の遺物が出土してコンテナ278箱となった。特に住居跡内から出土した土器の量が多く、接合・復元作業に多くの時間を必要とし、平成16・17年度の2ヶ年をその作業に充当した。

遺物の選定・分類・実測・トレース及び遺構図版作成は平成17・18年度に実施したが、途中の平成19・20年度に第3・4次の発掘調査が入ったため、第1・2次調査の整理作業は2年間休止した。

平成21年度は図版作成・原稿執筆・報告書編集を実施し、出土品写真撮影と編集業務を株式会社ササヒ印刷に委託し、平成22年度に発掘調査報告書を印刷・刊行した。

### 4 グリッドの設定

調査区を区画するグリッドは、日本測地系（改正測量法以前）に基づいて、5m四方で設定した（第4・5図）。日本測地系に基づいた理由は、調査開始時に国土交通省東北地方建設局山形工事事務所（当時）から提供された「須川平面図」が、同測地系に基づいて作成された事業計画図（縮尺1/2,500）であったことによるもので、平成19・20年に実施された第3・4次調査においても、整合性を持たせるため同じ測地系とグリッド制を踏襲した。

平面が細長い眼鏡状を呈した調査区域のうち、調査区南端の右眼レンズ右端の部分をグリッドの基点として、X軸は南から北に1～58、Y軸は西から東に1～44として座標を設定し、「X1-Y1区」というように位置を標記した。調査区は南西端（X1-Y1区）がX座標-185925、Y座標-45940、北東端（X58-Y44区）がX座標-185640、Y座標-45725の範囲となり、「X6-Y9区」がX座標-185900、Y座標-45900の基準の座標となる。



## II 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

川前2遺跡は、山形県山形市大字中野目字赤坂地内と東村山郡中山町大字長崎文新田地内（北緯38度19分38秒、東経140度18分20秒）に位置する。本遺跡が位置する中野目地区は、山形市の北西部にあり、山形盆地の中央やや西寄りの海拔100m以下の盆地底に当たり、東に奥羽脊梁山脈、西に白鷹丘陵、月山、薬山を望み、馬見ヶ崎川や立谷川によって形成された大規模な扇状地の前縁部に位置しており、周囲には田圃・果樹地帯が広がっている。

山形盆地は最上川流域に当たり、南北約40km、東西約10～20kmの舟底形の構造盆地で、北接する尾花沢盆地とは河島山丘陵、南接する上山盆地とは蔵王火山の泥流堆積による狭窄部によって画される。最上川は盆地の北西部を蛇行帯を形成しながら北流し、盆地の東側には扇状地が発達しており、北から乱川・立谷川・馬見ヶ崎川の各扇状地が並列し、北のものほど規模が大きく、間析が進み、段丘化している。また盆地西側には、扇面が比較的平坦な寒河江川扇状地が形成されている（第2図）。

川前2遺跡は、奥羽山系の蔵王連峰に源を発する須川左岸の自然堤防上の微高地に立地し、海拔は192～93mを測る。本遺跡の東側を北流する須川は、上市市、山形市、山辺町、中山町、天童市の各市町を貫流して最上川に注いでいるが、最上川水系では第2位の流域面積（682km<sup>2</sup>）を有している。須川は本遺跡の北端で白川（馬見ヶ崎川と高瀬川が合流）に、更に400m下流で立谷川に合流し、その先1.6kmで北流する最上川と合わさるが、流路は盆地の東側に発達した馬見ヶ崎川と立谷川の扇状地によって盆地の西側に押しやられて、盆地西縁を画する白鷹丘陵に近接している（第2図）。また現在は水質が硫酸イオンを主体とする酸性毒水河川となっており、魚類が生息できない環境にあるが、本遺跡の周囲には水鳥類が多く生息しており、遺跡周辺の河川数は狩猟区域となっている。

遺跡周辺は最上川を中心に、複数の河川が合流してお

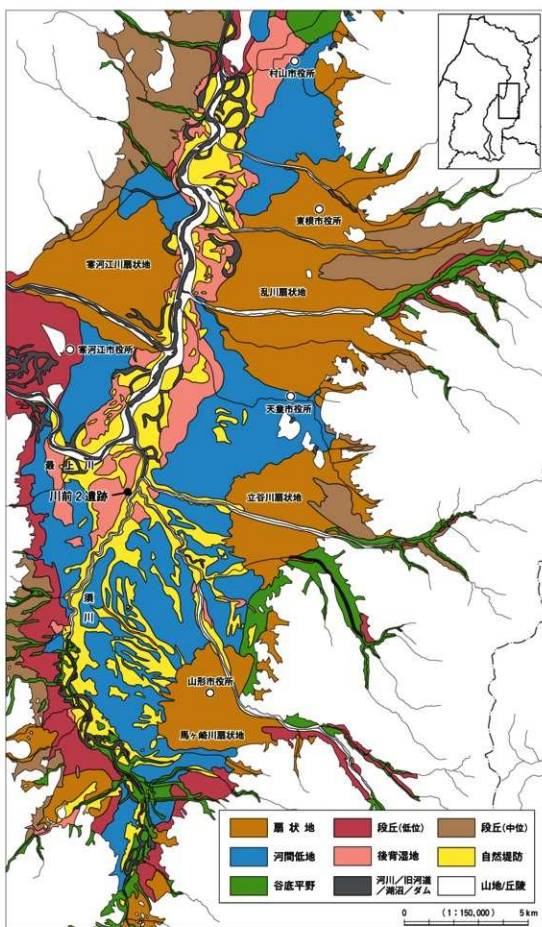
り、増水時には冠水の危険にさらされた地域である。しかしこの周辺は古くより、陸路、水路ともに交通の要衝となっており、特に本遺跡の約2km上流の「船町」と最上川の合流点に位置する「寺津」は、江戸時代を通じて最上川舟運の集積地として繁栄していた。古墳時代や奈良・平安時代においても、この地域の遺跡が水運の要衝としての役割を担っていたと推測され、川前2遺跡もそういう性格の遺跡であった可能性が考えられる。

### 2 歴史的環境

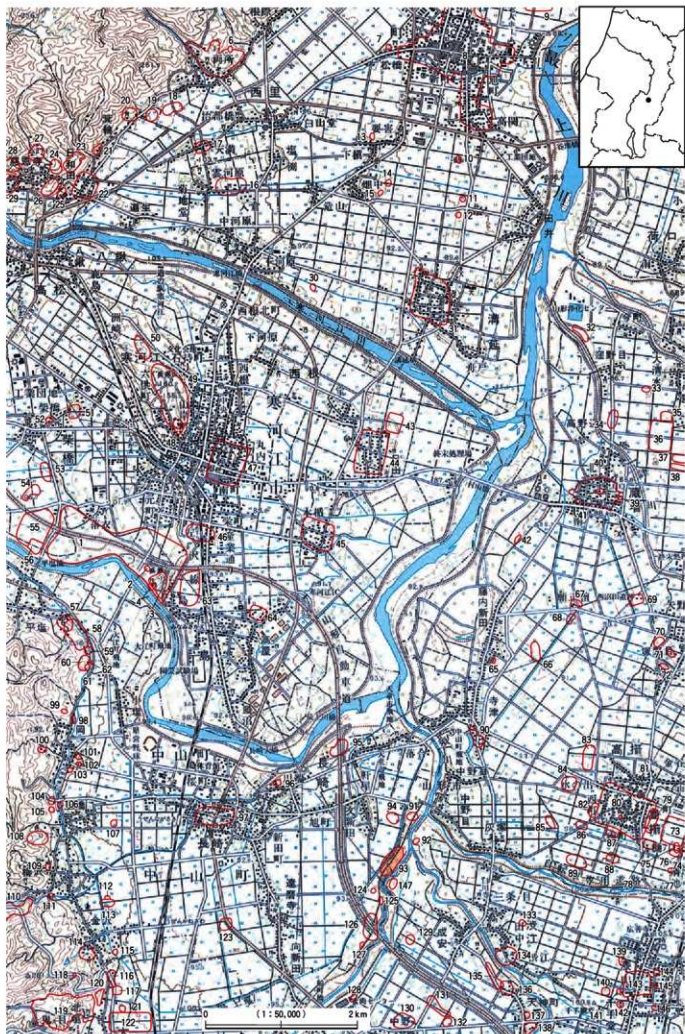
川前2遺跡は須川の自然堤防上に立地する弥生時代～奈良・平安時代にかけての集落跡である。周囲には古墳時代や奈良・平安時代の遺跡が多く分布している。第3図には、国土地理院発行の1/50,000地形図「楢岡」・「山形」を使用し、図幅内に周知されている147遺跡をプロットした。

縄文時代では、矢口遺跡（70）、砂子田遺跡（84）、高瀬山遺跡（1）、石田遺跡（46）等が、後・晩期の有力遺跡として上げることができる。特に縄文時代後期中葉（宝ヶ峯2式期）になると、天童市砂子田遺跡に象徴されるように、扇状地扇端部～前縁部にかけての沖積低地への遺跡の広がりが顕在化する。図幅の範囲外の天童市板橋（1）遺跡では大木7a式、砂子田遺跡（84）では大木8b式が出土していることから、沖積低地への進出は縄文中期に顕現するが、遺跡数が増加するのは縄文後期中葉の宝ヶ峯2式期と晩期後葉の大洞A新式期である（小林2001）。それ以前の縄文時代の遺跡は盆地周縁の合流に分布する傾向が見られ、例外的に乱川扇状地扇端には縄文前期後葉の天童市柏木遺跡が位置している。

弥生時代では、扇状地の前縁部に遺跡が点在するが、水田耕作の普及を反映した立地形態と考えられる。中でも山形市向河原遺跡（135）では、弥生時代中期3棟、後期4棟の住居跡が検出され、住居内からは炭化した米やアワ・ヒエ類が採取されている（山形県埋蔵文化財センター2005a）。また寒河江市石田遺跡（46）では前期の再葬墓が調査され、山形盆地では唯一の検出事例と



第2図 山形盆地地形分類図



第3図 川前2遺跡周辺の遺跡

表1 川前2遺跡周辺の遺跡

遺跡名	市町村	時代	種別
1 高瀬山遺跡	東河江市	旧石器～古墳	集落跡
2 高瀬山古墳	東河江市	古墳	墳墓
3 高瀬山新館	東河江市	中世	城跡跡
4 高瀬山経塚遺跡	東河江市	鎌倉	経塚
5 和瀬山新館	河北町	中世	城跡跡
6 真田遺跡	河北町	縄文、平安	遺物包含地
7 若宮八幡遺跡	河北町	平安	遺物包含地
8 寺地城跡	河北町	中世	城跡跡
9 大塚城跡	河北町	中世	城跡跡
10 月山堂遺跡	河北町	平安	遺物包含地
11 馬場遺跡	河北町	平安	遺物包含地
12 熊野台遺跡	河北町	古墳、奈良、平安	遺物包含地
13 下城遺跡	河北町	古墳	遺物包含地
14 畑中道遺跡	河北町	平安	遺物包含地
15 畑中入遺跡	河北町	平安	遺物包含地
16 小泉新館	東河江市	中世	城跡跡
17 堀合次郎新館遺跡	河北町	中世	城跡跡
18 内河入遺跡	河北町	平安	散布地
19 瓦輪遺跡	東河江市	平安	集落跡
20 瓦輪下段敷遺跡	東河江市	中世	城跡跡
21 瓦輪上段敷遺跡	東河江市	中世	城跡跡
22 日和田新館	東河江市	中世	城跡跡
23 上の寺遺跡	東河江市	縄文～近世	墓所・社寺跡
24 尾山新館	東河江市	中世	城跡跡
25 日和田遺跡	東河江市	縄文	遺物包含地
26 フロピシ新館	東河江市	中世	城跡跡
27 肥前新館	東河江市	中世	城跡跡
28 松尾新館	東河江市	中世	城跡跡
29 田沢宮遺跡	東河江市	中世	城跡跡
30 不動木遺跡	河北町	奈良	遺物包含地
31 溝尻城跡	河北町	中世	城跡跡
32 今町経塚遺跡	天童市	江ノ	経塚遺跡
33 一筆塚遺跡	天童市	室町	塚墓
34 蔵地北谷遺跡	天童市	平安	集落跡
35 的場遺跡	天童市	古墳、平安	集落跡
36 三釜急水遺跡	天童市	奈良、平安	集落跡
37 清池清水遺跡	天童市	古墳	集落跡
38 八反記田遺跡	天童市	縄文	集落跡
39 蔵地北八遺跡	天童市	中世	城跡跡
40 宮崎寺遺全経塚遺跡	天童市	江ノ	経塚遺跡
41 蔵地城遺跡	天童市	室町～江ノ	城跡跡
42 蔵地南一字一石経塚遺跡	天童市	江ノ	経塚遺跡
43 新田新館	東河江市	中世	城跡跡
44 日田城の内遺跡	東河江市	中世	城跡跡
45 本願寺跡	東河江市	中世	城跡跡
46 石田遺跡	東河江市	縄文、弥生	集落跡
47 東河江城遺跡	東河江市	中世	城跡跡
48 山岸遺跡	東河江市	縄文	遺物包含地
49 長岡山新館	東河江市	中世	城跡跡
50 石神宮遺跡	東河江市	縄文	遺物包含地
51 柴橋新館	東河江市	中世	城跡跡
52 柴橋新館	東河江市	平安	塚墓
53 高松新館	東河江市	中世	城跡跡
54 高松1遺跡	東河江市	縄文、平安	散布地
55 赤衣長者新館遺跡	東河江市	奈良、平安、中世	集落跡
56 赤衣長者新館遺跡	東河江市	奈良、平安	集落跡
57 平橋寺山遺跡	東河江市	縄文、奈良、平安	集落跡
58 山崎新館	東河江市	中世	城跡跡
59 新田山遺跡	東河江市	縄文	散布地
60 殿敷山遺跡	中山町	中世	城跡跡
61 松岡山遺跡	中山町	縄文、平安	遺物包含地
62 塚ノ原遺跡	中山町	縄文	遺物包含地
63 二条寺跡	東河江市	縄文～近世	経塚・城跡跡
64 高柳新館	東河江市	中世	城跡跡
65 中塚遺跡	天童市	平安	集落跡
66 鍋田遺跡	天童市	古墳	集落跡
67 新正塚遺跡	天童市	室町	寺社跡
68 新正塚遺跡	天童市	縄文、平安	集落跡
69 西沢田遺跡	天童市	古墳	集落跡
70 久仁遺跡	天童市	縄文	集落跡
71 沼田遺跡	天童市	縄文	集落跡
72 塚野日入遺跡	天童市	弥生～平安	集落跡
73 礼舟ノ急水遺跡	天童市	平安、室町	急水遺跡
74 清池西遺跡	天童市	平安	集落跡

遺跡名	市町村	時代	種別
75 礼舟ノ遺跡	天童市	縄文	集落跡
76 高瀬山古墳	天童市	奈良、平安	集落跡
77 大矢塚2号古墳	天童市	古墳	古墳
78 入水遺跡	天童市	奈良、平安	集落跡
79 高瀬山前遺跡	天童市	奈良、平安	集落跡
80 高瀬山遺跡	天童市	南北朝～江ノ	城跡跡
81 西新遺跡	天童市	南北朝～江ノ	城跡跡
82 高瀬山前遺跡	天童市	縄文	集落跡
83 中塚遺跡	天童市	奈良、平安	集落跡
84 砂子田遺跡	天童市	縄文、奈良、平安	集落跡
85 影北北遺跡	天童市	奈良、平安	集落跡
86 松雲遺跡	天童市	平安	集落跡
87 高瀬山前遺跡	天童市	縄文、平安	集落跡
88 板江遺跡	天童市	縄文～奈良	集落跡
89 高瀬山前遺跡	天童市	古墳	集落跡
90 寺津城遺跡	天童市	室町～室土織山	城跡跡
91 中野日ノ遺跡	山形市	平安	集落跡
92 若宮遺跡	山形市	奈良、平安	集落跡
93 川前2遺跡	山形市	古墳・奈良・平安	集落跡
94 中野日ノ遺跡	山形市	古墳、奈良、平安	集落跡
95 物見台遺跡	中山町	古墳、中世	集落・城跡跡
96 川邊遺跡	中山町	平安	集落跡
97 長崎新館	中山町	南北朝～戦国	城跡跡
98 竹ノ花遺跡	中山町	中世	城跡跡
99 松雲遺跡	中山町	平安	遺物包含地
100 影雲遺跡	中山町	縄文、平安	遺物包含地
101 八幡宮遺跡	中山町	平安	遺物包含地
102 塚の原遺跡	中山町	平安	遺物包含地
103 岡地遺跡	中山町	縄文、平安	遺物包含地
104 滝2遺跡	中山町	平安	塚墓
105 滝3遺跡	中山町	縄文、平安	遺物包含地
106 滝1遺跡	中山町	旧石器・縄文、平安、中世	遺物包含地
107 全形敷遺跡	中山町	中世	城跡跡
108 新堂・柄ノ遺跡	中山町	中世	城跡跡
109 墓ノ遺跡	中山町	縄文	遺物包含地
110 谷木沢遺跡	中山町	室町	集落跡
111 御祭神社遺跡	中山町	縄文	遺物包含地
112 横沢寺山遺跡	中山町	奈良、平安	集落跡
113 竹ノ花遺跡	中山町	中世	城跡跡
114 扇形敷遺跡	中山町	中世	城跡跡
115 前田遺跡	中山町	平安	遺物包含地
116 新館遺跡	山形市	平安・鎌倉	集落跡
117 新館跡	山形市	不明	城跡跡
118 旗中山遺跡	山形市	弥生	遺物包含地
119 坊土原古墳群	山形市	古墳・飛鳥・奈良	古墳
120 白山山遺跡	山形市	戦国	城跡跡
121 矢野城遺跡	山形市	平安	塚墓
122 山辺北急水遺跡	山形市	奈良、平安	急水遺跡
123 松下加敷遺跡	中山町	戦国	城跡跡
124 川前遺跡	中山町	平安	遺物包含地
125 川前渡り地遺跡	中山町	奈良、平安	集落跡
126 連雲寺遺跡	山形市	奈良、平安、中世	集落跡
127 連雲寺3遺跡	山形市	平安	集落跡
128 春日山遺跡	山形市	奈良、平安	集落跡
129 八幡宮遺跡	山形市	奈良、平安	集落跡
130 中野遺跡	山形市	古墳	集落跡
131 馬場北遺跡	山形市	古墳・奈良、平安	集落跡
132 馬場南遺跡	山形市	平安	散布地
133 三条ノ日遺跡	山形市	古墳	古墳跡
134 洪水遺跡	山形市	弥生～中世	集落跡
135 阿河軍遺跡	山形市	弥生～中世	集落跡
136 同心加敷遺跡	山形市	不明	城跡跡
137 新井田遺跡	山形市	奈良、平安	集落跡
138 天神遺跡	山形市	奈良、平安	集落跡
139 津山遺跡	山形市	弥生	集落跡
140 井森城遺跡	山形市	弥生	集落跡
141 南寺塚2号古墳	山形市	古墳	古墳
142 南寺塚1号古墳	山形市	奈良、平安	古墳
143 津山新館	山形市	室町～戦国	城跡跡
144 藤岡古墳群	山形市	古墳	古墳
145 北海上入遺跡	山形市	弥生	集落跡
146 北海上上遺跡	山形市	奈良、平安	集落跡
147 上敷免遺跡	山形市	奈良、平安	集落跡

なっている。

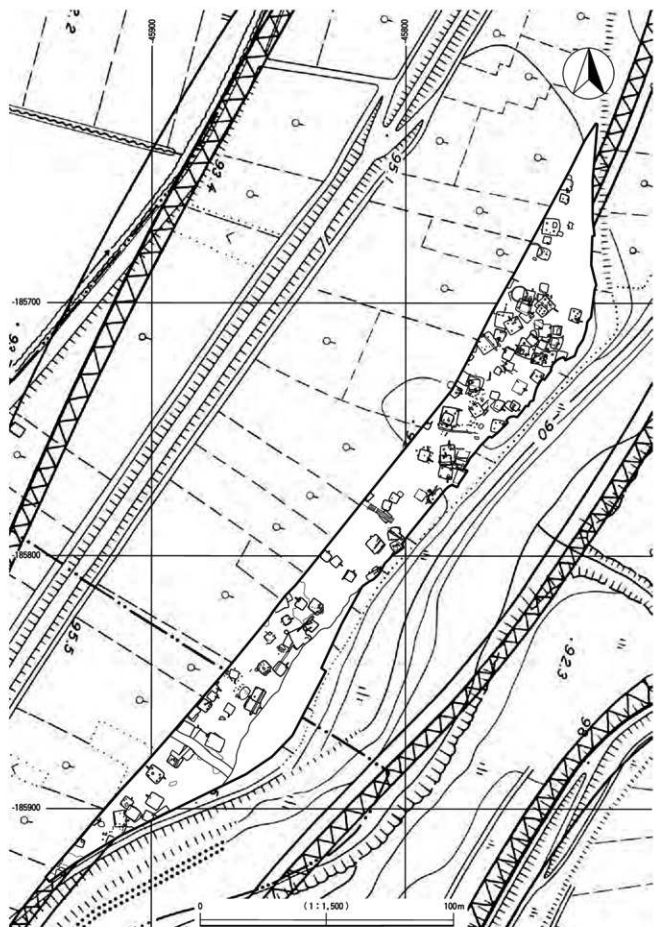
古墳時代の山形盆地では、沖積低地に遺跡数が多く認められる。北から①倉津川・押切川流域にまとまる一群、②立谷川北岸にまとまる一群、③馬見ヶ崎川と立谷川間にまとまる一群、④馬見ヶ崎川と須川間にまとまる一群、⑤盆地南側須川西岸にまとまる一群、がある（山形県埋蔵文化財センター2004 a）。各々の集落群は、各河川と深く関わり成立・展開したと考えられているが、川前2遺跡はこの内の③と④に関わる遺跡となろう。図幅から外れるが、山形市今塚遺跡では、古墳時代前期の住居跡が30棟検出され、特にS T 702から出土した土師器の一括資料は、山形盆地の古墳時代前期後半の指標となっている（山形県埋蔵文化財センター1994）。山形市馬洗場B遺跡（131）では、竪穴住居跡の隣接地点から破鏡（内行花文鏡）が出土し、最北端の出土事例となっている（山形県埋蔵文化財センター2004 b）。図幅外の山形市服部・藤治屋敷遺跡では、前期後半の河川跡の下位層から土師器・木製品が多量に出土したが、東海系曲柄二又鍬や廻間式類似の土師器が含まれており、他地域との交流関係が指摘されている（山形県埋蔵文化財センター2004 a）。天童市高橋南遺跡（89）では、古墳時代前期の住居跡が25棟検出されたが、住居跡や包含層からは管玉の製作工程を示す遺物が出土し、河川跡（S G 252）からは多量の木製品が出土している（山形県埋蔵文化財センター2004 d）。

古墳時代後期では、中山町物見台遺跡（95）でカマドを有する竪穴住居跡が16棟検出され、特にS T 13から出土した土師器は、従来「三軒屋式」とされた型式の住居内一括資料に相当する。また大溝跡（S D 15）からは土師器の完形品約400点の他、古式須恵器や土・石製品が多数出土している（山形県教育委員会1987 a）。天童市西沼田遺跡（69）は6世紀を中心とした集落跡で、平地式の掘立柱建物跡群が検出され、昭和62年（1987年）に国史跡に指定され、史跡公園として整備が進められている。

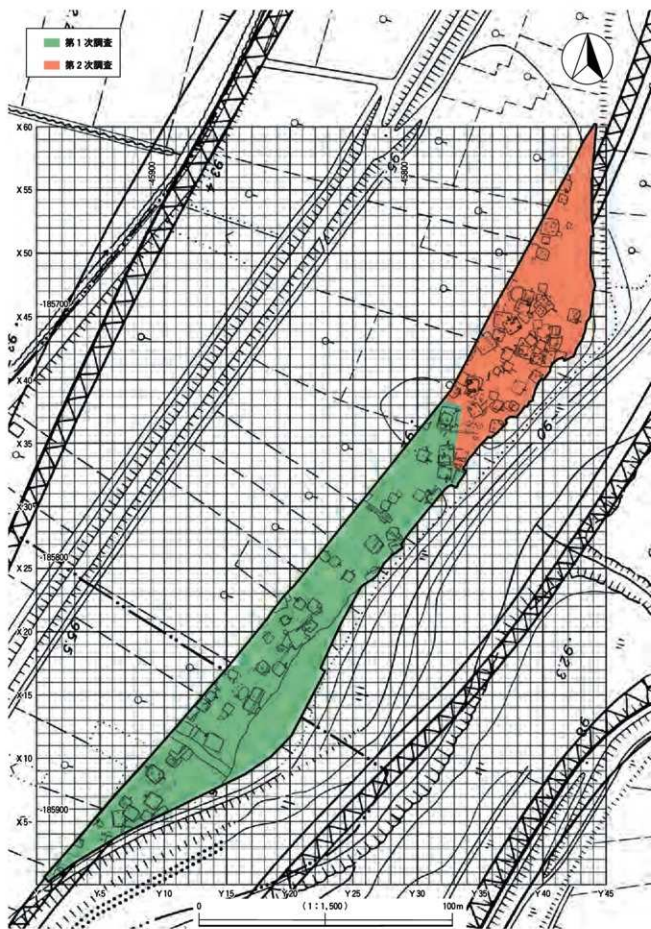
奈良・平安時代では、川前2遺跡の南方1kmに位置する遠磨寺遺跡（126）で、大型の掘立柱建物跡群や倉庫が規則的に配置され、隣接してバレススタイルの井戸跡が付属する状況が確認され、風字硯も出土しており、本遺跡と共に水運に関連した官衙の可能性が指摘されてい

る（山形県埋蔵文化財センター2004 c）。また須川の対岸に位置する上敷免遺跡（147）は、8～9世紀を主体とした集落跡で、時的に本遺跡との関連を有しており、S T 3 竪穴住居跡から出土した8世紀前半の「関東系土師器」が特記される（山形県埋蔵文化財センター2007）。盆地西端の最上川沿いに位置する高瀬山遺跡（1）は、8世紀後半～9世紀前半を中心とした集落跡で、これまでの調査で600棟以上の建物関連施設が検出されており、古代村山郡「長岡郷」と推定されている（山形県埋蔵文化財センター2005 b）。

上記したように川前2遺跡の周辺には、縄文時代～奈良・平安時代を通じて、多数の遺跡が点在しており、特に古墳時代～古代を通して山形盆地の中核域が形成されていた様相を窺うことができる。その背景には山形盆地を貫流した各河川の合流点という地理的特性から、河川を利用した交通や物流の要衝の地域になっていたと想定される。



第4図 座標配置図



第5図 グリッド配置図

## Ⅲ 第1次調査の成果

### 1 第1次調査の概要

川前2遺跡の第1次調査は、平成14年5月7日(火)～11月8日(金)までの実働124日で実施した。調査面積8,500㎡の内、2/3の面積に相当する調査区南側～中央区域の5,500㎡を調査したが、表土除去については、第2次調査区域も終了した。

第1次調査区は調査対象区域の南側(須川上流側)で、細長い眼鏡状を呈した調査区域の右眼レンズからブリッジにかけた部分に相当する。ブリッジ部分が若干低く、右眼レンズ部分が微高地となっており、ST14住居跡とST78住居跡を結んだラインが、中山町と山形市の境界に相当し、上流側が中山町、下流側が山形市となる。

発掘調査は調査区の南端(須川上流側)から着手し、漸次北側に向かって進められ、堅穴住居跡65棟、井戸跡2基などの遺構が調査された。堅穴住居跡の殆どが奈良・平安時代の所産であり、第1次調査では古墳時代の堅穴住居跡は1棟を検出したに過ぎない。

調査区の東端には、須川に並行するように南北方向に伸びた河川跡(SG171)が検出されている。住居跡等の遺構の一部を削平しており、古代以降の河道と考えられるが、川幅が広大であることから、嘗ての須川の河道と考えられる。また調査区南側には、これに直交するように、幅4mの河川跡(SG100)が検出されている。須川に流入する小さな河川であるが、古代の住居跡を切っていることから、古代以降の河道と考えられる。

第1次調査区の遺構検出面の海拔は92.5～93.1mを測り、住居跡の分布は第1次調査区の全面に及んでいる。しかしその中でも海拔92.7m以上の微高地(右眼レンズ部分)に集中して構築される傾向が見られ、特にSG100付近に多く検出されているが、第2次調査区域に比べると、遺構の密度はやや薄いであろう。

第1次調査区の基本層序は、図版7に図示している。調査区の南端部に相当するが、表土として暗褐色シルト質土が堆積し、その下位に黒褐色シルト質土が堆積しており、遺構の検出面とした。しかし遺跡は全体的に冠水

を受けており、砂質土、シルト質土、粘質土の織状の堆積が随所に見られ、堆積状況は地点毎に異なっていたため、遺構の検出は困難を極めたのが実情である。平成19・20年の第3・4次調査では、第1次調査面の直下20～100cmで、古墳時代の住居跡が検出されており、度重なる増水で集落全体が埋没し、同一地点に繰り返し集落が営まれた様相を窺わせている。

なお、遺構番号は調査段階の番号をそのまま踏襲し、記載は調査区南側から北に向かって順次進めている。

### 2 第1次調査の堅穴住居跡

#### ST99住居跡(図版6、125-1、写真図版2)

ST99住居跡は、調査区南端のX1-Y1区に位置する。住居跡の西側は調査区域外となっており、東にST97・98住居跡が近接する。東・南壁を検出したのみで、検出面からの掘り込みは10cm程度と浅く、東壁の一部は2001年の試掘坑によって削平されている。なお、土層断面は調査区西壁で記録を取ったが、セクション・ポイントが判然としないため、断面図と平面図の整合性は得られていない。(平面形)南北軸3.6m以上の方形と推測されるが、北東隅は緩いカーブを描いており、主軸方向は確定できない。(堆積土)覆土は暗褐色シルト質土で、20cm程度の層厚を測る。(壁面)壁高は10cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)平坦で、硬化面や貼壁は認められない。(柱穴)東壁際に2基の浅いピットが検出されたが、柱穴は認められない。(壁溝)未検出。(カマド)未検出。(出土遺物)住居跡覆土から、須恵器片(図版125-1)が1点出土した。(時期)出土遺物から、8世紀代の住居跡と考えられる。

#### ST97住居跡(図版6、写真図版2)

ST97住居跡は、調査区南端のX0-Y1・X1-Y1区に位置する。西・北壁の一部を検出したのみで、東側は川寄りの調査区域外となる。ST98住居跡と重複関係にあり、西にST99住居跡が近接する。新旧関係はST97住居跡がST98住居跡を切っている。(平面形)北西隅のみを検出し方形と推測され、主軸方向は確定でき



ないが、S T 98住居跡とはほぼ同等と見なされる。(堆積土) 詳細不明。(壁面) 壁高は15cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められないが、S T 98住居跡の床面より7cm低い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 出土遺物がなく、時期の特定は困難だが、住居跡の特徴等から古代の所産と考えられる。切り合い関係から、S T 98住居跡よりも新しいと見なされる。

#### S T 98住居跡 (図版6、写真図版2)

S T 98住居跡は、調査区南端のX 1-Y 1・X 1-Y 2区に位置する。西・北壁の一部を検出したのみで、東側は川寄りの調査区域外となる。S T 97住居跡と重複関係にあり、西にS T 99住居跡が近接する。新旧関係はS T 98住居跡がS T 97住居跡に切られている。(平面形) 北西隅のみを検出し方形と推測され、主軸方向は確定できないが、S T 97住居跡とはほぼ同等と見なされる。(堆積土) 詳細不明。(壁面) 壁高は9cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 出土遺物がなく、時期の特定は困難だが、住居跡の特徴から古代の所産と考えられる。切り合い関係から、S T 97住居跡よりも古いと見なされる。

#### S T 2住居跡 (図版6、125-2・3、写真図版2)

S T 2住居跡は、調査区南端のX 3-Y 5区に位置する。西・北壁の一部を検出したのみで、東側は川寄りの調査区域外となる。北にS T 3住居跡とS T 9住居跡が近接しており、住居跡の周囲には柱痕を有するピット6基が検出されている。(平面形) 北西隅のみを検出し方形と推測され、主軸方向は確定できない。(堆積土) 覆土は層厚20~30cmを測り、凹レンズ状に黒褐色・暗褐色微砂シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は25~30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 覆土から、須恵器蓋(図版125-2)、須恵器壺(図版125-3)が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀代の住居跡と考えられる。

#### S T 1住居跡 (図版7、126-1~3・127-1~3、写真図版3)

S T 1住居跡は、調査区南端のX 4-Y 4・X 5-Y 4区に位置する。カマドと東壁を検出したのみで、住居跡の西側は調査区域外となる。S X 89性格不明遺構と重複関係にあり、東にS T 3住居跡、南東にS T 1住居跡が近接する。新旧関係はS T 1カマドの煙道がS X 89性格不明遺構に切られている。(平面形) 横軸3.9mの方形で、煙道から推測した主軸方向はN-135°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は30cmを測り、凹レンズ状に黒褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 貼床で、カマドの周囲には炭が広がっている。(柱穴) 貼床下からピット5基が検出されたが、柱穴は認められない。(壁溝) 未検出。(カマド) 東壁の北寄りに構築されている。煙道部・袖部・燃焼部が検出されたが、煙道部の先端はS X 89性格不明遺構に切られている。(出土遺物) カマド及びその周囲から、土師器壺6点(図版126-1~3、127-1~3)が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀前半の住居跡と考えられ、切り合い関係から、S X 89性格不明遺構よりも古いと見なされる。

#### S T 3住居跡 (図版8、127-4~6、写真図版4)

S T 3住居跡は、調査区南端のX 4-Y 6・X 5-Y 6区に位置する。S T 4・88住居跡と重複関係にあり、北にS T 5住居跡、南東にS T 9住居跡が近接する。新旧関係はS T 3住居跡がS T 4・88住居跡に切られている。(平面形) 南北軸6.1~6.4m、東西軸4.7~5.1mの方形で、主軸方向がN-78°-Eにある。東壁の北側はS T 4・88住居跡によって切られている。(堆積土) 覆土の層厚は15~20cmを測り、暗褐色・淡暗褐色砂質シルトが堆積する。(壁面) 壁高は10~15cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められないが、カマド周辺に焼土の広がりが見られる。S T 88住居跡の床面より5cm程度低い。(柱穴) 住居跡内からピット12基が検出されたが、柱穴は認められない。(壁溝) 西壁に幅30~45cm、深さ15cm程度の壁溝を検出した。(カマド) 東壁の南寄りに構築されており、煙道部・袖部・燃焼部が検出された。(出土遺物) カマド右袖から土師器杯(図版127-4)、南壁付近の覆土から須恵器杯(図版127-6)が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀前半の住居跡と考えられ、切り合い関係から、S T 4・88住居跡よりも古いと見なされる。

## ST 9 住居跡 (図版 9)

ST 9 住居跡は、調査区南端の X 4-Y 7 区に位置する。住居跡の北側を検出したのみで、南側は川寄りの調査区域外となり、北西に ST 3 住居跡が近接する。(平面形) 東西軸 3 m 程度の方形と推測されるが、北西隅は緩いカーブを描いており、主軸方向は確定できない。(堆積土) 覆土の層厚は 40 cm を測り、凹レンズ状に黒褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は 15~25 cm を測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 出土遺物が少なく、時期の特定は困難だが、住居跡の特徴から古代の所産と考えられる。

## ST 8 住居跡 (図版 9、128-1・2、写真図版 7)

ST 8 住居跡は、調査区南端の X 5-Y 9・X 5-Y 10・X 6-Y 10 区に位置する。住居跡の北西側を検出したのみで、南東側は川寄りの調査区域外となり、北西に ST 6 住居跡、西に ST 7 住居跡が近接する。(平面形) 東西軸 5.6 m の方形と推測され、北側コーナーは耕作痕により削平されている。東西軸から推測した主軸方向が N-32°-W にある。(堆積土) 覆土の層厚は 25~30 cm を測り、上位に暗褐色微砂シルト質土、下位に暗褐色中砂シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は 25~30 cm を測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド・炉跡) 未検出。(出土遺物) 覆土から、古墳時代前期の土師器甕 2 点 (図版 128-1・2) が出土した。(時期) 出土遺物から、古墳時代前期 4 世紀代の住居跡と考えられる。

## ST 5 住居跡 (図版 10、128-3~6、193-10・11、写真図版 4~6)

ST 5 住居跡は、調査区南端の X 6-Y 6・X 6-Y 7 区に位置する。ST 4・88 住居跡と重複関係にあり、南に ST 3 住居跡が近接する。新旧関係は ST 5 住居跡が ST 4・88 住居跡に切られている。また住居跡中央の床面に SX 105 性格不明遺構が掘り込まれているが、新旧関係は判然としない。(平面形) 横軸 4.2 m、縦軸 4 m の方形で、主軸方向は N-54°-E にあり、南隅は ST 4・88 住居跡により削平されている。(堆積土) 覆土の層厚は 20~30 cm を測り、黒褐色シルト質土が堆積するが、

SX 105 性格不明遺構の周辺には、酸化鉄が顕著に認められる。(壁面) 壁高は 20~25 cm を測り、壁は外傾して立ち上がるが、部分的に緩い角度で立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴) 住居跡内からピット 3 基が検出されたが、いずれも浅く、柱穴は特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド) 北壁のやや東寄りに構築されており、煙道部・袖部・焼焼部が検出された。(出土遺物) カマドから土師器甕 (図版 128-3)、須恵器杯 (図版 128-5)、須恵器高台杯 (図版 128-6)、南壁付近の覆土から須恵器杯 (図版 128-4) が出土した。また北壁付近の床面直上からは、鉄製鎌 (図版 193-10) と鉄斧 (図版 193-11) が出土した。(時期) 出土遺物から、8 世紀後半の住居跡と見られるが、SX 105 性格不明遺構との新旧関係は不明で、ST 5 住居跡に付随した施設であった可能性も考えられる。

## ST 4 住居跡 (図版 11、129-1~6、193-16、写真図版 4、5)

ST 4 住居跡は、調査区南端の X 5-Y 6・X 5-Y 7・X 5-Y 8・X 6-Y 7 区に位置する。ST 88 住居跡とは入れ子状の重複関係にあり、本住居跡の方が一回り大きく、また東は ST 7 住居跡、北西は ST 5 住居跡、西は ST 3 住居跡と重複する。新旧関係は、ST 4 住居跡が ST 88 住居跡に切られ、ST 7 住居跡からもカマドの削平を受けており、ST 3 住居跡と ST 5 住居跡を本住居跡が切っている。従って本住居跡の残存は、壁際の周縁に限られる。(平面形) 横軸 4.4~5 m、縦軸 6~6.3 m の方形で、主軸方向は N-125°-E にある。(堆積土) 覆土の層厚は 10 cm を測り、暗褐色砂質シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は 10 cm を測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 残存部は平坦であるが、詳細は不明。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 東壁の北寄りに構築されており、袖部と焼焼部が検出された。煙道部は ST 7 住居跡カマドの煙道部により削平された。(出土遺物) 東壁のカマド付近から、土師器甕 2 点 (図版 129-1・2)、土師器罎 2 点 (図版 129-3・4)、須恵器壺 (図版 129-5)、須恵器こね鉢 (図版 129-6) が出土した。また東壁際から鉄鎌? (図版 193-16) が出土した。(時期) 出土遺物は年代幅を有しており、時期の特定は困難である。なお重複した遺構の新旧関係は、古い方から ST 3 住居跡・ST 5 住居跡→ST 4 住居跡→

S T 88住居跡・S T 7住居跡の順序となる。

#### S T 80住居跡 (図版11、写真図版5)

S T 88住居跡は、調査区南端のX 5-Y 7・X 5-Y 8・X 6-Y 7区に位置する。S T 4住居跡とは入れ子状の重複関係にあり、本住居跡の方が一回り小さく、また北西はS T 5住居跡、西はS T 3住居跡と重複する。新旧関係は、S T 88住居跡がS T 4住居跡を切っており、S T 3住居跡とS T 5住居跡を本住居跡が切っている。(平面形) 短軸4.2~4.5m、長軸5.2mの方形で、主軸方向はS T 4住居跡とほぼ同様で、N-125°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は15~25cmを測り、凹レンズ状に堆積しており、下位には暗褐色砂質シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は10~25cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められず、S T 4住居跡の床面よりも10cm程度低くなる。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 覆土より少量出土したが、掲載遺物なし。(時期) 出土遺物が少なく、時期の特定は困難だが、住居跡の特徴から古代の所産と考えられる。なお重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T 3住居跡・S T 5住居跡→S T 4住居跡→S T 88住居跡の順序となる。

#### S T 7住居跡 (図版12、130-1~6、写真図版6)

S T 7住居跡は、調査区南端のX 5-Y 8・X 5-Y 9区に位置する。S T 4住居跡と重複関係にあり、本住居跡がS T 4住居跡を切っている。北にS T 6住居跡、東にS T 8住居跡が近接しており、住居跡の南隅は川寄りの調査区外となる。(平面形) 横軸3.9m、縦軸4mの方形で、主軸方向はN-62°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は20~30cmを測り、下位に暗褐色砂質シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は15~30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められないが、住居跡内の南隅付近に炭の集中が認められる。(柱穴) 住居跡内の東隅に深さ35cmのビット1基が検出されたが、柱穴かどうかは判然としない。(壁溝) 未検出。(カマド) 西壁の南寄りに構築されており、煙道部・袖部・燃焼部が検出された。なお煙道部は、S T 4住居跡のカマドを倒し構築された。(出土遺物) カマド付近の床面直上から土師器碗(図版130-2)、覆土から土師器碗(図版130-1)、土師器蓋3点(図版130-3~5)、須恵器杯(図版130-6)が出土した。(時

期) 出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。なお切り合い関係から、本住居跡がS T 4住居跡より新しいと推定される。

#### S T 6住居跡 (図版13、130-7~9、131-1~6、193-14、写真図版7)

S T 6住居跡は、調査区南端のX 6-Y 8・X 6-Y 9・X 7-Y 9区に位置する。北にS T 83住居跡、南にS T 7・8住居跡、西にS T 4・88住居跡が近接する。(平面形) 横軸5.5m、縦軸5.6mの方形で、主軸方向はN-58°-Eにある。北壁は並行した耕作痕により削平されている。(堆積土) 覆土の層厚は15~25cmを測り、床面近くまで耕作の影響を受けている。(壁面) 壁高は10~20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 床が貼られており、広い範囲で焼土・炭の集中が認められた。(柱穴) 住居跡内から浅いビット数基が検出されたが、柱穴は判然としない。(壁溝) 未検出。(カマド) 北西壁のほぼ中央に構築されており、煙道部・袖部・燃焼部が検出された。なお左袖部から心材に用いられたと思われる礫が出土した。(出土遺物) カマド及びその周囲から土師器蓋3点(図版130-9、131-1・3)、須恵器蓋(図版131-6)が出土した。その他に土師器碗(図版130-8)、土師器蓋(図版131-2)、須恵器蓋(図版131-4)、須恵器杯(図版131-5)、鉄簾(図版193-14)が出土したが、土師器杯(図版130-7)は、床面下15cmの貼床中から出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀中葉の住居跡と考えられる。

#### S T 83住居跡 (図版14、132-1~7、写真図版8)

S T 83住居跡は、調査区南端のX 8-Y 8・X 8-Y 9・X 9-Y 8・X 9-Y 9区に位置する。北東にS T 82、南にS T 6が近接する。(平面形) 横軸5~5.5m、縦軸6.1~6.3mの方形で、主軸方向はN-49°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は25cmを測り、凹レンズ状に堆積しており、下位に灰黄褐色粘質シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は20~25cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 全面に床が貼られており、広い範囲に炭の集中が認められた。(柱穴) 住居跡内には大小10基のビットが検出されたが、その内コーナー付近のビットが柱穴に相当する可能性がある。(壁溝) 未検出。(カマド) カマドは北西壁(カマド1)と南西壁(カマド2)に構築されていた。カマド1は北西壁のほぼ中央に構築

され、煙道部・袖部・燃焼部が検出された。カマド2は南西壁の東寄りに構築され、煙道部のみが検出され、壁際ののみ焼土の集中が認められた。(出土遺物)南西壁際床面から須恵器蓋(図版132-4)、カマド1の右袖部から土師器甕(図版132-1・3)、E P246から土師器甕(図版132-2)、その他に須恵器杯(図版132-5)、須恵器高台(図版132-6・7)が出土した。(時期)出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。

**ST82住居跡**(図版15、132-8・9、133-1-5、写真図版8)

ST82住居跡は、調査区南端のX9-Y10・X9-Y11・X10-Y10区に位置している。北東にST85住居跡が近接し、住居跡内は並行して南西-北東に延びた溝跡に切られており、住居跡の北東壁の大半と北西壁の一部は、2001年のL字形の試掘坑により削平されている。(平面形)短軸4.7m、長軸5.15mの方形で、長軸を基準とした主軸方向は、N-53°-Wにある。(堆積土)覆土の層厚は10cm以下で、黒褐色微砂シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は15cmを測り、壁は緩い角度で立ち上がる。(床面)全面に床が貼られており、掘り方は起伏を有する。(柱穴)住居内にピット8基が検出されたが、その内E P241・242・243・244が柱穴に相当すると考えられる。(壁溝)未検出。(カマド)未検出。削平された北東壁に存した可能性も考えられる。(出土遺物)覆土から土師器甕(図版133-1・2)、須恵器杯(図版133-3)、須恵器高台(図版133-4)、須恵器双耳杯(図版133-5)が出土した。(時期)出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。

**ST85住居跡**(図版15、133-6、写真図版8)

ST85住居跡は、調査区南端のX9-Y11・X10-Y11・X10-Y12区に位置する。住居跡内は南西-北東の方向に、幅1.4mの試掘坑(2001年)で掘削されている。また東隅は河川跡(SG100)と重複関係にある。(平面形)横軸4.2-4.7m、縦軸4.3-5mの方形で、カマドを基準とした主軸方向はN-125°-Eにあり、ST82住居跡の向きとはほぼ同等となる。(堆積土)詳細は不明。(壁面)壁高は5-20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面に床が貼られており、ピットが検出された。(柱穴)住居跡内に5基のピットが検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝)未検出。(カマド)北西壁

のやや西寄りに構築されており、燃焼部のみが検出された。(出土遺物)南隅の床面直上から、須恵器高台(図版133-6)が出土した。(時期)出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。SG100との新旧関係は判然としなが、対岸の遺構から推して、本住居跡の方がSG100より古いと見なされる。

**ST10住居跡**(図版16、133-7-9、134-1-10、写真図版9、10)

ST10住居跡は、調査区南側のX11-Y11・X11-Y12・X12-Y11・X12-Y12区に位置する。ST11住居跡と重複関係にあり、本住居跡がST11住居跡を切っており、南西壁は河川跡(SG100)に削平されている。(平面形)南東壁をカマドと見た場合、横軸5.5m以上、縦軸5.2-5.8mの方形で、北西壁がやや外に開いており、主軸方向はN-120°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は10-20cmを測り、黒褐色・暗褐色シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は5-20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)床が貼られており、掘り方は起伏を有する。貼床面は、ST11住居跡の床面よりも10cm程度低い。(柱穴)掘り方の調査で、ピット数基が検出されたが、柱穴を特定することができなかった。(壁溝)未検出。(カマド)南東壁の南寄りに焼土・炭の集中が認められることから、該域に構築された想定されるが、煙道部・袖部は検出できなかった。(出土遺物)南東壁際の床面直上から土師器甕2点(図版133-8、134-1)、土師器鉢(図版133-9)、その他に覆土から土師器甕(図版133-7)、須恵器蓋(図版134-2)、須恵器杯4点(図版134-3-6)、須恵器高台3点(図版134-7-9)、須恵器双耳杯(図版134-10)が出土した。墨書土器3点(図版134-5・6・9)が含まれており、特記される。(時期)出土遺物は年代幅を有するが、9世紀代の住居跡と考えられる。なお重複した遺構の新旧関係は、古い方からST11住居跡→ST10住居跡→SG100の順序となる。

**ST11住居跡**(図版17、134-11・12、写真図版9、10)

ST11住居跡は、調査区南側のX11-Y12・X12-Y12区に位置する。西壁はST10住居跡、東壁はST12住居跡に切られており、南壁も旧河川(SG100)のため確認できず、北壁と東隅コーナーを検出したに過ぎない。(平面形)各壁が削平されたため、規模は判然としな

が、形状は方形と推測され、北壁ラインから推定した主軸方向は、N-17°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は5-10cm程度を測り、褐色砂質シルト質土が堆積する。(壁面) 北壁のみであるが、壁高は10cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められず、S T10住居跡の床面よりも10cm程度高く、またS T12住居跡の床面よりも5cm程度低くなる。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 北壁のやや東寄りに構築されており、煙道部を検出した。煙道部は長さ1.1mを測り、北壁のラインに対しやや東方向に傾いている。(出土遺物) 覆土から須恵器杯(図版134-11)、須恵器双耳杯(図版134-12)が出土した。前者はS T10住居跡との境界から出土しており、S T10住居跡に帰属される可能性も否定できない。(時期) 出土遺物から、時期の特定は困難である。なお重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T11住居跡→S T10住居跡・S T12住居跡→S G100の順序となり、本住居跡が最も古いと考えられる。

**S T12住居跡** (図版17、135-1-7、136-1-10、137-1、写真図版9、10)

S T12住居跡は、調査区南側のX11-Y12・X11-Y13・X12-Y12・X12-Y13区に位置する。南東壁はS T81住居跡に切れ、南西壁も旧河道(S G100)のため確認できず、北東壁と北西壁を検出した。北西はS T11住居跡を切っている。(平面形) 一辺4.5m以上の方形と考えられ、北西壁のラインから見た主軸方向はN-37°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は10cm以下と浅く、黄褐色砂質シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は10cm程度で、壁は外傾して僅かに立ち上がる。(床面) やや起伏を有しており、硬化面や貼床は認められない。S T11住居跡の床面より5cm程度高く、S T81住居跡よりも僅かに高い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 北東壁のやや東寄りに構築されており、煙道部・袖部・燃焼部を検出した。土師器甕(図版135-1)を逆位に据え付けて、支脚にしたと考えられる。(出土遺物) カマド及びその周囲から土師器甕7点(図版135-1・4・7、136-1-4)、須恵器杯2点(図版136-7・8)、須恵器甕(図137-1)、覆土からは土師器甕(図版135-2・3・5)、土師器甕(図版135-6)、須恵器蓋(図版136-5)、須恵器杯(図版136-6・9)、須恵

器蓋(図版136-10)が出土した。覆土から出土した遺物はいずれも床面に近く、特に須恵器蓋(図版136-10)は、北西壁際の床面直上から倒立した状態で出土した。(時期) 出土遺物から、時期の特定は困難である。なお重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T11住居跡→S T12住居跡→S T81住居跡→S G100の順序になると見られる。

**S T81住居跡** (図版18、写真図版9、10)

S T81住居跡は、調査区南側のX10-Y13・X10-Y14・X11-Y13・X11-Y14区に位置する。北西壁はS T12住居跡、北東壁はS T84住居跡と重複しており、本住居跡が両者を切って構築されている。(平面形) 短軸5.4-5.5m、長軸5.6-6.9mの方形で、南東壁をカマドと見た場合、主軸方向はN-117°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は10cm程度で、暗褐色微砂シルト質土等が堆積するが、耕作による溝状の削平を受けている。(壁面) 壁高は5-10cmを測り、壁は外傾して僅かに立ち上がる。(床面) 全面に床が貼られており、南東側に炭の集中が見られ、掘り方は比較的平坦で、S T84住居跡の床面よりも僅かに低い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 南東壁のやや南寄りに焼土・炭の集中が認められることから、該域に構築されたと想定されるが、煙道部・袖部は検出できなかった。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 出土遺物が少なく、時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。切り合い関係から本住居跡が、S T12住居跡とS T84住居跡より新しいと見なされる。

**S T84住居跡** (図版18、137-2、写真図版9)

S T84住居跡は、調査区南側のX11-Y14区に位置する。殆どがS T81住居跡に切られており、北隅のコーナーを残すのみである。(平面形) 各壁が削平されたため、規模は判然としないが、形状は方形と推測され、北東壁ラインから推定した主軸方向は、N-130°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は5cm程度で、暗褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は5cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められず、S T81住居跡の床面よりも僅かに高い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 床面直上から、須恵器杯(図版137-2)と砥石が出土した。(時期) 出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T81住

居跡よりも古いと見なされる。

#### S T 91住居跡 (図版19、137-3~10、写真図版13)

S T 91住居跡は、調査区南側のX13-Y11・X13-Y12・X14-Y12区に位置する。住居跡の北西側は調査区外となっており、南東半分を調査したのみである。S T 86住居跡を切って構築されているが、当初S T 86住居跡として調査され、その下部から本住居跡が検出された。(平面形) 南東壁から一辺5mの方形と推測され、北東壁と南西壁から見た主軸方向は、N-45°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は40cmを測り、上位に黒褐色微砂シルト質土、下位に暗褐色微砂シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は25~40cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 全面に褐色微砂シルト質土の床が貼られており、掘り方は比較的平坦である。S T 86住居跡の床面よりも15~20cm程度低い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 覆土から土師器項(図版137-3・4)、須恵器杯(図版137-6・7)、須恵器高台杯(図版137-8・9)、須恵器長頸瓶(図版137-10)が出土した。その中でも、線刻土器(図版137-7)と「文」と明記された墨書土器(図版137-8)の出土が特記される。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T 86住居跡より新しいと見なされる。

#### S T 86住居跡 (図版19、写真図版13)

S T 86住居跡は、調査区南側のX12-Y12・X13-Y11・X13-Y12区に位置する。S T 91住居跡から大きく切られており、南東壁から南西壁に沿ってL字形に残存するのみで、北西壁は調査区外となる。(平面形) 南東壁から一辺3.3mの方形と推定され、残存壁から見た主軸方向はN-50°-Eにあり、S T 91住居跡とはほぼ同等となる。(堆積土) 覆土の層厚は20cmを測り、暗褐色微砂シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は20cmを測り、壁は外傾して立ち上がるが、南西壁は段を有して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められず、S T 91住居跡の床面よりも、15~20cm程度高い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 遺物が少なく、時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T 91住居跡よりも古いと見なされる。

#### S T 186住居跡 (図版19、185-1~7、186-1~11、

193-1、写真図版17)

S T 186住居跡は、調査区中央の南側のX16-Y18・X16-Y19・X17-Y18・X17-Y19区に位置する。住居跡の西側には、幅70cmの溝が並行する様に掘り込まれており、西にS T 15住居跡、東に須川の旧河道(S G 171)が近接しており、南東壁の東側は河道により削平を受けている。(平面形) 横軸4.6m、縦軸4.6~4.8mの方形で、主軸方向はN-40°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は15cmを測り、暗褐色・黒褐色砂質シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は15~25cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められず、東側に炭の集中が見られる。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 煙道部・袖部・燃焼部が検出され、カマド及びその周囲から遺物が多く出土した。(出土遺物) カマドから土師器壺(図版186-2)、右袖脇のビットから土師器壺(図版186-1)と土師器杯(図版185-2)が出土した。覆土からは土師器杯(図版185-1・3・4)、土師器壺(図版185-5~7、186-3・4)、須恵器蓋(図版186-5)、須恵器杯(図版186-6~8)、須恵器高台杯(図版186-9)、須恵器壺(図版186-10)、須恵器壺(図版186-11)が出土した。関東系土師器3点(図版185-1・2・4)と土錘(図版193-1)の出土が特記される。(時期) 出土遺物から、8世紀中葉の住居跡と考えられる。重複関係にある溝跡が新しいと思われるが、土層断面から有益な情報を引き出すことができなかった。

S T 77住居跡 (図版20、138-1~6、139-1~7、140-1~11、141-1~5、写真図版12)

S T 77住居跡は、調査区南側のX13-Y12・X13-Y13・X14-Y12・X14-Y13区に位置する。カマド煙道部の先端がS T 76住居跡に切られ、西にS T 86・91住居跡が近接する。(平面形) 横軸4.4m、縦軸4.3mの方形で、主軸方向はN-36°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は20~30cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は20cmを測り、壁は緩い角度で立ち上がる。(床面) 全面に黒褐色シルト質土の床が貼られ、硬化しており、掘り方はやや起伏を有する。(柱穴) 住居跡内からビット7基が検出されたが、柱穴を特定することはできない。(壁溝) 未検出。(カマド) 北東壁のやや東寄りに構築されており、煙道部・袖部・燃焼部が検出され、遺物が多

く出土した。(出土遺物) カマドから土師器甕7点(図版138-1・3・5、139-1・3・5)、須恵器蓋(図版139-7)、須恵器坏3点(図版140-2・4)、須恵器高台坏(図版141-4)、右袖部脇から須恵器高台坏(図版141-3)が出土し、その他に覆土から土師器甕(図版138-2・4・6、139-2)、須恵器蓋(図版139-7)、須恵器坏(図版140-1・5~10)、須恵器高台坏(図版140-11、141-1・3)、須恵器甕(図版141-5)が出土した。その中で、墨書土器2点(図版140-11、141-1)の出土が特記される。(時期) 出土遺物から、8世紀中葉の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T76住居跡よりも新しいと見なされるが、煙道部先端の微妙な切り合い関係でしかない。

**S T74住居跡** (図版21、141-6~8、142-1~5、143-1~7、写真図版12、14)

S T74住居跡は、調査区南側のX15-Y13・X15-Y14区に位置する。南側をS T76住居跡に切られ、西側は調査区域外となる。カマドが2基構築されており、北東に伸びたE L213が古く、南東に伸びたE L214が新しいと考えられる。(平面形) 形状は方形と思われるが、規模は判然としえない。なお、E L214煙道部から見た主軸方向はN-12°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は20cmを測り、黒褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められないが、炭の集中箇所が存し、S T76住居跡の床面とほぼ同等である。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 北東に伸びたE L213は、煙道部のみの検出で、被熱の度合いも少なく、使用頻度が少なかったと判断される。南東に伸びたE L214は、煙道部・袖部・燃焼部が検出され、遺物が多く出土した。このことから、後者が付け替えられたと考えられる。(出土遺物) 遺物の殆どが、E L214とその周辺から出土した。図示したのは、土師器甕9点(図版141-7・8、142-1~5、143-1・2)、土師器坏(図版141-6)、須恵器蓋(図版143-3)、須恵器坏(図版143-4~6)、須恵器高台坏(図版143-7)である。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T76住居跡よりも古いと見なされる。

**S T76住居跡** (図版21、143-8、144-1~5、写真図

版12~14)

S T76住居跡は、調査区南側のX14-Y13・X14-Y14・X15-Y13区に位置する。S T74住居跡を切っており、南西壁の一部をS T77住居跡に切られている。(平面形) 横軸3.5m、縦軸3.4mの方形で、主軸方向はN-125°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は30cmを測り、暗褐色シルト質土が水平に堆積する。(壁面) 壁高は20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 明確に粘土を貼った痕跡は認められないが、硬化しており、炭化物の集中が認められる。堆積土の最下層は薄く水平に堆積しており、貼床の可能性も否定できない。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 南東壁の東寄りに構築されており、煙道部・袖部・燃焼部が検出された。土師器甕(図版143-8)が逆位に据えられており、支脚に使用されたと考えられる。(出土遺物) カマド及びその周囲から土師器甕4点(図版143-8、144-1~3)、須恵器坏(図版144-5)が出土した。なお土師器甕(図版144-4)の出土位置は、判然としえない。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。なお重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T74住居跡→S T76住居跡→S T77住居跡の順序となるが、本住居跡とS T77住居跡との関係は微妙であると言わざるを得ない。

**S T13住居跡** (図版22、144-6~8、145-1~5、写真図版15)

S T13住居跡は、調査区南側のX13-Y16・X13-Y17・X14-Y16・X14-Y17区に位置する。北東壁はS T78住居跡に切られており、カマド煙道部の先端は須川の旧河道(S G171)に接する。旧河道に並行して幅60cm程度の溝跡が掘り込まれており、住居跡の東側と北西壁が削平されている。(平面形) 横軸5m、縦軸5.4~5.5mの方形で、主軸方向はN-117°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は、20~30cmを測り、黒褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は20~30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められない。S T78住居跡の床面より5~10cm高い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 南東壁の中央に構築されており、煙道部のみ検出された。(出土遺物) 覆土から土師器甕(図版144-7)、須恵器坏(図版145-1)、須恵器高台坏(図版145-2・3)、須恵器蓋(図版145-4)、須恵器甕(図版145-5)が出土した。土師器甕

(図版144-6)はS T78住居跡、須恵器蓋(図版144-8)はS X507性格不明遺構と接合関係にある。(時期)出土遺物から、8世紀代の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T78住居跡よりも古いと見なされる。しかし土層断面図d-d'との整合性は得られていない。

**S T78住居跡**(図版22、145-6-12、146-1-8、147-1-10、148-1-14、写真図版15)

S T78住居跡は、調査区南側のX14-Y17・X15-Y17区に位置する。S T13住居跡の北東壁を切っており、旧河道に並行して幅60cm程度の溝跡が掘り込まれており、住居跡の東側が削平されている。(平面形)横軸4.5m、縦軸5.5mの方形で、主軸方向はN-153°-Wにある。(堆積土)覆土の層厚は25-30cmを測り、暗褐色・黒褐色砂質シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は20-30cmを測り、壁は外傾して立ち上がるが、一部緩く傾斜して立ち上がる。(床面)平坦で、硬化面や貼床は認められず、S T13住居跡の床面より5-10cm低い。(柱穴)住居跡内からピット2基が検出されたが、柱穴は未検出。(壁溝)未検出。(カマド)北東壁の東寄りに構築され、煙道部と燃焼部が検出された。(出土遺物)住居跡内からは、多数の遺物が出土した。カマドから土師器壺6点(図版145-10・11、146-5-8)、須恵器蓋(図版147-3)、覆土から土師器壺(図版145-6)、土師器蓋(図版145-7)、土師器環(図版145-8・9)、土師器壺(図版145-12、146-1-4)、土師器壺(図版147-1-2)、須恵器蓋(図版147-4)、須恵器環(図版147-5-10、148-1-6)、須恵器高台環(図版148-7-11)、須恵器壺(図版148-12)、須恵器壺(図版148-13)、須恵器壺(図版148-14)が出土した。墨書土器4点(図版147-7-10)の出土が特記される。(時期)出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T13住居跡よりも新しいと見なされる。しかし土層断面図d-d'との整合性は得られていない。

**S T14住居跡**(図版23、149-1-8、150-1、写真図版16)

S T14住居跡は、調査区南側のX16-Y15区に位置する。南西にはS T74住居跡が近接しており、住居跡の周囲には柱痕を有するピット群が検出されている。北西隅のコーナーは、調査区西壁の排水溝により削平されてい

る。(平面形)横軸3.6m、縦軸3.2mの方形で、主軸方向はN-167°-Wにある。(堆積土)覆土の層厚は15cmを測り、凹レンズ状に堆積し、東・西・北壁に黒褐色シルト質土が認められた。(壁面)壁高は15cmを測り、壁は外傾して立ち上がり、東壁に自然礫が検出された。(床面)平坦で、硬化面や貼床は認められず、カマド付近に焼土が集中している。(柱穴)北東隅にピット1基を検出したが、柱穴は未検出。(壁溝)未検出。(カマド)煙道部と燃焼部を検出した。(出土遺物)カマド周囲から土師器壺(図版149-2)、須恵器環(図版149-3)、須恵器壺(図版149-7)、煙道部先端から土師器壺(図版149-1)と須恵器壺(図版149-8)が出土した。また床面直上から須恵器環(図版149-4)、覆土から須恵器高台環(図版149-5)が出土した。(時期)出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。

**S T15住居跡**(図版24、150-2-6、151-1-4、写真図版16)

S T15住居跡は、調査区南側X16-Y17・X16-Y18・X17-Y17・X17-Y18に位置する。東にS T186住居跡が近接し、西隅コーナーはピット(E P201)に切られている。(平面形)横軸4.4-4.6m、縦軸4.5-5mの方形で、主軸方向はN-132°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は45-50cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は30-40cmを測り、壁は外傾して立ち上がるが、一部は段を有して立ち上がる。(床面)平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴)住居内には浅い土坑2基とピット10基を検出したが、柱穴を特定することはできない。(壁溝)未検出。(カマド)南東壁に2基のカマドが構築されており、や東寄りがカマド1、南寄りがカマド2となる。カマド1は煙道部と燃焼部が検出された。被熱の度合いが少なく、袖部が確認できなかった。このことからカマド1を廃棄し、カマド2を付け替えたと考えられる。(出土遺物)カマド1付近から土師器環(図版150-2)と土師器壺(図版150-5)、カマド2付近から土師器壺2点(図版150-6、151-1)、覆土から土師器環(図版150-3)、須恵器蓋(図版151-2)、須恵器高台環(図版151-3)、須恵器壺(図版151-4)、住居内のピットから土師器壺(図版150-4)が出土した。(時期)出土遺物から、7



世紀末～8世紀初頭の住居跡と考えられる。

**S T72住居跡** (図版25、151-5～8、152-1～4・6～10、153-1～13、154-1～15、155-1～7、写真図版18、19)

S T72住居跡は、調査区中央の南側のX18-Y20・X19-Y19・X19-Y20・X19-Y21・X20-Y20区に位置する。住居跡は須川旧河道 (S G171) に並行する溝跡により削平を受けており、西壁はS T73住居跡、カマド煙道部はS T20住居跡に切られている。東壁にカマドが2基構築されており、南壁東側は張り出し、不整形となる。(平面形) 横軸6.3～7.3m、縦軸6.4mの台形であるが、南壁東側はカマド2使用のため、張り出していると推測されるが、その南壁は須川旧河道 (S G171) に接しており、形状は判然としない。北西壁のラインから見た主軸方向はN-65°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は20～30cmを測り、凹レンズ状に暗褐色微砂シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は20～35cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 全面に暗褐色微砂シルト質土の床が貼られており、焼土・炭の集中が認められ、S T73住居跡の床面より10cm低い。(柱穴) 掘り方の調査で、多数のピットを検出したが、E P257とE P255が30cm以上の深さを有しており、柱穴に相当すると考えられる。(壁溝) 未検出。(カマド) 東壁中央にカマド1、東壁南寄りにカマド2が構築されている。カマド1は煙道部と燃焼部が検出され、煙道部の付け根に礫が敷設されていたが、焼土の集中や被熱の度合いが少ない。カマド2は煙道部・袖部・燃焼部が検出され、焼土や炭化物が厚く堆積していた。このことから、カマド1を廃絶し、カマド2を付け替えたと推測される。なおカマド1の煙道部は、S T20住居跡の煙道部を壊したと考えられる。(出土遺物) 本住居跡内からは遺物が多く出土したが、調査当初S T73住居跡と明確に分離できなかったため、提示資料の中にS T73住居跡出土の土器が3点 (図版151-9・10、152-5) 含まれている。S T72住居跡のカマドからは、土師器甕 (図版151-7、152-7)、須恵器坏 (図版153-13、154-5)、須恵器高台杯 (図版155-1) が出土したが、その内カマド2及びその周辺から、土師器甕 (図版152-6)、須恵器坏 (図版153-9、154-1) が出土した。また北西コーナー付近の覆土からは、土師器甕 (図版153-1・4)、須恵器坏 (図

版153-11・12、154-4・6)、須恵器高台杯 (図版154-14) が離まって出土し、住居内のピットからは、土師器甕 (図版151-8、152-1・3・8・9、153-2)、須恵器蓋 (図版153-7)、須恵器坏 (図版154-2・5・7)、須恵器高台杯 (図版155-2) が出土した。S T72住居跡とS T73住居跡で、土師器甕2点 (図版152-10、153-3) が接合関係にある。なおカマドから出土した須恵器高台杯 (図版155-1) は、墨書土器である。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられ、切り合い関係から、本住居跡がS T73住居跡とS T20住居跡より新しいと見なされるが、出土土器から推測しても、時期差はさほどないと思われる。

**S T73住居跡** (図版25、151-9・10、152-5、155-8～12、写真図版18)

S T73住居跡は、調査区中央の南側のX18-Y19・X19-Y19・X19-Y20区に位置する。住居跡の北東側をS T72住居跡に切れ、南東壁は溝跡に削平されている。南西に井戸跡 (S E180) が近接する。(平面形) 北東壁と南東壁が削平されたため、規模は判然としないが、短軸3.7m以内、長軸5.3m程度の方形と推測される。北西壁のラインから見た主軸方向はN-28°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は10～15cmを測り、暗褐色微砂シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は10～15cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 全面に褐色微砂シルト質土の床が貼られており、S T72住居跡の床面より10cm高い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 調査当初S T72住居跡と明確に分離できなかったため、遺物の提示に混乱が生じている。覆土から土師器甕3点 (図版151-9・10、155-8)、土師器瓶 (図版152-5)、須恵器蓋 (図版155-9)、須恵器坏3点 (図版155-10～12) が出土した。(時期) 出土遺物からの時期の特定は困難であるが、切り合い関係から、本住居跡がS T72住居跡 (8世紀後半) より古いと見なされるが、出土土器からの時期差は、さほど見られない。

**S T20住居跡** (図版25、156-1～10、写真図版18、19)

S T20住居跡は、調査区中央の南側のX20-Y21・X20-Y22区に位置する。住居跡の北西壁を溝跡に削平され、カマドの煙道部はS T72住居跡の煙道部に壊されている。(平面形) 縦軸4.3mの方形で、北西壁が溝跡に削

平されているため、横軸は判然としない。南東壁のラインから見た主軸方向は $N-135^{\circ}-W$ にある。(堆積土) 覆土の層厚は20~25cmを測り、凹レンズ状に暗褐色微砂シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は25cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められないが、中央に炭の集中が見られる。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 南西壁の中央に燃焼部のみ検出した。煙道部はS T 72住居とのカマド煙道部によって壊されたと推測される。(出土遺物) カマドから土師器甕(図版156-1)と土師器壺(図版156-2)、覆土から土師器壺(図版156-3)、須恵器蓋2点(図版156-4・5)、須恵器杯5点(図版156-6~10)が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀中葉の住居跡と考えられ、切り合い関係から、本住居跡がS T 72住居跡よりも古いと見なされる。しかし出土土器からの時期差は、さほど見られない。

**S T 17住居跡** (図版26、156-11・12、157-1~5、写真図版19)

S T 17住居跡は、調査区中央の南側のX20-Y19・X21-Y19区に位置する。北にS T 135住居跡、南にS T 72・73住居跡が近接し、南西壁の一部は2001年の試掘坑で削平されている。(平面形) 横軸3.4m、縦軸3.1mの方形で、主軸方向は $N-56^{\circ}-E$ にある。(堆積土) 覆土の層厚は25~30cmを測り、凹レンズ状に暗褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は25~30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴) 住居跡内の四隅に径30~40cmのピット(E P 327・328・329・330)が検出されており、柱穴と考えられる。(壁溝) 未検出。(カマド) 北東壁や東寄り構築されており、煙道部・袖部・燃焼部が検出され、左袖部から構築材として使用された土師器甕の破片が出土した。(出土遺物) 床面直上から土師器壺(図版156-12)と須恵器杯(図版157-1)、覆土から土師器甕(図版156-11)、須恵器杯(図版157-2から5)が出土したが、その中で墨書土器(図版157-5)の出土が特記される。(時期) 出土遺物から、8世紀中葉の住居跡と考えられる。

**S T 135住居跡** (図版27、28、157-6~12、158-1~5、159-1~8、160-1~6、161-1~7、162-1~12、193-15、写真図版21)

S T 135住居跡は、調査区中央の南側のX21-Y18・X21-Y19・X22-Y19区に位置する。東壁がS T 19住居跡を切っており、本住居跡の下位にはS T 178・182住居跡が入れ子状に存している。北壁と西壁は調査区域外となり、東にS T 18住居跡、南にS T 19住居跡が近接する。(平面形) 東壁と南壁のみ検出したが、いずれもコーナーまでは調査できず、規模は判然としないが、少なくとも一辺5m以上の方形と推定される。カマドが東壁に構築されており、東壁のラインに直交する主軸方向は $N-73^{\circ}-E$ にある。(堆積土) 覆土の層厚は20~30cmを測り、覆土には炭や焼土の集中が顕著に認められる。(壁面) 壁高は20~30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 全面に床が貼られており、焼土や炭の集中が認められ、S T 19住居跡の床面より5~10cm程度高い。またS T 178・182住居跡の床面との高低差は、本住居跡の方が10cm程度高い。(柱穴) 柱穴は判然としないが、本住居跡に伴う土坑として、E K 315(図版28)が該当する。同土坑は貼床下層から検出され、径1~1.2mの不整形で、底面は起伏を有し、壁は緩く立ち上がる。(壁溝) 未検出。(カマド) 東壁に構築されている。煙道部の一部と袖部、燃焼部が検出された。(出土遺物) 住居跡内の東側から多量の遺物が出土したが、一部下位のS T 178・182住居跡(図版157-11・12、160-5、161-4)や、切り合い関係にあるS T 19住居跡(図版159-8)と接合した土器も認められる。カマドからは土師器甕(図版158-4、159-2)、覆土からは土師器壺(図版157-6・8)、土師器壺(図版157-10)、土師器甕(図版157-11・12、158-1~5、159-1・3~6・8、160-1~6、161-1~5)、土師器壺(図版161-6・7)、ミニチュア土器(図版159-7)、須恵器蓋(図版162-1~3)、須恵器杯(図版162-4~7)、須恵器高台杯(図版162-8)、須恵器残塊(図版162-9)、須恵器壺(図版162-11)、須恵器甕(図版162-12)、鉄鏝(図版193-15)、また貼床直下から検出されたE K 315からは、土師器杯(図版157-9)、須恵器残塊(図版162-10)が出土した。住居跡内から出土した土器の中で、墨書土器2点(図版162-1・7)の出土が特記される。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T 178・182住居跡とS T 19住居跡より新しいと推測されるが、後二者の新

旧関係は判然としない。

**S T19住居跡** (図版27, 163-1・2、写真図版21)

S T19住居跡は、調査区中央の南側のX22-Y19・X22-Y20区に位置する。住居跡の南西半分をS T135住居跡に切られ、北西壁は調査区域外となり、東にS T18住居跡が近接する。(平面形) 一辺3m以上の方形と推測されるが、規模は判然としない。北東壁のラインから見た主軸方向はN-30°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は25cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は25cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められないが、炭の集中が見られる。(柱穴) 住居跡内からピット1基を検出したが、柱穴は判然としない。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 覆土から須恵器環 (図版163-1) と須恵器壺 (図版163-2) が出土した。(時期) 出土遺物が少なく、時期の特定は困難である。切り合い関係から、本住居跡がS T135住居跡より古いと推測される。

**S T178・182住居跡** (図版28, 184-7~9、193-13)

S T178・182住居跡は、調査区中央の南側のX22-Y19区に位置する。S T135住居跡の下位から検出され、調査時の所見では、S T178・182住居跡のピットと出土遺物が識別されたのみで、遺構因から両遺構を区別することはできない。また南東壁にS T135住居跡のEK315が掘り込まれている。(平面形) S T135住居跡内に入れ子状に存し、方形を呈すると思われるが、規模については判然としない。(堆積土) 記録がなく、判然としない。(壁面) 詳細は判然としない。(床面) 床が貼られ、硬化面や焼土の集中が認められる。(柱穴) 住居跡内からピット3基を検出したが、柱穴は判然としない。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出であるが、東壁付近の床面に焼土が集中しており、また南西隅コーナーの外側では焼け礫、EK321に焼土がブロック状に堆積していることから、いずれかにカマドが構築された可能性も考えられる。(出土遺物) S T178住居跡として土師器壺2点 (図版184-7・8)、須恵器残塊 (図版184-9)、S T182住居跡として鉄鏝 (図版193-13) が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T135住居跡より古いと見なされるが、S T19住居跡との新旧関係は判然としない。

**S T18住居跡** (図版29, 163-3~8、164-1~5、193

-19、写真図版20)

S T18住居跡は、調査区中央の南側のX21-Y20・X21-Y21・X22-Y20・X22-Y21区に位置する。東にS T108住居跡、南にS T17住居跡、西にS T119・135住居跡が近接する。(平面形) 横軸3.6~4m、縦軸3.9mの方形で、主軸方向はN-52°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は30cmを測り、暗褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は25~30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、住居跡中央に床が貼られている。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 北西壁のやや北りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部は幅50cm、長さ1.6mを測り、右袖部脇にピットを検出した。(出土遺物) カマドから土師器環 (図版163-3)、土師器壺 (図版163-7、164-2)、須恵器壺 (図版164-5)、右袖部脇から土師器壺2点 (図版163-6・8)、床面直上から須恵器環 (図版164-3)、覆土から土師器環 (図版163-4)、土師器壺 (図版163-5、164-1)、須恵器環 (図版164-4)、環状金具 (図版193-19) が出土した。関東系土師器 (図版163-3) の出土が特記される。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。

**S T113住居跡** (図版30, 164-6・7、165-1~6、166-1~6、写真図版23)

S T113住居跡は、調査区ほぼ中央のX25-Y22・X25-Y23・X26-Y22・X26-Y23区に位置しており、東にS T112住居跡が近接する。(平面形) 横軸4m、縦軸3.5mの方形で、主軸方向はN-40°-Eにある。西隅コーナーが緩くカーブしており、やや不整の方形となる。(堆積土) 覆土の層厚は10~20cmを測り、暗褐色細砂質土が堆積する。(壁面) 壁高は15~20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 全面に床が貼られ、硬化しており、掘り方はやや起伏を有する。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 北東壁のやや北寄りに構築されており、煙道部、袖部、燃焼部が検出され、カマドから遺物が多く出土した。(出土遺物) カマド及びその周囲から土師器壺6点 (図版164-7、165-3・4、166-1~3)、床面直上から土師器壺 (図版164-6、165-1・2・5)、須恵器壺 (図版166-4)、須恵器環 (図版166-5・6) が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。

**ST112住居跡** (図版30、166-7、写真図版22)

ST112住居跡は、調査区ほぼ中央のX25-Y23区に位置しており、東にST111住居跡、西にST113住居跡が近接する。(平面形) 横軸3.9m、縦軸3.4-3.8mの方形で、主軸方向はN-134°-Eにある。南西壁は、溝状の耕作痕により削平されている。(堆積土) 覆土の層厚は15-20cmを測り、黒褐色シルト質土が堆積するが、耕作の擾乱が床面まで及んでいる。(壁面) 壁高は10-20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、カマド周辺から住居跡中央にかけて炭の集中、またその外縁に硬化面が認められる。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 南東壁のやや北寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部は幅50cm、長さ1.2mを測る。(出土遺物) カマドから土師器甕(図版166-7)が出土した。(時期) 出土遺物が少なく、時期の特定は困難である。

**ST111住居跡** (図版31、167-1-3、写真図版22)

ST111住居跡は、調査区ほぼ中央のX24-Y24区に位置する。東にST114・115住居跡、北西にST112住居跡が近接し、北西壁に沿って溝跡が掘り込まれている。(平面形) 横軸3.8-4m、縦軸3.7mの方形で、主軸方向はN-34°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は10-20cmを測り、暗褐色・淡褐色砂質シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は10-25cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴) 壁に沿ってピットを検出したが、柱穴は特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド) 北東壁やや南寄りに構築されており、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。(出土遺物) カマドから須恵器環(図版167-2)、南西壁際から須恵器環(図版167-3)が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。

**ST114住居跡** (図版32、167-4・5、168-1-6、写真図版24)

ST114住居跡は、調査区ほぼ中央のX24-Y26区に位置する。住居跡の南東半分は須川寄りの調査区域外にあり、本住居跡がST115住居跡を切っている。(平面形) 北西壁のみ検出し、北東壁と南西壁は部分的であるため、正確な規模・形状は不明だが、北西壁から一辺5.1m程度の方形で、主軸方向はN-30°-Wと推定される。北東壁は1m程度で内側に入り込むが、本来そのまま延長

すると思われる。(堆積土) 覆土の層厚は10-30cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は10-25cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、床として褐色粘質シルト質土が貼られており、ST115住居跡の床面よりも10cm低い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 判断としないが、北西壁中央に焼土が集中し、その直上に土師器甕(図版167-4・5、168-1-6)が纏まって出土したことから、カマドであった可能性が考えられる。(出土遺物) 上記の通り。(時期) 切り合い関係から、本住居跡がST115住居跡よりも新しいと見なされるが、ST115住居跡の遺物が混在しており、時期は特定できない。

**ST115住居跡** (図版32、169-1-4、写真図版24)

ST115住居跡は、調査区ほぼ中央のX24-Y26・X24-Y27・X25-Y26・X25-Y27区に位置する。ST114住居跡に大きく切られており、東側は須川寄りの調査区域外となる。(平面形) 一辺が3m程度の方形と思われるが、東側はST114住居跡と調査区東壁のため判断とせず、また北隅コーナーは試掘坑で削平を受けている。北西壁ラインから見た主軸方向はN-46°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は10cmを測るが、詳細は不明。(壁面) 壁高は10cm程度で、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められず、ST114住居跡の床面よりも10cm高い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 北東壁に構築され、袖部の一部と燃焼部が検出された。(出土遺物) カマドから須恵器環(図版169-3)、覆土から須恵器蓋(図版169-1)、須恵器環(図版169-2)、須恵器甕(図版169-4)が出土した。(時期) 切り合い関係からは、本住居跡がST114住居跡(8世紀後半)より古いと見なされるが、ST114住居跡の遺物が混在しており、時期は特定できない。

**ST117住居跡** (図版32、169-5・6、写真図版24)

ST117住居跡は、調査区ほぼ中央のX26-Y27・X26-Y28・X27-Y28区に位置する。北東壁と南東壁は攪乱により削平され、ST127住居跡が入れ子状に重複する。また住居跡内にも攪乱が及んでいる。(平面形) 一辺4m程度の方形と推測され、北西壁のラインから見た主軸方向はN-62°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は10-15cmを測り、砂質土・シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は10cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床

面) 平坦で、S T127住居跡直上には床が貼られ、焼土・炭が集中し、北東壁、南東壁付近や南側床面は攪乱を受けている。本住居跡の床面は、S T127住居跡より10cm高い。(柱穴) 住居跡内にビット3基が検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 覆土から土師器壺2点(図版169-5・6)が出土した。(時期) 遺物が少なく、時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。土層断面から見た切り合い関係は判然としませんが、本住居跡がS T127住居跡よりも新しいと見なされる。

#### S T127住居跡 (図版32、169-7-10、写真図版24)

S T127住居跡は、調査区はほぼ中央のX26-Y28区に位置する。S T117住居跡内に入れ子状に存し、南東壁、南西壁は判然としない。(平面形) 方形を呈し、S T117住居跡よりも小規模と推定されるが、詳細は不明。北西壁ラインから見た主軸方向はN-50°-Eにある。(堆積土) 詳細は不明。(壁面) 壁高は10cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められず、南西側は攪乱を受けている。本住居跡の床面は、S T117住居跡より10cm低い。(柱穴) 北隅コーナーに径60-75cmの焼土粒を多く含むビットが検出されたが、柱穴は検出されていない。(壁溝) 未検出。(カマド) 北隅コーナーのビットに焼土が見られることから、この付近にカマドが構築されていた可能性が考えられる。(出土遺物) 覆土から土師器壺(図版169-7・8)、須恵器蓋(図版169-9)、須恵器杯(図版169-10)が出土した。(時期) 出土遺物から、時期を特定することは困難である。土層断面から見た切り合い関係は判然としないが、本住居跡がS T117住居跡より古いと見なされる。

#### S T116住居跡 (図版33、169-11、170-1-7、写真図版25)

S T116住居跡は、調査区はほぼ中央のX26-Y26・X26-Y27・X27-Y26・X27-Y27区に位置する。東にS T117住居跡、北東にS T118住居跡、南にS T115住居跡が近接し、南東壁の一部と住居跡内は並行した溝跡に切られている。(平面形) 横軸5.7m、縦軸5.6mの方形で、主軸方向はN-45°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は5-15cmを測り、黒褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は5-15cmを測り、壁は外傾して立ち上が

る。(床面) 床が貼られ、やや起伏を有しており、焼土・炭の集中が認められる。耕作痕と思われる溝跡の掘り込みが、床面まで及んでいる。(柱穴) 未検出。(壁溝) 北東壁と南東壁の一部に、幅20-30cm、深さ5-15cmの壁溝が検出された。(カマド) 北東壁の東寄りに構築され、煙道部の一部と燃焼部が検出された。(出土遺物) カマドから土師器壺2点(図版170-1・2)、床面直上から土師器壺(図版169-11)、須恵器杯(図版170-6・7)、覆土から須恵器杯(図版170-3-5)が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。

#### S T118住居跡 (図版34、170-8-11、171-1-7、写真図版26)

S T118住居跡は、調査区はほぼ中央のX27-Y27・X27-Y28・X28-Y28区に位置する。住居跡の中央は北西-南東に伸びる溝跡に切られており、北西隅と南東隅が削平されている。南にS T117住居跡、西にS T116住居跡が近接する。(平面形) 北西隅と南東隅は失われているが、一辺5m程度の方形と推測され、東壁、西壁ラインから見た主軸方向はN-9°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は10-20cmを測り、凹レンズ状に堆積するが、上面は耕作による攪乱を受けている。(壁面) 壁高は10-20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 全面に黒褐色シルト質土が貼られている。(柱穴) 住居跡内からビット2基が検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド) 東壁の南寄りに構築されており、燃焼部のみ検出した。(出土遺物) カマドから土師器壺(図版171-1)、ビットから須恵器杯(図版171-4)、覆土から土師器壺か壺(図版171-2)、須恵器蓋(図版171-3)、須恵器及耳環(図版171-5)、須恵器壺(図版171-6・7)が出土した。(時期) 出土遺物から、時期を特定することは困難である。切り合い関係から、本住居跡が溝跡より古いと見なされる。

#### S T121住居跡 (図版35、173-4-6、写真図版28)

S T121住居跡は、調査区はほぼ中央のX30-Y27・X30-Y28区に位置する。北東壁がS X122性格不明遺構と接しており、南西にS T120住居跡が近接する。(平面形) 一辺3.5mの方形で、主軸方向はN-59°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は15cmを測り、凹レンズ状に黒褐色粘質土が堆積する。(壁面) 壁高は15cmを測り、壁は外傾して立ち上がるが、南西壁の一部は垂直に立ち

上がる。(床面)平坦で、硬化面や貼床は認められず、SX122性格不明遺構の床面より10cm程度低い。(柱穴)カマド付近にピット1基を検出したが、柱穴は特定できない。(壁溝)未検出。(カマド)北西壁のやや西寄りに構築されており、燃焼部のみが検出された。(出土遺物)覆土下位から土師器環2点(図版173-4・5)、土師器瓶(図版173-6)が出土した。(時期)出土遺物から、8世紀前半の住居跡と考えられる。切り合い関係は判然としないが、本住居跡がSX122性格不明遺構より新しいと見なされる。

#### ST124住居跡 (図版35、写真図版28)

ST124住居跡は、調査区中央の北側のX30-Y29・X30-Y30・X31-Y30区に位置し、東にST70住居跡が近接する。住居跡の壁溝と床面を検出したのみで、溝状の耕作痕の削平を受けている。(平面形)一辺3.7~4mの方形で、主軸方向はN-35°-Eにある。(堆積土)未検出。(壁面)壁高5cmの壁溝の立ち上がりのみ検出。(床面)平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴)未検出。(壁溝)幅15cm、深さ5cmの壁溝を北東壁、南東壁、南西壁で、部分的に検出された。(カマド)未検出。(出土遺物)出土遺物なし。(時期)出土遺物がなく、時期の特定は困難だが、古代の所産と考えられる。

#### ST119住居跡 (図版36、171-8・9、写真図版26)

ST119住居跡は、調査区ほぼ中央のX28-Y27・X29-Y27区に位置する。北にST120住居跡が接し、住居跡の中央は北西-南東に伸びた溝跡(SD125)に切られている。検出時にはほとんど床面に達しており、掘り方で掘り下げた。(平面形)短軸3.5m、長軸3.7~4.1mの方形で、主軸方向はN-48°-Wにある。(堆積土)詳細不明。(壁面)掘り方の壁高は5cm程度で、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面床を貼っていたと想定され、掘り方は平坦である。(柱穴)住居跡の壁際にピット2基を検出したが、柱穴は特定できない。(壁溝)未検出。(カマド)未検出であるが、北西壁または南東壁に構築されていたと推定される。(出土遺物)床面から土師器甕(図版171-9)が出土した。(時期)出土遺物から、時期を特定することは困難である。切り合い関係から、本住居跡が溝跡(SD125)より古いと見なされるが、隣接したST120住居跡との関係は判然としない。

#### ST120住居跡 (図版36、172-7~9、173-1~3、写真図版28)

ST120住居跡は、調査区ほぼ中央のX29-Y27・X30-Y27区に位置し、北東にST121住居跡、南にST119住居跡が近接する。(平面形)短軸3.4m、長軸3.7mの方形で、南西壁にカマドを想定した場合、主軸方向はN-162°-Wにある。(堆積土)覆土の層厚は10~15cmを測り、黒褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は10~15cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面に床が貼られており、硬化している。(柱穴)住居跡内にピット3基を検出したが、柱穴は特定できない。(壁溝)未検出。(カマド)南西壁に焼土・炭の集中が見られることから、この付近にカマドが構築されていたと想定される。(出土遺物)EK263から土師器甕2点(図版172-7、173-1)、EP264から土師器甕(図版172-8)、床面直上から須恵器双耳環(図版173-3)、覆土から土師器甕(図版172-9)、土師器埴(173-2)が出土した。(時期)出土遺物から、8世紀後半~9世紀前半の住居跡と考えられる。隣接したST119住居跡との新旧関係は判然としない。

#### ST123住居跡 (図版36、171-10・11、172-1~6、写真図版27)

ST123住居跡は、調査区ほぼ中央のX30-Y25・X30-Y26区に位置する。住居跡の北西半分は調査区域外になっており、南西壁は溝跡(SD125)に接している。(平面形)南東壁と北東壁・南西壁の一部が検出されたのみで、南東壁から3.5m程度の方角と推定され、主軸方向はN-135°-Wにある。(堆積土)覆土の層厚は10cmを測り、暗褐色シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は10~15cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴)カマド左袖部脇にピットが検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝)未検出。(カマド)南西壁南寄りに構築されており、袖部と燃焼部が検出された。煙道部は溝跡(SD125)で壊されたと思われる。(出土遺物)カマドから、土師器甕3点(図版171-11、172-1・2)、須恵器環(図版172-5)、床面直上から、土師器甕(図版172-3)、覆土から土師器甕(図版171-10)、須恵器環(図版172-4・6)が出土した。(時期)出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居

跡が溝跡（S D125）より古いと見なされる。

**S T70住居跡**（図版37、173-7・8、174-1～5、175-1～6、写真図版29）

S T70住居跡は、調査区中央の北側のX30-Y30・X30-Y31・X31-Y31区に位置する。住居跡の南東半分は調査区域外となっており、南西壁には直交するように溝状の耕作痕が多数掘り込まれている。直下にS T130住居跡とS T133住居跡が検出されたが、これらの住居跡の廃絶後に本住居跡が構築された。（平面形）横軸6～6.3mを測るが、縦軸は調査区域外に伸びているため判然としない。形状は方形で、主軸方向はN-40°-Wにある。（堆積土）覆土の層厚は30～40cmを測り、暗褐色・黒褐色砂質シルト質土が凹レンズ状に堆積する。（壁面）壁高は30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。（床面）全面に床が貼られており、S T130住居跡の床面より20cm高い。（柱穴）住居跡内からピット3基が検出されたが、この内E P266とE P267は床面から50cmの深さを測り、柱穴の可能性が高い。（壁溝）未検出。（カマド）煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部は直交するように溝状の攪乱を受けており、左袖部には心材として、火成岩が用いられている。（出土遺物）カマドから土師器壺（図版173-8）、土師器甕（図版174-3）、須恵器高台2点（図版175-3・4）、右袖部脇の床面直上から土師器甕（図版174-1・2）、須恵器杯（図版174-5、175-1）、覆土から土師器甕（図版174-4）、須恵器杯（図版175-2）、須恵器高台（図版175-5）、須恵器甕（図版175-6）が出土した。図版174-3は、S T130住居跡やS D158溝跡と接合関係にある。（時期）出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T130住居跡→S T133住居跡→S T70住居跡の順序になると見られる。

**S T130住居跡**（図版38、175-7～9）

S T130住居跡は、調査区中央の北側のX30-Y30・X30-Y31・X31-Y31区に位置する。住居跡の南東半分は調査区域外となっており、S T70住居跡の直下で検出された。S T70住居跡の直下で入れ子状に検出され、形状・規模とも同様であったと想定される。S T70住居跡床面直下にS T133住居跡の床面が検出され、その直下が本住居跡の覆土となることから、同一場所に同じ規模・形状の住居跡が3棟構築されたことになる。なおS

T133住居跡の南西壁は、本住居跡よりもやや外に張り出すようである。（平面形）S T70住居跡に同じ。（堆積土）覆土の層厚は20cmを測り、暗褐色シルト質微砂が堆積する。（壁面）壁高は15cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。（床面）平坦で、硬化面や貼床は認められない。S T70住居跡の床面より20cm低い。（柱穴）本住居跡内から深さ30cmのピット1基（E P291）を検出した。E P266・267はS T70住居跡の柱穴である。（壁溝）南西壁に幅15cm、床面からの深さ5cmの壁溝が検出された。（カマド）未検出。（出土遺物）覆土から土師器杯（図版175-7）、土師器甕（図版175-8）、須恵器杯（図版175-9）が出土した。図版175-7はS T70住居跡と接合関係にある。（時期）出土遺物から、8世紀中葉の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T130住居跡→S T133住居跡→S T70住居跡の順序になると見られる。

**S T133住居跡**（図版38、175-10・11）

S T133住居跡は、調査区中央の北側のX30-Y30・X30-Y31・X31-Y31区に位置する。住居跡の南東半分は調査区域外となっており、S T70住居跡の直下で検出され、その下位からはS T130住居跡が検出された。（平面形）S T70住居跡と同じで、南西壁がS T130住居跡より僅かに張り出している。（堆積土）S T70住居跡貼床直下の炭化層からなるが、詳細は不明。（壁面）詳細は不明だが、西隅コーナーの壁高は30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。（床面）全面に黒褐色シルト質土が貼られており、炭化層・焼土の集中が認められる。（柱穴）未検出。（壁溝）土層断面から、南西壁に幅10cm程度の壁溝の存していたことが窺われる。（カマド）未検出。（出土遺物）須恵器蓋（図版175-10）、須恵器杯（図版175-11）が出土したが、覆土が殆ど存しないことから、いずれも床面出土と思われる。（時期）出土遺物から、時期を特定することは困難である。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T130住居跡（8世紀中葉）→S T133住居跡→S T70住居跡（8世紀後半）の順序になると見られる。

**S T63住居跡**（図版39、175-12～15、176-1～19、写真図版30、32）

S T63住居跡は、調査区中央の北側のX31-Y32・X31-Y33・X32-Y33区に位置する。東側は須川寄りの

調査区域外となり、南壁は掘乱により削平されている。第1次調査区域の北東端に当たり、西にS T64住居跡が近接する。(平面形) 方形と思われ、規模は判然としなないが、西壁は5.5m以上を測る。西壁ラインから見た主軸方向はN-22°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は25-30cmを測り、下に黒褐色砂質シルト質土の炭化層が凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は25cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 全面に床が貼られ、中央は硬化しており、北側に炭の集中が見られる。掘り方は起伏を有する。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 検出できなかったが、南壁や東壁に構築されていた可能性がある。(出土遺物) 床面直上から、土師器甕(図版175-12・13)、須恵器蓋(図版175-14・15、176-1・2・4・6)、須恵器坏(図版176-7・8・11・12・15)、須恵器高台坏(図版176-17)が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。

#### S T68住居跡 (図版39、177-1~3、写真図版36)

S T68住居跡は、調査区中央の北側のX36-Y30・X36-Y31区に位置し、北西壁は調査区域外になっている。(平面形) 長軸2.5mの方形と推測され、主軸方向はN-36°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は15-20cmを測り、黒褐色シルト質土が凹レンズ状に体積する。(壁面) 壁高は20-25cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴) 住居跡内から、ビット1基(E K294)が検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド) 北東壁に構築されており、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。(出土遺物) カマド煙道部から須恵器壺(図版177-3)、燃焼部から土師器甕(図版177-1)、覆土下位から須恵器横板(図版177-2)が出土した。(時期) 出土遺物から、時期を特定することは困難である。

#### S T64住居跡 (図版40、177-4~7、178-1~8、179-1~9、写真図版30、33)

S T64住居跡は、調査区中央の北側のX32-Y31・X32-Y32区に位置し、北にS T66住居跡、東にS T63住居跡、南西にS T70住居跡が近接する。(平面形) 横軸5.1-5.4m、縦軸4.5mの方形で、平行四辺形となる。主軸方向はN-169°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は35-40cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は30-40cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)

全面に床が貼られており、掘り方はやや起伏を有する。カマド周辺には、焼土・炭の集中が広範囲に認められる。(柱穴) 四隅にビット4基(E P297・295・296・298)が検出され、柱穴と想定される。いずれも床面からの深さは10-20cmと浅い。(壁溝) 未検出。(カマド) 南壁の東寄りに構築されており、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部が幅40cm、長さ1.5mを測り、両袖には隙が心材として使用されていた。(出土遺物) カマドから土師器甕(図版177-4・7、178-1・2)、土師器鉢(図版178-3)、須恵器蓋(図版178-6・8)、須恵器坏(図版179-1・5)、床面直上から須恵器蓋(図版178-5)、須恵器高台坏(図版179-8)、覆土から土師器鉢(図版177-5・6)、須恵器蓋(図版178-7)、須恵器坏(図版179-2・4・6)、須恵器高台坏(図版179-7)、須恵器甕(図版179-9)が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。

#### S T65住居跡 (図版41、180-1~12、181-1~5、写真図版30、34)

S T65住居跡は、調査区中央の北側のX33-Y31・X33-Y32・X34-Y31・X34-Y32区に位置する。第1次調査区域の北東端に当たり、S T66住居跡を切っており、東にS T542住居跡、南にS T64住居跡、西にS T129住居跡が近接する。(平面形) 横軸5.8m、縦軸6.7mの方形で、主軸方向はN-0°にある。(堆積土) 覆土の層厚は25-30cmを測り、黒褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は30-40cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 住居跡の中央に床が貼られており、S T66住居跡の床面より10cm高い。(柱穴) E P299・301・311が柱穴であり、北東柱穴はE P300またはE P307が相当するが、前者の可能性が高い。(壁溝) 未検出。(カマド) 北壁のやや東寄りに構築されている。煙道部と燃焼部が検出され、袖部は痕跡が見られたのみである。(出土遺物) カマド付近から土師器甕(図版180-6)、E P307から土師器埴(図版180-7)、須恵器坏(図版181-2)、南壁際床面から須恵器蓋(図版180-11)、覆土から土師器甕(図版180-1・3・5)、土師器壺(図版180-8)、土師器鉢(図版180-9)、須恵器蓋(図版180-10・12)、須恵器坏(図版181-1)、須恵器埴埴(図版181-3)、須恵器高台坏(図版181-4)、須恵器壺(図版181-5)が出土した。この中で、墨書



土器(図版181-2)の出土が特記される。(時期)出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T66住居跡より新しいと見なされる。

#### S T66住居跡(図版41、184-1-3、写真図版35)

S T66住居跡は、調査区中央の北側のX33-Y31・X33-Y32区に位置する。住居跡の北半はS T65住居跡に切れ、南西隅は溝跡に切られている。東にS T542住居跡、南にS T64住居跡、西にS T129住居跡が近接する。(平面形)横軸4.6m、縦軸4mの方形で、主軸方向はS T65住居跡と同様である。(堆積土)詳細不明。(壁面)壁高は30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面に10~20cm程度の厚さで床を貼っている。S T65住居跡の床面より10cm低い。(柱穴)住居跡内からビット1基(E P310)が検出されたが、カマド脇の貯蔵穴と思われる。(壁溝)南壁と西壁で、幅20cm、床面からの深さ5cm程度の壁溝が検出された。(カマド)北壁の中央に構築され、煙道部と燃焼部が検出されたが、煙道部はあまり被熱を受けていない。(出土遺物)カマドから土師器杯2点(図版184-1・2)、E P311から須恵器杯(図版184-3)が出土した。なおE P311はS T65住居跡の柱穴と考えられており、遺物の所属住居跡については、問題が存している。また貯蔵穴と考えられるE P310から、鉄製刀子(RM256)が出土した。(時期)出土遺物から、7世紀後半の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T65住居跡(8世紀後半)より古いと見なされる。

#### S T129住居跡(図版42、181-6-12、182-1-6、193-20、写真図版30、31)

S T129住居跡は、調査区中央の北側のX33-Y30・X34-Y30区に位置する。東にS T65・66住居跡、南東にS T64住居跡が近接し、北壁の一部はS X153性格不明遺構に切られている。周囲からは柱穴状のビットが多く検出された。(平面形)横軸4.5m、縦軸4.2mの方形で、主軸方向はN-108°-Wにある。(堆積土)覆土の層厚は50~60cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面に褐色砂質シルト質土が、15~20cmの厚さで貼られている。(柱穴)住居跡の中央にビット1基(E P304)が検出された。掘り方の調査でビットが数基検出されたが、

柱穴は特定できなかった。(壁溝)西壁と南壁の一部に、幅10~20cm、床面からの深さ10cm程度の壁溝が検出された。(カマド)東壁の南寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。(出土遺物)カマド及びその周辺から土師器壺5点(図版181-7~11)、須恵器杯2点(図版182-2・3)、北壁際床面直上から須恵器杯(図版182-1)、覆土から土師器壺(図版181-6・12)、須恵器高台杯(図版182-4)、須恵器双耳杯(図版182-5)、須恵器長頸壺(図版182-6)、鉄滓(図版193-20)が出土した。(時期)出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。

#### S T145住居跡(図版43、写真図版37)

S T145住居跡は、調査区中央の北側のX36-Y31・X36-Y32・X37-Y32区に位置する。第1次調査区域の北端に当たり、本住居跡がS T61住居跡とS T161住居跡を切っており、S T161住居跡の直上に、ほぼ同規模の住居跡が構築されたことになる。(平面形)横軸4.5m、縦軸4.1mの方形で、主軸方向はN-161°-Eにある。土層断面の観察では、下位のS T161住居跡より本住居跡の方が若干大きい。(堆積土)覆土の層厚は10~20cmを測り、黒褐色微砂シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は10~15cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面に灰黄褐色粘土が5~10cmの厚さで貼られている。住居跡の中央に炭の集中が認められる。(柱穴)未検出。(壁溝)未検出。(カマド)詳細不明。(出土遺物)掲載遺物なし。(時期)出土遺物が少なく、時期の特定は困難だが、古代の所産と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T61住居跡→S T161住居跡→S T145住居跡の順序になると見られ、本住居跡が最も新しい。

#### S T161住居跡(図版43、写真図版37)

S T161住居跡は、調査区中央の北側のX36-Y31・X36-Y32・X37-Y32区に位置する。第1次調査区域の北端に当たり、本住居跡はS T61住居跡を切り、S T145住居跡に切られており、本住居跡の直上にS T145住居跡が構築されたことになる。(平面形)横軸4.3m、縦軸4mの方形で、主軸方向はN-161°-Eにある。直上のS T145住居跡よりも若干規模が小さい。(堆積土)覆土の層厚は25~35cmを測り、黒褐色微砂シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は20~30cmを測り、壁は外傾し

で立ち上がる。(床面) 全面に床が貼られており、S T 145住居跡の床面より30cm、S T 61住居跡の床面より20cm程度低い。(カマド周辺と住居内西側に炭化物の集中が認められた。(柱穴) 住居跡内からビット3基を検出したが、柱穴は特定できない。なおE P 318はS T 61住居跡の柱穴である。(壁溝) 未検出。(カマド) 煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部は幅20~25cm、長さ1.1mを測る。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 出土遺物が少なく、時期の特定は困難だが、古代の所産と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T 61住居跡→S T 161住居跡→S T 145住居跡の順序になると見られる。

#### S T 61住居跡 (図版43、182-7~13、写真図版37)

S T 61住居跡は、調査区中央の北側のX36-Y31・X36-Y32・X36-Y33・X37-Y31・X37-Y32・X37-Y33区に位置する。第1次調査区域の北端に当たり、本住居跡はS T 145住居跡とS T 161住居跡に切られている。(平面形) 横軸6.6~6.8m、縦軸7.1mの方形で、主軸方向はN-166°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は30~35cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は15~30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 床面に黒褐色微砂シルト質土が貼られている。(柱穴) E P 318・331~333のビット4基が、柱穴に相当する。いずれも床面から70cm以上掘り込まれ、底面は硬化している。E P 331では柱を抜き取った痕跡が観察され、E P 332では覆土内から礎が出土し、礎石として使用されたと推測される。(壁溝) 西壁の一部に幅15~20cm、床面からの深さ5~10cmの壁溝が検出された。(カマド) 煙道部、袖部、燃焼部が検出された。左袖部には心材として礎が用いられており、右袖部の残存状況は不良である。(出土遺物) カマド周辺から須恵器蓋 (図版182-9)、須恵器坏 (図版182-10)、覆土から土師器蓋 (図版182-7・8)、須恵器坏 (図版182-11・12)、須恵器甕 (図版182-13) が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀中葉の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T 61住居跡→S T 161住居跡→S T 145住居跡の順序になると見られ、本住居跡が最も古い。

#### S T 108住居跡 (図版44、写真図版20)

S T 108住居跡は、調査区中央の南側のX21-Y21・X21-Y22・X22-Y21・X22-Y22区に位置する。西

にS T 18住居跡、南にS T 20住居跡が近接し、南東壁を溝跡に切れ、カマドが想定される北東壁の一部も削平されている。(平面形) 短軸4.6m、長軸5.1mの方形と推測され、北東壁にカマドを想定した主軸方向はN-32°-Eにある。(堆積土) 耕作による溝跡の攪乱が多く見られるが、層厚は20~25cmを測り、黒褐色・暗褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は10~25cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められないが、北東壁の東寄りに炭が集中する。(柱穴) 住居跡内からビット6基が検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド) 検出されていないが、北東壁の東寄りに炭の集中が認められることから、該域に構築されていた可能性が考えられる。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 出土遺物が少なく、時期の特定は困難だが、古代の所産と考えられる。

#### S T 16住居跡 (図版45、183-1~10、写真図版19)

S T 16住居跡は、調査区中央の南側のX19-Y17・X19-Y18区に位置する。東にS T 73住居跡、南東にS E 180井戸跡が近接し、北東壁は2001年の試掘坑で削平されている。(平面形) 横軸3.3~3.6m、縦軸3.4mの方形で、主軸方向はN-131°-Wにある。(堆積土) 住居跡の中央が試掘坑で掘割されたため、壁際で黒褐色シルト質土の覆土が確認されたのみである。(壁面) 壁高は10~15cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) ほぼ全面に床として褐色粘質土が貼られている。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 煙道の北半は削平を受けているが、煙道部、袖部(左側)、燃焼部が検出された。袖部には礎が心材として用いられていた。(出土遺物) 須恵器坏 (図版183-8) を除いて、カマド及びその周辺から、土師器蓋4点 (図版183-1~4)、須恵器蓋3点 (図版183-5~7)、須恵器高台坏 (図版183-9)、須恵器甕 (図版183-10) が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。

## 3 第1次調査の井戸跡

#### S E 80井戸跡 (図版46、187-8、写真図版38)

S E 80井戸跡は、調査区南側のX13-Y14区に位置し、北東に海獣葡萄鏡 (図版237-11) が出土したS T 181住居跡、南西にS T 81住居跡が近接する。素掘井戸と推測され、調査は湧水のため、北側半分を調査して終了した。

(平面形) 掘り方は径2.5mの略円形で、底面は径1m程度になると推測される。(堆積土) 遺構検出面からの深さは90cmを測り、覆土は凹レンズ状に堆積している。(壁面) 壁面は底面から外傾して立ち上がるが、途中段が作り出される。(底部) 掘り方の底面は平坦だが、東側に傾斜しており、底部の施設は検出されていない。(出土遺物) 覆土から須恵器高台杯(図版187-8)が出土した。(時期) 出土遺物が少なく、時期の特定は困難だが、周囲の遺構との関係から、古代の所産と考えられる。

#### SE180井戸跡(図版47、写真図版38)

SE180井戸跡は、調査区中央の南側のX18-Y19区に位置し、北東にST73住居跡、南にST186住居跡、北西にST16住居跡が近接する。素掘井戸と推測され、調査は湧水のため、北側半分を調査して終了した。外周には上屋施設の存在を窺わせるピットが検出された。(平面形) 掘り方は径3mの円形で、底面は径1m程度になると推測される。(堆積土) 遺構検出面からの深さは95cmを測り、覆土は凹レンズ状に堆積している。(壁面) 壁面は底面から外傾して立ち上がるが、途中段が作り出される。(底部) 掘り方の底面は平坦で、底部の施設は検出されていない。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 出土遺物が少なく、時期の特定は困難だが、周囲の遺構との関係から、古代の所産と考えられる。

## 4 第1次調査の土坑

#### SK90土坑(図版48、188-3~7、189-1~8)

SK90土坑は、調査区南端のX3-Y3区に位置し、西側は調査区域外となっている。一辺3.3m程度の方形の掘り込みと径1.1mの円形の土坑から構成される。前者の遺構を後者が切っており、同時期の所産ではないが、調査時に厳密に区分されず、同一遺構として処理された。方形遺構は覆土の層厚が30~40cmを測り、黒褐色微砂シルト質土と褐色粘質シルト質土が凹レンズ状に堆積し、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。円形遺構は遺構検出面からの深さは1.35mを測り、底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土として黒褐色微砂シルト質土が堆積し、人為的に埋められたと推測される。(出土遺物) 覆土から土師器杯3点(図版188-3~5)、土師器高台杯4点(図版188-6・7、189-1・2)、須恵器杯4点(図版189-3~6)、須恵器高台杯(図版189-

7・8)が出土した。この中で墨書土器(図版189-3)の出土が特記される。(時期) 出土遺物から、9世紀代の遺構と考えられる。

#### SK509土坑(図版49、189-10・11)

SK509土坑は、調査区中央の南側のX19-Y19・X20-Y19区に位置する。ST73住居跡、ST72住居跡と重複するが、新旧関係は判然としにくい。短軸1.5m、長軸2mの楕円形で、底面は短軸1.1m、長軸1.5mを測る。遺構検出面からの深さは35cmで、南東に向かって浅くなる。(出土遺物) 底面直上から須恵器高台杯等(図版189-10・11)が出土した。(時期) 出土遺物から、時期の特定は困難である。

## 5 第1次調査のその他の遺構

#### SX89性格不明遺構(図版7、190-4)

SX89性格不明遺構は、調査区南端のX4-Y4・X4-Y5区に位置する。ST1住居跡のカマド煙道と重複関係にあり、新旧関係はST1住居跡を切っている。長軸2.5m、短軸2mの略楕円形の浅い掘り込みで、底面は起伏に富むが、詳細は判然としにくい。(出土遺物) 覆土から土師器罎(図版190-4)が出土している。(時期) 出土遺物から8世紀代後半に比定され、切り合い関係から、ST1住居跡より新しいと見なされる。

#### SX105性格不明遺構(図版10)

SX105性格不明遺構は、調査区南側のX6-Y6・X6-Y7区に位置する。ST5住居跡中央床面に掘り込まれており、新旧関係は判然としにくい。開口部は径1.3m、底面は径1.2mの円形の掘り込みで、深さはST5住居跡床面から70cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土は4層に区分され、水平に堆積しており、壁面や底面は酸化鉄のため赤化が顕著に認められた。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 出土遺物が少なく、時期の特定は困難であるが、ST5住居跡に付随した施設であった可能性も考えられる。

#### SX507性格不明遺構(図版49、190-5~9、191-1~10、写真図版39)

SX507性格不明遺構は、調査区南側のX14-Y16・X15-Y16に位置し、東にST13・78住居跡が近接する。長軸5.3m、短軸3.5mの卵形の掘り込みで、深さは20~30cmを測る。底面は起伏を有し、凹レンズ状にシルト質

土が堆積する。遺物が多量に出土したことから、土器捨て場跡であったと考えられる。(出土遺物) 覆土から土師器坏(図版190-5)、土師器双耳坏(図版190-8)、土師器盖(図版190-7)、土師器甕(図版190-6・9、191-1)、須恵器坏(図版191-2~9)、須恵器甕(図版191-10)が出土した。墨書土器2点(図版191-2・3)の出土が特記される。(時期) 出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。

#### S X 122 性格不明遺構 (図版35)

S X 122 性格不明遺構は、調査区ほぼ中央の X30-Y 28 区に位置し、南西壁が S T 121 住居跡の北西壁と接している。一辺 2 m の方形で、当初住居跡として調査されたが、規模が小さく、カマド、柱穴が検出されなかったことから、性格不明遺構に変更された。覆土の層厚は 10 cm で、にぶい黄褐色シルト質土が堆積する。壁高は 10 cm で、壁は外傾して立ち上がり、床は平坦で S T 121 住居跡の床面より 10 cm 程度高く、南隅コーナーのみ高まりを有する。(出土遺物) 出土遺物なし。(時期) 出土遺物がなく、時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。切り合い関係は判然としないが、本遺構が S T 121 住居跡より古いと見なされる。

#### S H 179 合口甕棺 (図版50、187-9、188-1・2、写真図版38)

S H 179 合口甕棺は、調査区北側の X42-Y36 区に位置しており、第2次調査区域に相当するが、第1次調査期間中に発掘調査された。S T 574 住居跡に切られており、北に S T 587 住居跡、東に S T 586 住居跡が近接する。土坑は短軸 0.65 m、長軸 1.45 m の楕円形で、長軸から見た主軸方向は N-45°-W にある。遺構検出面からの深さは 10~15 cm を測り、黒褐色シルト質土が堆積しており、壁は緩い角度で立ち上がる。底面は多少起伏を有しており、土器は 5 cm 程度浮いて検出された。(出土遺物) 土坑内から 3 点の土器が出土したが、土師器甕(図版187-9、188-1) 同士が合わせ口となり、やや離れて北側から土師器埴(図版188-2) が出土した。(時期) 出土遺物から、8 世紀代の甕棺と考えられる。切り合い関係から、本遺構が S T 574 住居跡(7 世紀末~8 世紀初頭) より新しいと見なされる。

## IV 第2次調査の成果

### 1 第2次調査の概要

川前2遺跡の第2次調査は、平成15年5月6日～10月31日までの実働120日間で、3,000㎡の面積で実施した。表土除去については前年に完了しており、器材搬入後直ぐに遺構検出と遺構調査に着手した。

第2次調査区は調査対象区域の北側（須川下流側）で、細長い眼鏡状を呈した調査区域の左眼レンズの部分に相当する。この区域は微高地となっており、住居跡が密集しており、重複が著しく、竪穴住居跡61棟、掘立柱建物跡2棟、井戸跡1基などの遺構を検出した。竪穴住居跡の殆どが奈良・平安時代の所産であったが、古墳時代の竪穴住居跡は5棟（ST703住居跡の詳細は不明）が検出された。

第2次調査区の東半（須川寄り）は須川の旧河道跡が確認されており、埋没してかなり時間が経過した後に、住居跡が構築されている。従って土層の状況が一様ではなく、遺構検出については困難を極めた。第2次調査区の基本層序は、図版113に図示しているが、表土として明黄褐色シルト質土（I層）が20cm程度堆積し、その直下が遺構検出面となる。II層（ふい黄褐色細砂質土）、III層（ふい黄褐色シルト質土）、IV層（褐色シルト質土）、V層（褐色シルト質土）の順序で堆積している。特にIV層は層厚5cm程度の水平な堆積であり、水性作用による層準と思われる。しかし地点毎に堆積の様相が異なるのは、第1次調査区と同様である。平成20年の第4次調査では、第2次調査の遺構面を20cm程度掘り下げて実施し、古墳時代の住居跡を多数検出すると共に、奈良・平安時代の住居跡も新たに検出した。第2次調査区の遺構検出面の海拔は、92.7～93.3mを測り、住居跡の分布は第2次調査区域の全面に及んでいる。しかし調査区の北端は、遺構の分布がやや希薄となる。

なお、遺構番号は第1次調査と同様に調査段階の番号をそのまま踏襲し、記載は調査区南側から北に向かって順次進めている。

### 2 第2次調査の竪穴住居跡

#### ST542住居跡（図版51）

ST542住居跡は、調査区中央の北側のX33-Y33・X34-Y33区に位置する。第2次調査区の南端に当たり、南にST63住居跡、西にST65住居跡が近接し、東西方向に溝跡（SD527）が掘り込まれている。（平面形）長軸4.3m、短軸3.9mの方形で、床面積は16.8㎡を測る。東・西壁ラインから見た主軸方向はN-22°-Eにある。（堆積土）覆土の層厚は8cmを測り、黒褐色シルト質土が堆積する。（壁面）東壁の壁高は5cm程度を測り、壁は垂直に立ち上がるが、西壁は削平されている。（床面）平坦で、硬化面や貼床は認められない。（柱穴）未検出。（壁溝）未検出。（カマド）床面の北側に炭化物の集中が見られたことから、北壁にカマドが構築された可能性が考えられるが、詳細は不明である。（出土遺物）出土遺物なし。（時期）出土遺物がなく、時期の特定は困難だが、住居跡の特徴から古代の所産と考えられる。なお切り合い関係から、本住居跡が溝跡（SD527）より古いと見なされる。

#### ST570住居跡（図版51）

ST570住居跡は、調査区の北側のX39-Y35・X40-Y35区に位置している。攪乱により大きく削平され、東壁が検出されたに過ぎず、住居跡であるかどうかは確定できない。（平面形）住居跡とすると、一辺3.2m以上の方形と推定され、東壁ラインから見た主軸方向はN-5°-Eにある。（堆積土）覆土の層厚は15cmを測り、黒褐色シルト質土が堆積する。（壁面）壁高は15～20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。（床面）詳細は不明だが、炭の集中が認められる。（柱穴）未検出。（壁溝）未検出。（カマド）未検出。（出土遺物）出土遺物なし。（時期）出土遺物がなく、時期の特定は困難である。

#### ST535住居跡（図版52、53、194-1～11、195-1、238-7、写真図版41）

ST535住居跡は、調査区中央の北側のX35-Y35・X35-Y36・X36-Y35・X36-Y36区に位置する。東

壁と南壁の一部は川寄りの調査区域外となっており、北にS T646住居跡が近接する。(平面形)長軸5m、短軸4.9mの方形で、床面積は24.6㎡を測り、主軸方向はN-100°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は20cmを測り、凹レンズ状に堆積しており、炭化材が認められる。(壁面)壁高は20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面に床を貼っており、貼り替えている。中央西寄りの旧床面上に炭化材・焼土塊が分布しており、柱・天井材の可能性が考えられる。火災にあった後に埋めて、床を貼り替えたと思われる。(柱穴)貼床を除去したところ、西側の柱穴2基(E P 2・3)を検出したが、東側は特定できない。新床面の柱穴はE P 1・4と想定される。なお北西隅のE P 5は深さが55cmを測り、柱穴の可能性が考えられる。(壁溝)未検出。(カマド)東壁の北寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部の先端は調査区域外となっており、袖部付近は被熱で脆くなった礫が散乱し、構築材であったと思われる。貯蔵穴と推定されるE K 6には、大量の焼土が含まれていた。(出土遺物)カマド及びその周辺から土師器壺2点(図版194-1・3)、須恵器杯2点(図版194-5・6)、覆土から土師器壺(図版194-2)、須恵器壺(図版194-4)、須恵器杯(図版194-6~9)、須恵器高台杯(図版194-10・11)、柱穴のE P 1から鉄製鉋(図版238-7)、貯蔵穴のE K 6から須恵器壺(図版195-1)が出土した。(時期)出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。

#### S T549住居跡(図版54、55、195-2~7、238-17・19、写真図版43)

S T549住居跡は、調査区中央の北側のX36-Y34・X37-Y34・X37-Y35区に位置する。第2次調査区の南端に相当し、北にS T654住居跡、東にS T646住居跡、西にS T61住居跡が近接し、住居跡の中央は2001年の試掘坑により削平されている。新旧の2面の床面が検出された。(平面形)長軸4.5m、短軸4.6mの方形で、床面積は21.7㎡を測り、主軸方向はN-31°-Wにある。(堆積土)覆土の層厚は30cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は20~30cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(床面)新床面は全面に暗褐色粘質シルト質土が貼られており、部分的に炭の集中が認められる。旧床面は部分的に貼床で、褐色粘質シルト質土が貼られ

ている。(柱穴)柱穴は4基検出された。新住居跡の柱穴がE P 2~5、旧住居跡の柱穴はE P 2・4・6・7で、E P 2・4が新旧住居跡の柱穴を兼ねている。(壁溝)未検出。(カマド)北西壁の中央に構築されているが、2001年の試掘坑で削平を受け、残存状況は良好とは言いがたい。袖部と燃焼部が検出されたが、新住居跡に伴うと考えられる。(出土遺物)新住居跡の床面から、土師器杯(図版195-2)、土師器壺(図版195-4~7)、鉄製品2点(図版238-17・19)が出土した。また旧住居跡の床面直上から、土師器杯(図版195-2・3)が出土したが、図版195-2は新旧住居跡同士で接合し、図版195-6はE K 1内からも出土した。(時期)出土遺物から、7世紀後半の住居跡と考えられる。

#### S T558住居跡(図版56、57、195-8・9、196-1~8、写真図版42、43)

S T558住居跡は、調査区中央の北側のX38-Y32・X38-Y33・X39-Y32・X39-Y33区に位置する。第2次調査区の南端に相当し、北東にS T560住居跡、東にS T654住居跡、南にS T61住居跡が近接し、北西壁は調査区域外にある。新旧の2面の床面が検出されている。(平面形)横軸4.4mの方形で、主軸方向はN-127°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は10~15cmを測り、暗褐色シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は15cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)新旧の床面とも貼床となっている。新床面は黒褐色粘質シルト質土が5cm程度貼られており、炭の集中箇所が認められる。旧床面は褐色粘質シルト質土が10cm程度貼られており、掘り方は比較的平坦である。(柱穴)E K 6と重複したピットが柱穴に相当するが、その他の柱穴は特定できない。(壁溝)未検出。(カマド)南東壁の東寄りに構築されており、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部の長さは56cmで、急傾斜で立ち上がり、その先端からは土師器壺4点(図版195-8・9、196-2・3)が出土した。袖部付近では礫が出土しており、構築材として使用されたと想定される。(出土遺物)カマドの煙道部については前記した通りである。住居跡の床面から土師器壺(図版196-1)、E P 1から須恵器高台杯(図版196-5)、E K 4から土師器壺(図版196-3)、E P 2・E K 3から土師器壺(図版196-4)が出土した。カマド煙道部から出土した図版195-8と図版196-2は、住居跡床

面・覆土・EK6からも破片が出土した。(時期) 出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。

#### S T 551住居跡 (図版58、197-1-4、写真図版43)

S T 551住居跡は、調査区中央の北側のX37-Y36・X37-Y37・X38-Y37区に位置する。東側をS T 552住居跡に切られており、北にS T 553住居跡、西にS T 550住居跡が近接する。(平面形) 長軸3.9m、短軸2.9mの方形で、床面積は11.3m<sup>2</sup>を測り、北東壁・南西壁ラインから見た主軸方向はN-55°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は20cmを測り、にぶい黄褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は15~20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められないが、西側床面に炭の集中箇所が認められる。床面はS T 552住居跡よりも10cm程度低い。(柱穴) 住居跡内からピット2基(E P 1・2)が検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。E P 1・2の覆土に焼土塊・ブロックが含まれることから、S T 552住居跡との重複箇所に構築された可能性が考えられる。(出土遺物) 床面から須恵器環(図版197-3)、E P 1から土師器甕又は鉢(図版197-1)、覆土から土師器甕(図版197-2)、須恵器壺(図版197-4)が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられ、切り合い関係から、本住居跡がS T 552住居跡よりも古いと見なされる。

#### S T 552住居跡 (図版59、197-2、234-18、235-1、写真図版43)

S T 552住居跡は、調査区中央の北側のX37-Y37・X37-Y38・X38-Y37区に位置する。西側がS T 551住居跡、南東壁がS K 647土坑を切っている。北にS T 553住居跡、西にS T 550住居跡が近接し、東側は川寄りの調査区域外となる。なおS K 647土坑は、径0.75m、深さ18cmの略円形の土坑で、底面に焼土が堆積している。(平面形) 長軸3.5m、短軸3.2mの方形で、床面積は11.4m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-148°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は10cmを測り、暗褐色・褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は5~10cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) S T 551住居跡上には、黒褐色・褐色シルト質土の床が貼られている。(柱穴) 住居跡の中央からピット1基(E P 1)が検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド)

南西壁の中央やや西寄りに構築されており、煙道の一部と燃焼部が検出された。(出土遺物) 住居跡中央のE P 1から土師器甕(図版197-2)、住居跡の覆土から土玉(図版234-18)、砥石(図版235-1)が出土した。(時期) 出土遺物が少なく、時期の特定は困難であるが、住居跡の特徴等から古代の所産と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T 551住居跡とS K 647土坑より新しいと見なされる。

#### S T 550住居跡 (図版60、61、197-5・6、198-1-4、199-1~11、200-1-4、238-1、写真図版44)

S T 550住居跡は、調査区中央の北側のX37-Y36・X38-Y36区に位置する。本住居跡はS T 646住居跡を切り、北西隅はS T 635住居跡に切られている。東にS T 551住居跡、南にS T 535住居跡、西にS T 549住居跡が近接する。(平面形) 長軸3.8m、短軸3.5mの方形で、床面積は13.3m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-120°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は20cmを測り、凹レンズ状に暗褐色・黒褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は20~30cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(床面) 黒褐色シルト質土が10cm程度の厚さで、全面に貼られており、S T 646住居跡の床面より10cm低い。(柱穴) 住居跡内からピット3基を検出したが、柱穴は特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド) 南東壁の南寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出され、煙道部の付け根は天井部が存しトンネル状を呈していた。袖部から土師器甕が纏まって出土しており、構築材に使用されたと考えられる。(出土遺物) カマドから土師器甕8点(図版197-5・6、198-1-4、199-1・2)、須恵器環2点(図版199-10・11)、鉄鎌(図版238-1)、床面から須恵器環(図版199-5・10)、須恵器壺(図版200-3)、須恵器甕(図版200-4)、貯蔵穴であるE P 1から土師器甕(図版197-6、199-1・2)が出土した。墨書土器2点(図版199-9・10)の出土が特記されるが、いずれもカマド周辺から出土した。(時期) 出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T 646住居跡→S T 550住居跡→S T 635住居跡の順序になると見られる。

#### S T 646住居跡 (図版60)

S T 646住居跡は、調査区中央の北側のX37-Y35・X37-Y36・X38-Y36区に位置する。東側を大きくS

T550住居跡に切られており、東にS T551住居跡、南にS T535住居跡、西にS T549住居跡が近接する。(平面形) 一辺3.9m程度の方角と推測され、南西壁ラインから見た主軸方向はN-45°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は15cmを測るが、詳細は不明。(壁面) 壁高は15cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(床面) 詳細は不明。S T550住居跡の床面より10cm高い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 出土遺物が少なく、時期の特定は困難であるが、住居跡の特徴等から古代の所産と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T646住居跡→S T550住居跡→S T635住居跡の順序になると見られる。

#### S T635住居跡 (図版62、200-5)

S T635住居跡は、調査区中央の北側のX38-Y35・X38-Y36区に位置し、S T550住居跡の北西隅を切っている。(平面形) 長軸3.4m、短軸3.2mの方角で、床面積は10.7㎡を測り、主軸方向はN-103°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は10~15cmを測り、暗褐色・褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は5~15cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 東壁の北寄りに構築され、煙道の一部と燃焼部が検出された。燃焼部に被熱で脆くなった礫が散布していたことから、構築材であったと考えられる。(出土遺物) 覆土から土師器片(図版200-5)が出土した。(時期) 出土遺物が少なく、時期の特定は困難であるが、住居跡の特徴等から古代の所産と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T646住居跡→S T550住居跡→S T635住居跡の順序になり、本住居跡が最も新しいと見られる。

#### S T554住居跡 (図版62、200-6・7、201-1-4、写真図版45、46)

S T554住居跡は、調査区中央の北側のX39-Y34区に位置する。S E655井戸跡、S T560住居跡、S T651住居跡、S T555住居跡と重複関係にあり、本遺構が後三者を切っている。(平面形) 長軸4.3m、短軸4.2mの方角で、床面積は17.9㎡を測り、主軸方向はN-4°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は10~20cmを測り、暗褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は5~20cmを

測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 全面に明黄褐色粘質シルト質土が貼られており、S T555住居跡の床面よりも15~20cm高い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 南壁のやや東寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部の長さは1mで、緩やかな傾斜で立ち上がる。(出土遺物) カマドから土師器壺4点(図版202-1・2、203-1・2)、須恵器壺(図版203-5)、覆土から土師器壺(図版200-6)、須恵器片(図版200-7、201-1・2)、須恵器壺(図版201-3・4)が出土したが、図版202-1・2、203-1・2・5はS T555住居跡、図版201-1はS T535住居跡、図版201-4はS T539住居跡と接合関係にある。墨書土器2点(図版200-7、201-2)の出土が特記される。(時期) 出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS E655井戸跡→S T651住居跡→S T560住居跡→S T555住居跡→S T554住居跡の順序になり、本住居跡が最も新しいと見られる。

#### S T555住居跡 (図版63、64、201-5~7、202-1~6、203-1~6、237-8、写真図版45)

S T555住居跡は、調査区中央の北側のX39-Y33・X39-Y34・X39-Y35・X40-Y34区に位置する。S E655井戸跡、S T560住居跡、S T651住居跡、S T554住居跡と重複関係にあり、本住居跡はS T554住居跡に切れ、S T560住居跡を切っている。(平面形) 長軸6.4m、短軸5.3mの方角で、床面積は33.6㎡を測り、主軸方向はN-110°-Eを測る。(堆積土) 覆土の層厚は10~30cmを測り、黒褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は10~30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 全面に床が貼られており、S T554住居跡の床面よりも15~20cm低い。(柱穴) 住居跡内にビット4基が検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド) 東壁の南寄りに構築され、煙道部、燃焼部が検出されたが、袖部の遺存状況は不良であった。煙道部の長さは1.3mで、ほぼ水平に伸びており、先端から須恵器壺(図版203-6)が出土した。(出土遺物) カマド周辺から、遺物が多く出土した。カマドから土師器壺(図版202-2・3、203-1)、土師器壺(図版203-3)、須恵器壺(図版203-5)、覆土から土師器壺(図版201-6・7、202-1~6、203-1・2)、須恵器壺(図版203-5)、鉄



製鎌(図版237-8)、E P 2から須恵器環(図版203-4)、E P 3・5から土師器甕(図版201-5)が出土した。なお図版202-1・2・5、203-1・2・5はS T 554住居跡と接合関係にある。(時期)出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS E 655井戸跡→S T 651住居跡→S T 560住居跡→S T 555住居跡→S T 554住居跡の順序になると見られる。

**S T 651住居跡** (図版65、66、203-10・11、204-1-3、234-9、写真図版46)

S T 651住居跡は、調査区中央の北側のX38-Y34・X39-Y34・X40-Y34区に位置する。S E 655井戸跡、S T 560住居跡、S T 555住居跡、S T 554住居跡と重複関係にあり、本住居跡はS T 554・555住居跡に切れ、S T 651住居跡を切っている。なお調査時は、本住居跡の掘り方をS T 654住居跡と呼称した。(平面形)西壁は検出されていないが、横軸5.3mの方形と推定され、北・南壁ラインから見た主軸方向はN-104°-Eにある。(堆積土)覆土の上層はS T 555住居跡に削平されており、下層のみが残存する。層厚は10cmを測り、暗褐色シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は5~35cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(床面)全面に床が貼られており、東壁に焼土・炭化物の集中が認められる。(柱穴)住居跡内からビット8基が検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝)未検出。(カマド)S T 555住居跡によって削平されたと思われるが、焼土の集中から東壁に構築されたと推測される。(出土遺物)床面から土師器環(図版203-10)、覆土から土師器甕(図版203-11)、須恵器環(図版204-1・2)、須恵器甕(図版204-3)、E P 1から土玉(図版234-9)が出土した。図版203-10・11は上位のS T 555住居跡と接合関係にある。(時期)出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS E 655井戸跡→S T 651住居跡→S T 560住居跡→S T 555住居跡→S T 554住居跡の順序で、住居跡では本住居跡が最も古いと見られる。

**S T 560住居跡** (図版67、写真図版47)

S T 560住居跡は、調査区中央の北側のX39-Y33・X40-Y33・X40-Y34区に位置する。南東壁はS T 555住居跡に切れ、北西壁は調査区域外となる。(平面形)

短軸4.5mの方形と推測され、北東・南西壁ラインから見た主軸方向はN-60°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は10~15cmを測り、暗褐色・黒褐色シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は10cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)平坦で、硬化面や貼床は認められないが、炭化物の集中が見られる。S T 555住居跡の床面よりも5~10cm高い。(柱穴)未検出。(壁溝)未検出。(カマド)未検出。(出土遺物)掲載遺物なし。(時期)出土遺物が少なく時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS E 655井戸跡→S T 651住居跡→S T 560住居跡→S T 555住居跡→S T 554住居跡の順序になると見られる。

**S T 618住居跡** (図版68、203-7-9、写真図版60)

S T 618住居跡は、調査区北側のX42-Y39・X42-Y40区に位置し、住居跡の密集地域で、多数の住居跡に取り囲まれているが、他の住居跡との切り合いはない。(平面形)長軸3.5m、短軸3.3mの方形で、床面積は11.6㎡を測る。南東・北西壁から見た主軸方向は、N-25°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は50cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は50cmを測り、壁は緩い角度で立ち上がる。(床面)全面に床が貼られ、焼土、炭の集中箇所が認められる。(柱穴)未検出。(壁溝)未検出。(カマド)未検出。(出土遺物)覆土から、土師器環(図版203-7)、須恵器蓋(図版203-8)、須恵器横瓶(図版203-9)が出土した。(時期)出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。

**S T 553住居跡** (図版69、204-4~7、238-6、写真図版47)

S T 553住居跡は、調査区北側のX38-Y37・X38-Y38・X39-Y37・X39-Y38区に位置し、北東にS T 612住居跡、南西にS T 551・552住居跡が近接する。遺構検出面は床面直上で、カマドのある南東壁の一部が検出され、攪乱を受けており、平面プランは不明瞭である。(平面形)長軸4.8m、短軸4.3mの方形で、床面積は20.6㎡を測り、主軸方向はN-120°-Eにある。(堆積土)床面直上で検出したため、覆土の詳細は不明。(壁面)カマド付近の壁高は5cm程度で、その他の壁高は認められない。(床面)詳細は不明。(柱穴)住居跡内からビット2基が検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝)未検出。(カマド)南東壁の中央に構築され、煙道部、袖

部、燃焼部が検出されたが、左袖部は攪乱により削平されている。(出土遺物) カマド周辺の床面から、土師器壺2点(図版204-4・5)、須恵器蓋(図版204-6)、須恵器坏(図版204-7)、鉄鉢(図版238-6)が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。

#### ST 648住居跡(図版69、205-1、写真図版60)

ST 648住居跡は、調査区北側のX41-Y40・X41-Y41・X42-Y41区に位置する。本住居跡がST 615住居跡を切っており、南壁と東壁の一部は須川寄りの調査区域外となる。(平面形) 長軸4.4m、短軸4.1mの方形で、床面積は18㎡程度と推定される。調査区域外の南壁にカマドを想定し、西壁ラインから見た主軸方向はN-166°-Wにある。(堆積土) 土層断面の記録は貼床面のみであったため、詳細は不明。(壁面) 壁高は15cm程度を測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 全面に黄褐色シルト質土が貼られ、南壁付近に焼土・炭の集中箇所が認められる。掘り方はやや起伏を有する。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 床面の焼土・炭の集中から、調査区域外の南壁に構築されたと想定される。(出土遺物) 床面から土師器壺(図版205-1)が出土した。(時期) 出土遺物が少なく時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がST 615住居跡より新しいと見なされる。

#### ST 584住居跡(図版70、205-2-6、写真図版48)

ST 584住居跡は、調査区北側のX40-Y36区に位置し、東にST 585住居跡、西にST 570住居跡が近接する。(平面形) 長軸2.7m、短軸2.6mの方形で、床面積は7.1㎡を測り、主軸方向はN-125°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は35cmを測り、暗褐色・黒褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 住居跡の中央に床が貼られ、掘り方は起伏を有する。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 南東壁の東角に構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部の長さは53cmで、急傾斜で立ち上がる。(出土遺物) カマドから土師器壺(図版205-2)、須恵器高台坏(図版205-5)、床面から須恵器高台坏(図版205-5)、覆土から土師器壺(図版205-3・4)、須恵器壺(図版205-6)が出土した。図版205-2はST 585住居跡カマドと接合関係にある。(時

期) 出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。

#### ST 585住居跡(図版71、72、205-2、写真図版48)

ST 585住居跡は、調査区北側のX40-Y36・X40-Y37・X41-Y37区に位置する。住居跡の南側は、北西-南東の方向で2001年の試掘坑により床面まで削平され、2基あるカマドの内EL 2が消失している。(平面形) 長軸3.4m、短軸3.3mの方形で、床面積は11.4㎡を測り、EL 1を基準にした主軸方向はN-160°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は20cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は15cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(床面) 全面に床が貼られ、炭の集中が認められる。(柱穴) 住居跡内からピット2基が検出されたが、カマドに付随した貯蔵穴等と思われ、柱穴は特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド) 南壁西側にEL 1、西壁のやや南寄りにEL 2が構築されており、後者は試掘坑で削平され、煙道部の痕跡が見られたのみである。EL 1は煙道部、袖部、燃焼部が検出され、煙道部は1.4mの長さを測る。EL 1の遺存状況が良好なことから、新たに付け替えたと考えられる。(出土遺物) 掲載遺物は、カマドから出土した土師器壺(図版205-2)に過ぎないが、同例はST 584住居跡カマドと接合関係にある。(時期) 出土遺物が少なく時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。

#### ST 572住居跡(図版73)

ST 572住居跡は、調査区北側のX41-Y34区に位置する。北にST 573住居跡が近接し、西側は調査区域外となる。(平面形) 一辺2.3m程度の方形と推測される。(堆積土) 覆土の層厚は10-15cmを測り、暗褐色・褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は5-15cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 出土遺物が少なく時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。

#### ST 573住居跡(図版73、234-1)

ST 573住居跡は、調査区北側のX42-Y34区に位置する。北東にST 574住居跡、南にST 572住居跡が近接し、西側は調査区域外となる。(平面形) 一辺3.1m程度の方形と推測され、東壁ラインから見た主軸方向はN-12°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は25-45cmを測

り、黒褐色・黒色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は20~25cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 覆土から土錘(図版234-1)が出土した。(時期) 出土遺物が少なく時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。

**S T 574住居跡** (図版74、205-7・8、206-1~4、207-1~5、236-1~12、237-1~6・12、238-18・22、写真図版50)

S T 574住居跡は、調査区北側のX41-Y35・X42-Y34・X42-Y35・X42-Y36・X43-Y35区に位置する。北東壁の一部をS T 582住居跡、住居跡中央をS D 575溝跡に切られており、東隅はS H 179合口窰棺に切られている。また西隅は調査区域外となる。(平面形) 長軸7.2m、短軸6.8mの方形で、床面積は49.0m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-32°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は30~35cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は25~35cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 全面に床が貼られており、S T 582住居跡の床面より10cm程度低い。(柱穴) E P 1~4のビット4基が柱穴となり、底面には柱痕跡が認められた。(壁溝) 未検出。(カマド) 北西壁の中央付近に構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部の先端は調査区域外になっており、右袖部の上位はS D 575溝跡の削平を受けている。(出土遺物) カマドから土師器甕3点(図版206-1・3・4)、床面から土師器高坏(図版205-7)、土師器甕(図版207-2・4)、土師器鉢(図版207-3)、鉄鏝(図版237-12)、鉄製品(図版238-22)、鉄製品(図版238-18)、なご石18点(図版236-1~12、237-1~6)、覆土から土師器甕(図版205-8、206-2、207-4)、土師器甕(図版207-5)が出土した。床面からなご石が纏まって出土した点が特記される。(時期) 出土遺物から、7世紀末~8世紀初頭の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方から、S T 574住居跡→S T 582住居跡・S D 575溝跡の順序になると見なされる。

**S T 612住居跡** (図版75、207-6~10、写真図版48)

S T 612住居跡は、調査区北側のX39-Y39・X40-Y38・X40-Y39区に位置する。北にS T 614住居跡、

南西にS T 553住居跡が近接し、南東壁の南側は須川寄りの調査区域外となる。北西壁と南東壁にそれぞれカマドが構築されている。(平面形) 一辺4.2mの方形で、床面積は17.6m<sup>2</sup>を測り、E L 1から見た主軸方向はN-55°-Wにある。(堆積土) 遺構検出面が床面直上であったため、覆土の様相は判然としにくい。(壁面) 壁高は5cm以下で、壁の立ち上がりは僅かであり、(床面) 貼床と思われるが、詳細は不明。(柱穴) 住居跡内から貯蔵穴と思われるビット4基が検出されたが、柱穴は認められない。(壁溝) 未検出。(カマド) 北西壁の中央にE L 1、南東壁の東側にE L 2が構築されている。E L 1は袖部が検出されたが、煙道部、燃焼部は明確でない。対面するE L 2は袖部、燃焼部が検出され、左袖部付け根から須恵器坏(図版207-9)が出土した。(出土遺物) カマドから土師器甕(図版207-6)、床面から土師器甕(図版207-6)、須恵器蓋2点(図版207-7・8)、須恵器坏(図版207-10)が出土した。刻書土器(図版207-8)の出土が特記される。(時期) 出土遺物から、8世紀中葉の住居跡と考えられる。

**S T 614住居跡** (図版76、77、208-1~5、237-7、写真図版56)

S T 614住居跡は、調査区北側のX41-Y39区に位置する。東壁はS T 615住居跡、西壁はS T 589住居跡を切っており、北はS T 618住居跡、南はS T 612住居跡に近接する。東壁にカマドが2基構築されている。(平面形) 長軸4.3m、短軸4.3mの方形で、床面積は20.6m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-98°-Eにある。北壁は掘りすぎており、直線的なラインにはならない。(堆積土) 覆土の層厚は10~40cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は10~35cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(床面) 全面に床が貼られており、間仕切りを窺わせるL字形の溝跡(E D 7)が検出され、溝跡の西側の床面は明確でない。カマドが2基構築されていることから、住居跡を縮小した可能性も考えられる。床面はS T 589住居跡より10cm低く、S T 615住居跡より5cm程度低い。(柱穴) 住居跡内からビット10基が検出されたが、E P 2・3が柱穴に相当する。溝跡に伴う小ビット4基(E P 6ほか)は、間仕切り施設に付随したビットであろう。(壁溝) 未検出。(カマド) 東壁に2基構築されており、中央付近がE L 1、北寄りがE L 2となる。E L 1は煙

道部、袖部、燃焼部が検出され、燃焼部から石製の支脚(図版237-7)が出土した。E L 2は煙道部と燃焼部が検出され、煙道部はトンネル状に残存し、先端が直角に曲がっていた。(出土遺物) E L 1から土師器甕(図版208-1)、須恵器坏(図版208-4)、覆土から須恵器坏(図版208-2・3・4)が出土した。なお図版208-3は、S T 615・617住居跡と接合関係にある。(時期)出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡が、S T 589住居跡とS T 615住居跡よりも新しいと見なされる。

**S T 615住居跡** (図版78、79、208-6~13、209-1・2、234-10~13、235-3、238-4・5・13、写真図版57)

S T 615住居跡は、調査区北側のX40-Y40・X41-Y39・X41-Y40・X42-Y40区に位置する。東壁をS T 648住居跡、西壁をS T 614住居跡に切られており、南東隅は調査区域外となり、北にS T 616・618住居跡が近接する。北壁にカマドが2基構築されている。(平面形)長軸6.4m、短軸6.1mの方形で、床面積は39.0m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-6°-Wにある。(堆積土)覆土の層厚は25~35cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は10~40cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面に床が貼られている。(柱穴)E P 1~4が柱穴で、柱痕跡が認められた。(壁溝)未検出。(カマド)北壁中央がE L 1、北壁西寄りがE L 2となる。E L 1は煙道部、袖部、燃焼部が検出され、煙道部の長さは1.22mを測る。E L 2はE L 1の左隣に存し、長さ1.1mの煙道部のみが検出された。このことからE L 2が古く、E L 1が付け替えられたと推測される。(出土遺物)床面から土師器坏(図版208-11)、南壁周辺の床面直上から土玉4点(図版234-10~13)、砥石(図版235-3)、E P 1から土師器甕(図版209-2)、E K 5から土師器坏(図版208-6)、覆土から土師器坏(図版208-7~10・12)、土師器甕(図版208-13、209-1)、鉄鍔(図版238-4)、鉄製品(図版238-5・13)が出土した。なご石と思われる礫7点が床面直上から出土したのと、関東系土師器(図版208-13)が特記される。(時期)出土遺物から、7世紀後半の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡が、S T 614住居跡とS T 648住居跡より古いと見なされる。

**S T 589住居跡** (図版80、81、209-3~5、234-14、写真図版53)

S T 589住居跡は、調査区北側のX41-Y37・X41-Y38・X41-Y39・X42-Y37・X42-Y38・X42-Y39・X43-Y38区に位置する。住居跡が密集した地点で、北壁がS T 591住居跡、東壁をS T 614住居跡、北西コーナーをS K 666土坑、住居跡内をS T 588・590住居跡に切られている。(平面形)長軸6.8m、短軸7.1mの方形で、床面積は48.3m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-68°-Wにある。(堆積土)覆土の層厚は15~20cmを測り、黒褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は15~25cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面に床が貼られている。(柱穴)E P 1~3・7が柱穴に相当し、底面に柱痕跡が認められた。(壁溝)未検出。(カマド)西壁の中央南寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。左袖部の一部はS T 588住居跡に削平されている。煙道部は1.4mの長さで、緩やかな傾斜で立ち上がる。(出土遺物)カマドから土師器坏2点(図版209-3・4)、覆土から土師器坏(図版209-5)、土玉(図版234-14)が出土した。(時期)出土遺物から、8世紀前半の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡が、S T 591住居跡、S T 614住居跡、S T 588・590住居跡、S K 666土坑より古いと見なされる。

**S T 590住居跡** (図版82、209-6、写真図版55)

S T 590住居跡は、調査区北側のX41-Y38・X42-Y38区に位置する。住居跡が密集した地点で、S T 589住居跡内に入れ子状に構築され、S T 588住居跡を切っている。(平面形)長軸3.5m、短軸3.4mの方形で、床面積は11.8m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-171°-Wにある。(堆積土)覆土の層厚は15cmを測り、暗褐色・黒褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は15~20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)S T 589住居跡の覆土が床面に相当するが、硬化面や貼床の状況は判然としない。S T 589住居跡の床面より5cm程度高い。(柱穴)未検出。(壁溝)未検出。(カマド)南壁の東側に構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。右袖部は土層観察時に除去したため、詳細は不明。(出土遺物)覆土から須恵器高台坏(図版209-6)が出土した。(時期)出土遺物が少なく時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。重複した遺構の新旧間

係は、古い方から S T 589 住居跡→S T 588 住居跡→S T 590 住居跡の順序になると見なされる。

#### S T 588 住居跡 (図版82、209-7・8、写真図版53)

S T 588 住居跡は、調査区北側の X41-Y38・X42-Y37・X42-Y38 区に位置する。住居跡が密集した地点で、S T 589 住居跡内に入れ子状に構築され、東側は S T 590 住居跡に切られている。(平面形) 長軸 2.7m、短軸 2.3m の方で、床面積は 6.2㎡を測り、長軸を基準とした主軸方向は N-60°-W にある。(堆積土) 覆土の堆積土は 10cm を測り、黒褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 貼床面からの壁高は 10cm を測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 全面に黒褐色シルト質の床が貼られ、掘り方は起伏を有する。貼床面は S T 589 住居跡の床面より 10cm 低い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 覆土から土師器壺 (図版209-7)、須恵器 (図版209-8) が出土した。(時期) 出土遺物が少なく時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方から S T 589 住居跡→S T 588 住居跡→S T 590 住居跡の順序になると見なされる。

#### S T 586 住居跡 (図版83、209-9、210-1~6、238-9~11・26、写真図版52、53)

S T 586 住居跡は、調査区北側の X41-Y36・X41-Y37・X42-Y36・X42-Y37 区に位置する。北東壁が S T 587 住居跡、カマド (E L 2) 煙道部が S T 589 住居跡を切っており、南に S T 585 住居跡、北西に S T 574 住居跡が近接する。北西壁と南東壁にそれぞれカマドが構築されている。(平面形) 長軸 4.5m、短軸 3.8m の方で、床面積は 17.1㎡を測り、E L 1 を基準とした主軸方向は N-65°-W にある。(堆積土) 覆土の層厚は 15~20cm を測り、暗褐色・黒褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は 15~25cm を測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 全面に床が貼られており、北東壁に沿って炭化物の集中が認められる。(柱穴) 柱穴は特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド) 北東壁の北寄りに E L 1、南東壁の東際に E L 2 が構築されている。E L 1 は煙道部、袖部、燃焼部が検出され、煙道部の長さは 1m で、水平に伸びている。E L 2 は煙道部のみ検出されたが、S T 589 住居跡を切っている。新旧の付け替えが想定されているが、詳細は不明である。(出土遺

物) E L 1 から土師器壺 2 点 (図版210-1・2)、床面から土師器壺 (図版209-9)、土師器ミニチュア土器 (図版210-4)、須恵器壺 (図版210-6)、覆土から環状金具 (図版238-9~11) が出土した。覆土から出土した墨書土器 (図版210-5) が特記される。(時期) 出土遺物から、8 世紀中葉の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方から S T 589 住居跡→S T 587 住居跡→S T 586 住居跡の順序になり、本住居跡が最も新しいと見なされる。

#### S T 587 住居跡 (図版83、写真図版52)

S T 587 住居跡は、調査区北側の X42-Y37 区に位置する。住居跡の大半が S T 586 住居跡に切られており、僅かに北東壁付近が残るに過ぎない。(平面形) 横軸 3.1m の方形と推測され、カマドの向きは異なるが、S T 586 住居跡に平行して構築されている。(堆積土) 覆土の層厚は 20cm を測り、暗褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は 20cm を測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 詳細は不明であるが、S T 586 住居跡の床面より 5cm 程度高い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) E L 3 は北東壁の東際に構築され、長さ 25cm の煙道部のみが検出された。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 出土遺物が少なく時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方から S T 589 住居跡→S T 587 住居跡→S T 586 住居跡の順序になると見なされる。

#### S T 582 住居跡 (図版84、85、210-7・8、211-1~7、写真図版52)

S T 582 住居跡は、調査区北側の X42-Y36・X43-Y36 区に位置する。南西隅が S T 574 住居跡の北東壁の一部を切っており、北壁と南壁にそれぞれカマドが構築されている。(平面形) 長軸 4.5m、短軸 3.9m の方で、床面積は 17.8㎡を測り、E L 1 を基準とした主軸方向は N-22°-E にある。E L 1 に近い東壁の北側がやや張り出している。(堆積土) 覆土の層厚は 25~35cm を測り、黒褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は 20~30cm を測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) ほぼ全面に床が貼られているが、西側はやや低く、起伏を有する。S T 574 住居跡の床面より 10cm 程度高い。(柱穴) 住居跡内からピット 3 基が検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド) 北壁の東寄りに

E L 1、南壁の中央にE L 2が構築されている。E L 1は煙道、袖部、燃焼部が検出された。煙道部の長さは1.4 mで、緩やかな角度で立ち上がり、袖部から出土した焼け磚は構築材に用いられたと推測される。E L 2は煙道部と燃焼部が検出された。袖部が明確でないことから、E L 2が古くE L 1が付け替えられたと考えられる。(出土遺物) E L 1及びその周囲から土師器壺(図版210-7、211-1) E P 1から須恵器高台坏(図版211-7)、E P 2から須恵器坏(図版211-4)、覆土から土師器壺(図版210-8、211-2)、土師器ミニチュア土器(図版211-3)、須恵器坏(図版211-5・6)が出土した。(時期) 出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T 574住居跡よりも新しいと見なされる。

#### S T 616住居跡 (図版86、211-8~10、写真図版60)

S T 616住居跡は、調査区北側のX42-Y40・X42-Y41・X43-Y40・X43-Y41区に位置する。西壁をS T 617住居跡に切られており、北にS T 610住居跡、西にS T 619住居跡、南にS T 615・648住居跡が近接する。(平面形) 長軸4.4m、短軸4.3mの方形で、床面積は18.9 m<sup>2</sup>を測り、東・西壁ラインから見た主軸方向はN-14°-Eにある。北壁ラインが東に向かって開いており、台形状を呈する。(堆積土) 覆土の層厚は25~30cmを測り、暗褐色粘質シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は25~30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められない。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 北東コーナーに構築されており、住居跡に対し斜め方向の軸を有する。長さ1mの煙道部が検出されたのみで、緩やかな角度で立ち上がるのが、詳細は不明である。(出土遺物) 床面から土師器壺(図版211-8)、覆土から須恵器坏(図版211-9)、須恵器壺(図版211-10)が出土した。なお図版211-9はS X 649性格不明遺構と接合関係にある。(時期) 出土遺物から、時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T 617住居跡より古いと見なされる。

#### S T 617住居跡 (図版86、212-1・2)

S T 617住居跡は、調査区北側のX42-Y40・X42-Y41・X43-Y40・X43-Y41区に位置する。S T 616住居跡を切っており、北にS T 610住居跡、西にS T 619住

居跡が近接する。南東隅は攪乱により削平を受けている。(平面形) 長軸3.5m、短軸2.7mの方形で、床面積は9.5 m<sup>2</sup>を測り、主軸方向はN-100°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は5cm程度で、褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は5cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) S T 616住居跡の覆土が床面となるが、詳細は不明である。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 東壁の南寄りに構築され、煙道部と燃焼部が検出された。煙道部は長さ50cmで、土師器壺(図版212-1)が出土した。(出土遺物) 土師器坏(図版212-2)は東壁に接して出土しており、本住居跡に伴うかどうかは確定できない。(時期) 出土遺物が少なく、時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T 616住居跡よりも新しいと見なされる。

#### S T 619住居跡 (図版87、88、212-5・6、213-1、写真図版59、60)

S T 619住居跡は、調査区北側のX42-Y40・X43-Y39・X43-Y40区に位置する。北側をS T 620住居跡に切られており、東にS T 617住居跡、南にS T 618住居跡、南西にS T 591住居跡が近接する。(平面形) 長軸3.6m、短軸3.1mの方形で、南壁ラインで見た主軸方向はN-112°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は25cmを測り、黒褐色・暗褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は25~30cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(床面) 平坦で、硬化面や貼床は認められない。S T 620住居跡の床面よりも10cm程度高い。(柱穴) 住居内からピット2基が検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド) 東壁の北寄りに構築され、煙道部と袖部が検出された。燃焼部はS T 620住居跡のカマドで削平されており、煙道部の長さは44cmを測る。(出土遺物) カマド及びその周囲から土師器壺(図版212-5)、土師器埴(図版213-1)、須恵器高台坏(図版212-6)が出土した。(時期) 出土遺物から、時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T 619住居跡→S T 620住居跡→S T 621住居跡の順序になり、本住居跡が最も古いと見なされる。

#### S T 620住居跡 (図版87、88、213-2~10、238-8、写真図版59、60)

S T 620住居跡は、X43-Y39・X43-Y40・X44-

Y39・X44-Y40区に位置する。南壁がS T619住居跡を切り、北・西壁がS T621住居跡に切られている。住居跡が密集した区域で、東にS T610住居跡、南東にS T616・617住居跡、南にS T618住居跡、南西にS T591・686住居跡が近接する。住居跡の中央北寄りには2001年の試掘坑で削平されている。(平面形)長軸5.3m、短軸4.9mの方形で、床面積は25.8㎡を測り、主軸方向はN-93°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は25-30cmを測り、暗褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は25-30cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(床面)全面に床が貼られており、S T619住居跡とS T621住居跡の床面より10cm低い。(柱穴)住居跡のピットの内、EP2、EP1・5、EP4が柱穴の可能性が考えられるが、確定できない。(壁溝)未検出。(カマド)南東隅に構築され、袖部と燃焼部が検出された。S T619住居跡のカマドを壊して構築されており、煙道部は明確でない。(出土遺物)カマドから須恵器壺2点(図版213-5・6)、床面から須恵器蓋(図版213-3)、須恵器高台杯(図版213-10)、覆土から土師器壺(図版213-2)、須恵器蓋(図版213-4)、須恵器杯(図版213-7・9)、鉄製環状金具(図版238-8)が出土した。図版213-3はS T616住居跡、図版213-9はS T621住居跡と接合関係にあり、墨書土器2点(図版213-5・10)の出土が特記される。(時期)出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T619住居跡→S T620住居跡→S T621住居跡の順序になると見なされる。

#### S T621住居跡 (図版88、212-3・4、写真図版59)

S T621住居跡は、調査区北側のX43-Y39・X44-Y39区に位置する。南東隅がS T620住居跡の北・西壁の一部を切っており、北にS T602住居跡、北西にS T593住居跡、南西にS T686住居跡が近接する。住居跡の中央を北西-南東の方向に、2001年の試掘坑が削平している。(平面形)長軸3.5m、短軸3.4mの方形で、床面積は11.9㎡を測り、北・南壁ラインで見た主軸方向はN-88°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は10-15cmを測り、暗褐色・黒褐色シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は15cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(床面)全面に床が貼られており、S T620住居跡の床面よりも10cm高い。(柱穴)未検出。(壁溝)未検出。(カマ

ド)東壁の削平部分に焼土の集中があることから、東壁にカマドが構築されていた可能性が考えられる。また南東隅のS K650土坑の覆土に焼土が多く含まれることから、カマドに関連した施設の可能性も否めない。(出土遺物)覆土から須恵器杯(図版212-3)、須恵器高台杯(図版212-4)が出土した。(時期)出土遺物から、時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T619住居跡→S T620住居跡→S T621住居跡の順序になり、本住居跡が最も新しいと見なされる。

#### S T583住居跡 (図版89、90、214-1~8、234-15・16・25、写真図版51)

S T583住居跡は、調査区北側のX43-Y37・X43-Y38・X44-Y36・X44-Y37・X44-Y38区に位置する。古墳時代のS T707住居跡を切って構築されており、北東にS T593住居跡、南東にS T589住居跡、南西にS T582住居跡が近接する。なお本住居跡の床面直下については、2008年の第4次調査でS T26住居跡として補足調査を実施した。(平面形)長軸5.9m、短軸5.4mの方形で、床面積は32.0㎡を測り、主軸方向はN-31°-Wにある。(堆積土)覆土の層厚は25-30cmを測り、黒褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は25-35cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面に床が貼られている。(柱穴)EP1-4が柱穴で、底面に柱痕跡が認められた。(壁溝)未検出。(カマド)北東壁の中央に構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部の長さは1.4mで、水平に伸びており、カマド内から土師器壺(図版214-8)が倒立して出土したことから、支脚として用いられたと考えられる。(出土遺物)カマド及びその周囲から土師器壺(図版214-5・8)、床面から土師器壺(図版214-6)、床面から砥石(図版234-25)、EK7から土師器杯(図版214-3)、EK6から土師器杯(図版214-4)、EP4から土師器壺(図版214-6・7)が出土した。南西壁際の西寄りの床面から、なご石と思われる礫が並べられた状態で5点出土し、土玉2点も出土した。図版234-15は床面直上、図版234-16は北東壁際から出土した。図版214-1はS T591住居跡と接合関係にある。関東系土師器2点(図版214-5・6)が出土した点が特記される。(時期)出土遺物から、7世紀後半の住居跡と考えられ

る。切り合い関係から、本住居跡がS T 707住居跡よりも新しいと見なされる。

#### S T 707住居跡 (図版91)

S T 707住居跡は、X43-Y36・X43-Y37・X44-Y36・X44-Y37・X45-Y36・X45-Y37区に位置する。住居跡の南東部をS T 583住居跡、北西側をS B 701掘立柱建物跡に切られている。北東にS T 684住居跡、南にS T 582住居跡が近接する。住居跡の範囲を確認したのみで、2008年の第4次調査で、S T 27住居跡として調査した。(平面形)長軸6.5m、短軸6.4mの方形で、床面積は41.6㎡を測り、東・西壁のラインで見た主軸方向はN-19°-Eにある。(堆積土)未調査のため不明。(壁面)未調査のため不明。(床面)未調査のため不明。(柱穴)未調査のため未検出。(壁溝)未調査のため未検出。(炉跡)未調査のため未検出。(出土遺物)未調査のため掲載遺物なし。(時期)古墳時代の住居跡で、切り合い関係から、本住居跡がS T 583住居跡とS B 701掘立柱建物跡より古いと見なされる。

#### S T 595住居跡 (図版91、225-1-3、写真図版64)

S T 595住居跡は、X46-Y37区に位置する。北西のプランを検出したのみで、詳細は判然としないが、S D 588溝跡により、切られている。なお2008年の第4次調査で、S T 23住居跡として補足調査を実施した。(平面形)一部のプランを検出したのみで、詳細は不明。(堆積土)詳細は不明。(壁面)詳細は不明。(床面)詳細は不明。(柱穴)未検出。(壁溝)未検出。(炉跡)未検出。(出土遺物)床面から土師器壺(図版225-1)、土師器台付壺(図版225-3)、覆土から土師器甕(図版225-2)が出土した。(時期)出土遺物から、古墳時代前期4世紀代の住居跡と考えられる。

#### S T 610住居跡 (図版92、215-1-3、234-19-21)

S T 610住居跡は、調査区北側のX43-Y40・X43-Y41・X44-Y40・X44-Y41区に位置する。住居跡内にS K 649土坑が掘り込まれ、北壁はS D 611溝跡で切られており、西にS T 620住居跡、南にS T 616住居跡が近接する。(平面形)長軸3.3m、短軸3.2mの方形で、床面積は10.6㎡を測り、東・西壁ラインから見た主軸方向はN-10°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は35~45cmを測り、下位に黒褐色シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は20~40cmを測り、壁は緩い角度で立ち上がる。(床

面)床に黒褐色シルト質土・にぶい黄褐色粘土が貼られている。S K 649土坑の底面より10~15cm低い。(柱穴)未検出。(壁溝)未検出。(カマド)未検出。(出土遺物)床面から土師器甕(図版215-2)、土製紡錘車(図版234-19)、土製支脚(図版234-21)、覆土から土師器甕(図版215-1)、須恵器杯(図版215-3)が出土した。(時期)出土遺物から、8世紀中葉の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS K 649土坑、S D 611溝跡より古いと見なされる。

#### S T 591住居跡 (図版93、215-4~10、234-2~8、238-16・20、写真図版54、55)

S T 591住居跡は、調査区北側のX42-Y38・X42-Y39・X43-Y38・X43-Y39区に位置する。東側はS T 686住居跡とS T 687住居跡、西側はS T 589住居跡を切っており、東にS T 620・618住居跡が近接する。(平面形)長軸4m、短軸3.3mの方形で、床面積は13.1㎡を測り、主軸方向はN-42°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は35~40cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は30~40cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(床面)床が貼られている。(柱穴)未検出。(壁溝)未検出。(カマド)北東壁の東寄りに袖石状の切石が出土したことから、仮設のカマドが構築されていた可能性が考えられる。(出土遺物)床面から土師器甕(図版215-4)、須恵器蓋(図版215-5・6)、須恵器杯(図版215-7)、須恵器高台杯(図版215-8~10)、土鍾7点(234-2~8)、鉄製品(図版238-16・20)が出土した。仮設カマド?の脇の床面からコモ網の土鍾が纏まって出土したが、網に付けられた状態であったと想定される。(時期)出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、東側は古い方からS T 686住居跡→S T 687住居跡→S T 591住居跡の順序になり、西側は古い方からS T 589住居跡→S T 591住居跡の順序になり、本住居跡が最も新しいと見なされる。

#### S T 687住居跡 (図版94、231-2、写真図版54、55)

S T 687住居跡は、調査区北側のX43-Y39区に位置する。S T 686住居跡を切って構築されたが、北東壁を除く大半が、S T 591住居跡に切られている。(平面形)北東壁の幅は3.8mを測り、主軸方向はS T 591住居跡と同様と推測される。(堆積土)詳細は不明。(壁面)壁高



は10~30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) S T 686住居跡の床面より10cm低く、S T 591住居跡の床面より10cm高い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 北東壁の北寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。袖部には構築材として礫が用いられており、屹立した状態で検出された。(出土遺物) 床面から出土した土師器壺(図版231-2)が、S T 686住居跡と接合関係にある。その他の出土遺物は不明。(時期) 出土遺物が少なく時期の特定は困難だが、古代の所産と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T 686住居跡→S T 687住居跡→S T 591住居跡の順序になり、図版231-2は7世紀後半に位置付けられる。

#### S T 686住居跡 (図版94、231-1~4、写真図版55)

S T 686住居跡は、調査区北側のX43-Y38・X43-Y39区に位置する。南西側をS T 591・687住居跡に切られており、北にS T 621住居跡、東にS T 620住居跡が近接する。形状から住居跡でない可能性もある。(平面形) 長軸4.5m、短軸2.6mの不整形で、長軸ラインで見た主軸方向はN-25°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は20cmを測り、黒褐色シルト質土が堆積する。(壁面) 壁高は15cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 平坦で床が貼られており、炭化物の集中箇所が認められる。S T 687住居跡の床面より10cm高い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 未検出。(出土遺物) 床面から土師器杯(図版231-1)、土師器壺(図版231-2)、土師器鉢(図版231-4)、覆土から土師器壺(図版231-3)が出土した。図版231-2はS T 687住居跡と接合関係にある。(時期) 出土遺物から、7世紀後半の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T 686住居跡→S T 687住居跡→S T 591住居跡の順序になり、本住居跡が最も古いと見なされる。

#### S T 592住居跡 (図版95、216-1~6、235-2、写真図版61、62)

S T 592住居跡は、調査区北側のX45-Y38区に位置する。南壁を2001年の試掘坑で削平され、S T 684住居跡とS T 593住居跡を切っている。またカマド煙道部がS T 597住居跡を切っている。本住居跡にはカマドが2基構築されている。(平面形) 横軸4.5mの方形で、主軸方向はN-20°-Eにあるが、南壁は削平されたため、規模は判然としない。(堆積土) 覆土の層厚は40cmを測り、

凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は40cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 床が貼られている。S T 684住居跡の床面よりも5cm程度高い。(柱穴) 特定できない。(壁溝) 未検出。(カマド) E L 1は北東壁の東側、E L 2は南東壁の南寄りに構築されている。E L 1は煙道部、袖部が検出されたが、袖部の残存は良好でなかった。E L 2は煙道部と燃焼部が検出されたが、袖部は確認できなかった。煙道部はトンネル状に残存しており、先端はS T 593住居跡の覆土をくりぬいていた。E L 1で遺物が多く出土したのに対し、E L 2では少なく、E L 1が新たに付け替えられたと想定される。(出土遺物) E L 1から、須恵器壺(図版216-6)、E L 2から土師器壺(図版216-2)、床面から土師器壺(図版216-1・3)、覆土から須恵器蓋(図版216-4)、須恵器高台杯(図版216-5)、須恵器壺(図版216-6)、砥石(図版235-2)が出土した。図版216-1はS T 597住居跡E L 1、図版216-3はS T 684住居跡E L、図版216-6はS T 597住居跡、S T 602住居跡、S T 604住居跡、S B 600掘立柱建物跡E B 4と接合関係にある。(時期) 出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T 593住居跡→S T 684住居跡→S T 597住居跡→S T 592住居跡の順序になり、本住居跡が最も新しいと見なされる。

#### S T 593住居跡 (図版96、217-1~4、238-25、写真図版61)

S T 593住居跡は、調査区北側のX44-Y38・X44-Y39・X45-Y38・X45-Y39区に位置する。北西側をS T 684住居跡とS T 592住居跡に切られており、北東にS T 602住居跡、南東にS T 621住居跡、南西にS T 583住居跡が近接する。住居跡の中央は、2001年の試掘坑で削平されている。(平面形) 長軸4.9m、短軸4.5mの方形で、床面積は22.1㎡を測り、主軸方向はN-44°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は15~20cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は15~20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 床が貼られている。S T 592住居跡の床面よりも5cm程度高い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。(カマド) 北東壁の東寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部の長さは90cmで緩やかに傾斜して立ち上がる。(出土遺物) 覆土から土師器壺(図版217-1・2)、須恵器高台杯(図

版217-3)、鉄製品(図版238-25)が出土した。(時期)出土遺物から、時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T 592住居跡(8世紀後半)より古いと見なされる。

#### S T 684住居跡(図版97、217-5、写真図版64)

S T 684住居跡は、調査区北側のX44-Y38・X45-Y37・X45-Y38・X46-Y38区に位置する。S T 592住居跡とS T 597住居跡に切れ、S T 593住居跡を切っている。また北・西壁の一部をS D 598溝跡に切られている。(平面形)長軸5.3m、短軸5mの台形状を呈し、床面積は26.5㎡を測り、主軸方向はN-107°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は35cmを測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁は北東壁と北西壁に部分的に見られるのみで、壁高は25-35cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)平坦で、硬化面や貼床は認められない。S T 592住居跡の床面より5cm程度低い。(柱穴)住居跡内でピット1基が検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝)未検出。(カマド)北東壁の北寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出されたが、袖部の残存は良好な状態ではなかった。(出土遺物)床面から土師器仏器(図版217-5)が出土した。(時期)出土遺物から、8世紀前半の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T 593住居跡→S T 684住居跡→S T 597住居跡→S T 592住居跡の順序になると見なされる。

#### S T 680住居跡(図版98、99、217-6~8、218-1~14、219-1~11、234-24、237-10、238-14、写真図版61)

S T 680住居跡は、調査区北側のX44-Y41・X44-Y42・X45-Y42区に位置し、住居跡密集区域の東端に当たる。西壁の北側は2001年の試掘坑により削平を受けている。(平面形)長軸5m、短軸4.2mの方形で、床面積は21㎡を測り、主軸方向はN-107°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は20-40cmを測り、明るい色調の土層が凹レンズ状に堆積し、下位に暗褐色シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は20-35cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)平坦であるが、硬化面や貼床は判然としない。(柱穴)E P 7を除くE P 1-8が、柱穴に相当すると考えられる。E P 4のみ深さが65cmと深い。(壁溝)未検出。(カマド)東壁の南側に構築され、煙道

部、袖部、燃焼部が検出された。カマド内からは土師器甕(図版219-4)、土師器杯(図版218-10・12)が纏まって出土し、カマド前の覆土には被熱した糠が散布していた。(出土遺物)カマドから土師器甕(図版217-6)、床面から土師器甕(図版217-6)、土師器杯(図版218-1~3)、土師器高台杯(図版218-14)、須恵器高台杯(図版219-10)、砥石(図版234-24)、鉄鏃(図版237-10)、E P 1から須恵器高台杯(図版219-9)、E P 2から鉄製品(図版238-14)、E P 4から土師器杯(図版218-4)、E P 6から土師器甕(図版217-8)、土師器杯(図版218-7)、E P 7から土師器甕(図版217-6)、須恵器蓋(図版219-6)、E P 8から土師器杯(図版218-5)、須恵器仏器(図版219-11)が出土した。土師器杯類が多く出土したのと、墨書土器(図版219-7)の出土が特記される。(時期)出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。

#### S T 602住居跡(図版100、101、219-12~16、220-1、234-17、写真図版65、66)

S T 602住居跡は、調査区北側のX44-Y39・X44-Y40・X45-Y39・X45-Y40区に位置する。S T 603住居跡の南西壁を切っており、南にS T 621住居跡、西にS T 593住居跡が近接する。(平面形)長軸4m、短軸3.6mの方形で、床面積は14.4㎡を測り、北西壁・南東壁ラインから見た主軸方向はN-45°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は35-45cmを測り、黒褐色・暗褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は35-45cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(床面)平坦で、中央に炭化物の集中が認められるが、貼床については判然としない。S T 603住居跡の床面より10cm低い。(柱穴)E P 1-4の4基のピットが柱穴で、底面に柱痕跡が認められた。(壁溝)未検出。(カマド)未検出。(出土遺物)床面から須恵器杯(図版219-13)、覆土から土師器甕(図版219-12)、須恵器杯(図版219-14・15)、須恵器壺(図版219-16、220-1)、土玉(図版234-17)が出土した。(時期)出土遺物から、9世紀代の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T 603住居跡よりも新しいと見なされる。

#### S T 604住居跡(図版102、103、222-2~5、写真図版65、66)

S T 604住居跡は、調査区北側のX46-Y39・X46-

Y40区に位置する。S T603住居跡とS T682住居跡を切っており、S B600掘立柱建物跡のE B5にカマド煙道部、E B11に南壁が切られている。北にS T607住居跡、西にS T597住居跡が近接する。(平面形)長軸3.4m、短軸2.9mの方形で、床面積は9.9㎡を測り、主軸方向はN-20°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は15~20cmを測り、下位に黒褐色シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は15cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面に床が貼られており、S T682住居跡の床面より10cm低く、S T603住居跡の床面より15cm高い。(柱穴)未検出。(壁溝)未検出。(カマド)北壁の東側に構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。住居跡に対し斜めに軸を有しており、煙道部はS B600掘立柱建物跡のE B5によって壊されている。(出土遺物)カマドから土師器甕(図版222-2)、須恵器甕(図版222-5)、床面から土師器甕(図版222-3)、須恵器甕(図版222-5)、貯蔵穴であるE K1から須恵器杯(図版222-4)が出土した。(時期)出土遺物から、時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T603住居跡→S T682住居跡→S T604住居跡→S B600掘立柱建物跡の順序になると見なされる。

#### S T682住居跡(図版102、写真図版66)

S T682住居跡は、調査区北側のX45-Y40・X46-Y40区に位置する。西側をS T604住居跡に大きく切られており、カマドもS T604住居跡のカマドに壊されている。(平面形)一辺2.45mの方形と推測され、東壁ラインから見た主軸方向はN-21°-Eにあり、S T604住居跡とはほぼ同等である。(堆積土)覆土の層厚は10cmを測り、暗褐色・極暗褐色シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は7cm以下で、北壁と東壁の一部で観察され、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。東壁の南側や南壁は壁高が認められない。(床面)平坦で、硬化面や貼床は認められず、S T604住居跡の床面より10cm高い。(柱穴)未検出。(壁溝)未検出。(カマド)北壁に構築されており、煙道部のみが検出された。(出土遺物)掲載遺物なし。(時期)出土遺物が少なく時期の特定は困難だが、古代の所産と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T603住居跡→S T682住居跡→S T604住居跡→S B600掘立柱建物跡の順序になると見なされる。

#### S T607住居跡(図版104、223-1~4、写真図版65)

S T607住居跡は、調査区北側のX46-Y39・X46-Y40・X47-Y39・X47-Y40区に位置する。南壁をS B600掘立柱建物跡のE B3・4に切られており、南にS T604住居跡が近接する。(平面形)一辺3.4mの方形で、床面積は11.6㎡を測り、東・西壁ラインから見た主軸方向はN-12°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は35cmを測り、褐色粘土と黒褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は30~35cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面に床が貼られており、住居跡の中央には炭化物の集中が認められる。(柱穴)住居跡内からビット6基が検出されたが、いずれも浅く、柱穴は特定できない。(壁溝)未検出。(カマド)未検出。(出土遺物)床面から土師器甕(図版223-1)、覆土から須恵器高台杯(図版223-2・3)、須恵器壺(図版223-4)が出土した。(時期)出土遺物から、9世紀後半の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS B600掘立柱建物跡より古いと見なされる。

#### S T603住居跡(図版105、106、220-2~5、221-1~10、222-1、238-12、写真図版66)

S T603住居跡は、調査区北側のX45-Y39・X45-Y40・X46-Y39・X46-Y40区に位置する。南西壁をS T602住居跡に切れ、住居跡の北側をS T682住居跡、S T604住居跡、S B600掘立柱建物跡に切られており、北にS T607住居跡、西にS T597住居跡が近接する。(平面形)一辺5.8mの方形で、床面積は33.64㎡を測り、主軸方向はN-136°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は20~30cmを測り、褐色シルト質土と暗褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は25~35cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面に床が貼られており、S T682住居跡の床面より25cm、S T604住居跡より15cm低く、またS T602住居跡の床面よりも10cm程度高い。(柱穴)E P1~4のビット4基が柱穴で、底面に柱痕跡が認められた。(壁溝)未検出。(カマド)煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部の長さは2mで、緩い傾斜で立ち上がり、袖部には切石が構築材に用いられたと考えられる。(出土遺物)カマド及びその周囲から土師器甕(図版220-2・5、221-1~4)、床面から土師器甕(図版220-4、221-1)、須恵器蓋(図版221-7)、須恵器杯(図版221-9)、須恵器高台杯(図

版222-1)、鉄製品(図版238-12)、覆土から土師器甕(図版220-3、221-5)、須恵器蓋(図版221-6)、須恵器環(図版221-8)が出土した。(時期)出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T 603住居跡→S T 682住居跡→S T 604住居跡→S B 600掘立柱建物跡の順序になり、また本住居跡がS T 602住居跡よりも古いと見なされる。

#### S T 703住居跡(図版107)

S T 703住居跡は、調査区北側のX47-Y37区に位置する。北壁をS D704溝跡に切られており、西側は調査区域外となる。(平面形)一辺3.8m程度の方形と想定され、東壁ラインから見た主軸方向はN-28°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は30cmを測り、暗褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は10-15cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(床面)貼床と思われるが、詳細は不明。(柱穴)未検出。(壁溝)未検出。(炉跡)土層断面から、地床炉の存在が想定されている。(出土遺物)掲載遺物なし。(時期)出土遺物が少なく時期の特定は困難だが、地床炉を有することから、古墳時代の所産と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS D704溝跡より古いと見なされる。

#### S T 631住居跡(図版107、224-8・9、写真図版71)

S T 631住居跡は、調査区北端のX53-Y41・X54-Y41区に位置し、北にS T 632住居跡が近接する。(平面形)長軸3.3m、短軸3mの方形であるが、南壁の東縁が三角形に張り出している。南壁の張り出しをカマドとして見た場合、主軸方向はN-170°-Wにある。(堆積土)層厚は5cm程度で、明黄褐色シルト質土が堆積する。(壁面)壁高は5cm以下で、壁は緩やかな角度で立ち上がる。(床面)平坦で、硬化面や貼床は判然としないが、東側に焼土・炭化物の集中が認められる。(柱穴)柱穴は特定できない。(壁溝)未検出。(カマド)検出されていないが、東壁～南壁にかけて、焼土と炭化物の集中と、三角形の張り出しが認められることから、南壁の東寄りにカマドが構築されていた可能性が考えられる。(出土遺物)床面から須恵器鉢(図版224-9)、覆土から土師器壺(図版224-8)が出土した。(時期)出土遺物が少なく時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。

#### S T 597住居跡(図版108、223-5～7、224-1～7、

写真図版62、63)

S T 597住居跡は、調査区北側のX46-Y38・X46-Y39区に位置する。南壁はS T 684住居跡を切っており、S T 592住居跡のカマド煙道部が掘り込まれている。また住居跡の西側にS D598溝跡が掘り込まれている。カマドは北壁に1基、南壁に2基の計3基が構築されている。(平面形)長軸4.4m、短軸4.3mの方形で、床面積は18.9㎡を測る。E L 3を基準とした主軸方向はN-11°-Eにある。(堆積土)覆土の層厚は35cmを測り、暗褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は35cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面に床が貼られており、焼土の集中箇所が認められた。S T 684住居跡の床面より5cm程度高い。(柱穴)住居跡内からビット7基が検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝)未検出。(カマド)南壁の東縁にE L 1、南壁のやや東寄りにE L 2、北壁の東寄りにE L 3が構築されている。E L 1は煙道部、袖部、燃焼部が検出され、良好な残存状況であった。煙道部の長さは74cmで、トンネル状に検出され、袖部には切石が構築材として用いられていた。E L 2は煙道部と燃焼部が検出された。煙道部の長さは150cmで、S T 684住居跡のカマドを壊して構築されている。E L 3は煙道部と燃焼部が検出され、煙道部の長さは96cmを測る。E L 2とE L 3は袖部が壊されており、E L 1が付け替えられたカマドと考えられる。(出土遺物)カマドE L 1から土師器甕(図版223-5)、床面から土師器甕(図版223-7、224-1)、須恵器蓋(図版224-3)、須恵器環(図版224-6・7)、E K 1から土師器甕(図版224-1)、E K 4から土師器甕(図版223-6・7)、須恵器環(図版224-4)、E K 5から土師器甕(図版223-6)、E K 6から土師器甕(図版224-1)が出土した。図版224-2はS T 592住居跡、図版224-5はS T 602住居跡と接合関係にある。墨書土器(図版224-2)と刻書土器(図版224-7)の出土が特記される。(時期)出土遺物には時間幅が見られ、8世紀～9世紀前半の住居跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T 593住居跡→S T 684住居跡→S T 597住居跡→S T 592住居跡→S D 598溝跡の順序になると見なされる。

S T 622住居跡(図版109、110、225-4～8、写真図版68、69)

S T622住居跡は、調査区北端のX49-Y39・X49-Y40・X50-Y39・X50-Y40区に位置する。北にS T627住居跡が近接し、住居跡の西側にS D623溝跡が掘り込まれている。(平面形)長軸5m、短軸4.4mの方形で、床面積は22㎡を測る。北東壁・南西壁ラインから見た主軸方向はN-66°-Wにある。(堆積土)覆土の層厚は15-20cmを測り、黒褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は10-20cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)住居跡内の周縁を除いて床が貼られており、中央に焼土・炭化物の集中が認められた。(柱穴)住居跡内からピット8基が検出されたが、この内E P2、E P3、E P4、E P8が柱穴の可能性が高く、後三者の底面には柱痕跡が認められた。(壁溝)未検出。(炉跡)明確な炉跡は検出されていないが、住居跡の中央に焼土の集中箇所が認められ、地床炉の存した可能性が考えられる。(出土遺物)床面から土師器壺(図版225-5・6)、覆土から土師器壺(図版225-4)、土師器壺(図版225-7)、土師器鉢(図版225-8)が出土した。(時期)出土遺物から、古墳時代前期4世紀代の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS D623溝跡より古いと見なされる。

**S T627住居跡** (図版111、112、226-1-5、227-1-4、228-1-8、238-15、写真図版68、69)

S T627住居跡は、調査区北端のX50-Y39・X50-Y40・X51-Y39・X51-Y40区に位置する。北にS T628住居跡、南にS T622住居跡が近接する。(平面形)長軸3m、短軸2.6mの方形で、床面積は7.8㎡を測り、主軸方向はN-171°-Wにある。(堆積土)覆土の層厚は30cmを測り、暗褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は15-30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)床が貼られており、南側に硬化面と炭化物の集中が認められる。(柱穴)未検出。(壁溝)未検出。(カマド)南壁の東寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部の長さは30cmと短く、急傾斜で立ち上がる。燃焼部には支脚痕と思われるE P1が存しており、袖部からは土師器壺が纏まって出土し、構築材に用いられたと考えられる。(出土遺物)カマドから土師器壺(図版226-1-5、227-1-4、228-1)、須恵器坏(図版228-5)、床面から須恵器坏(図版228-3)、須恵器高台坏(図版228-7・8)、南壁際から

鉄鏃(図版238-15)が出土した。墨書土器(図版228-2)の出土が特記される。(時期)出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。

**S T632住居跡** (図版113、229-1-6、230-1-4、234-22・23、235-4、237-9、238-2・3、写真図版70、71)

S T632住居跡は、調査区北端のX54-Y41・X54-Y42・X55-Y41・X55-Y42区に位置し、調査区域の最北端に相当する。北側はS T633住居跡を切っており、西壁は調査区域外となる。(平面形)縦軸4.5mの方形で、東壁ラインから見た主軸方向はN-161°-Wにある。東壁の南端は東にやや張り出しているが、S T633住居跡の東隅コーナーとなる。(堆積土)覆土の層厚は20cm(調査区西壁では55-60cm)を測り、凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁高は25cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面)全面に暗褐色シルト質土が貼られており、炭化物の集中箇所が認められる。掘り方はやや起伏を有する。S T633住居跡の床面より15cm低い。(柱穴)住居跡内からピット2基が検出されたが、柱穴は特定できない。(壁溝)未検出。(カマド)南壁の東寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。カマドの焚き口付近の小ピット(E P1)には焼土が堆積し、袖部は半壊の状態で、南東隅側に焼土と炭化物が散らばっていた。(出土遺物)カマドから土師器壺(図版230-2)、須恵器坏(図版230-4)、床面から土師器壺(図版229-4)、鉄鏃(図版238-3)、E P2から土師器壺(図版229-5)、土師器壺(図版230-1)、覆土から土師器壺(図版229-1-3・5・6)、土師器壺(図版230-1・2)、須恵器坏(図版230-3)、勾玉(図版234-22・23)、砥石(図版235-4)、鉄鏃(図版237-9、238-2)が出土した。(時期)出土遺物から、8世紀後半の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T633住居跡よりも新しいと見なされる。

**S T633住居跡** (図版113、229-6、写真図版71)

S T633住居跡は、調査区北端のX55-Y41・X55-Y42区に位置し、調査区域の最北端に相当する。南側はS T632住居跡に切られ、西壁は調査区域外となる。(平面形)縦軸6mの方形で、東壁ラインから見た主軸方向はN-180°にある。(堆積土)調査区西壁で見た層厚は45cmを測り、褐色シルト質土が堆積する。(壁面)南壁

の東側で見た壁高は15cmであるが、北側は床面のみが検出された。(床面) 全面に褐色シルト質土が貼られており、焼土と炭化物の集中箇所が認められる。S T 632住居跡の床面よりも15cm高い。(柱穴) 未検出。(壁溝) 未検出。土層断面にある北壁際の落ち込みはピットである。(カマド) 南壁の東寄りに構築されているが、S T 632住居跡により壊されており、煙道部のみが検出された。(出土遺物) カマド煙道部から土師器壺(図版229-6)が出土した。(時期) 出土遺物が少なく時期の特定は困難だが、古代の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS T 632住居跡より古いと見なされる。

#### S T 628住居跡(図版114、228-9-11、写真図版70)

S T 628住居跡は、調査区北端のX51-Y39・X51-Y40・X51-Y41・X52-Y39・X52-Y40・X52-Y41区に位置する。S K 629土坑とS K 658土坑に切られており、南にS T 627住居跡が近接する。(平面形) 長軸6.7m、短軸6.5mの方形で、床面積は43.6㎡を測り、東・西壁ラインで見た主軸方向はN-7°-Eにある。(堆積土) 覆土の層厚は15cmを測り、黒褐色・暗褐色シルト質土が凹レンズ状に堆積する。(壁面) 壁高は10-30cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 住居跡内の中央が硬化面となっている。(柱穴) E P 1-3が柱穴で、北東の柱穴はS K 658土坑により壊されている。(壁溝) 未検出。(炉跡) 中央や北寄りの炭化物の集中箇所には、焼土粒も含まれており、地床炉に相当すると考えられる。(出土遺物) 床面から土師器壺(図版228-9)、覆土から土師器壺(図版228-10・11)が出土した。(時期) 出土遺物から、古墳時代前期4世紀代の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS K 629土坑とS K 658土坑より古いと見なされる。

#### S T 181住居跡(図版115、116、230-5-7、237-11、238-21・23・24、写真図版11)

S T 181住居跡は、調査区南側のX13-Y14・X13-Y15・X14-Y14・X14-Y15区に位置する。第1次調査で調査を実施したが、床面が新旧の2面存したため、第2次調査に調査を持ち越した。従って第2次調査の住居跡として報告する。住居跡内の南隅にS K 705土坑が存しており、その直上に住居跡が構築されている。(平面形) 一辺3.5mの方形で、床面積は12.25㎡を測り、主軸方向はN-150°-Wにある。(堆積土) 覆土の層厚は

10-30cmを測り、黒褐色・暗褐色シルト質土が堆積するが、溝状の耕作の攪乱が床面まで及んでいる。(壁面) 壁高は10cm程度を測り、壁は外傾して立ち上がる。(床面) 床面は貼床で、新旧の2面が認められ、共に北西壁側にやや傾斜している。上位の新しい床面ではE K 5が検出され、下位の古い床面は5cm下で検出した。(柱穴) 住居跡内からは、カマドの燃焼部に当たるE K 706以外に、ピット5基が検出された。貯蔵穴と思われるE K 5は新床面に伴い、E P 1-4が柱穴に相当すると考えられる。(壁溝) 未検出。(カマド) 南西壁の南側に構築されており、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部の長さは1mで、新旧床面ともに同じカマドを使用していたと想定される。(出土遺物) 上位の新床面から海獣歯骨鏡(図版237-11)、下位の旧床面から鉄製品(図版238-21・23・24)、E P 1から土師器壺(図版230-6)、覆土から土師器壺(図版230-5)、須恵器杯(図版230-7)が出土した。(時期) 出土遺物から、8世紀前半(第2四半世紀)の住居跡と考えられる。切り合い関係から、本住居跡がS K 705土坑よりも新しいと見なされる。

## 3 第2次調査の掘立柱建物跡

#### S B 600掘立柱建物跡(図版117、232-1-4、写真図版72、73)

S B 600掘立柱建物跡は、調査区北側のX45-Y39・X45-Y40・X46-Y39・X46-Y40区に位置し、S T 603住居跡、S T 604住居跡、S T 607住居跡と重複関係にある。(構造) 梁行2・3間、桁行3間の隅柱建物で、主軸方向はN-57°-Wにある。梁行は基本的に2間であるが、南東柱列は出入口と推定される施設を有するため3間となる。(規模) 梁4m、桁5.2mを測り、面積は20.8㎡となる。柱心間の距離は、梁の北側が西から1.7m-2.2m、同じく南側が1.5m-1m-1.5m、桁の西側が北から1.5m-1.9m-1.7m、同じく東側が1.7m-1.7m-1.8mとなる。(柱穴) 一辺60-80cmの隅丸方形を基本とするが、長軸が1mの長方形(E B 2-4)も存する。遺構検出面からの深さは40-60cmを測り、E B 1・2・4・7・10・11の底面には、径15-20cm程度の円形の柱痕跡が認められる。(出土遺物) E B 5から須恵器杯(図版232-2)、E B 6から須恵器壺(図版232-4)、E B 7から須恵器杯(図版232-1)、E B 8か

ら須恵器環(図版232-3)が出土した。(時期)出土遺物から、8世紀代の建物跡と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T 603住居跡→S T 682住居跡→S T 604住居跡→S B 600掘立柱建物跡の順序になり、また本建物跡がS T 607住居跡よりも新しいと見なされる。

#### S B 701掘立柱建物跡 (図版118、232-5、写真図版73)

S B 701掘立柱建物跡は、調査区北側のX44-Y36・X45-Y36区に位置する。古墳時代前期のS T 707住居跡を切っており、南北柱列の西側は調査区域外となり、東西柱列の北側は判然としない。(構造)東西2間、南北3・4間の掘立柱建物と推定されるが、梁の北側は判然としない。主軸方向はN-15°-Eにある。南北柱列は基本的に3間と思われるが、東側は出入口と推定される施設を有するため4間となる。(規模)東西3.7m、南北4.7mを測る。柱心心間の距離は、東西柱列の南側が西から1.8m-1.9m、南北柱列の東側が北から1.7m-0.6m-0.9m-1.5m、同じく西側が1.3m-2.3mとなる。(柱穴)一辺50cmの隅丸方形や径50cm程度の円形を基本とし、遺構検出面からの深さは15-35cmを測る。E B 4・5・9以外の底面には柱痕跡が認められた。(出土遺物)E B 3から須恵器壺(図版232-5)が出土した。(時期)出土遺物から時期の特定は困難であるが、古代の建物跡と考えられる。切り合い関係から、本建物跡がS T 707住居跡よりも新しいと見なされる。

## 4 第2次調査の井戸跡

#### S E 655井戸跡 (図版119、写真図版75)

S E 655井戸跡は、調査区中央の北側のX39-Y34区に位置する。S T 560住居跡、S T 651住居跡、S T 555住居跡、S T 554住居跡と重複関係にあり、S T 651住居跡の貼床面の調査時に検出された。従って重複した遺構の中では最も古いと考えられる。素掘井戸と推測され、外周には上屋構造の存在を窺わせる浅いピット(E P 1・2)が検出された。(平面形)掘り方上面は径1.7mの円形で、掘り方の底面は径40cm程度の円形となる。(堆積土)遺構検出面からの深さは1.4mを測る。覆土は9層に区分され、最下層の9層が灰褐色粘質シルト質土で、それより上層は凹レンズ状に堆積する。(壁面)壁は底面から垂直に近い角度で立ち上がるが、途中段が作出さ

れ、再び開口部に向かって外傾する。(底部)掘り方の底面は平坦で、底部の施設は検出されていない。(出土遺物)掲載遺物なし。覆土下位より土玉1点が出土した。(時期)出土遺物が少なく、時期の特定は困難だが、周囲の遺構との関係から、古代の所産と考えられる。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS E 655井戸跡→S T 651住居跡→S T 560住居跡→S T 555住居跡→S T 554住居跡の順序で、本遺構が最も古いと見なされる。

## 5 第2次調査の溝跡

#### S D 523・524・525溝跡 (図版120)

S D 523・524・525溝跡は、調査区中央の北側のX32-Y33・X33-Y32・X33-Y33に位置する。第2次調査区の南端に当たり、北にS T 542住居跡、南にS T 63住居跡、西にS T 65・66住居跡が近接し、東側は須川寄りの調査区域外となる。東西方向に平行した溝跡で、長さ2-3m、幅30-40cm、遺構検出面からの深さ10-15cmと小規模で、性格については判然としない。

#### S D 529溝跡 (図版120)

S D 529溝跡は、調査区中央の北側のX34-Y33区に位置する。第2次調査区の南端に当たり、南にS T 542住居跡、西にS T 65住居跡が近接する。東西方向に伸びた溝跡で、長さ3.3m、幅40cm、遺構検出面からの深さ10cmと小規模で、性格については判然としない。

#### S D 709溝跡 (図版120)

S D 709溝跡は、調査区中央の北側のX35-Y31・X35-Y32・X35-Y33・X35-Y34区に位置する。第1次調査区域と第2次調査区域にまたがっており、北にS T 61住居跡が近接する。東西方向に伸びた溝跡で、長さ16m、幅60cm、遺構検出面からの深さ25cmとやや規模が大きい。古代の所産と思われるが、性格については判然としない。なお第1次調査では、S D 136溝跡として調査された。

#### S D 598溝跡 (図版121、写真図版74)

S D 598溝跡は、調査区北側のX46-37・X46-Y38・X47-Y37・X47-Y38区に位置し、S T 597住居跡、S T 684住居跡を切っている。直径6.3-6.6mの円形の溝跡で、幅40-60cm、遺構検出面からの深さは10-25cmを測る。覆土は黒褐色シルト質土が堆積し、溝跡の底面は比較的平坦で、壁は緩い角度で立ち上がる。古代の所

産と思われるが、周溝内には施設は認められず、遺構の性格は判然としない。重複した遺構の新旧関係は、古い方からS T 593住居跡→S T 684住居跡→S T 597住居跡→S D 598溝跡の順序になり、本溝跡が最も新しいと見なされる。また本溝跡は古墳時代前期のS T 595住居跡よりも新しい。

## 6 第2次調査の土坑

### S K 545土坑 (図版122)

S K 545土坑は、調査区中央の北側のX35-Y34区に位置し、北にS D 709溝跡とS K 546土坑が近接する。長軸1.8m、短軸0.9mの不整形で、遺構検出面からの深さは20cmで、底面は起伏を有し、壁は緩い角度で立ち上がる。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 遺物が少なく時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。

### S K 546土坑 (図版122、232-7)

S K 546土坑は、調査区中央の北側のX36-Y34・X36-Y35区に位置する。北に古墳時代のS T 549住居跡、東にS T 535住居跡、南にS K 545土坑が近接する。長軸2.1m、短軸1.6mの隅丸長方形で、遺構検出面からの深さは50-60cmを測り、覆土は凹レンズ状に堆積する。底面は平坦で、壁は緩い角度で立ち上がる。(出土遺物) 覆土から須恵器蓋(図版232-7)が出土した。(時期) 出土遺物から8世紀代の土坑と考えられる。

### S K 666土坑 (図版122)

S K 666土坑は、調査区北側のX43-Y38区に位置し、S T 589住居跡の北西コーナーを切っている。一辺75cmの隅丸方形で、主軸方向はN-16°-Eにある。遺構検出面からの深さは15cmで、暗褐色・黒褐色粘質シルト質土が堆積し、底面は平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 遺物が少なく時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。切り合い関係から、本土坑がS T 589住居跡よりも新しいと見なされる。

### S K 649土坑 (図版92)

S K 649土坑は、調査区北側のX43-Y41区に位置し、S T 610住居跡を掘り込んでいる。長軸2.2m、短軸1.3mの隅丸長方形で、主軸方向はN-7°-Eにある。遺構検出面からの深さは25cmで、底面は平坦となる。(出土遺物) S T 616住居跡出土の須恵器環(図版211-9)

と接合関係にある。(時期) 出土遺物が少なく時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。切り合い関係から、本土坑がS T 610住居跡よりも新しいと見なされる。

### S K 658土坑 (図版114、123、232-10-13、写真図版70、75)

S K 658土坑は、調査区北端のX51-Y40・X52-Y40区に位置し、古墳時代前期のS T 628住居跡の北東柱穴を壊している。長軸2.2m、短軸1.7mの台形の形状で、主軸方向はN-11°-Eにある。遺構検出面からの深さは60cmを測り、暗褐色シルト質土と褐色砂質シルト質土が凹レンズ状に堆積し、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。(出土遺物) 底面から土師器壺(図版232-10)、須恵器甕(図版232-13)、覆土から須恵器環(図版232-11)、須恵器高台環(図版232-12)が出土した。(時期) 出土遺物から8世紀代の土坑と考えられる。切り合い関係から、本土坑がS T 628住居跡よりも新しいと見なされる。

### S K 608土坑 (図版123、232-8・9、写真図版75)

S K 608土坑は、調査区北端のX49-Y39区に位置し、北東に古墳時代前期のS T 622住居跡が近接する。長軸1.6m、短軸1mの楕円形で、主軸方向はN-57°-Wにある。遺構検出面からの深さは30cmで、覆土に焼土を含み、底面はやや起伏を有し、壁は緩い角度で立ち上がる。(出土遺物) 覆土から土師器壺(図版232-8・9)が出土した。(時期) 出土遺物から8世紀代の土坑と考えられる。

### S K 629土坑 (図版114、124、写真図版75)

S K 629土坑は、調査区北端のX51-Y41区に位置し、古墳時代前期のS T 628住居跡の東壁を切っている。長軸2.2cm、短軸1.7mの隅丸方形で、主軸方向はN-71°-Wにある。遺構検出面からの深さは30cmを測り、底面はやや起伏を有し、壁は外傾して立ち上がる。(出土遺物) 掲載遺物なし。(時期) 出土遺物が少なく時期の特定は困難であるが、古代の所産と考えられる。切り合い関係から、本土坑がS T 628住居跡よりも新しいと見なされる。

### S K 630土坑 (図版124、232-14、写真図版75)

S K 630土坑は、調査区北端のX51-Y41・X51-Y42・X52-Y41・X52-Y42区に位置する。上面は2001



年の試掘坑により削平を受けており、西にS T 628住居跡やS K 629土坑、S K 658土坑が近接する。長軸2.5m、短軸1.6mの隅丸長方形と思われるが、西壁南側が内側に陥入し、主軸方向はN-11°-Eにある。遺構検出面からの深さは20-30cmを測り、暗褐色シルト質土が堆積し、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。(出土遺物) 覆土から須恵器坏(図版232-14)が出土した。(時期) 出土遺物から8世紀中葉の土坑と考えられる。

## V 理化学的分析

### 1 自然科学分析 (1)

パリオ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

今回の自然科学分析調査は、主に遺構や遺物を中心として以下の課題について実施し、当時の生業に関する情報を得る。1) 古墳時代や奈良時代に構築されたとされる焼失住居の構築材やがらに残された炭化材の年代測定を行い、年代に関する情報を得る。2) これらの試料に関しては樹種同定も実施し、当時の建築材や燃料材に関する情報を得る。3) 住居跡から出土した炭化種実の同定を実施し、当時の植物利用に関する情報を得る。4) 住居跡から出土した土器や、カマド内の土壌について、植物珪酸体分析と微細物分析を実施し、内容物や植物利用に関する検討を行う。5) 住居から検出された勾玉の石材を調べるために、岩石肉眼鑑定を行う。

また、本遺跡が立地する自然堤防周辺の地形は、古墳時代と奈良・平安時代では異なっていたことが、堆積層序や遺構の分布から判明している。したがって、6) 本遺跡の古墳～平安時代の土層断面から採取した土壌の珪酸分析、花粉分析、植物珪酸体分析を行うことにより、遺跡の立地環境や周辺植生に関する情報を得る。

#### A 試料

試料は、焼失住居跡や炉内から検出された炭化材や炭化種実、住居内から検出された勾玉、土器内やカマドの土壌、土層断面から層位ごとに採取した土壌である(表2)。

炭化材試料は、古墳時代および奈良・平安時代の焼失住居跡から出土した14点(試料番号1~14)である。放射性炭素年代測定に関しては、試料番号1、2、3、4、6、8、10の7点を用いる。この中で、試料番号6は炭化物が少ないため加速器質量分析法(AMS法)を、その他の試料では炭化物が比較的多いことから $\beta$ 線計数法を選択する。樹種同定に関しては、年代測定試料も含め

て14点全てについて行う。また、炭化種実同定は、住居内などから検出された炭化種実2点(試料番号15、16)について実施する。土器内、カマド内などの土壌は、14点(試料番号17~30)ある。この中で、植物珪酸体は10点(試料番号17、18、20、22~26、28、30)、微細物同定は焼土、炭化物、灰などが比較的多く含まれる6点(試料番号18、20、23、26、28、30)について実施する。岩石肉眼鑑定は、勾玉2点(試料番号31、32)について行う。

また、本遺跡の土層断面試料は、6地点から試料を採取した。便宜上、1~6地点とする。今回は3地点、4地点、5地点の試料を対象にする。試料は古墳時代以前、古墳時代、古墳～奈良時代、平安時代とされる層準を選択し、中でも粗粒な碎屑物により構成される洪水堆積物ではなく、比較的腐植が集積する粘土層を中心に、珪酸分析10点、花粉分析7点、植物珪酸体分析8点を実施する。

#### B 分析方法

##### (1) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、1点はAMS法で、残りの6点は $\beta$ 線計数法により行う。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 4.4 (Copyright 1986-2002 MStuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いている。また、北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与え、計算させている。

##### (2) 珪酸分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪酸化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユウラックで封入して、プレパラートを作製する。検鏡は、光学

顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer and Lange-Bertalot(1986, 1988, 1991a, 1991b)、Witkowski et al.(2000)などを参照する。

同定結果は、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉(1988)、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については, Asai and Watanabe(1995)の環境指標種を参考とする。

### (3) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し、図示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

### (4) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水、塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離、濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定し、計数する。

なお、壺壺、カマド等の試料では、珪化組織片の産出に注目する。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となるが、埋積した植物遺体や植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い(例えば、バリノ・サーヴェイ株式会社, 1991; 1993)。そのため、珪化組織片の産出により当時の燃料材や土器内容物などの種類が明らかになると考えられる。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や栽培植物について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の層位分布図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

### (5) 樹種同定

木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

### (6) 樺実同定

肉眼あるいはルーペを用い、形態的特徴から種類を同定する。

### (7) 微細物分析

試料は、植物珪酸体分析に必要な分量を採取後の残りof 全について分析する。分析量は結果とともに示すが、試料によっては分析量が少ないものもある。試料は水につけてしばらく放置したあと、0.5mmの篩を通して水洗し、残渣を集める。残渣を常温で数日間乾燥させたあと、双眼実体顕微鏡で観察し、同定可能な微細物を抽出・同定する。同定した微細物は種類毎に瓶に入れ、保存する。

### (8) 岩石肉眼鑑定

野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察

し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名または鉱物名を付す。

## C 結 果

### (1) 放射性炭素年代測定

結果を表3に、暦年校正の結果を表4に示す。 $\beta$ 線計数法で行った試料番号2、3は、発掘所見で推定された時代観よりも古い年代値が得られており、古墳時代頃を示す。AMS法で行った試料番号6は、発掘所見よりもやや新しい年代値となっている。ただし、暦年校正を行うと、測定誤差や校正曲線等が持つ誤差によって年代値に幅が出ることから、発掘所見で得られた時代観と整合する試料が多くなる。

### (2) 珪藻分析

結果を表5・6、第6図に示す。珪藻化石は、各地点とも比較的多く産出する。完形殻の出現率は、60%以上のものが多い。産出分類群数は、合計で34属155種類である。地点別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

#### ・3地点

試料番号5、6-1、7とも陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻と、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻）とが混在している。割合としては、水生珪藻が陸生珪藻を上回る。陸生珪藻の割合は、試料番号5が約50%、試料番号6-1が約15%、試料番号7が35%である。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられる種）、真+好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種）、真+好流水性種（流水域に最もよく生育する種）と流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）とが優占あるいは多産する。主な産出種は、好流水性で中～下流性河川指標種群の *Cymbella sinuate*, *Diatoma mesodon*, *Fragilaria vaucheriae*, *Meridion circulae* var. *constrictum*, *Rhoicosphenia abbreviata*, 好流水性の *Cymbella turgidula* var. *nipponica*, 流水不定性の *Cocconeis placentula* 等である。中～下流性河川指標種群とは、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、その環境を指標することができる種群のことである（安藤, 1990）。陸生珪藻は、上位に向かって増加する傾向があり、陸生

珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群（伊藤・堀内, 1991）の *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica* 等が産出する。

#### ・4地点

本地点においても、陸生珪藻と水生珪藻とが混在している。試料番号9、14は、陸生珪藻が全体の80%以上と優占する。これに対して、試料番号11は約50%、試料番号17は約30%産出する。陸生珪藻の主なもの、陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, それに同じく陸生珪藻A群の *Pinnularia borealis* 等である。水生珪藻は、前地点で産出したような中～下流性河川指標種群を含む流水性種が産出する。

#### ・5地点

試料番号5は、*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica* 等の陸生珪藻が全体の約80%と優占する。これに対して、試料番号8、10は水生珪藻が優占し、60~70%産出する。その主なもの、3地点で産出したような *Cymbella sinuate*, *Diatoma mesodon*, *Fragilaria vaucheriae*, *Meridion circulae* var. *constrictum*, *Rhoicosphenia abbreviata*, *Achnanthes lanceolata* 等の中～下流性河川指標種群や *Gomphonema parvulum* 等の流水不定性種である。

### (3) 花粉分析

結果を表7に示す。いずれの試料も花粉化石がほとんど検出されず、検出された試料のほとんどに風化の痕跡が認められる。マツ属やシダ類胞子が若干見られる程度である。

### (4) 植物珪酸体分析

壺巻やカマド関連試料の結果を表8、第7図に示す。各試料からは検出個数に差があるものの、珪化組織片が認められる。炭化物、焼土、灰などが認められた土器内土壌試料ではイネ属の葉部や糊殻、ヨシ属やススキ属の葉部に形成される珪化組織片が混在する。このうち、試料番号20（S T 603 Y の R P 776）と試料番号23（S T 614 E L の R P 633）ではイネ属の珪化組織片の検出個数が多く、試料番号23ではススキ属やヨシ属も多く認められる。また、試料番号18（S T 686 Y の R P 760）ではイネ属が少なくススキ属の短細胞列が多い。一方、炭化物、焼土が比較的少ない試料番号24（S T 555 Y の R P 509）と試料番号25（S T 591 Y の R P 656）でもイネ属やヨシ

属、ススキ属に由来する珪化組織片が混在する。試料番号17 (S T 628 Y の R P 713) と試料番号22 (S T 615 Y の R P 565) ではイネ属珪酸体がわずかに認められる。

焼土や炭化物を含む S T 627 E L カマド底面から採取された試料番号28、灰を含むとされる S T 632 Y 焚口前の床面から採取された試料番号30ではイネ属、ヨシ属、ススキ属に由来する珪化組織片が混在する。特に試料番号30はイネ属とススキ属の検出個数が多い。

これらの試料からは単体の植物珪酸体も認められ、珪化組織片で多く見られる種類の産出が目立つ。また、栽培種を含む分類群であるヒエ属やキビ属、オオムギ属が検出されるものの、その個数は少ない。また、検出された植物珪酸体の形態からは栽培種か否かの判別が困難である。

土層断面の3～5地点の結果を表8・第8図に示す。各地点では、植物珪酸体が検出されるものの、概して検出個数が少ない。保存状態も悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。3地点の試料番号6～1ではクマザサ属やヨシ属、ススキ属などがわずかに認められる。4地点の試料番号9、11、14、17でも同様な種類が認められる。試料番号14、17ではヨシ属、ススキ属を含むウシクサ属の産出が目立つ。また試料番号9、14ではイネ属やススキ属の短細胞列もわずかに検出される。5地点の試料番号5、8、10でも同様な種類が見られ、いずれの試料もヨシ属の産出が目立つ。

#### (5) 樹種同定

樹種同定結果を表9に示す。炭化材は、試料番号9が散孔材の道管配列を有する広葉樹材であるが、保存状態が悪く種類の同定には至らなかった。また、試料番号7は木材組織が観察できず、不明とした。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複雑管束重属 (Pinus subgen. Diploxyylon)

#### マツ科

試料は年輪界で割れており、早材部の多くを欠く。軸方向組織は仮道管を主とし、晩材部に樹脂道が認められる。晩材部の幅は比較的広い。放射組織は仮道管、柔細胞、樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヤナギ属 (Salix) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2～3個が複合して年輪全体にはほぼ一様に分布し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1～15細胞高。

・ハンノキ属ハンノキ亜属 (Alnus subgen. Alnus)

#### カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2～4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。放射組織は同性、単列、1～30細胞高のものと集合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Quercus subgen.

#### Lepidobalanus sect. Prinus) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.)

#### ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は2～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ヤマグワ (Morus australis Poiret)

#### クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は2～5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～40細胞高で、しばしば結晶を含む。

・ナツツバキ属近似種 (cf. Sturtia) ツバキ科

散孔材で、道管は比較的径が大きく、横断面では楕円形で、ほぼ単独で散在し、年輪界に向かって僅かに径を減ずる。道管は階段穿孔を有する。放射組織は破損が激しいが、異性、1～3細胞幅、1～30細胞高で、時に上下に連結する。現生標本と比較すると、道管配列や放射組織の大きさ等に若干の違いが認められること、保存状態が悪いこと等から近似種とした。

・カエデ属 (Acer) カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、

単独および2-3個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列-交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

#### (6) 種実同定・微細物分析

結果を表10に示す。炭化種実2点は、オニグルミとモモに同定された。ともに破片であるが、もともと1個体であったものが割れたと考えられる。特にモモは、表面の泥を取り除く際に、固まった状態で破片が確認されたことから、種実に同一個体である。微細物分析の結果をみると、土器や炭化材などが微量見られた程度で、同定可能な植物遺体は見られない。また地下茎とみられる塊茎は、炭化しておらず保存も良いことから、現生のものと思われる。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *Sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属の破片が同定された。1本の明瞭な縦の縫合線がある。核皮は硬く、表面は縦方向に溝状の浅い彫紋が走りごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

炭化した核(内果皮)が破片の状態で見出されたが、1個体のものが割れたものとみられる。推定される全体の大きさは2.5cm程度。広楕円形でやや偏平。基部は丸く大きな臍点がある。一端に明瞭な縫合線がある。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状のくぼみがあり、全体として粗いしわ状に見える。

#### (7) 岩石肉眼鑑定

肉眼鑑定によりNo31およびNo32は共に滑石と判定された。No31は、淡白灰色-淡緑灰色を呈し、直径約5cmと大型で、質がよく、表面が丹念に磨かれている。No32は、緑灰色を呈し、直径約3cmで表面には擦痕が多く認められる。ただし、このNo32については、穿孔部には擦れた痕跡が認められない。

## D 考 察

### (1) 遺構の年代

S T 707 (試料番号1) と、S T 181 (試料番号6) は古墳時代に相当すると考えられている。暦年校正を行っ

た年代でみると、試料番号1は発掘調査所見に近いが、試料番号6はやや新しく古墳-奈良時代の年代値を示す。

S T 535 (試料番号2)、S T 560 (試料番号3)、S T 551 (試料番号4)、S T 632 (試料番号8)、S T 550 (試料番号10) は、奈良-平安時代と考えられている。暦年校正を行った年代値でみると、試料番号2、3は古墳時代を示すものの、他は概ね発掘調査所見に近い年代値が得られている。年代値は、測定物以外の炭素による汚染により値が変化する可能性もあることから、遺構の年代観に関しては、出土遺物や炭化物の堆積状況なども加味しながら、多面的に検討していく必要がある。

### (2) 用材と植物利用

古墳時代の焼失住居 S T 707の部材は、壁近くの床面から出土しており、周囲には他にも炭化材が集中して出土している。出土状況から垂木等の可能性もある。樹種のヤマグワは、強度が比較的高いことや、人里周辺で普通に見られる種類であることから、材質や入手が容易なことが利用された背景と考えられる。

一方、奈良-平安時代の住居の部材には、ヤナギ属、ハンノキ亜属、複維管束亜属が認められた。今回確認された3種類はそれぞれ材質が異なっており、ハンノキ亜属は強度が高いが、ヤナギ属は強度や保存性は低い。複維管束亜属は、強度・保存性とも中程度である。出土位置をみると、S T 535の試料番号2は住居中央部付近から出土しており、垂木や上屋根材の可能性もある。S T 560の試料番号3は壁際から軸方向を住居中央方向に向けた状態で出土しており、垂木に由来する可能性がある。S T 551の試料番号4は壁近くの床面上から出土しているが、小片で部位の詳細は不明である。S T 535とS T 560では、今回樹種同定を行った試料の他にも炭化材が出土していることから、今後これらの炭化材の樹種同定も行った上で、部位や住居間の比較検討を行いたい。なお、今回の試料のうち、試料番号2では、炭化材の表面にイネ科と考えられる草本類が付着している様子が認められる。草本類は、繊維の軸方向が格子状に直交するように重なっており、編物の一部が残存したと考えられる。住居内から出土していることから、床に敷いた編物や製品等に由来する可能性がある。

試料番号5-14の炭化材の中で、試料番号6、9、10

の3点が床面や柱穴から出土しており、構築材などに由来する可能性がある。試料番号6は、古墳時代の住居跡床面から出土しており、樹種はイネ科タケ亜科であった。タケ亜科はその材質から垂木などに利用されたとは考えにくく、構築材とすれば屋根を葺いた葺材等に由来する可能性がある。試料番号10は、奈良・平安時代の柱穴内から出土しており、柱材が火を受けて一部が炭化・残存した可能性がある。クリは強度や耐久性に優れた材質を有しており、柱材としては適材といえる。これまでも、宮ノ下遺跡の平安時代の掘立柱建物跡等で柱材にクリが確認されている(ハリノ・サーヴェイ株式会社, 1996)。

一方、試料番号7、8はカマドや地床炉から出土しており、燃料材に由来する可能性がある。試料番号8に認められたカニア属は周囲の落葉広葉樹林等に普通にみられる種類であることを考慮すれば、遺跡周辺に生育していた木材など、手近で入手可能な木材が利用された可能性がある。

その他の試料については、ハンノキ亜属、コナラ節、ナツバキ属近似種が認められた。このうち、ハンノキ亜属は、S T560の住居構築材にも確認されていることから、S T620やS T686でも構築材に利用された可能性がある。これらの炭化材については、今後用途を含めて改めて木材利用の検討を行いたい。

検出された炭化種実、オニグルミとモモであった。オニグルミは、生食可能で収量が多く、保存が利くことから、古くから食用にされてきた種類である。河川沿いなどに多くみられることから、遺跡周辺に生育しており、利用しやすい種実の一つであったと思われる。モモは渡来した種類で、弥生・古墳時代以降多くの出土例があり、広く栽培されていたと思われる(粉川, 1988; 南木, 1991など)。モモは果実を食用として利用するほか、觀賞用、薬用としての用途もあることから、遺跡周辺での栽培、利用が推測される。

### (3) 壺・カマドの内容物

微細物分析では、土壌の内眼観察で炭化物、焼土、灰などが認められる試料を主に選択したが、微細な炭化物が微量含まれていた程度で、炭化米や粃などの大型遺体は認められなかった。

植物珪酸体分析では、検出個数や検出種類の量比に差があるものの、各試料中にイネ属の葉部や籾殻、ヨシ属

やススキ属の葉部に形成される珪化組織片が混在することが認められた。土器内土壌においても、試料番号20を除いては、ある種類のみが突出するような組成は認められなかった。検出されたススキ属、ヨシ属、イネ属などは、住居の構築材や燃料材、生活用具の資材として利用されることが多い。したがって、これらの組織片は、燃料材や住居構築材、住居内で用いられた生活資材などに由来するとみられ、植物体または焼失した灰が土器内に混入した、またはカマド内で燃料材として用いられたものとみられる。今回の結果から見ると、内容物に直接由来するとは考えにくい。ススキ属やヨシ属は荒れた土地に先駆的に進入し、開けた草地を作る種類である。本遺跡のように、河川の影響を受けやすい地域では、土壌の流出や堆積が頻繁に起こるため安定した植生が存在しにくく、このようなイネ科草本類からなる草地ができやすい。したがって、これらの資材は遺跡周辺で容易に採取できたと考えられる。一方、試料番号20ではイネ属の珪化組織片、単体の植物珪酸体がとくに多く認められた。したがって、壺の中にはイネ属の植物体が存在した、またはイネ属の灰が混入した可能性がある。

### (4) 勾玉の石材

滑石は、加工性に富む軟質鉱物で、モースの硬度は最低の1である。滑石は、脂態に富む鉱物であるが、不純物が含まれていることも多く、必ずしも純粋な滑石の集合体ではない。緑色の濃いもの一部には、緑泥石や蛇紋石を多く含むものがある。日本における滑石の地質学的な産状は、超塩基性岩に伴う変質鉱床で、レンズ状、脈状、網状を呈して産することが多い。山形県近傍における代表的な産地としては、福島県下の阿武隈山地、茨城県常陸太田地方、新潟県糸魚川地方などがある。産地を特定することは困難であるが、いずれにしても、搬入品であることは明らかであり、他の石器(磨製石斧等)の石材も含めて総合的に検討することが望まれる。

### (5) 遺跡周辺の古環境

珪酸分析の結果をみると、種類数が多く、陸生珪藻を除くと際だって多い種類が認められない傾向がある。このような傾向は、沖積層などにみられる氾濫堆積物に特徴的に現れる群集で、混合群集と呼ばれている。現在の氾濫堆積物を分析した結果、混合群集の上位に陸生珪藻が優占する層位が認められ、氾濫の休止期には陸生珪藻

が生育することが指摘されている（堀内ほか，1993）。今回の珪藻分析結果はこの事例と酷似している。さらに、層相においても、今回分析を行った層準は細粒で腐植が集積しており、砂を主体とする洪水堆積層に挟まれるため、氾濫の影響を比較的受けにくい時期の堆積物と考えられる。遺跡の立地環境を含めて本遺跡の土層は河成堆積物に由来すると考えられることから、上記の氾濫の休止期にあたる調和的な結果であるといえる。さらに、陸生珪藻に着目すると、古墳時代以前の堆積物に比べ、古墳時代、古墳～奈良時代、平安時代と上位になるほど陸生珪藻の割合が高くなっている。このことから、本遺跡が立地する自然堤防は古墳時代以降になるほど氾濫の影響を受けにくくなり、乾燥化する時間が長くなってきたと考えられる。

周辺の遺跡では奈良～平安時代の遺構・遺物が多く検出されているが、これは流路変化や自然堤防の固定化などによって、河川の影響を受けにくい場所が長期にわたって存在するようになったため、古代以降に低地での人間活動が活発化したことが推測される。これについては周辺の地形発達などを加味して検討していく必要があることから、今後も継続して情報を蓄積し、逐次検討を行っていきたい。

一方、花粉化石群集をみると、ほとんど検出されなかった。検出された化石の大部分に風化の痕跡が認められることや、針葉樹やシダ類孢子など風化に強い種類が残っている点からすると、前述のような好気的環境化における風化によって、花粉化石が消失した可能性がある。なお、炭化材で検出されたヤナギ属、ハンノキ属、ナラ類、カエバ属や、炭化種実で検出されたオニグルミはいずれも河畔に生育することが多い種類である。このことから、遺跡周辺には、これらの種類からなる河畔林やハンノキ湿地林が成立していたものと思われる。

各地点の土層断面から検出された植物珪酸体や、遺構内の土器内土壌から検出された単体の植物珪酸体を見ると、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族の産出が高い。ヨシ属は湿潤な場所に生育する大型の水生植物である。ススキ属は、湿潤な場所に生育する種類も、乾いた場所に生育する種類もある。ススキ属やヨシ属は共に荒地に開けた草地を作る種類であり、本遺跡のような、土壌の流出や堆積が顕著に起こる河川域に草地を作る。した

が、遺跡周辺にはこれらのイネ科草本類からなる草地が広がっていたものと推定される。また、ススキ属やヨシ属は、前述のように住居構築材や生活に必要な資材として多用される種類である。このため、低木の進入を防ぎ、安定した草地を得るために火入れを行うことが、かつては日本各地で行われていた。その起源がいつまで遡れるかは不明であるが、埼玉県荒川低地では、縄文時代末に野焼きが行われた可能性が指摘されている（楡井，1996）。本遺跡では、ヨシ属やススキ属が燃料材や住居構築材として多用されており、その採取場所は河川域周辺の草地であると思われる。野焼きを行わないと樹木が入り込んでくるため、草地の維持には「野焼き」は必要なことである。したがって、今後河川域の連続した堆積物で微粒炭分析を行うなど、草地の維持が行われていたかどうかを検討していく必要がある。一方で、遺構内から多量のイネ属珪酸体が検出されていることから遺跡周辺での稲作が考えられるが、今後は後背湿地を中心に生産域に関する情報も蓄積していくことが望まれる。また、植物珪酸体で多産するクマザサ属は、冷温帯の落葉広葉樹林では林床を覆う主要な種類であることから、周辺の山野に由来するものと思われる。

## 引用文献

- 安藤一男，1990，淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用，東北地理，42，73-88。
- Asai K. and Watanabe T. 1995. Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- 原口和夫・三友 清・小林 弘，1998，埼玉の藻類 珪藻類，埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，527-600。
- 伊藤良水・堀内 誠示，1991，陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用，珪藻学会誌，6，23-45。
- 小杉正人，1988，珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用，第四紀研究，27，1-20。
- 近藤三三・佐瀬 隆，1986，植物珪酸体分析，その特性と応用，第四紀研究，25，31-64。
- 粉川昭平，1988，穀物以外の植物食，弥生文化の研究 2 生業，金岡 恕・佐原 真福，雄山閣，112-115。



- Krammer,K.,1992.PINNULARIA,eine Monographie der europäischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26,J Cramer,353p.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1986,Bacillariophyceae,Teil 1,Naviculaceae,Band2/1 von: Die Suesswasser-flora von Mitteleuropa,Gustav Fischer Verlag,876p.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1988,Bacillariophyceae, Teil 2,Epithemiaceae,Bacillariaceae,Surirellaceae,Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,Gustav Fischer Verlag,536p.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1991a,Bacillariophyceae,Teil 3,Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae,Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,Gustav Fischer Verlag,230p.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1991b,Bacillariophyceae,Teil 4,Achnantheaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula(Lineolata)und Gomphonema.Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,Gustav Fischer Verlag, 248p.
- 南木睦彦, 1991, 栽培植物, 古墳時代の研究 生産と流通, 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編, 雄山閣, 165-174, .
- 楡井 尊, 1996, 埼玉県坂戸市赤尾付近の上部沖積層の花粉分析と検出されたバリノモルフ, 埼玉県立自然史博物館研究報告, 14, 11-16.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1991, 自然科学分析, 東京都新宿区戸山遺跡-厚生省戸山研究舎(仮称)建設に伴う緊急発掘調査報告書-本文編, 戸山遺跡調査会, 133-168.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1993, 自然科学分析からみた人々の生活(1), 慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, 慶應義塾, 347-370.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1996, 宮ノ下遺跡  
自然科学分析, 「山形県埋蔵文化財センター調査報告書第32集宮ノ下遺跡発掘調査報告書」, 財団法人山形県埋蔵文化財センター, 69-79.
- Witkowski,A.,Lange-Bertalot,H. and Metzeltin,D.,2000, Diatom flora of Marine coast IIconographia Diatomologica,Koeltz Scientific Books,881p.

表3 放射性炭素年代測定結果

番号	試料名	性状(重量)	方法	校正年代		測定年代	CodeNo.
				BP	$\delta$ 13 C (%)		
1	ST707	炭化材(27g)	$\beta$ 線計算法	1600 $\pm$ 130	-26.2		IAA-453
2	ST535	炭化材(69g)	$\beta$ 線計算法	1510 $\pm$ 80	-26.3		IAA-454
3	ST560	炭化材(21g)	$\beta$ 線計算法	1810 $\pm$ 90	-26.2		IAA-455
4	ST551	炭化材(8.8g)	$\beta$ 線計算法	1360 $\pm$ 70	-24.6		IAA-456
6	ST181 Y	炭化材(2.5g)	AMS法	1280 $\pm$ 40	-10.16 $\pm$ 0.78	1040 $\pm$ 30	IAAA-31788
8	ST632 EL	炭化材(12g)	$\beta$ 線計算法	1320 $\pm$ 60	-21.4		IAA-457
10	ST560 EFP	炭化材(5g)	$\beta$ 線計算法	1270 $\pm$ 80	-26.0		IAA-458

1) 年代値の算出には、Libbyの上減衰5568年を用いる。  
 2) BP年代値は、1950年を基準として周年率であることを示す。  
 3) 付記した試料は、測定結果 $\delta$  (測定値の68%が入る範囲)を年代値に変換した値。

表4 暦年較正結果

番号	試料	輸出年代 BP	暦年較正年代 (cal)						相対 $\delta$	Code No.
			cal	cal	cal	cal	cal	cal		
1	ST707	1661	cal. 242	cal. 538	cal. 1708	1,412	1,000		IAA-453	
2	ST535	84	cal. 438	cal. 453	cal. 1512	1,497	1,079		IAA-454	
			cal. 461	cal. 520	cal. 1489	1,430	1,337			
3	ST560	94	cal. 527	cal. 617	cal. 1423	1,333	1,584			
			cal. 83	cal. 105	cal. 1867	1,845	1,082		IAA-455	
			cal. 116	cal. 262	cal. 1834	1,688	1,704			
			cal. 278	cal. 335	cal. 1672	1,625	1,180			
4	ST551	73	cal. 308	cal. 336	cal. 1622	1,614	1,024			
			cal. 605	cal. 607	cal. 1345	1,343	1,015		IAA-456	
			cal. 616	cal. 731	cal. 1334	1,233	1,034			
6	ST181 Y	34	cal. 745	cal. 768	cal. 1205	1,182	1,151			
			cal. 689	cal. 728	cal. 1261	1,222	1,514		IAAA-31788	
8	ST632 EL	64	cal. 737	cal. 773	cal. 1213	1,177	1,486			
			cal. 667	cal. 727	cal. 1206	1,223	1,701		IAA-457	
10	ST560 EFP	76	cal. 738	cal. 773	cal. 1212	1,177	1,299			
			cal. 662	cal. 782	cal. 1288	1,168	1,021		IAA-458	
			cal. 791	cal. 813	cal. 1159	1,157	1,108			
			cal. 843	cal. 857	cal. 1107	1,063	1,060			

上段は、RADOCARBON CALIBRATION PROGRAM (CALIB REV4.4 ©Copyright 1996-2002 M Stuiver and P Reimer) を用いた結果を示したものである。この結果を用いている。  
 付記した試料は、測定結果 $\delta$  (測定値の68%が入る範囲)を年代値に変換した値。

表9 樹種同定結果

番号	試料	遺物番号	時代	試料内容	樹種
1	ST707		古墳時代	焼炭化材の付片	ケヤク
2	ST535		奈良・平安時代	焼炭化材の付片	カシ
3	ST560		奈良・平安時代	焼炭化材の付片	ハンノキ科(ハンノキ科)
4	ST551		奈良・平安時代	焼炭化材の付片	マツ属(黒松)
5	ST554	RP1003	古墳時代	木炭(炭化物)	ケリ
6	ST181 Y		古墳時代	木炭(炭化物)	イネ科(タケ)
7	ST628	EL	古墳時代	木炭(炭化物)	不明
8	ST632	EL	奈良時代	カマド内部の炭化物	カシ
9	ST549	Y	奈良時代	木炭(炭化物)	広葉樹(炭化物)
10	ST560	EFP	奈良・平安時代	木炭(炭化物)	ケリ
11	ST604		奈良・平安時代	木炭(炭化物)	ナツハシ(炭化物)
12	ST620		奈良・平安時代	木炭(炭化物)	ハンノキ科(ハンノキ科)
13	ST686		奈良・平安時代	木炭(炭化物)	ハンノキ科(ハンノキ科)
14	ST629		奈良・平安時代	木炭(炭化物)	コナラ科(コナラ科)

表10 種実・微生物分析結果

通し番号	出土遺構など	時代性など	分析量		同定結果
			(g)	(cc)	
15	ST632				オニグルミ(1+) 同一個体?
16	ST603 EL				ホホ(1) 同一個体
18	ST686 Y RP760	奈良時代	311	200	炭化材(+)
20	ST603 Y RP776	奈良時代	203	150	炭化材(+), 土器(+), 無下骨(+)
23	ST614 EL RP633	奈良・平安時代	152	100	炭化材(+), 土器(+)
26	ST501 Y RP668	奈良・平安時代	100	70	炭化材(+), 土器(+)
28	ST627 EL	奈良時代	22	25	-
30	ST632 Y	奈良時代	6	1	炭化材(+)

→細片等のため、個体数が異なるもの

表 2 分析試料一覧

種別	番号	遺留品名	師代名	備考	分析内容				
					元素分析	有機物同定	特殊同定		
薬剤・遺物	1	ST707	戸沢	徳島県産 肥料					
	2	ST335	奈良・平安	徳島県産 肥料					
	3	ST760	奈良・平安	徳島県産 肥料					
	4	ST331	奈良・平安	徳島県産 肥料					
	5	ST343 RP1003	戸沢	七瀬内					
	6	ST181 Y	戸沢	加那					
	7	ST628 EL	戸沢	加那寺					
	8	ST632 EL	奈良	カマド内蔵					
	9	ST349 Y	奈良	本御					
	10	ST350 E13	奈良・平安	本之内					
	11	ST1901	奈良・平安	堀之内					
	12	ST623	奈良・平安	堀之内					
	13	ST690	奈良・平安	堀之内					
	14	ST629	奈良・平安	堀之内					
	15	ST632	奈良	堀之内					
	16	ST633 EL	奈良	カマド内蔵 二内					
	17	ST628 Y RP713	戸沢	上瀬寺 徳島県産 正位 徳島県産 肥料					
	18	ST690 Y RP700	奈良	上瀬寺 徳島県産 横内					
	19	ST603 Y RP703	奈良	東瀬寺 徳島県産 正位					
	20	ST603 Y RP776	奈良	上瀬寺 横内					
	21	ST681 Y RP739	奈良	黒色土 基本完成 正位					
	22	ST615 Y RP565	奈良	上瀬寺 横内					
	23	ST614 EL RP633	奈良・平安	上瀬寺 小幡堂 正位 徳島 カマド内					
	24	ST335 Y RP529	奈良・平安	上瀬寺 正位 同蔵					
	25	ST391 Y RP556	奈良・平安	東瀬寺 徳島県産 横内					
	26	ST191 Y RP668	奈良・平安	東瀬寺 徳島県産 正位 No.21 と同一					
	27	ST191 Y RP699	奈良・平安	東瀬寺 徳島県産 正位 カマド内					
	28	ST627 EL	奈良	カマド内蔵					
	29	ST632 EL	奈良	カマド内蔵					
	30	ST632 Y	奈良	カマド内蔵					
	31	ST632 RQ738	奈良	カマド内蔵の床面					
	32	ST632 RQ730	奈良	カマド内蔵の床面					
土質調査試料	3	奈良	戸沢						
	6-1	戸沢	戸沢						
	7	戸沢	戸沢						
	9	戸沢	戸沢						
	11	戸沢	戸沢						
	14	戸沢	戸沢						
	17	戸沢	戸沢						
	5	奈良	奈良						
	8	戸沢	戸沢						
	10	戸沢	戸沢						



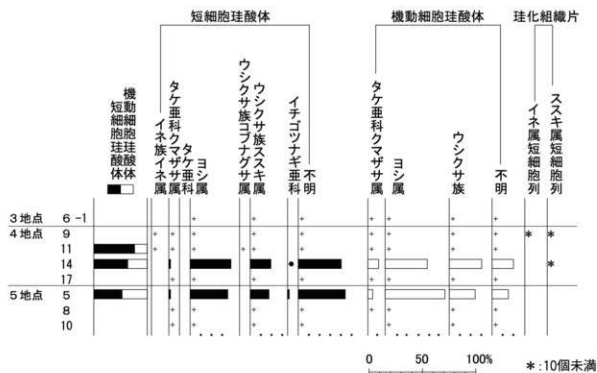


表8 植物珪酸体分析結果

種 類	ST628 ST696 ST603			ST615 ST614 ST535			ST591 ST591 ST627			ST632			4地点			5地点			
	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	9	11	14	17	5	8	10
RP713	RP770	RP770	RP565	RP033	RP599	RP956	RP608	RP608	RP608	RP608	RP608	6-1	30	28	30	6-1	30	28	30
イネ科葉部細胞壁珪酸体																			
イネ胚イネ殻	-	19	203	1	36	47	-	-	-	14	34	15	116	-	1	1	-	-	-
キビ胚イネ殻	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ胚キビ殻	-	3	6	1	6	5	4	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
キビ胚子ゴウキ中層	-	-	-	1	3	3	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ葉科	4	2	2	1	1	1	3	4	2	4	2	2	-	-	1	5	3	3	2
タケ葉科	2	-	-	1	1	1	3	4	2	4	2	2	-	-	-	-	-	-	-
ヨシ殻	38	17	9	14	23	53	43	56	6	60	13	6	60	6	22	73	8	41	8
ワシクサ胚コブアサグサ中層	-	-	-	2	2	2	1	1	1	1	1	1	-	-	1	-	-	-	-
ワシクサ胚スス草殻	32	167	3	7	84	56	62	68	16	280	15	6	280	6	17	37	20	22	1
イネゴウキ草葉科イネ草葉科	-	-	-	3	1	1	1	1	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-
イネゴウキ草葉科イネ草葉科	-	1	-	-	-	7	7	2	2	2	2	2	-	-	-	1	-	-	2
小葉キビ殻	66	33	16	17	52	50	81	37	21	5	18	20	32	71	22	49	17	9	-
不明ヒゲシハ葉	10	8	4	-	3	9	3	2	2	-	-	-	-	-	2	5	-	4	2
不明タンクワ葉	4	6	1	-	1	5	1	1	1	1	1	1	-	1	1	1	-	2	-
イネ科葉身細胞壁珪酸体																			
イネ胚イネ殻	-	7	83	1	47	27	27	5	7	21	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ胚イネ殻	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ胚イネ殻	9	4	2	1	3	5	5	6	6	6	-	3	7	6	11	5	5	6	-
タケ葉科	4	-	-	-	3	2	5	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ葉科	31	5	5	12	22	29	22	31	11	6	15	2	6	43	7	62	12	2	-
ワシクサ胚	37	2	-	7	16	26	39	31	6	35	2	1	5	33	3	27	1	5	-
不明	31	3	5	3	13	23	23	24	4	1	6	4	1	6	4	8	22	7	2
合計																			
イネ科葉部細胞壁珪酸体	157	256	249	41	210	285	227	217	69	462	47	35	81	191	53	125	33	19	-
イネ科葉身細胞壁珪酸体	112	23	106	24	104	112	111	101	34	43	26	14	25	169	20	111	21	9	-
総計	269	279	355	65	314	397	338	318	94	505	73	49	106	300	73	236	54	28	-
珪酸組成																			
イネ科葉部細胞壁珪酸体	1	7	2	4	65	14	3	8	21	104	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科葉身細胞壁珪酸体	-	8	121	-	33	32	11	31	8	114	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ胚イネ殻	-	-	12	-	3	-	-	-	-	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ胚キビ殻	-	-	72	-	10	4	2	-	2	31	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ胚子ゴウキ中層	-	-	-	-	4	3	2	1	1	36	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨシ胚細胞壁珪酸体	-	45	1	-	14	-	4	6	4	114	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ワシクサ胚コブアサグサ中層	-	-	-	-	2	-	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-

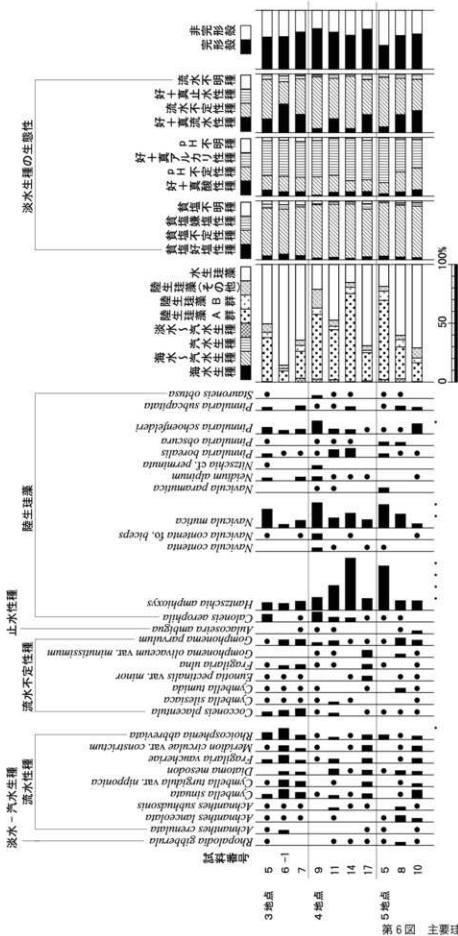
表7 花粉分析結果

種類	試料番号	4-9	4-11	4-14	4-17	5-5	5-8	5-10
木本花粉								
ホミ属		-	-	-	1	-	1	-
ツグ属		-	-	-	-	-	1	-
トウヒ属		-	-	-	-	-	2	1
マツ属早雄管束亜属		6	-	1	-	-	-	-
マツ属複雄管束亜属		24	-	1	-	-	-	-
マツ属(不明)		9	3	-	2	-	2	-
ハンノキ属		1	-	1	-	-	-	-
ブナ属		1	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属		1	-	-	-	-	-	-
ニレ属 ケヤキ属		-	-	-	-	1	-	-
草本花粉								
イネ科		1	-	-	1	1	1	-
ギシギシ属		3	-	-	-	-	-	-
アカザ科		1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属		-	-	1	-	1	-	-
不明花粉		-	-	-	-	-	1	-
シダ類胞子								
シダ類胞子		4	6	1	-	2	4	-
合計								
木本花粉		42	3	3	3	1	6	1
草本花粉		5	0	1	1	2	1	0
不明花粉		0	0	0	0	0	1	0
シダ類胞子		4	6	1	0	2	4	0
総計(不明を除く)		51	9	5	4	5	11	1



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満、+は100個体未満の試料で検出された種類を示す。また珪化組織片の産状を\*で示す。

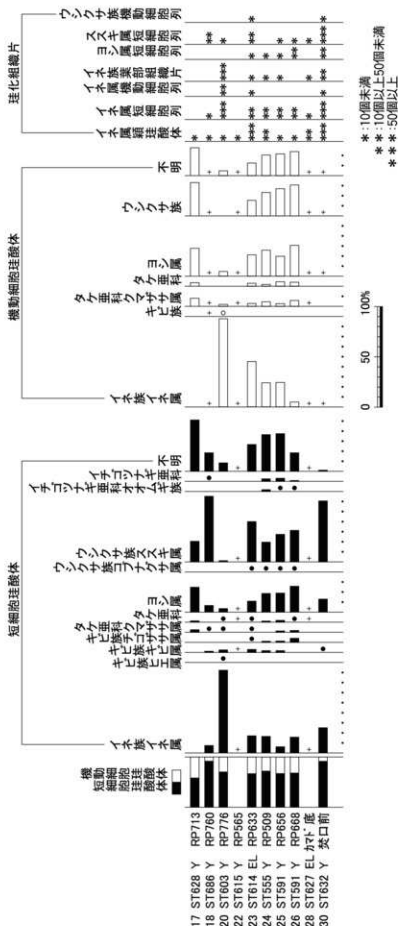
第8図 土層断面の植物珪酸体群集と珪化組織片の産状



海水-汽水-淡水性種割合・各種珪藻出現率・各種珪藻出現率は全体珪藻、淡水性種の割合は淡水性種の合計を基礎として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満、十は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

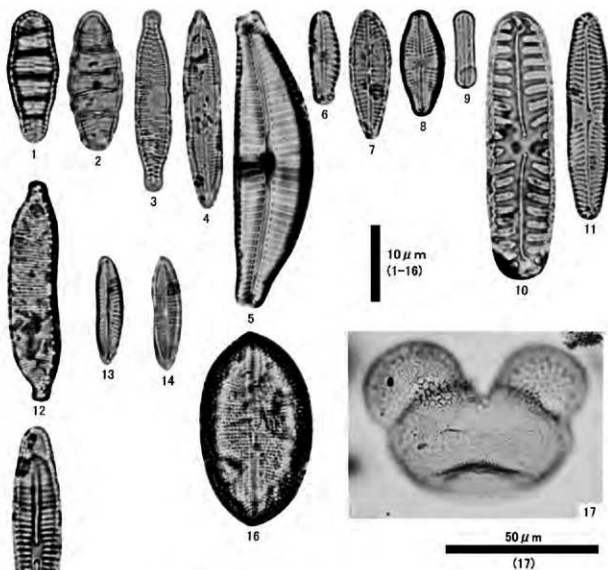
第6図 主要珪藻化石群集の層位分布



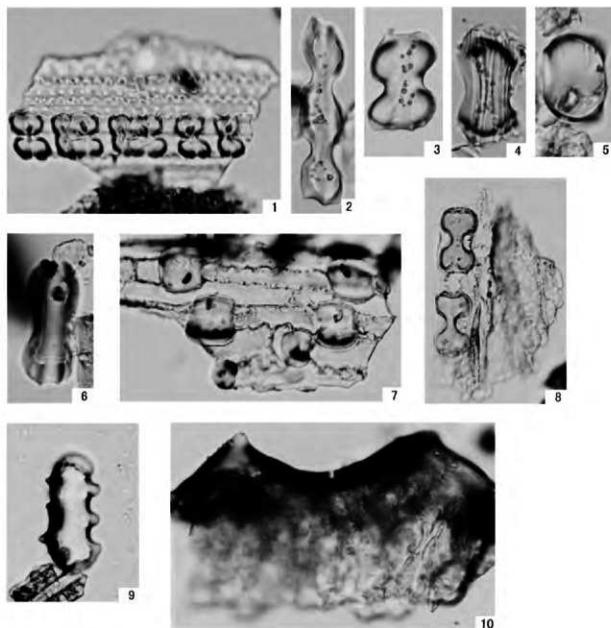


出現率は、イネ科葉部細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、  
 十は100個体未満の試料で検出された種類を示す。また、珪化組織片の産状を\*で示す。

第7図 遺構覆土の植物珪酸体群集と珪化組織片の産状



1. *Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs)V.Heurck(3地点:5)
2. *Diatoma mesodon* (Her.)Kuetzing(3地点:7)
3. *Fragilaria vaucheriae* (Kuetz.)Petersen(3地点:5)
4. *Caloneis aerophila* Bock(3地点:5)
5. *Cymbella turgidula* var. *nipponica* Skvortzow(3地点:6-1)
6. *Cymbella sinuata* Gregory(3地点:5)
7. *Gomphonema parvulum* Kuetzing(3地点:5)
8. *Navicula mutica* Kuetzing(3地点:5)
9. *Navicula contenta* fo. *biceps* (Arnott)Hustedt(3地点:5)
10. *Pinnularia borealis* Ehrenberg(4地点:11)
11. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer(3地点:5)
12. *Hantzschia amphioxys* (Her.)Grunow(3地点:5)
13. *Achnanthes subhudsonis* Hustedt(4地点:11)
14. *Achnanthes subhudsonis* Hustedt(4地点:11)
15. *Rhoicosphenia abbreviata* (Ag.)Lange—Bertalot(3地点:5)
16. *Cocconeis placentula* (Her.)Cleve(3地点:6-1)
17. マツ属(4地点:9)



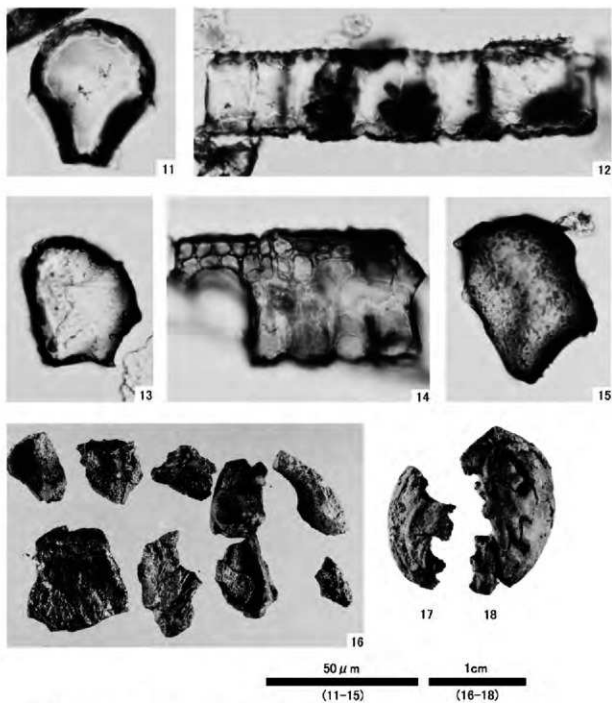
50  $\mu$ m

(1,7-10)

50  $\mu$ m

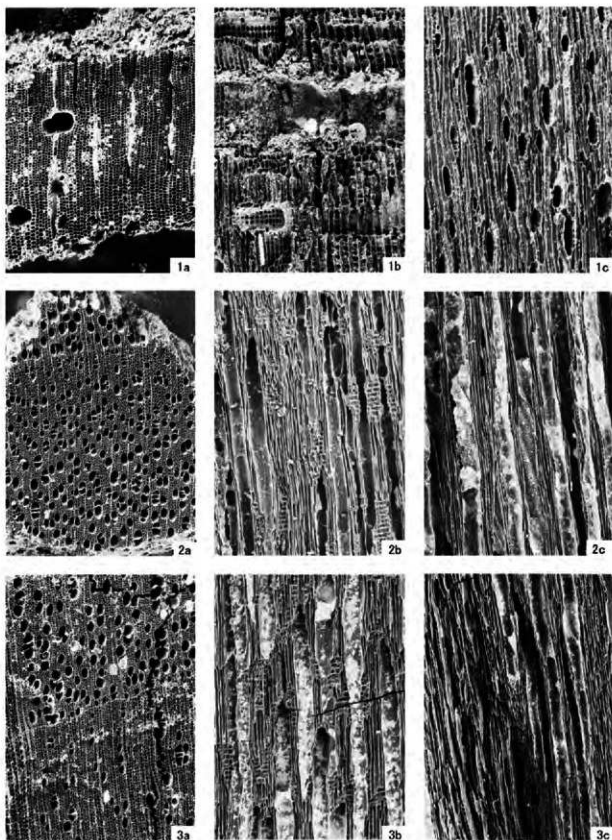
(2-6)

- |                        |                         |
|------------------------|-------------------------|
| 1 . イネ属短細胞列(No.20)     | 2 . ヒエ属短細胞珪酸体(No.20)    |
| 3 . キビ属短細胞珪酸体(No.20)   | 4 . テゴザサ属短細胞珪酸体(No.25)  |
| 5 . クマザサ属短細胞珪酸体(No.17) | 6 . コバナグサ属短細胞珪酸体(No.24) |
| 7 . イネ属短細胞列(No.30)     | 8 . ススキ属短細胞列(No.30)     |
| 9 . オオムギ族短細胞珪酸体(No.24) | 10 . イネ属珪酸体(No.30)      |



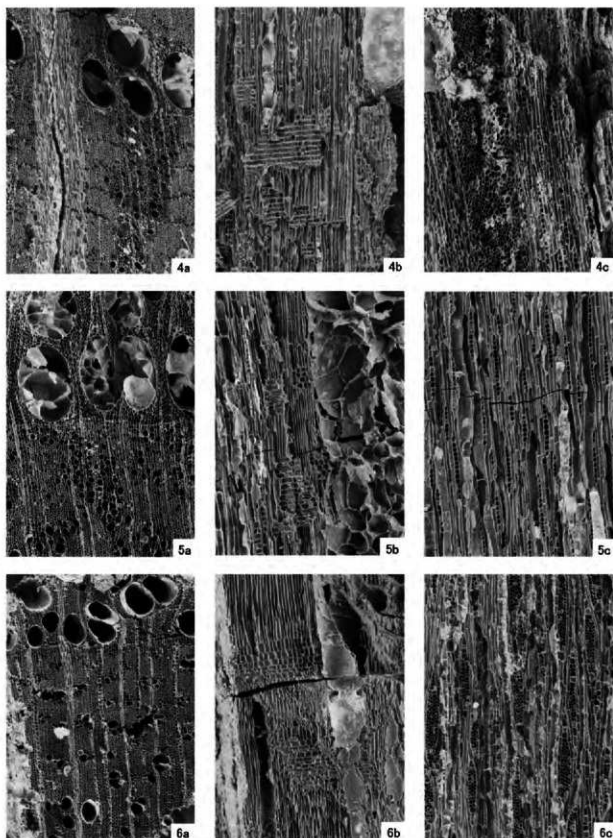
- 11 . イネ属機動細胞珪酸体(No.20)  
 13 . クマザサ属機動細胞珪酸体(No.18)  
 15 . ヨシ属機動細胞珪酸体(5地点:5)  
 17 . モモ(No.16)

- 12 . イネ属機動細胞列(No.20)  
 14 . ウシクサ族機動細胞列(No.30)  
 16 . オニグルミ(No.15)  
 18 . モモ(No.16)



1. マツ属複維管束亜属(No.4)  
 2. ヤナギ属(No.2)  
 3. ハンノキ属ハンノキ亜属(No.3)  
 a: 木口, b: 年目, c: 板目

200  $\mu$  m a  
 200  $\mu$  m b,c



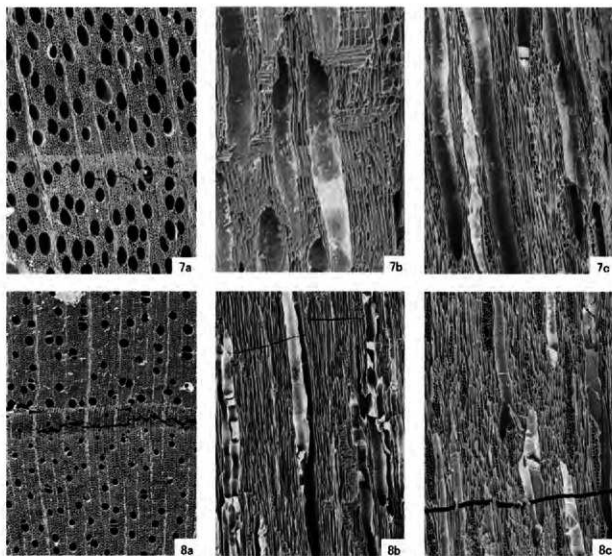
4. コナラ属コナラ亜属コナラ節(No.14)

5. クリ(No.10)

6. ヤマグチ(No.1)

a: 木口, b: 径目, c: 板目

200  $\mu$  m a200  $\mu$  m b, c



7. ナツツバキ属近似種 (No.11)

8. カエデ属 (No.8)

a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200  $\mu$  m a  
200  $\mu$  m b, c

## 2 自然科学分析 (2)

パリオ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

今回の分析調査では、奈良・平安時代とされる住居跡から出土した炭化材と溝跡から出土した炭化米と思われる炭化物について放射性炭素年代測定・樹種同定・種実遺体同定を実施し、年代・木材利用・炭化米についての情報を得る。また、出土した壺棺内部の土壌のリソ・カルシウム分析を実施し、遺体埋納の検証を行う。

### A 炭化物の年代と種類

#### 1. 試料

試料は、奈良・平安時代と考えられる住居跡や溝から出土した炭化物4点である。炭化物は、3点が炭化材、1点が種実遺体であった。放射性炭素年代測定は、4点全点について行う。また、炭化材については樹種同定、種実遺体については種実遺体同定を行う。なお、種実遺体試料には多くの完形・破片が認められたため、種類の同定を行った上で、14個体(0.2g)を年代測定試料とした。

#### 2. 分析方法

##### (1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。なお、 $\delta^{13}\text{C}$ の値は加速器を用いて試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定し、標準試料PDB(白亜紀のベレムナイト類の化石)の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差(‰;パーミル)で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

##### (2) 樹種同定

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)

の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

##### (3) 種実遺体同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体の形態的特徴と当社所有の現生標本との比較から種類を同定し、計数および乾燥重量測定を行う。同定後の種実遺体は、乾燥剤と共に種類毎にビンに入れて保存する。

### 3. 結果

放射性年代測定結果および樹種同定・種実遺体同定結果を表11に示す。試料の測定年代値は、S T135No1が1490 B P(補正年代1390 B P)、S T135No2が1290 B P(補正年代1350 B P)、S T65が1310 B P(補正年代1350 B P)、S D125が1710 B P(補正年代1750 B P)の値を示し、住居跡の3点については近似する。

炭化材は、広葉樹3種類(コナラ属コナラ節・クリ・キハダ)に同定された。一方、種実遺体は、全点イネに同定された。炭化材各種類の主な解剖学的特徴やイネの形態的特徴等を以下に記す。

#### <炭化材>

- ・コナラ属コナラ節(Quercus sect. Prinus) ブナ科  
環孔材で、孔部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものや複合放射組織とがある。
- ・クリ(Castanea crenata Siebet Zucc.)  
ブナ科クリ属  
環孔材で、孔部は1~4列、孔圏外で急激~やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。
- ・キハダ(Phellodendron amurense Ruprecht)  
ミカン科キハダ属

表11 放射性炭素年代測定および同定結果

番号	試料名	試料の質	樹種	測定年代	$\delta^{13}\text{C}$	補正年代	Code&No.
1	S T 135 No 1	炭化材	コナラ属コナラ節	1490±30 B P	-31.24±2.20‰	1390±50 B P	I A A A -30241
2	S T 135 No 2	炭化材	クリ	1290±30 B P	-21.34±1.21‰	1350±40 B P	I A A A -30242
3	S T 65	炭化材	キハダ	1310±30 B P	-22.64±1.10‰	1350±40 B P	I A A A -30243
4	S D 125	種実遺体	イネ	1710±30 B P	-23.01±1.17‰	1750±40 B P	I A A A -30244

- 1) 測定は、加速器質量分析法(AMS法)による。
- 2) 年代は、1950年を基点とした年数で、補正年代は $\delta^{13}\text{C}$ の基に同位体効果による年代誤差を補正した値。
- 3) 放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。



環孔材で、孔間部は2～5列、孔外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～40細胞高。

#### <種実遺体>

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

全て胚孔に同定される。胚乳は、破片も含めて95個体以上が計数され、胚乳は黒色、長楕円形でやや扁平。長さ3.5～5mm、幅2.5mm、厚さ1～1.5mm程度。一端には胚が脱落した凹部があり、両面には2～3本の縦溝がみられる。焼け膨れや発泡した個体が多い。また、胚乳表面に穎の一部が残っている個体もみられる。穎表面には特徴的な顆粒状突起が規則的に縦列する。

#### 4. 考察

##### (1) 遺構の年代

放射性炭素年代測定結果は、住居跡出土炭化材 (S T 135No 1・S T 135No 2・S T 65) が1290～1490 B P (補正年代1350～1390 B P)、溝跡出土種実遺体 (S D 125) が1710 B P (補正年代1750 B P) である。各試料の補正年代を用いて、INTCAL98 (Stuiver, M. et al. 1998) による暦年較正を行うと、各試料の暦年代は、放射性炭素年代より約60～100年新しくなるが、大きくは変わらない。よって、住居跡出土炭化材の年代が6世紀中頃～7世紀末の古墳時代～奈良時代・平安時代初頭、溝跡出土種実遺体の年代が3世紀頃の弥生時代後期が想定される。この結果は、住居跡出土炭化材に関しては発掘調査所見と概ね調和的である。一方、溝跡は奈良・平安時代の住居跡を掘り込んで構築されているため、古くとも奈良・平安時代のもと考えられる。したがって、出土種実遺体が住居跡に由来するものだとすると、その年代値は調査所見よりはるかに古い。このことから、試料は遺構埋積時に混入した古い種実遺体であることも考えられる。

今後、各遺構のより詳細な年代の特定のためには、各遺構についてより多くの測定例を得ること、測定試料の詳細な出土状況の検討など、考古学的な所見と合わせて評価することが望まれる。

##### (2) 木材利用・植物利用

S T 135とS T 65は奈良・平安時代の住居跡と考えら

れており、炭化材は住居構築材等に由来する可能性がある。年代測定の結果を考慮すれば、いずれの炭化材もほぼ同時期と考えられる。S T 135ではコナラ節とクリ、S T 65ではキハダが認められた。クリとコナラ節は、重硬で強度の高い材質を有し、クリでは耐朽性も高い。山形県内では、平安時代の住居構築材に関する調査例は少ないが、木原遺跡や宮ノ下遺跡では古代の掘立柱建物跡の柱根にクリが多く認められている (パノ・サーヴェイ株式会社, 1996等)。コナラ節やキハダについては、平安時代の住居構築材に認められた例は確認できないが、古墳時代の西沼田遺跡では確認例がある (パノ・サーヴェイ株式会社, 1986)。今回の結果から、奈良・平安時代も引き続き利用されていたことが推定される。また、今回の結果では住居によって樹種が異なるが、住居による木材選択の状況についてはさらに分析例を蓄積した上で検討したい。

一方、S D 125から出土した種実遺体は、栽培植物のイネの胚乳であった。東北地方では、弥生時代前期から水田跡が検出されており、弥生時代中期の農具も出土している (須藤・工藤, 1994)。このことから、東北地方における稲作が弥生時代前期まで遡ることが明らかとなっている。今回の結果から、遺跡周辺でイネの栽培が行われていた可能性があるが、イネは長期の保存が可能であるため、他地域から搬入された可能性もある。今後、周辺低地での水田遺構の有無や植物珪酸体分析によるイネ栽培の有無も含めて検討したい。

また、今回のイネの胚乳はいずれも炭化していることから、何らかの理由により火を受けたことは明らかである。調理した後に炭化した場合には表面模様や形状をとどめることは困難であるが、本試料の表面模様は明瞭である。そのため、調理前の生米の状態では火を受けたことが推定される。また、土に埋まっていることから、保管中に火を受けたものを廃棄した等の可能性がある。また、試料中に籾殻が認められないことから、脱穀されたイネの可能性もある。しかし、炭化した籾殻は容易に剥離すること、溝内から出土していること等から、本来は籾殻が付着していたが、廃棄などの過程で重さが異なるために分離し、試料中に残存しなかった可能性もある。

## B 糞粕のリン・カルシウム分析

### 1. 試料

試料は、出土した合わせ口糞箱内土壌1点 (R P 345内サンプル)、R P 346合わせ口糞 (壺) 箱内土壌1点 (R P 346内サンプル)、糞箱覆土1点 (S H 179フクト) の計3点である。

### 2. 分析方法

これまで自然科学分析調査により遺体の痕跡を検証した場合、主な分析手法には次の2つがある。一つは、人体の骨に多量に含まれ、土壌中で比較的移動しにくいリン成分の含有量を測定し、リンの特徴的濃集状況から遺体痕跡を推定するリン分析 (竹迫, 1981など)、もう一方は、動植物中の有機成分の中で土壌中に比較的残留しやすいといわれる脂肪酸の組成を測定し、その脂肪酸組成より遺体痕跡を推定する脂肪酸分析 (中野, 1986など) である。

今回は、分析調査事例が豊富で分析操作が比較的簡便なリン分析を実施することとした。加えてリン酸とともに骨の主成分であるカルシウム含有量についても調査することとした。

なお、土壌を試料とする場合のリン・カルシウム分析では、土壌自体にもリン、カルシウムが少なからず含まれることから、遺体痕跡を評価しようとする土壌と同質の土壌、すなわち対照試料の確保が必要である。そこで、今回は掘方覆土 (S H 179フクト) を比較対照試料とした。

リン・カルシウム分析は、土壌標準分析・測定法委員会 (1986)、土壌養分測定法委員会 (1981)、京都大学農学部農芸化学教室 (1957)、農林水産省技術会議事務局 (1967)、ペドロジスト懇談会 (1984) を参考に行った。以下にその操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0mmの篩を通過させる (風乾細土)。風乾細土の水分を加熱減量法 (105℃、5時間) により測定する。風乾細土2.00gをケルダールフラスコに秤量し、はじめに硝酸 (HNO<sub>3</sub>) 5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸 (HClO<sub>4</sub>) 10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)

濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム (CaO) 濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) mg/g とカルシウム含量 (CaO mg/g) を求める。

### 3. 結果

結果を表12に示す。リンは、R P 345内サンプル、R P 346内サンプル、比較対照試料のS H 179フクトともに含量に大差はないが、比較対照試料より箱内試料で僅かに高い値を示す。カルシウムについても同様な傾向である。

### 4. 考察

土壌中のリン含量についての調査事例をいくつかあげると、中央値2.0 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g (Bowen, 1983)、1.0~2.5 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g (Bolt・Bruggenwert, 1980)、リン含量の比較的高い黒ボク土の平均値が未耕地で2.1 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g、既耕地で5.5 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g (川崎ほか, 1991)、リン自然賦存量は2.7 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g以下 (天野ほか, 1991) とされる。したがって、これら事例から推定される土壌中のリンの自然賦存量は高く見積っても3.0 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g程度と推定される。

土壌中のカルシウム含量は、普通1~50 CaO mg/g (藤貫, 1979) といわれており、自然賦存量範囲が非常に幅広く、土壌の種類によってその上限値が著しく異なる。そのためリンのように一般的な上限値を設定することは難しく、リンを評価する際の補助的数値としてみるべきである。なお、リン、カルシウムともに文献の記載単位がそれぞれ異なるため、ここではすべてmg/gで表示した。

今回の結果では比較対照試料よりも糞箱内のR P 345内サンプル、R P 346内サンプルにおいて僅かに高いリン含量が認められるものの、いずれもその含量は土壌中のリンの自然賦存量範囲内にあり、リンの富化を明確に指摘することはできない。また、比較対照試料との僅かな差を有意なものとして評価することは、比較対照試料の含量にばらつきが無いことの証明が必要であるため、今回の結果からは難しい。したがって、今回の結果から見る限り、糞箱内に動物遺体などの痕跡は認められないといえる。これはカルシウムについても同様である。

表12 リン・カルシウム分析結果

試料名	土性	土色		P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg/g)	CaO (mg/g)
R P345内サンプル	L i c	10 Y R 2/3	黒褐	1.78	6.89
R P346内サンプル	HC	10 Y R 2/2	黒褐	1.78	6.67
S H179ブクド	L i c	10 Y R 2/3	黒褐	1.67	6.41

注.

(1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

(2) 土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。

L i c……軽殖土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

HC……重殖土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）

## 引用文献

天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36. Bowen, H.J.M. (1983) 環境無機化学—元素の循環と生化学—, 浅見輝男・茅野 充 男 訳, 297p., 博友社 [Bowen, H.J.M. (1979) Environmental Chemistry of Elements].

Bolt, G.H.・Bruggenwert, M.G.M. (1980) 土壌の化学, 岩田進午・三輪睿太郎・井上 隆弘・陽 捷行 訳, 309 p., 学会出版センター [Bolt, G.H. and Bruggenwert, M.G.M. (1976) SOIL CHEMISTRY], p.235-236.

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法, 354p., 博友社.

土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法, 440p., 養賢堂.

藤貫 正（1979）カルシウム, 地質調査所化学分析法, 52p., p.57-61, 地質調査所.

川崎 弘・吉田 滯・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p., p.23-27.

京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書 第1巻, 411p., 産業図書.

中野益男（1986）真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂, 「真脇遺跡」配石遺構の土壌に残存する脂肪の分析, 大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書, 第1巻, 46 p., 秋田県鹿角市教育委員会.

農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖,

パリオ・サーヴェイ株式会社（1986）西沼田遺跡出土建

築用材同定・種子分析報告, 「山形県埋蔵文化財調査報告書第10集 西沼田遺跡発掘調査報告書」, p.91-95, 山形県・山形県教育委員会.

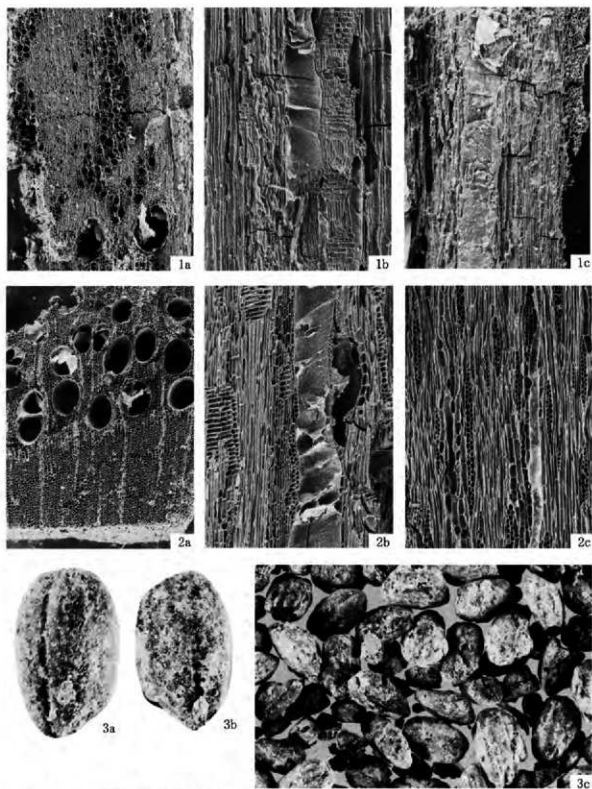
パリオ・サーヴェイ株式会社（1996）宮ノ下遺跡 自然科学分析, 「山形県埋蔵文化財センター調査報告書第32集 宮ノ下遺跡発掘調査報告書」, p.69-79, 財団法人山形県埋蔵文化財センター.

ペドロジスト懇談会（1984）野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」, 156p., p.39-40, 博友社.

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plincht, J. and Spurk, M. (1998) INTCAL 98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

須藤 隆・工藤哲司（1994）東北地方弥生文化の展開と地域性, 日本考古学協会編「北日本の考古学南と北の地域性」, p.52-71, 吉川弘文館

竹迫 紘・加藤哲郎・坂上寛一・黒部 隆（1980）神谷原遺跡への土壌学的アプローチ, 神谷原 I, p.412-416, 八王子市栢田遺跡調査会.



1. コナラ属コナラ節 (ST135炭化材 No.1) a: 木口, b: 柀目, c: 板目  
 2. キハダ (ST65炭化材) a: 木口, b: 柀目, c: 板目  
 3. イネ (SD125種実遺体) a, b: 単体, c: 集合写真

200  $\mu$ m: 1, 2a

200  $\mu$ m: 1, 2b, c

1mm: 3a, b

3cm: 3c

### 3 須恵器の理化学的分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

山形県内各地では、古代とされる須恵器窯跡が確認されている。本遺跡で出土した須恵器の産地が、これまでに確認されている窯跡の中から見出すことができれば、当該期における人との動きに関わる重要な資料が得られることが期待される。

今回の分析では、出土した須恵器の胎土分析を行い産地について検討を行う。また、山形県内各地の窯跡出土資料の当社による分析例との比較も行い、その産地に係る資料を作成する。

#### A 試料

試料は、いずれも古代のものとされている須恵器片合計11点である。受領試料には、試料番号1～11までが付されている。

試料番号1、2、5、8、10が坏、試料番号3が後碗、試料番号4、6、9が壺、試料番号7、11が蓋である。各試料の器種、実測番号などを一覧にして表13に示す。

表13 試料一覧

試料番号	器種	実測番号	遺物番号(仮)	分析	
				蛍光X線	薄片
1	坏	3-3	3-5	○	○
2	坏	135-5	38-5	○	○
3	後碗	135-16	38-10	○	○
4	壺	135-12	38-12	○	○
5	坏	18-10	40-4	○	○
6	壺	18-9	40-5	○	○
7	蓋	186-5	62-5	○	○
8	坏	186-14	62-8	○	○
9	壺	186-6	62-10	○	○
10	坏	181-1	106-7	○	○
11	蓋	675-1	107-6	○	○

#### B 分析方法

当社では、これまでも山形盆地や庄内平野に分布する古代の遺跡から出土した須恵器の胎土分析を行っている。高温焼成と胎土中の砂粒が少ないという須恵器の胎土の特性により、分析手法は薄片作製観察と蛍光X線分析を併用し、両結果を合わせて解析を行っている。今回の分析では、薄片作製観察に供する試料は9点、蛍光X

線分析は11点である。以下に各手法の処理過程を述べる。

##### (1) 薄片作製観察

薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか(1999)の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

##### (2) 蛍光X線分析

SiO<sub>2</sub>、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、TiO<sub>2</sub>、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、MnO、MgO、CaO、Na<sub>2</sub>O、K<sub>2</sub>O、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>の主要10元素およびRb、Sr、Y、Zr、Baの微量5元素について蛍光X線分析法によって分析する。以下に各分析条件を記す。

##### a) 装置

理学電機工業社製R I X1000 (F P法のグループ定量プログラム)

##### b) 試料調製

試料を振動ミル(平工製作所製T I 100; 10ml容量タンクステンカーバイト容器)で微粉砕し、105℃で4時間乾燥する。この微粉砕試料についてガラスシートを以下

の条件で作成する。なお、胎土表面に塗彩または釉薬が確認される試料については、これらを除去し、試料として供する。

溶融装置；自動剥離機構付理化学電機工業社製高周波  
ピートサンプラー (3491A1)

溶剤及び希釈率；融剤（ホウ酸リチウム）5,000 g；  
試料0.500 g

剥離剤；LiF（溶融中1回投入）

溶融温度；1200℃ 約7分

#### c) 測定条件

X線管；Cr (50Kv-50mA)

スペクトル；全元素K a

分光結晶；LiF, PET, TAP, Ge

検出器；F-PC, SC

計数時間；PeaK40sec, Back20sec

## C 結 果

### (1) 薄片作製観察

結果を表14、第16、17図に示す。砂粒の種類構成をみると、ほとんどの試料では石英の鉱物片を多く含み、少量の斜長石の鉱物片を伴う組成を示す。ただし、試料番号7と9では、斜長石が石英と同量かあるいはやや多い。石英と斜長石以外の鉱物片は、試料によっては微量か極めて微量含まれる程度であり、カリ長石や黒雲母などが認められた。岩石片では、珪質頁岩と凝灰岩および多結晶石英の3者を主体とする試料がほとんどであり、試料によっては微量の頁岩や流紋岩・デイサイトおよび花崗岩類や珪化岩などが含まれている。各試料における各鉱物片および各岩石片の量比は異なるが、9点の中で分類できるほどの組成のまとまりは認められない。

なお、試料番号2、3、4、6、7には斜長石の溶融と斜長石表面におけるムライトの晶出が認められ、それ以外の試料では長石類の溶融は認められなかった。ムライトの晶出は1200℃前後で生じる（五十嵐，2007）ことから、上述した5点の試料の焼成温度は1200℃前後であり、他の試料の焼成温度は、それよりも低いことが推定される。

胎土中の砂の粒径組成では、試料番号1、3、7は細粒砂をモードとし、試料番号4、5、6、8、9は中粒砂をモードとする。試料番号2は粗粒砂と細粒砂の両者

をモードとしている。

砕屑物・基質・孔隙の割合では、試料番号1、2、3、8、9の5点がいずれも10%以上15%未満の砕屑物の量比を示し、試料番号4～7の4点はいずれも5%以上10%未満の砕屑物の量比を示す。

### (2) 蛍光X線分析

結果を表15に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として、以下に示す元素を選択し、それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した（第18図）。

a) 化学組成中で最も主要な元素（ $\text{SiO}_2$ ,  $\text{Al}_2\text{O}_3$ ）

b) 粘土の母材を考える上で長石類（主にカリ長石、斜長石）の種類構成は重要である。このことから、指標として長石類の主要元素である  $\text{CaO}$ 、 $\text{Na}_2\text{O}$ 、 $\text{K}_2\text{O}$  の3者を選択し、長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には、長石類全体におけるアルカリ長石の割合  $(\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})/(\text{CaO}+\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$  を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合  $\text{K}_2\text{O}/(\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$  を縦軸とする。

c) 輝石類や黒雲母、角閃石など有色鉱物における主要な元素。この場合、指標としてこれらの有色鉱物の主要な元素のうち、 $\text{TiO}_2$ 、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ 、 $\text{MgO}$  を選択し、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$  を分母とした  $\text{TiO}_2$ 、 $\text{MgO}$  の割合を見る。

d) 各微量元素を選択する。組み合わせは、Rb-Sr と Zr-Ba とする。

また、これらの散布図では、器種ごとに異なる記号で示した。

作成した5つの散布図を概観すると、有色鉱物主要元素の散布図において、試料番号4、9、11がそれぞれ他の試料からは離れた位置にプロットされ、Rb-Srの散布図において、試料番号5と6が他の試料から離れた位置にあることが指摘される。この試料番号5と6は、他の散布図においても互いに近接した位置にプロットされている。ここで、上述した試料番号4、9、11と試料番号5、6を除いて各散布図を詳細にみれば、試料番号1、3、7の3点がいずれの散布図でも近接し、これらとは別に試料番号2、8、10の3点も各散布図で互いに近接した位置にプロットされている。以上の状況から、11点の試料については、その化学組成値により、試料番号1、3、7の3点のグループと試料番号2、8、10の3点のグループ、さらに試料番号5、6の2点のグループに分

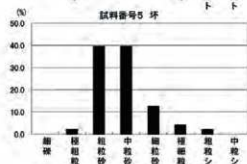
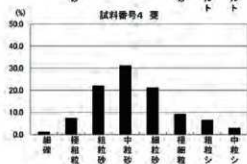
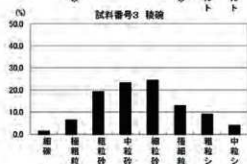
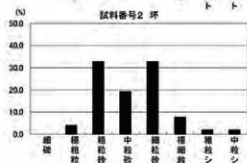
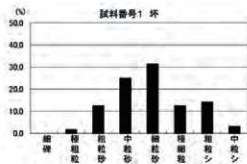
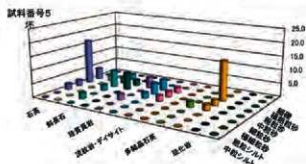
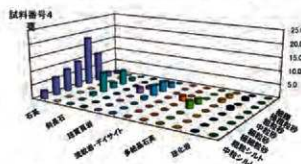
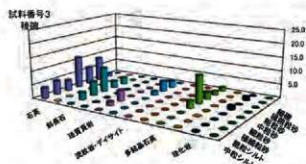
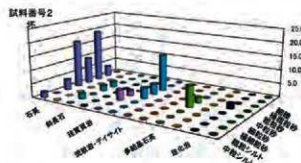
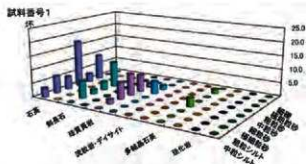
表14 (1) 薄片観察結果

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類・構成											その他		合計					
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	白雲母	黒雲母	不透明結核	珪質直岩	頁岩	凝灰岩	火山岩	多結晶石英	花崗岩類		千枚岩	ホルンフェルス	凝灰岩	珪化岩	火山ガラス
1	細塵																			
	極細粒砂																			
	細粒砂	6						1			1									
	中粒砂	2		6	1				4		3									
	粗粒砂	11		2					5					2						
	極細粒砂	3		1					4											
	粗粒シルト	4		4					1											
	中粒シルト	2																		
	基質																			473
	不気																			6
2	細塵																			
	極細粒砂	2																		
	細粒砂	10									7									
	中粒砂	5		1						2			1				1			
	粗粒砂	9		1					1	2			4							
	極細粒砂	2							2											
	粗粒シルト			1																
	中粒シルト	1																		
	基質																			416
	不気																			22
3	細塵											1								
	極細粒砂	1								2		1					1			
	細粒砂	7		2						3		2								
	中粒砂	5		2						1		1					1			
	粗粒砂	9		7						1					2					
	極細粒砂	3		4					3											
	粗粒シルト	4		2					1											
	中粒シルト	3																		
	基質																			477
	不気																			12
4	細塵	1																		
	極細粒砂	2		1							2			1				1		
	細粒砂	12		6					1		4			1						
	中粒砂	25		2					2	1	4		2	2				1		
	粗粒砂	11		8							1				3					
	極細粒砂	9		1																
	粗粒シルト	7																		
	中粒シルト	3																		
	基質																			1096
	不気																			36
5	細塵																			
	極細粒砂			1																
	細粒砂	2	1	1			1		2		2	1			7	1		1		
	中粒砂	8		3		3					2	1			1		1			
	粗粒砂	1		1							1	1			1	1				
	極細粒砂	1							1											
	粗粒シルト																			
	中粒シルト																			
	基質																			441
	不気																			12

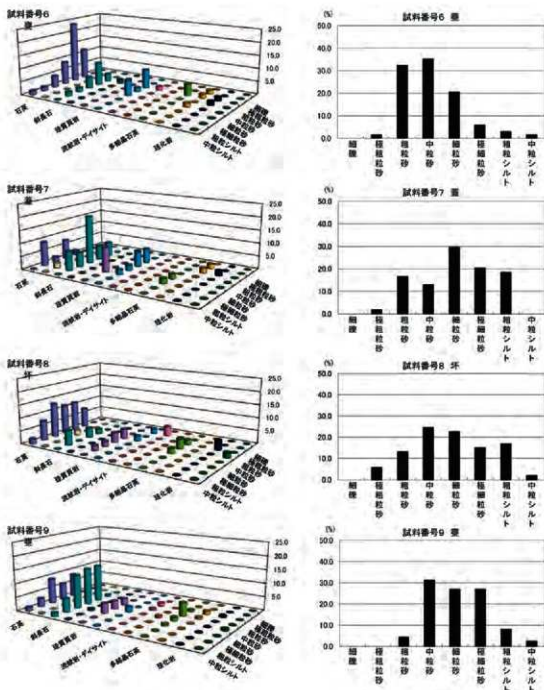
表14 (2) 薄片観察結果

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成													合計							
		石英	カリアリ長石	斜長石	角閃石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	珪質頁岩	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩		多結晶石英	花園岩類	千枚岩	ホルンフェルス	風石英	珪化岩	火山ガラス
6	集塵																					0
	細粒砂														1							1
	粗粒砂	8		2			1					5	1		3	1				1		22
	中粒砂	16		6							1									1		24
	細粒砂	6		3											1							14
	細粒シルト	3		1																		4
	粗粒シルト	1		1																		2
	中粒シルト	1																				1
基質																					855	
孔眼																						34
7	集塵																					0
	細粒砂															1						1
	粗粒砂				3						1	3				1				1		9
	中粒砂	1		3							3											7
	細粒砂	4		10							1			1								16
	細粒シルト	1		3							1			1								11
	粗粒シルト	5		4																		10
	中粒シルト																					0
基質																					337	
孔眼																						11
8	集塵																					0
	細粒砂										1	2										3
	粗粒砂	4												1						2		7
	中粒砂	6		1					2		1			2							1	13
	細粒砂	6		2					2					1								12
	細粒シルト	7							1													8
	粗粒シルト	4		3				1	1													9
	中粒シルト	1																				1
基質																					319	
孔眼																						5
9	集塵																					0
	細粒砂																					0
	粗粒砂				1							2		1	2					1		7
	中粒砂	14		22		1			4			1		8	1							51
	細粒砂	10		22					5			3		1	2						1	44
	細粒シルト	15		20			1	1	6					1								44
	粗粒シルト	5		8																		13
	中粒シルト	2		2																		4
基質																					1003	
孔眼																						12

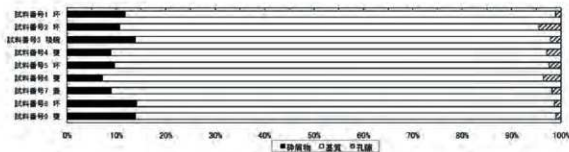




第16図 (1) 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (%) および砂の粒径組成



第16図 (2) 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (%) および砂の粒径組成



第17図 砕屑物・基質・孔隙の割合

表15 蛍光X線分析結果(1)

試料番号	主要元素											
	SiO <sub>2</sub> (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na <sub>2</sub> O (%)	K <sub>2</sub> O (%)	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (%)	Igloss (%)	合計 (%)
1	65.98	0.86	20.64	6.07	0.02	0.83	0.48	0.49	1.41	0.04	3.18	100.00
2	73.04	0.87	16.79	5.10	0.01	0.56	0.21	0.42	1.20	0.05	1.75	100.00
3	69.64	0.88	17.64	6.29	0.02	0.92	0.40	1.01	1.73	0.04	1.43	100.00
4	72.96	0.90	18.16	3.10	0.01	0.62	0.49	0.45	1.50	0.04	1.77	100.00
5	67.13	0.80	21.09	5.41	0.01	1.17	0.45	0.73	1.73	0.02	1.46	100.00
6	68.93	0.81	20.68	5.20	0.03	1.11	0.48	0.87	1.80	0.01	0.08	100.00
7	68.80	0.67	18.95	5.25	0.02	0.93	0.54	1.02	2.00	0.02	1.80	100.00
8	71.85	0.80	17.67	4.27	0.01	0.65	0.25	0.28	1.13	0.02	3.07	100.00
9	68.87	0.76	20.50	2.78	0.01	1.03	0.42	0.91	2.01	0.04	2.67	100.00
10	73.75	0.91	15.50	4.57	0.03	0.57	0.43	0.67	1.34	0.01	2.22	100.00
11	73.55	0.83	19.13	2.04	0.01	0.54	0.25	0.65	1.74	0.05	1.21	100.00

表15 蛍光X線分析結果(2)

試料番号	微量元素				
	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)
1	80	64	31	187	425
2	77	42	30	222	300
3	86	60	27	194	452
4	90	65	34	238	385
5	118	74	24	168	413
6	125	80	26	174	444
7	82	85	32	226	525
8	68	38	33	224	332
9	89	75	34	211	457
10	82	63	33	229	374
11	85	67	24	292	434

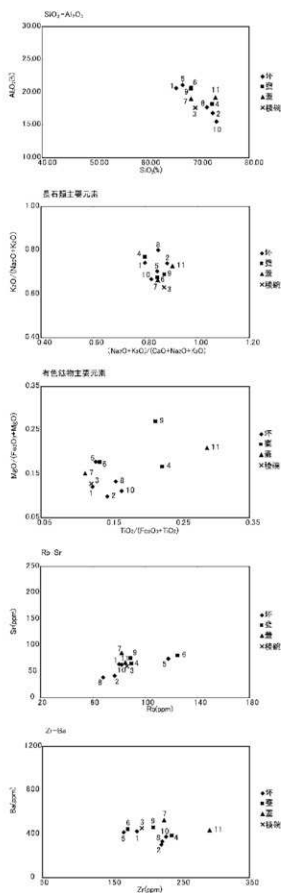
類することが可能であり、これらいずれにも属さない単独試料として、試料番号4、9、11があるという構成を見出すことができる。

## D 考 察

古代の須恵器窯の立地条件の一つとして、一般的には原材料の採取地に近接した場所ということが考えられることから、須恵器胎土中の砂粒の鉱物・岩石組成は、窯跡周辺の地質を反映していると考えて良い。今回の薄片観察を行った試料9点は、胎土中に出現した鉱物および岩石の種類はほぼ同様であると判断される。すなわち、いずれの試料も、同様の地質学的背景を有する地域内に所在する窯で焼かれた製品であると考えられる。大沢ほか(1986)や日本の地質「東北地方」編集委員会(1989)などを参照すれば、米沢盆地から山形盆地、新庄盆地を経て庄内平野に至る最上川沿いの地域は、同様の地質学的背景を有する地域となる。各盆地背後の山地を構成する地質の主体は、頁岩、珪質頁岩、凝灰岩を

主要な構成要素とする新第三紀中新世の堆積岩類からなり、また、同時期の流紋岩・デイサイトからなる溶岩も分布している。さらに、これら新第三紀の地質の背後には白亜紀～古第三紀に貫入した花崗岩類の分布も記載されている。このような地質からなる山地の縁辺部に堆積した砕屑物は、上述した各地質に由来する岩石片が混在していることが推定され、それは今回の各試料に認められた鉱物組成および岩石組成とよく一致する。したがって、現時点では、川前2遺跡出土の古代の須恵器は全て最上川沿いの地域を産地とする可能性が高いと判断されるが、薄片観察のみでは、その地域内での絞り込みはできない。

ただし、前述した蛍光X線分析の化学組成値による分類を薄片観察結果に対応させると、試料番号1、3、7はいずれも細粒砂をモードとする粒徑組成を示し、試料番号5、6はいずれも中粒砂と粗粒砂が同程度に高い割合を占める粒徑組成を示している。試料番号2と8では粒徑組成が異なっているものの、今後は、胎土中の砂の粒徑組成に注目することにより、生産地の区別が可能になるかも知れない。今回の蛍光X線分析による化学組成値からは、前述したように、3つの胎土グループと3点の単独試料とに分類される可能性があったとした。山形県内で確認された古代の須恵器窯跡出土試料の当社による分析事例としては、庄内平野に位置する荒沢窯跡、泉森南窯跡、山形盆地西部の寒河江市に位置する平野山窯跡、山形盆地東部の天童市に位置する二子沢古窯跡、山形盆地南縁の丘陵に位置する小松原窯跡、オサヤズ窯跡、三本木窯跡、そして長井盆地に位置する蛇崩窯跡と米沢盆地北部に位置する平野古窯跡の各遺跡がある。現時点で



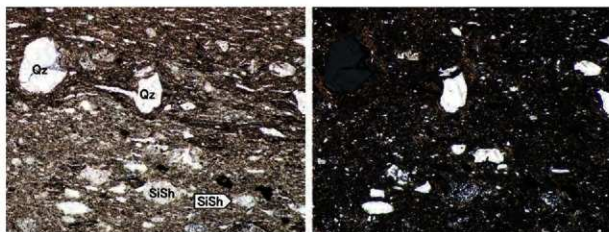
第18図 胎土化学組成散布図

は、各窯跡試料ともに分析試料数が少ないために、同一窯跡出土試料間の組成のばらつき状況が明瞭でない部分もあるが、散布図上での範囲から推定してみたい。上述した各窯跡のうち、庄内平野に位置する窯跡試料は、特に有色鉱物主要元素や Zr-Ba の各散布図において、今回の試料全体との分布範囲のずれが大きい。したがって、今回の試料が庄内平野の窯跡産である可能性は低いと考えられる。今回の試料と近似する組成を示す窯跡としては、やはり川前 2 遺跡から近い天童市の二子沢古窯跡試料の組成が、試料番号 1、3、7 のグループの組成に近似する傾向が認められる。また、寒河江市の平野山古窯跡試料の組成は、試料番号 5、6 のグループに近い傾向が認められる。試料番号 2、8、10 のグループについては、それに近い窯跡試料は認められない。

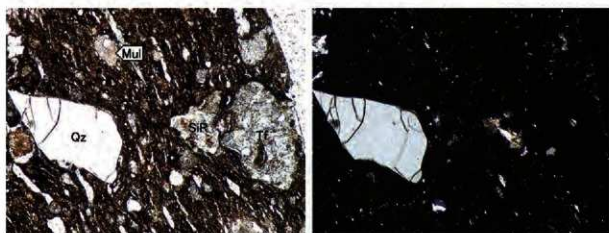
以上の推定は、分析事例の限定された中での対比であるが、川前 2 遺跡出土須恵器の産地の可能性として、複数の窯からの供給があったことと、それらの窯は山形盆地内の窯であったことが推定される。今後、他の窯跡試料の分析事例が増えることになれば、今回の推定も再検討、修正が生じることは十分に考えられる。今後はそのような可能性も含めて分析事例の蓄積を行う必要があると考える。

## 引用文献

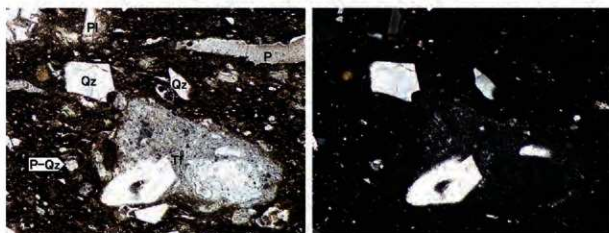
- 五十嵐俊雄, 2007, 土師器・須恵器等に関する焼成温度推定手法の開発, 徳永重元博士献呈論集, バリノ・サーヴェイ株式会社, 281-297.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察-岩石学的・堆積学的による-, 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.
- 日本の地質「東北地方」編集委員会, 1989, 日本の地質 2 東北地方, 共立出版, 338 p.
- 大沢儀・三村弘二・久保和也・広島俊男・村田泰章, 1986, 20万分の1地質図幅「仙台」, 地質調査所,



1. 試料番号1(坏 実測番号3-3 遺物番号3-5)



2. 試料番号2(坏 実測番号135-5 遺物番号38-5)



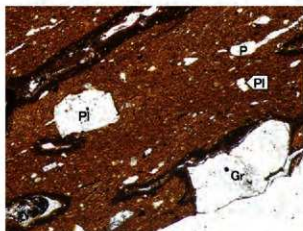
3. 試料番号3(稜碗 実測番号135-16 遺物番号38-10)

Qz:石英, Pl:斜長石, SiSh:珪質頁岩, Tf:凝灰岩, P-Qz:多結晶石英, SiR:珪化岩,  
Mul:ムライト, P:孔隙。

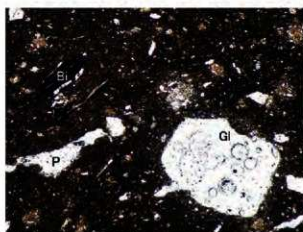
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



4. 試料番号4(壔 実測番号135-12 遺物番号38-12)



5. 試料番号5(坏 実測番号18-10 遺物番号40-4)

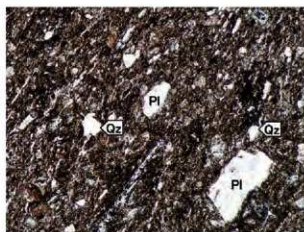


6. 試料番号6(壔 実測番号18-9 遺物番号40-5)

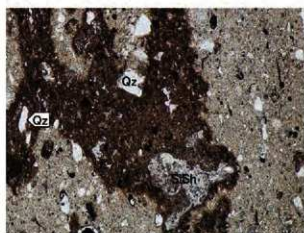
0.5mm

Qz:石英, Pl:斜長石, Bi:黒雲母, Tf:凝灰岩, Gr:花崗岩, Mul:ムライト, Gl:ガラス,  
P:孔隙。

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



7.試料番号7(壺 実測番号186-5 遺物番号62-5)



8.試料番号8(环 実測番号186-14 遺物番号62-8)



9.試料番号9(壺 実測番号186-6 遺物番号62-10)

Qz:石英, Pl:斜長石, SiSh:珪質頁岩, P-Qz:多結晶石英。  
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

## 4 破鏡の理化学的分析

財団法人元興寺文化財研究所 川本耕三

### A 分析対象

預証No2002-1490 No1 破鏡表面加工痕の確認と付着赤色顔料

分析箇所は写真1に矢印で示した。

### B 使用機器及び測定条件

○ エネルギー分散型ケイ光X線分析装置 (XRF) (セイコーインスツルメンツ製 SE A5230)

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することによ

り元素を同定する。大気中、コリメータ1.8mm、管電圧45kV

### C 結果

実体顕微鏡により破鏡表面 (①~③) を観察したところ、全体が灰緑色の腐食生成物に変化しており、本来の鏡の表面は失われていた。加工痕とみられるものは確認できなかった。

鏡の主成分は銅 (Cu) で、鉛 (Pb) とアンチモン (Sb) を比較的多く含んでいる (第22図)。他にスズ (Sn)、ヒ素 (As)、ビスマス (Bi)、銀 (Ag)、鉄 (Fe) を検出した。鏡背の赤色部分③からは水銀 (Hg) を検出しており、このことから水銀朱 (硫化水銀: HgS) が付着していると考ええる。

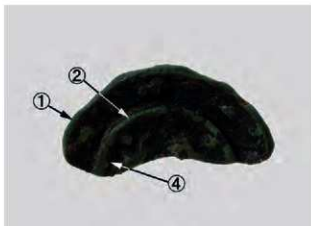


写真1 破鏡表面



写真2 破鏡裏面

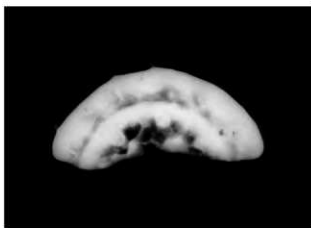


写真3 X線写真(1)

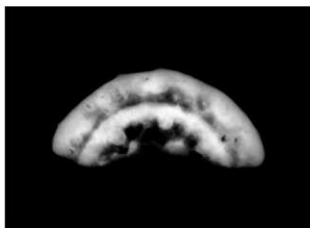


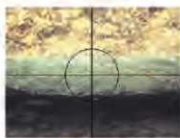
写真4 X線写真(2)



## [測定条件]

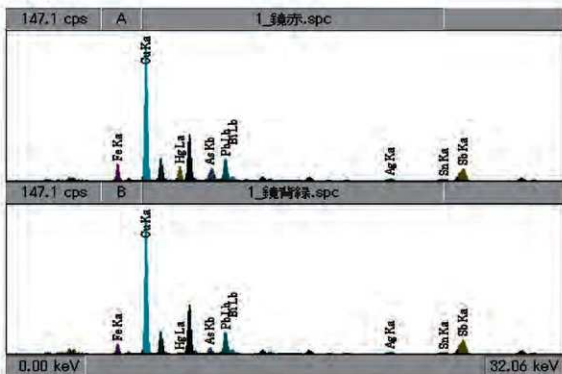
測定条件	A	B
測定装置	SEA5230	SEA5230
測定時間 (秒)	300	300
有効時間 (秒)	212	217
試料室雰囲気	大気	大気
コリメータ	φ 18 mm	φ 18 mm
励起電圧 (kV)	45	45
管電流 (μA)	20	28
コメント	2002-1490 (財) 山形県 No.1 破鏡 (4) 鏡背赤色部分	2002-1490 (財) 山形県 No.1 破鏡 (1) 鏡背青色部分

## [試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm) [X Y] 6.60 4.95 (mm)

## [スペクトル]



## [結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	B (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	1179.893	1169.698	7.86-8.22
50	Sn	スズ	K α	17.751	19.360	24.92-25.47
51	Sb	アンチモン	K α	213.253	247.003	25.99-26.55
47	Ag	銀	K α	23.459	20.652	21.84-22.36
82	Pb	鉛	L β	227.814	225.710	12.42-12.84
26	Fe	鉄	K α	130.278	80.600	6.23-6.57
83	Bi	ビスマス	L β	48.512	51.268	12.81-13.24
33	As	ヒ素	K β	143.410	61.340	11.52-11.93
80	Hg	水銀	L α	138.673	8.090	9.79-10.17

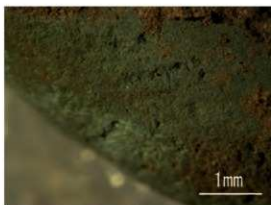
第22図 破鏡表面のXRFスペクトル



鏡背01



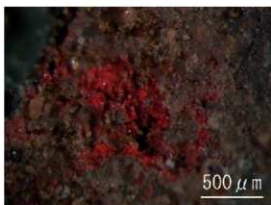
鏡背02



鏡面



赤色顔料



赤色顔料

破鏡表面および赤色顔料の顕微鏡写真

## VI 総 括

### 1 遺跡の総括

川前2遺跡第1・2次調査では、平成14年と15年の2カ年にわたって8,500㎡の面積の発掘調査を実施してきた。その結果、古墳時代から奈良・平安時代にかけての夥しい数の遺構と遺物が検出された。遺構は竪穴住居跡126棟、掘立柱建物跡2棟、井戸跡3基があり、時期の主体は7世紀後半を含む奈良・平安時代で、該当する時期の竪穴住居跡は120棟が検出された。古墳時代の竪穴住居跡は6棟と少ないが、同一地点を掘り下げた平成19・20年の第3・4次調査では、古墳時代前期（4世紀代）の竪穴住居跡が30棟程度検出され、川前2遺跡が古墳時代から古代にかけて、断続的ではあるが長期にわたって集落が営まれた様相が明らかになっている。

川前2遺跡は須川左岸の自然堤防上に位置しているが、この地域は最上川の合流点に近く、白川や立谷川も合流しており、増水時には冠水しやすい場所となっている。発掘調査でも、川前2遺跡は度重なる洪水に見舞われた様子が明らかになったが、それにもかかわらず同じ土地に居住が繰り返されていた背景には、河川の合流点が集中する水運に適した土地の利便性と、冠水により土地が肥えていたことがあったものと推察される。

古代の集落は7世紀後半～9世紀前半にかけて営まれていたが、8世紀中葉～後半に主体がある。その中で、住居跡内から関東系土師器や海獣葡萄鏡が出土したことが特記される。前者は7世紀後半～8世紀中葉にかけての非ロクロ成形の土師器で、関東地方からの移民との関わりを窺わせている。また後者はS T 181住居跡から出土したもので、住居内から出土した土器の年代は8世紀第2四半期頃のものである。祭祀具として本遺跡に持ち込まれたものと想定され、日本海沿岸における北限の出土例となるものである。

第23図には、山形盆地内の川前2遺跡に関連する遺跡をプロットした。関東系土師器は、山形市内の上敷免遺跡、山形城三の丸跡、北向遺跡、双葉町遺跡の4遺跡で確認されているが、川前2遺跡の対岸の上敷免遺跡では、

S T 3 竪穴住居跡から8世紀前半の関東系土師器の白付堯（山形県埋蔵文化財センター2007：第81図20）が出土しており、本遺跡との関連が窺われる。本遺跡の北西方5.5kmには、8世紀後半～9世紀前半を主体とし、古代村山郡「長岡郷」と推定される高瀬山遺跡群が位置している。最上川左岸の河成段丘上に位置しており、本遺跡とは須川と最上川を通じて相互の交流が行われていたと推定され、平野山遺跡群とも同様の関係にあったと考えられる。川前2遺跡は山形盆地のほぼ中央に位置し、盆地を貫流した各河川の合流点が集中する地理的特性から、河川を利用した交通や物流の要衝の役割を担った遺跡であったことが指摘され、古墳時代についても、同様の性格が考えられる。

### 2 検出遺構について

川前2遺跡では、竪穴住居跡126棟が検出されたが、掘立柱建物跡が2棟、井戸跡が3基と少なく、遺構の中では竪穴住居跡の数量が突出している。竪穴住居跡は細長い眼鏡状を呈する調査区のほぼ全域にくまなく分布するが、微高地となる右眼レンズ部分（南側）と左眼レンズ部分（北側）に多く認められ、特に後者の区域において住居跡同士の重複が顕著になっている。

川前2遺跡の集落の年代は、出土した土器から以下の8期に区分することができる。

- ① 4世紀、② 7世紀後半、③ 7世紀末～8世紀初頭、
- ④ 8世紀前葉、⑤ 8世紀前半、⑥ 8世紀中葉、
- ⑦ 8世紀後半、⑧ 9世紀代

#### A 竪穴住居跡について

竪穴住居跡の棟数で見ると、①が5棟、②が5棟、③が2棟、④が0棟、⑤が6棟、⑥が12棟、⑦が28棟、⑧が18棟で、⑥と⑦の時期が主体となる。その他に8世紀代とした住居跡は3棟、時期が特定できなかった住居跡は25棟を数える。④の8世紀前葉は該当する住居跡を抽出することができなかったが、該期の土器は遺跡から僅かに出土している。8世紀前葉は近接する達磨寺遺跡

(山形県埋蔵文化財センター2004c)や対岸の上敷免遺跡(山形県埋蔵文化財センター2007)でも、明確な住居跡を指摘することが困難であり、この地域一帯で希薄になっていた時期に相当した可能性も否めない。

古代の年代毎の集落構成の変遷をみると、②の7世紀後半では、調査区の北側の微高地に住居跡が構築され、古代の集落形成が始まっている。しかしその後の③・④の7世紀末～8世紀前葉にかけて集落の様相は判然とせず、再び活性化するのが⑤の8世紀前半～⑧の9世紀代にかけた時期で、北側と南側の微高地に住居跡が構築されるようになり、調査区の全面にわたって集落が営まれていた様相を窺うことができる(第24～26図)。

本遺跡の堅穴住居跡は、住居跡同士の重複する例が数多く存するが、掘立柱建物跡や溝跡、河川跡との重複関係を有する例も認められる。一般的には掘立柱建物跡や溝跡、河川跡が堅穴住居跡を切っており、堅穴住居跡の方が古い傾向が看取される。

川前2遺跡の古代の堅穴住居跡は、一辺が4m程度の小規模な住居跡が多く、貼床を有し、柱穴や壁溝が明確でない点に特徴がある。4本の柱穴が明確な住居跡は、S T 82住居跡(8世紀後半)、S T 17住居跡(8世紀中葉)、S T 64住居跡(8世紀後半)、S T 65住居跡(8世紀後半)、S T 61住居跡(8世紀中葉)、S T 549住居跡(7世紀後半)、S T 574住居跡(7世紀末～8世紀初頭)、S T 615住居跡(7世紀後半)、S T 589住居跡(8世紀前半)、S T 620住居跡(9世紀代)、S T 583住居跡(7世紀後半)、S T 680住居跡(9世紀代)、S T 602住居跡(9世紀代)、S T 603住居跡(8世紀後半)の14棟に過ぎず、その内一辺が6m以上の住居跡は、S T 65住居跡、S T 61住居跡、S T 574住居跡、S T 615住居跡、S T 589住居跡、S T 603住居跡の6棟で、こうした比較的規模の大きな住居跡に柱穴が明瞭である。但し柱穴が明確な住居跡の年代は、7世紀後半～9世紀の長期にわたっており、時期的な特徴と指摘することは不可能である。なお一辺8m超の大型の住居跡は、本遺跡の調査区域の中では検出されていない。

本遺跡では、カマドを基本とした主軸方向の統一性を見出すことができない。主軸が南北方向(座標方向)を向いた住居跡は少なく、須川に直交または平行した方向(座標に対し斜め方向)の住居跡が多く、カマドの構築

方向にも統一性は認められない。また、カマドが複数構築されていた住居跡が11棟検出されている。

カマドを対面させた住居跡がS T 83住居跡(8世紀後半)、S T 612住居跡(8世紀中葉)、S T 586住居跡(8世紀中葉)、S T 582住居跡(9世紀代)の4棟、カマドを並列させた住居跡がS T 15住居跡(7世紀末～8世紀初頭)、S T 72住居跡(8世紀後半)、S T 614住居跡(9世紀代)、S T 615住居跡(7世紀後半)の4棟、カマドが90°の方向で構築された住居跡がS T 74住居跡(8世紀後半)、S T 592住居跡(9世紀代)の2棟、カマド3基で並列と対面を併せ持つ住居跡がS T 597住居跡(8世紀～9世紀前半)である。いずれも一方のカマドに袖部が認められないことから、併用されたのではなく、新たに付け替えられたと見られるが、S T 612住居跡は双方のカマドに袖部が検出されている。

本遺跡の住居跡のカマドは一般に煙道部が長い点が指摘される。長さが1m超の住居跡が多く、煙道部に天井が残存しトンネル状に検出された例も4棟(S T 550住居跡、S T 614住居跡、S T 592住居跡、S T 597住居跡)を数えた。S T 597住居跡以外は9世紀代の住居跡である。袖部の構築材として切石を用いた例は、S T 64住居跡(8世紀後半)、S T 591住居跡(8世紀後半)、S T 687住居跡(時期不明)、S T 603住居跡(8世紀後半)、S T 597住居跡(8世紀～9世紀前半)の5棟で、8世紀後半の特徴となっている。カマド内から須恵器環等が複数纏まって出土した住居跡は、S T 77住居跡(8世紀中葉)、S T 64住居跡(8世紀後半)、S T 550住居跡(9世紀代)、S T 620住居跡(9世紀代)を挙げることができる。煮炊きに関係しない器種が出土していることから、カマド廃絶時に祭祀が執り行われた可能性が考えられる。

堅穴住居跡の覆土の上位に、褐色粘質土ないしは褐色シルト質土の凹レンズ状の堆積が確認された住居跡が存している。この土層は冠水時の堆積土と考えられ、冠水時堅穴住居跡が埋まりきらず、やや窪んだ状態にあったと想定される。北側の第2次調査区に限られるが、S T 535住居跡(9世紀代)、S T 592住居跡(9世紀代)、S T 583住居跡(時期不明)、S T 684住居跡(8世紀前半)、S T 680住居跡(9世紀代)、S T 607住居跡(9世紀後半)、S T 603住居跡(8世紀後半)、S T 597住居跡(8

世紀～9世紀前半)の覆土に認められ、住居跡の帰属時期は、8世紀前半1棟、8世紀後半1棟、9世紀代が4棟となる。須川寄りに位置するS T 535住居跡とS T 680住居跡は9世紀代に該当し、その他の住居跡は調査区北側のX45-Y39区周辺に集中し、8世紀～9世紀前半の時期が考えられる。覆土上位の褐色の土層が同じ冠水に起因していたとすれば、9世紀以降の堆積物ということになるであろう。

## B 掘立柱建物跡について

川前2遺跡で検出された掘立柱建物跡は、S B 600掘立柱建物跡とS B 701掘立柱建物跡の2棟にすぎず、古代の竪穴住居跡が120棟検出されたのに対し、非常に少ないように思われる。2例とも竪穴住居跡が集中する調査区北側に、竪穴住居跡を切って構築されており、出入口施設と思われる構造を有している。

S B 600掘立柱建物跡(図版117)は梁行2間、桁行3間であるが、桁行の須川側(南東柱列)が3間となり、施設部分の柱心間隔は1m幅で構成されている。S B 701掘立柱建物跡(図版118)は、梁行(東西)2間、桁行(南北)3間と推測され、梁の北側は判然としなが、桁行の須川側が4間となり、施設部分の柱心間隔は0.6mと0.9m幅で構成される。主軸方向は、前者が須川の川筋に沿っているのに対し、後者は南北方向に沿って構築されている。

S B 701掘立柱建物跡は、全体が調査されておらず詳細は保留せざるをえないが、S B 600掘立柱建物跡は8世紀代の建物跡で、8世紀後半の竪穴住居跡(S T 607住居跡、S T 603住居跡)よりも新しく、須川側に入出口施設を有していたと想定される。出入口施設と思われる構造を持った掘立柱建物跡は、寒河江市高瀬山遺跡でも5棟検出されている。第27図がその集成図となるが、いずれも東西柱列の南側(最上川側)が3間で構成され、柱列中央の柱心間隔が1～1.5mの幅で構成されている。高瀬山遺跡報告書の刊行時点(山形県埋蔵文化財センター2005b)では、類例を見出すことができなかったが、川前2遺跡の事例が新たに加わったことで、8世紀後半～9世紀代にかけての山形盆地に固有の構造を持った施設であった可能性が指摘される。

## 3 出土遺物について

本遺跡から出土した遺物は、土師器や須恵器などの主として古墳時代から奈良・平安時代にかけての土器である。土器の他には、土製品、石製品、鉄製品などが認められた。

### A 出土遺物の特徴と分類

#### (1) 土師器(第28図～33図)

本遺跡では、土師器を「ロクロ使用の有無に関係なく、酸化焙で焼成された土器群」として定義した。非ロクロ成形では、「坏・碗・高台坏・壺・甕・鉢・埴・甌・瓶・仏器・ミニチュア土器」の10器種が認められる。ロクロ成形では、「蓋・坏・高台坏・双耳坏・甕・埴」の6器種が認められた。以下では非ロクロ成形をⅠ類、ロクロ成形をⅡ類と大別して説明する。

#### Ⅰ類(非ロクロ成形)

**坏** 黒色処理の有無でA・Bに類別する。

A類 内面に黒色処理を施すもの。

口縁部形態は、外反(a)、直線的もしくは内湾気味の外傾(b)、直立気味(c)に細分される。

- 1 丸底を呈し、体部に段を有する。口縁部形態には、(a)・(b)がある。調整は外面口縁部をヨコナデ、体部下端をハケメ、内面はヘラミガキが施される。
- 2 丸底風平底を呈し、外面中位に段また稜が形成されるもの。口縁部形態には(a)・(b)がある。調整は、外面の段または稜以上にヨコナデ、以下にヘラケズリが施される。
- 3 丸底風平底を呈し、外面の中位に稜が形成されるもの。口縁部形態は(c)がある。調整は、外面の段または稜以上をヨコナデ、以下にヘラケズリ、内面はヘラミガキが施される。
- 4 丸底風平底を呈し、内外面に段や稜などの屈曲をもたないもの。口縁部形態は(b)がある。調整は、外面口縁部を僅かにヨコナデ、体部下端をヘラケズリ、内面はヘラミガキを主体とする。
- 5 平底を呈し、内外面に段や稜などの屈曲をもたないもの。口縁部形態には(b)がある。調整は、外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施される。

B類 内面に黒色処理を施さないもの。

口縁部形態は、外反 (a)・直線的もしくは内弯気味の  
外傾 (b)・直立気味 (c) に細分される。

- 1 丸底を呈し、外面中位に明瞭な段をもつもの。口縁部形態は (a)・(b) がある。調整は段以上をヨコナデ、以下はヘラケズリが施される。
- 2 丸底を呈し、外面中位以上に稜を形成し稜以上の口縁部が短く、外傾または直立するもの (c)。外面調整は稜以上をヨコナデ、以下はヘラケズリが施される。
- 3 丸底風平底を呈し、段や稜などの屈曲をもたないもの。口縁部形態には (b) がある。調整は外面下方にヘラケズリ、さらに内外面共に口縁部にヨコナデが施される。
- 4 丸底風平底を呈し、段や稜などの屈曲をもたないもの。口縁部形態には (b) がある。調整は、外面口縁に僅かなヨコナデ、以下にヘラケズリが施される。内面は、ヘラミガキやヘラナデが施される。
- 5 平底を呈し、内外面に弱い稜をもつもの。内外面共に、稜以上にヨコナデが施されるもの。口縁部形態には (b) がある。
- 6 平底を呈し、段や稜などの屈曲をもたないもの。口縁部形態には (a) がある。調整は外面口縁にヨコナデ、それ以下にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施される。
- 7 平底を呈し、段や稜などの屈曲をもたないもの。口縁部形態には (b) がある。調整は外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施される。

**碗**は9点図化している。丸底風平底と平底を呈するものがあり、内弯気味に立ち上り、口縁部にいたる。調整は外面にヘラケズリやヘラナデ、内面は黒色処理が施される。底部に網代痕が残るものもある (130-1・2)。

**高坏**は、1点 (205-7) 出土している。坏部外面にヨコナデ、ヘラケズリ、内面にヘラミガキ、黒色処理が施される。脚部外面にヘラケズリ、ハケメ、内面にヘラナデが認められ、坏身外面に段を有する。脚部下端がやや屈曲して伸び、縦長の透かし孔が3箇所確認できる。

**壺** 破片資料が多く、頸部が短く直立するもの (180-8)、小型丸底で口縁が直立するもの (225-1)、複合口縁のもの (225-4)、折返し口縁のもの (192-4) 等がある。完形資料では、体部中位に最大径をもつ球割

で、口縁部は頸部から直立気味に立ち上り徐々に外反していくもの (228-9) と、同じく体部中位に最大径のある球割で、体部と頸部の境に僅かな段がめぐり、口縁が「く」の字状を呈する (231-2)。調整はハケメを主体とし、口縁部にヨコナデが施される。頸部に刻目をもつ凸帯を巡らすもの (192-5) もある。

**甕** 器形、寸法、調整で細分される。

球割タイプ

- A類 最大幅を体部中位にもつもの。頸部から口縁部にかけて外傾し、端部が丸くおさまる。調整は、外面口縁部にヨコナデ、体部にハケメ、内面はヨコナデ、ハケメが施されるもの。
- B類 頸部が直立気味にたちあがり、屈曲し、口縁にいたるもの。頸部 (屈曲部分) 内側に面をもつもの。
- C類 頸部外面に明瞭な段を持つもの。
- D類 底径100mm以上の平底を呈するもの。
- E類 寸胴に近い球割を呈するもの。
- F類 体部最大幅が150mm以下のもの。

長割タイプ

- A 外面調整をハケメ主体とするもの。
- A 1 体部最大幅が頸部にあるもの。頸部から底部にかけて、ほぼ直線的に窄まるもの。口縁は外傾し、端部に面をつくるもの。調整は、内外面共にハケメ、口縁部はヨコナデが施される。底部には木葉痕が確認できる。
- A 2 頸部外面に明瞭な段を有するもの。
- A 3 頸部から口縁がほぼ横に開くもの。
- A 4 頸部の屈曲が緩やかで、そのまま口縁にいたるもの。
- A 5 頸部から口縁にかけて、鋭く外反するもの。
- A 6 器高が150mm未満の小型品。
- B 外面調整にヘラケズリやヘラナデが施されるもの。
- B 1 体部中位に最大径をもつもの。頸部から口縁にかけて外反し、端部は丸くおさまるもの。外面口縁部はヨコナデ、体部は縦方向のヘラケズリのみで調整される。底径70mm未満のもの。
- B 1 a 口径を1とした時、器高が1.7以上のもの。
- B 1 b 口径を1とした時、器高が1.7未満のもの。
- B 2 頸部から口縁にかけて外反し、端部は丸くおさまる。外面口縁にヨコナデ、体部にハケメ、へ

ラケズリが施されるもの。

B3 底径が70mm以上のもの。調整は外面口縁にヨコナデ、体部に縦方向のヘラケズリが施され、底部に木葉痕が残るもの。

B4 底部の端部が外に張り出すもの。

B5 器高が200mm以下の小型品。

B6 台が付くもの。

**鉢** 破片資料が多い。177-5・6は、内面に黒色処理を施す資料である。192-6は台を持つ台付鉢である。197-1は口縁部から体部の資料である。やや丸みをもつ体部で中位に最大径を持ち、頸部に段をもつ。頸部から口縁部にかけて外反し、端部は丸くおさまる。調整は外面口縁部にヨコナデ、体部は縦方向のヘラナデ、内面口縁部にヨコナデ、体部にヘラナデが施される。207-3も口縁部から体部の資料である。口縁端部は内湾する。外面上位に稜を持ち、内面にはナデが施される。須恵器鉄鉢模倣か？。207-4も口縁部から体部の資料である。頸部を最大径とし、口縁は短く外傾して端部は丸くおさまる。調整は、外面口縁にヨコナデ、体部にヘラケズリ、口縁部の内面はヨコナデが施される。225-8は底部資料で、穿孔をもつ。調整は外面にナデ、内面にハケメが施される。231-4は底部資料で、残存状態から大型であることが推測される。内面は黒色処理の施された痕跡は確認できないが、黒色を呈する。233-4はほぼ完形資料で、底部に穿孔をもつ。調整は内外面共にハケメが施される。

**壺**は2点(156-2、173-8)図示した。共に口縁部から体部の資料で口径は420mm前後である。口縁は直線的に外傾する。体部は頸部からなだらかに底部にいたる。調整は内外面共にハケメである。

**甕**は3点(135-6、173-6、207-5)図示した。3点共、無底の資料である。135-6は体部下端から底部の資料で、内外面共にヘラナデが施される。173-6はほぼ完形資料である。底部からなだらかに立上り、口縁部もなだらかに外反する。調整は、外面口縁にヨコナデ、体部に縦方向のヘラケズリが施される。207-5は体部下端から底部の資料である。調整は外面体部にハケメ、縦方向のヘラケズリが施されている。

**仏器**は、ST684住居跡から出土した1点(217-5)のみである。器形は、内湾気味に立上り、頸部で若干窄

まり、S字状に口縁部が短く外反する。調整は、内外面共に単位の小さいナデが施されている。

**ミニチュア土器**は4点出土しているが、全体がわかるものは1点のみである。器形は、頸部で窄まり、口縁端部にかけて外傾するもの、内湾するものがある。

### Ⅱ類(口口成形)

**蓋**はSX507性格不明遺構から1点(190-7)出土している。外面天井部に回転ヘラケズリ、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。

**坏** 黒色処理の有無で、A(黒色処理を施すもの)、B(黒色処理を施さないもの)に大別する。器形で、体部が直線的に口縁部に至るもの(a)、口縁端部が外反するもの(b)、体部から口縁部にかけて内湾するもの(c)に細分される。

**高台坏** 黒色処理の有無で、A(黒色処理を施すもの)、B(黒色処理を施さないもの)に大別する。

器形で、体部が直線的に口縁部に至るもの(a)、口縁端部が外反するもの(b)、体部から口縁部にかけて内湾するもの(c)に細分される。

**双耳坏**は把手のみの資料1点(190-8)である。

**甕** 寸法、調整、器形で細分した。

**大型甕**(口径200mm以上)

A類 長胴を呈し、外面にタタキ、ヘラケズリが施されるもの。ケズリは体部上位から施されるもの。丸底(A1)と平底(A2)がある。

B類 長胴を呈し、外面にタタキ、ヘラケズリが施されるもの。ヘラケズリは体部中位から施されるもの。

C類 長胴を呈し、外面下方にタタキを施すもの。

須恵器蓋を模倣した壺全般。

D類 長胴を呈し、外面にヘラケズリが施されるもの。

D1 ヘラケズリが体部上位から施されるもの。

D2 ヘラケズリが体部中位から施されるもの。

E類 ロクロナデのみで成形されるもの。

F類 肩部に最大径をもつもの。調整は外面下方にヘラケズリが施される。

G類 頸部に段を持ち、口縁が短く、鋭く外反するもの。調整は頸部直下に縦方向のヘラケズリ、内面にヘラナデを施すもの。

### 小型甕 (口径200mm未満)

- A類 外面にヘラケズリを施し、丸底を呈するもの。
- B類 外面にヘラケズリを施し、平底を呈するもの。
- C類 ロクロナデのみで成形し、平底を呈するもの。
- C 1 口縁端部を上方向につまみだすもの
- C 2 口縁端部を内側につまみだすもの
- 埴** 器形、調整で分類した。
- A類 口縁部にかけて外傾し、端部が丸くおさまるもの。調整は内外面共にロクロナデ、外面下方にヘラケズリが施されるもの。
- B類 口縁部にかけて外傾し、端部が丸くおさまるもの。調整は内外面共にロクロナデ、さらに外面にヘラケズリ、内面にカキメ、ハケメが施される。
- C類 口縁部にかけて外傾し、端部が丸くおさまるもの。調整は内外面共にロクロナデのみ。
- D類 口縁部にかけて短く外傾し、端部が短く上方につまみだされるもの。調整は、外面にカキメ、ヘラケズリ、タタキ、内面にハケメが施される。
- E類 口縁部にかけて外傾し、端部が上方につまみだされるもの。調整は内外面共にカキメ、さらに外面下方にヘラケズリが施される。
- F類 口縁部にかけて外傾し、端部が上方につまみだされるもの。調整は内外面共にロクロナデのみ。
- G類 口縁部にかけて外傾し、端部に面をつくるもの。調整は内外面共にロクロナデ、さらに外面にタタキ、ヘラケズリが施される。また、体部中位に把手がつくもの。

**筒型土器**は1点(153-6)出土している。資料は口縁端部だけの破片である。内外面共に調整はハケメである。内面には、輪積痕が確認できる。

**底部穿孔土器**は、2点図示した。152-5は、土師器(I類)甕である。約35mmの穿孔で、円形というより五角形に近い。穿孔部分の状態から、焼成前に穿孔されたとみられる。底部内外面の状態から、甕として使用された可能性がある。覆土から正位で出土している。218-13は、土師器(II類)坏である。こちらも焼成前に穿孔されたものであろう。底部のほぼ中央に、約6mmの円形の穿孔が確認できる。住居の壁際、床面直上の位置で逆位で出土している。

### (2) 須恵器 (第34図・35図)

須恵器は、「蓋・坏・壺・高台坏・双耳坏・俊埴・壺・捏鉢・長頸瓶・横瓶・壺類・甕・仏器」の13器種が認められた。

**蓋** 口径は、160mm以上、150mm前後、140mm前後の3つに分類された。160mm以上のものは少なく、150mm前後、140mm前後のものが主体となる。器高は扁平なものが主体で、高さのあるものは数少ない。天井部分には比較的、回転ヘラケズリの施されるものが多い。受け部に、カエリがつくものが1点出土している(232-6)。つまみは、宝珠型、リング状がある。壺のものと思われる深さのある蓋も1点出土している(183-5)。

**坏**は、器形、寸法、底部の切離して細分した。

- A類 底部切離し後、底部の全面または外周に回転ヘラケズリが施されるもの。
- B類 底部の周縁部は低く外傾して立上り、口縁部との境に明らかな屈曲点を持ち小さな段となすもの。底部全面にヘラケズリが施されるもの。
- C類 箱形や逆台形を呈し、底径指数(底径÷口径×100)は70以上、器高指数(器高÷口径×100)は30以下のものである。底部切離しは回転ヘラ切りが主体である。
- D類 箱形や逆台形を呈し、底径指数は60前後～65前後、器高指数が30前後以下のもの。底部切離しは回転ヘラ切りが主体である。
- E類 丸底風平底を呈し、底径指数が60前後以上のもの。底部切離しは回転ヘラ切りだけのもの。
- F類 E類に較べ底径がやや小さくなる。底径指数は、50前後～60前後、器高指数は25前後～35前後のもの。底部切離しは、回転ヘラ切りと回転系切りが認められる。
- G類 やや塊状になり、底径指数が50前後以下、器高指数が25前後～35前後のものである。口縁端部を小さく外反させる。底部切離しは回転系切りが主体となり、回転ヘラ切りはわずかである。

**壺** 5点図化(129-5、148-12、155-5、162-11、176-18)した。

**高台坏**の寸法は、器高が40～50mm前後、口径が130～140mm前後を主体とし、蓋とのセット関係となる寸法を呈している。底部切離しは回転ヘラ切り、回転系切り両



方認められる。底部切離しの違いによる寸法の差はほとんど、みられない。

**双耳環**は6点出土しているが、全体が把握できる資料は1点(133-5)のみである。底部切離しは全て回転糸切りで、台を有する。体部は比較的なだらかに立上る。把手は口縁直下に位置し、やや上方に傾く。全面にヘラケズリが施され、薄く作られている。

**残塊** 器形は、稜部分からやや反し口縁部にいたる資料が多い。脚部は、端部が外に張り出すものと、脚部の外側端部のみで設置するものがある。

**壺** 破片資料が多く、完形資料はわずかである。頸部形態で分類した。長頸壺の体部資料では、中位と下位に回転ヘラケズリが認められる(136-10)。また、短頸壺の体部下端ではヘラケズリが施される(148-14)。

**捏鉢**は1点(129-6)のみの出土である。口縁から体部の破片資料で、体部の上部に鈎が確認できる。

**長頸瓶**は1点(137-10)のみ出土している。頸部から底部の資料で、体部と頸部の接合部にリング状の凸帯が認められる。

**横瓶**は、2点(177-2、203-9)出土している。共に、体部の中央部の閉塞部分の破片資料である。

**甕**は破片資料のみで、完形資料はない。部位、寸法、調整で細分する。部位は、口縁部、体部の資料が多い。口縁部では、口径により分類する。口径400mm以上のものを**大型甕**とした。164-5は口縁部から頸部付近までの資料である。頸部には、1段の襷描き波状文が施されている。また、頸部の付け根に近い体部に、直径60-70mmの円筒状の須恵器が附着していた痕跡が3箇所確認できた。179-9は口縁部から頸部にかけての資料である。頸部から外反しながら口縁に至り、端部は外につまみだされる。

口径400mm未満の甕について、部位、器形で分類した。

**A類** 体部がドーナツ状に膨らみ、口縁が直立気味に立上るもの。

**B類** 体部の肩位に最大径を持ち、直立気味に立上るもの。底部は丸底風平底を呈する。

**C類** 口縁部の破片資料

**D類** 体部の破片資料

調整では「外面平行タタキ、内面同心円状アテ痕」、「外面平行タタキ→カキメ、内面同心円状アテ痕」、「外面平

行タタキ、内面ナデ」、「外面格子状タタキ、内面同心円状アテ痕」、「外面平行タタキ、内面平行アテ痕」がある。

**E類** 底部資料

**仏器** 口縁部資料が1点(219-11)出土している。

### (3) 墨書・刻書土器と硯(第36図)

墨書土器は、30点図示した。須恵器蓋、坏、高台坏に確認できた。土師器の資料は確認できなかった。墨書された部位は、蓋は天井部、坏は体部と底部、高台坏は底部である。全て外面に墨書されている。坏の体部に墨書された資料では正位と逆位のものがある。確認できた文字は、「若」「九」「田」「百万」「文」「足」の6種類である。「足」に関しては、旧字体で墨書されている。特に「若」の出土が目立つ。認識できない文字や、墨痕のみの資料もいくつか存在する。文字は、ほぼ20mm四方に収まる大きさである。

刻書土器は、7点図示した。須恵器蓋、坏に刻書が確認された。認識できた文字は「人」「百」の2つである。蓋は天井部に、坏は持ちヘラケズリされた底部に刻書されている。他に、底部に「×」などの窯記号と思われる刻書資料も数点ある。

硯は、遺構外で1点(193-9)出土している。石製の長方硯を呈する。色調は10R4/2灰赤色を呈する。

### (4) 土製品(図版193・234)

土製品は、土錘、土玉、紡錘車、羽口、支脚が出土している。土錘はS T186住居跡、S T573住居跡からそれぞれ1点、S T591住居跡から7点、遺構外で4点、計13点出土している。寸法は長さ48-58.5mm、幅17-29mm、厚さ15-19.5mmを測る。

土玉はS T552住居跡、S T589住居跡、S T602住居跡、S T651住居跡からそれぞれ1点、S T583住居跡から2点、S T615住居跡から4点、計10点出土している。直径は直径30-40mmを測る。紡錘車はS T610住居跡から1点(234-19)出土している。復元径で42mm、高さ24mmを測る。

羽口はS T85住居跡、S T622住居跡から1点ずつ、遺構外から1点、計3点出土している。端部に軸葉の付着が確認できる。支脚は、1点(234-21)のみの出土である。直径約58mmの円柱状を呈する。

### (5) 石製品(図版193・234-237)

石製品は、勾玉、なご石、砥石、支脚が出土している。

大きさの異なる勾玉がS T 632住居跡から2点(234-22・23)出土している。共に完形品である。234-22は長さ48.5mm、幅28mm、厚さ17mm、234-23は長さ31mm、幅19mm、厚さ7.5mmを測る。石材は蛇紋岩であろう。住居年代は8世紀後半であるが、下に存在している古墳時代と想定されるS T 633住居跡の資料の可能性がある。

なご石はS T 574住居跡から一括で18点出土している。なご石とは、現在で云うお手玉を指す。お手玉は飛鳥時代に日本に伝わり、地方にもたされるのは奈良時代と考えられる。S T 574住居跡出土土器は7世紀末～8世紀初頭頃の年代が求められ、上記のことと整合がつく。形状は表面がつるつるした扁平な川原石で、長辺が60mm前後、短辺が30mm前後、厚さ15mm前後を測り、意識的に石を選んでいることが推測できる。

砥石は7点出土している。寸法で分類され、使用用途も異なることが推測できる。

支脚はS T 614住居跡から1点(237-7)出土している。カマド内に据えられる支脚であろう。形状は、丸味をおびた三角柱を呈している。加工の施された痕跡はなく、川原石と考えられる。

#### (6) 金属製品 (図版193・237・238)

金属製品は、青銅鏡、鉄鏝、鎌、鉄斧等の製品や、種別の判別できないもの、鉄釘等が多数出土している。海獣葡萄鏡はS T 181住居跡出土である。約1/2依存している。踏返し鑄造を多数回経た後の鏡と見られ、文様の崩れが甚だしい。鈕は欠損しており不明であるが、内区、界隈、外区、外縁が確認できる。内区には明瞭ではないが、獣と葡萄唐草、外区には小鳥と葡萄唐草の存在が確認できる。復元径62mmの小型海獣葡萄鏡である。厚さは、内区で3mm、外区で2.5mmを測る。重さは20.9gで、完形とすれば、約42gと推測される。

鉄鏝資料は、完全な状態で出土したものはない。長頭鏝を主体とする。長頭鏝のうち、比較的残りの良い資料としては、193-12・13がある。共に片刃のものである。両刃と推測できる資料はない。三角形鏝は1点(238-6)出土している。無頭鏝と推測できる資料が1点(193-14)出土している。鏝の先端が破損しているが、全体の形状から判断できた。他に、破片資料のため、種別が何なのか判別できないものが多い。種別が判断できたのは、ごく僅かである。鎌は2点出土(193-10、237-8)

している。

## B 出土遺物の年代について

川前2遺跡の年代は、大きく古墳時代、奈良・平安時代があたりられる。遺物年代は、主に須恵器坏を基に検討した。当遺跡が位置する山形盆地での須恵器生産は、長岡山州崎窯跡(寒河江市)の奈良時代の8世紀第2四半期頃とされ、続いて平野山窯跡(寒河江市)を中心として本格的に操業されていくことがこれまでの発掘成果で分かっている。8世紀第2四半期以前の資料については、県外の須恵器資料、及び、山形県内の土師器編年を用いて、年代を求めた。

須恵器坏の年代は、以下のように想定された。

A (8世紀第2四半期)、B (7世紀後半)、  
C・D・E (8世紀中葉)、F (8世紀末～9世紀初頭)、  
G (9世紀前半)

Bは、平野山窯跡操業以前の須恵器である。類似資料に、善光寺窯跡(福島県相馬市)の2B窯跡のものがあり、それを年代的根拠とした。もう1点、平野山窯跡操業以前の須恵器がある。それは、受け部にカエリを持つ蓋で、県内では、置賜地方の高安窯跡(高島町)で生産されていたことが分かっている。ただ、本資料と比較すると、高安窯跡の資料より高く、より善光寺窯跡の資料に類似していると考えられる。

## C 土器組成について (第37～46図)

住居伴資料の土器組成について検討してみる。ただし、組成的にまとまる住居出土例が少ないため、代表的なものに限って提示する。その際、明らかに年代の異なる資料は除いた。

土器年代は、上で提示したように、古墳時代前期の4世紀、古墳時代終末期の7世紀後半から、平安時代の9世紀前半が想定される。細かくは、①4世紀、②7世紀後半、③7世紀末～8世紀初頭、④8世紀前葉、⑤8世紀前半、⑥8世紀中葉、⑦8世紀後半、⑧9世紀代と細分できた。ここでは、7世紀後半から8世紀代を中心に土器組成を検討する。

4世紀 資料は、全体の1割にも満たない量である。

該当する遺構はS T 8住居跡、S T 112住居跡、S T 595住居跡、S T 622住居跡、S T 628住居跡である。全

て土師器（Ⅰ類）のみで、須恵器は皆無である。S T 8住居跡出土土器は球胴甕A、S T 112住居跡出土土器は球胴甕D、S T 595住居跡出土土器は小型丸底を呈すると思われる壺、球胴甕A、長胴甕B 6、S T 622住居跡出土土器は複合口縁を呈する壺、球胴甕A、S T 628住居跡出土土器は、体部中位に最大径を持つ球形で口縁部は頸部から直立気味に立上り、徐々に外反していく壺、球胴甕B、球胴甕Fがある。基本的に壺は、球胴を呈する。

**7世紀後半** 代表的な遺構はS T 549住居跡、S T 686住居跡、S T 583住居跡、S T 615住居跡、S T 66住居跡がある。遺物は主に土師器（Ⅰ類）であるが、須恵器坏（B類）が1点共伴している。

S T 549住居跡出土土器は坏A 1 a・1 b、球胴甕F、長胴甕A 4・B 5がある。坏A 1 a・bに関しては、7世紀前半まで遡る可能性がある。また、底部にハケメを施す点において、東北部とのつながりが考えられる。S T 686住居跡出土土器は坏B 2 c、長胴甕、鉢、壺である。S T 615住居跡出土土器は坏A 2 b・A 3 c、球胴甕C、長胴甕A 4、長胴甕B 1 aがある。S T 66住居跡出土土器は土師器坏A 2 a・A 5 bと須恵器坏Bである。須恵器坏Bの類似資料として、善光寺窯跡2 B窯がある。S T 583住居跡出土土器は坏A 3 c・B 5 b、長胴甕A 4、長胴甕B 1 a・B 2・B 5がある。

**7世紀末～8世紀初頭** 代表的な遺構は、S T 574住居跡、S T 15住居跡で、遺物は主に土師器（Ⅰ類）である。

S T 574住居跡出土土器は高坏、鉢、長胴甕A 1・A 4、長胴甕B 1・B 2・B 5、甗がある。S T 15住居跡出土土器は土師器坏B 1 a・B 7 b、長胴甕A 1・A 5、長胴甕B 5、須恵器がある。ただし、須恵器は破片資料のため、年代を求める資料として取り扱っていない。

擾乱を受けたS D 675溝跡から、当該期と思われる、受け部にカエリを持つ須恵器蓋が1点出土している。山形盆地内での出土は当遺跡の1点と、山形城三の丸跡出土（S P 1059）の1点、計2点のみである。

**8世紀前半** 代表的な遺構はS T 18住居跡がある。ここで取り上げる資料は、土師器（Ⅰ類）坏B 3 bの1点である。S T 18住居跡の主体時期は8世紀中葉と考えられるため、本資料は流れ込みの資料であろう。S T 18住居跡以外、8世紀前半と断定できる資料は少ない。住居内

出土土師器（Ⅰ類）坏B 1 a（163-4）、球胴甕F（163-7）が同時期の資料と考えられる。

**8世紀前半** 代表的な遺構は、S T 1住居跡、S T 121住居跡、S T 181住居跡、S T 684住居跡がある。土師器（Ⅰ類）と須恵器がある。

S T 1住居跡出土土器は、球胴甕C、長胴甕A 1、長胴甕B 3がある。S T 121住居跡出土土器は坏A 2 a、B 6 a、甗がある。S T 181住居跡出土土器は球胴甕F、須恵器坏Aがある。S T 684住居跡出土土器には仏器と思われるものがある。

**8世紀中葉** 8世紀第2四半期から平野山窯跡や上山業山窯跡を中心として、須恵器生産が開始される。また、ロクロ成形の土師器（Ⅱ類）使用が始まる。代表的な遺構は、S T 6住居跡、S T 186住居跡、S T 130住居跡がある。

S T 6住居跡出土土器には土師器（Ⅰ類・Ⅱ類）が存在する。Ⅰ類は坏B 1 b、甗、長胴甕A 1・A 6、Ⅱ類は大型甕Cがある。須恵器は扁平したつまみをもつ蓋、坏Eがある。S T 186住居跡出土土器は、土師器（Ⅰ類）と須恵器である。土師器は坏A 4 b・坏B 4 b、球胴甕D、長胴甕A・A 2・A 3・A 5である。須恵器は、扁平で口径の大きな蓋、坏A・C・D、高台坏、波状文が施された甕C、壺である。S T 130住居跡出土土器は土師器（Ⅰ類・Ⅱ類）がある。Ⅰ類は坏A 2 b、Ⅱ類は小型甕C 1、須恵器は坏Eである。

**8世紀後半** 土師器（Ⅰ類・Ⅱ類）と須恵器が伴う。代表的な遺構はS T 603住居跡である。Ⅰ類は長胴甕A 4、Ⅱ類は大型甕A 1・B・D 2、小型甕B・C 1がある。須恵器は、天井部分に回転ヘラズリを施す蓋、坏D、高台坏がある。

**9世紀代** 9世紀第2四半期以降、須恵器坏の切離し技法の主体が、回転ヘラ切りから回転系切りへと変わっていく。代表的な遺構は、S T 129住居跡、S T 680住居跡である。

S T 129住居跡出土土器には土師器（Ⅰ類・Ⅱ類）と須恵器がある。Ⅰ類はハケメを施す体部下端の甕、Ⅱ類は大型甕、小型甕C類がある。須恵器は坏F、回転系切りの高台坏、双耳坏、壺がある。S T 680住居跡出土土器内で、一部明らかな流れ込みの資料があり、ここでは省く。土器内容は、土師器（Ⅱ類）と須恵器である。土

師器は、坏B a・B b、高台坏A a・A c、B a、小型甕C 2がある。須恵器は、蓋、坏G、高台坏、仏器がある。

土師器（I類）坏類に注目して変遷を追ってみる。

7世紀後半—A 1 a・A 1 b・A 2 a・A 3 c・A 5 b  
B 2 c・(B 5 b)

7世紀末—8世紀初頭—A 3 c・B 1 a・(B 7 b)

8世紀前半—B 3 b

8世紀前半—A 2 b・B 6 a

8世紀中葉—A 4 b・B 1 b・B 4 b

## D 川前2遺跡出土関東系土師器について

川前2遺跡で出土する土師器には、山形盆地の在地土器の他に、関東地方の特徴を持つ所謂関東系土師器が存在する。

S T 18住居跡、S T 186住居跡、S T 615住居跡、S T 583住居跡の4棟に、武蔵型と想定される関東系土師器が存在することがわかった。7世紀後半から8世紀中葉頃にかけての非ロコウ成形の土師器坏4点、甕3点計7点である（佐藤敏幸氏 [東松島市教育委員会]、高橋誠明氏 [大崎市教育委員会]、村田晃一氏 [東北歴史博物館] 3名にご教受いただいた）。

東北地方における関東系土師器とは、7世紀から8世紀中頃まで認められるもので、在地の「栗開式土器」とは器形・製作技法が明らかに異なっている。食膳具の場合、在地土器のほとんどが内側をヘラミガキ後、黒色処理を行うのに対し、関東系土師器は、ナデのみの調整で、赤～黄褐色を呈している。甕においても、在地土器の外面調整はハケメが主体となるのに対し、関東系土師器は、縦方向のヘラケズリを主体とする特徴がある。

以上の事を踏まえて、当遺跡の土師器を観察すると、食膳具の坏は、I類B 3 bとB 4 bで、4点が該当する。B 3 bは双葉町遺跡でも類似する資料が存在する（S T 1022）。県外においては、三貫地遺跡（福島県新地町）や、御駒堂遺跡（宮城県栗原市）、名生館官衙遺跡（宮城県大崎市）などで出土している。B 4 bに関しては、類似資料の存在が不明である。器形では、山の神1号墳（高島町）出土資料と類似する。ただし、山の神1号墳資料は全て、内面黒色処理が施されている。B 2 cに関しては、器形、調整方法では類似するものの、関東系土師器とは断定できない。今後、関東地方と東北部に同じよ

うな類例がないか、確認作業が必要である。

甕はI類B 1 a・B 2が該当する。どちらの甕も御駒堂遺跡で確認できる資料である。他にも器形と調整技法において定義的には合致する資料がいくつか存在すると考えられている。

当遺跡では、在地土器を主体に、関東系土師器と、在地土器、関東系土師器の範疇に属さない土器群の三者が存在している。これらの土器群は、関東地方からの移民が移り住み、彼らが製作する土師器様相が在地土器に吸収される過程のものと考えられる。

## E 山形盆地内出土関東系土師器について

山形盆地内で、当遺跡以外で関東系土師器が確認された遺跡は、上敷免遺跡、山形城三の丸跡、北向遺跡、双葉町遺跡と資料はごく僅かである。

上敷免遺跡出土資料で台付甕（S T 3）がある。台から体部下端にかけての資料で「武蔵型」とされている。県内では唯一の資料である。山形城三の丸跡出土資料は関東系土師器の可能性がある坏が2点（S P 1061、S D 7032）ある。北向遺跡出土資料では、関東系土師器と明記されていないが、坏が1点ある（S T 90）。双葉町遺跡出土資料でも、関東系土師器と明記されていないが、坏がある。

双葉町遺跡出土資料と比較し、以下の点が注目される。  
①土師器（I類）坏は、当遺跡より、黒色処理を施さないBの出土割合が高い。

②当遺跡で確認できる縦方向のヘラケズリを伴う甕は長胴のみだが、双葉町遺跡では、長胴・球胴両方存在する。

③については、双葉町遺跡例が御駒堂遺跡、名生館官衙遺跡などの陸奥側の土器様相に類似すると言え、較べて本遺跡例は陸奥的な様相というより、在地の様相が強いイメージを受ける。

## F 海獣葡萄鏡について

本調査により、山形県内で初めて、海獣葡萄鏡が出土した。日本海沿岸で最北の出土遺跡となった。それ以降、本県より北での海獣葡萄鏡の出土を確認していない。それまでは、子安遺跡（新潟県上越市）での発見が北限とされてきたが、それを北進する結果となった。東北地方では2例目で、市川橋遺跡（宮城県多賀城市）でも1面

出土 (No14トレンチ) し、全国では30面近く見つかった。

県内では、当遺跡から南東方向約4kmに位置する弥生～古墳時代にかけての集落跡である馬洗場B遺跡 (山形市) から、古墳時代初頭の内行花文鏡 (破鏡) が見つかった。また、お花山古墳 (山形市) 1号墳から変形振文鏡、22号墳から獣形鏡、下小松古墳群 (川西町) 薬師沢支群第143号墳から歯面文鏡が見つかった。古代においては、5点目の鏡資料である。

本調査で出土した海獣葡萄鏡は、S T 181住居跡から出土した。床面直上からの出土である。出土土器の年代は8世紀第2四半期と想定される。

鏡の形状は、約1/2の破片資料である。仿製鏡と考えられる。残存状態から円鏡の直径62mmの小型海獣葡萄鏡と推測できた。海獣葡萄鏡は、径が30cm以上の大型、20cm以上30cm未満の中型、そして、10cm以下の小型と大きさで分類されている。その小型品の中でも、径が60mm前後のサイズが最も多く発見されている。状態は全体的に腐食し、本来の鏡の表面は失われているが、内区、外区に配置された唐草文や獣などの存在は確認できる。

分析の結果、銅を主成分とし、鉛とアンチモンを比較的多く含むことがわかった。アンチモンは、わが国では7世紀後半から8世紀中頃という極めて限られた時期に認められる。他に背鏡の赤色部分から水銀が検出され、水銀朱が付着していると考えられた。

他の出土例でも、全体的に腐食または、鏡面の調整が不十分なものが多い。小型の海獣葡萄鏡は、水刃等で廃棄されることにより、祭具としての機能を全うしたと考えられている。ただ、本資料は河川出土ではなく、堅穴住居出土資料である。類例は少ないが、寺家遺跡 (石川県羽咋市) で、8世紀第1四半期～8世紀第3四半期の堅穴住居跡 (S B T 24床面、S B T 16覆土、S B 21覆土) から小型海獣葡萄鏡が出土している。S B T 16においては、廃絶時に鏡を埋土に埋め込む儀式の可能性が指摘されているが、本資料においては、出土地点がちょうど、視乱部分にあたり、正確な堆積状況が見出せない。

## G まとめ

発掘調査により、120棟以上にのぼる住居跡が見つかり、さらに遺物が整理箱にして約280箱出土した。

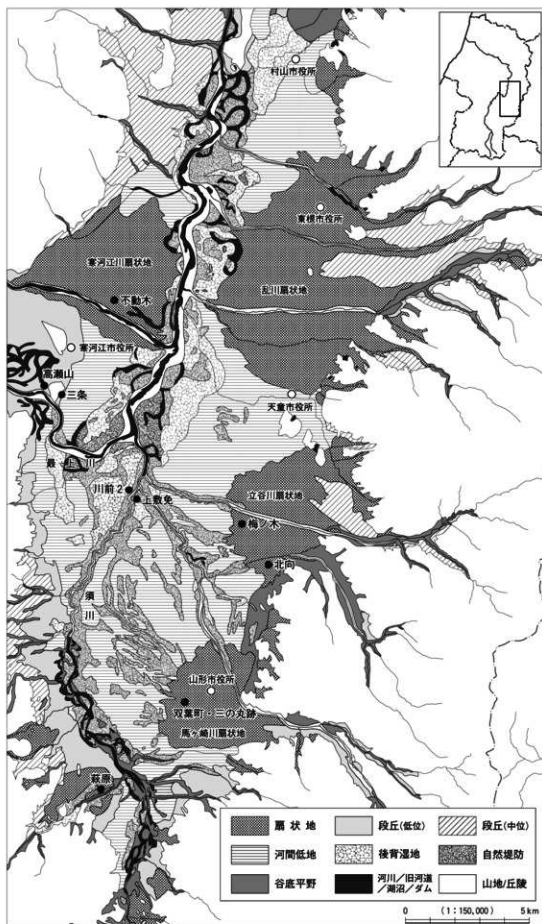
遺物のほとんどが土器で、古墳時代から奈良・平安時代にかけた資料であった。具体的には、古墳時代前期 (4世紀)、7世紀後半から9世紀前半である。その中でも、8世紀中葉から8世紀後半にかけての資料が多く、逆に8世紀前葉の資料が希薄である。

土器内容は、山形盆地で使用される在地土器の他に、外来の土器も含まれていた。関東地方の特徴をもつ関東系土器や、東北部の特徴をもつ土器も使用されていた。関東系土器は7世紀後半から、平野山窯跡が本格的に操業を開始する8世紀中葉までの間に確認できた。それ以降、関東系の特徴は在地土器に吸収され、新たな土器群として、須恵器と土器 (I類・II類) と同様、使用されていくことがわかった。

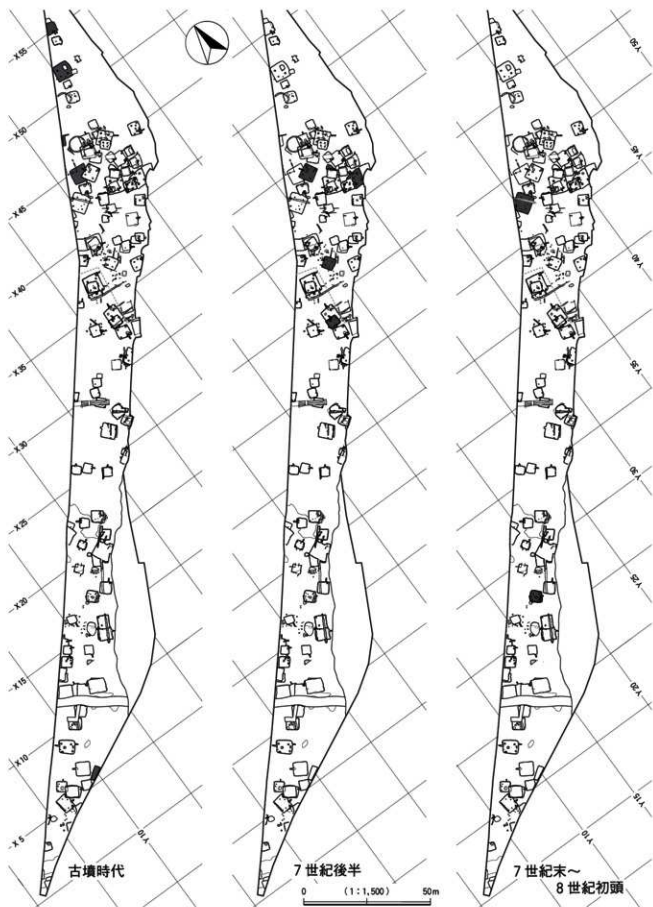
土器様相・年代から、川前2遺跡は、山形盆地が律令国家に組み込まれる頃の集落跡であったことが推測される。さらに当遺跡周辺に、関東系土器出土の上敷免遺跡や、内行花文鏡出土の馬洗場B遺跡など、出土遺物相の類似した遺跡が集中していることから中核的な存在であったことが推測される。また、双葉町遺跡と同様、関東地方からの移民集落としての性格を帯び、また、墨書土器の存在等から勘案すれば、末端官衙としての役割も果たしていたとも考えられる。

## 引用・参考文献

- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその福年」『歴史』第14輯、1-14頁 東北史学会
- 宮城県教育委員会 1982 「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』(宮城県文化財調査報告書第83集)
- 山形県教育委員会 1985 「お花山古墳群発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第85集)
- 福島県教育委員会・福島県文化センター 1987 「三貫地遺跡(原口地区)」『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅲ』(福島県文化財調査報告書第179集)
- 山形県教育委員会 1987 a 「三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書(2)」(山形県埋蔵文化財調査報告書第107集)
- 山形県教育委員会 1987 b 「a 山の神1号墳」『分布調査報告書(14)』(山形県埋蔵文化財調査報告書第110集)
- 石川県立埋蔵文化財センター 1988 「寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ(能登海浜遺跡関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ)」
- 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター 1988 「善光寺遺跡 国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅳ」(福島県文化財調査報告書第192集)
- 山形県埋蔵文化財センター 1994 「今塚遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第7集)
- 山形県川西町 1995 「下小松古墳群(1)」(川西町埋蔵文化財調査報告書第14集)
- 山形県埋蔵文化財センター 1998 「平野山古墳群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集)
- 阿部明彦・水戸弘美 1999 「山形県の古代土器福年」『第25回古代城郭官衙遺跡検討会資料』 古代城郭官衙遺跡検討会
- 杉山洋 1999 「日本の美術 第393号 古代の鏡」 至文堂
- 多賀城市教育委員会 1999 「市川橋遺跡-第23・24次調査報告書-」(多賀城市文化財調査報告書第55集)
- 村田晃一 2000 「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺」『宮城考古学』第2号 45-80頁 宮城県考古学会
- 小林圭一 2001 「蔵上川流域における縄文時代後・晩期の遺跡分布」『山形考古』第7巻第1号 21-81頁 山形考古学会
- 東北芸術工科大学考古学研究室 2003 「高安塚群B地区第1次発掘調査報告書」(東北芸術工科大学考古学研究室報告第2冊)
- 山形県教育委員会 2003 「分布調査報告書(29)」(山形県埋蔵文化財調査報告書第203集)
- 山形県埋蔵文化財センター 2004 a 「服部遺跡・藤治屋敷遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第119集)
- 山形県埋蔵文化財センター 2004 b 「馬洗場B遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第123集)
- 山形県埋蔵文化財センター 2004 c 「辻野寺遺跡第3次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第127集)
- 山形県埋蔵文化財センター 2004 d 「高橋南遺跡・高瀬江1遺跡・高瀬江2遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第132集)
- 高橋誠明 2005 「名生館官衙遺跡」『研究報告2 東北古代土器集成-古墳後期-奈良・集落編-〈宮城〉』34-42頁 東北古代土器研究会
- 山形県埋蔵文化財センター 2005 a 「向河原遺跡第5・6次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第141集)
- 山形県埋蔵文化財センター 2005 b 「高瀬山遺跡(HO地区)発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第145集)
- 山形市・山形市教育委員会 2005 「双葉町遺跡(山形城三の丸跡)発掘調査報告書 縄文時代-中世編」(山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第24集)
- 山形県埋蔵文化財センター 2006 「北向遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第146集)
- 佐藤敏幸 2007 「宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』164-209頁 辻秀人編
- 村田晃一 2007 「宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』119-163頁 辻秀人編
- 山形県埋蔵文化財センター 2007 「上敷遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第159集)
- 植松暁彦 2008 「出羽国創建(7-8世紀)の山形県の土師器の様相」『出羽国ができるころ-出羽建國期における南出羽の考古学-』108-114頁 山形県立きたむ風土記の丘考古資料館
- 村田晃一 2009 「律令国家形成期の陸奥北辺経営と取東 - 在土土師器・関東系土師器・四郡集落の検討から -」『古代社会と地域間交流 - 土師器からみた関東と東北の様相 -』141-162頁 国士館大学考古学
- 山形県埋蔵文化財センター 2010 「山形城三の丸跡第4・6次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第190集)

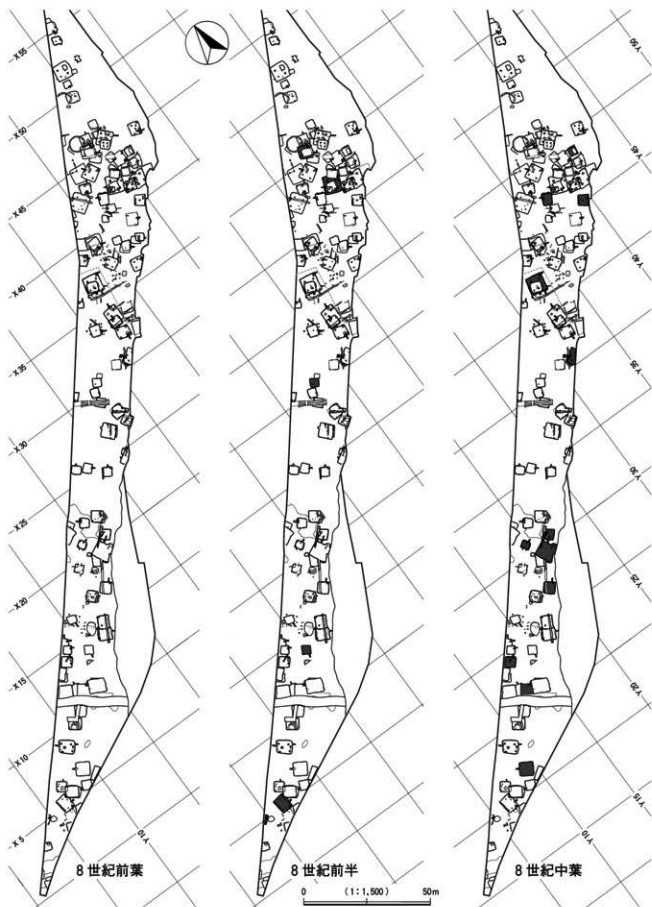


第23図 山形盆地の地形分類と川前2 遺跡関連遺跡跡

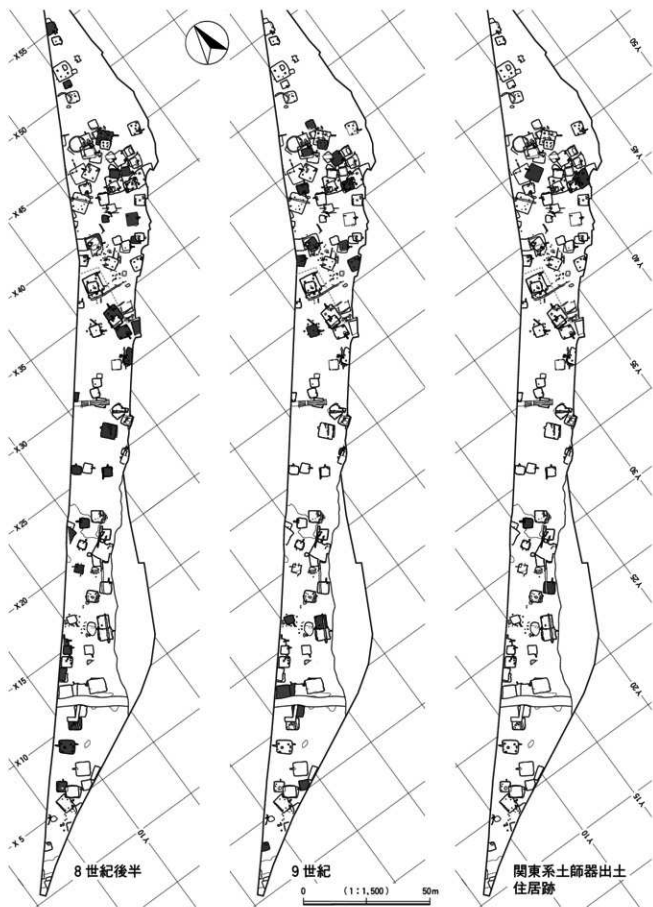


第24図 川前2遺跡時期別遺構分布図(1)

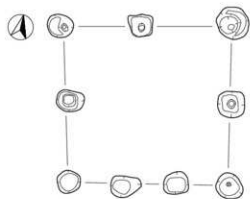




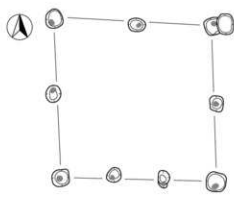
第25図 川前2遺跡時期別遺構分布図(2)



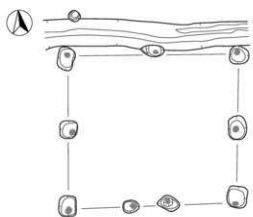
第26図 川前2遺跡時期別遺構分布図(3)



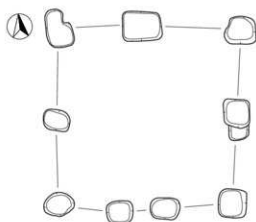
1 (4区2号掘立柱建物跡)



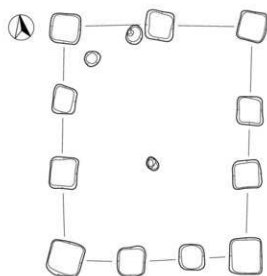
2 (5区4号掘立柱建物跡)



3 (12区7号掘立柱建物跡)

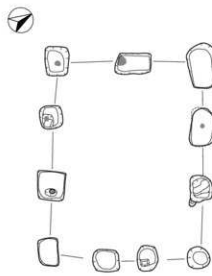


4 (13区4号掘立柱建物跡)



5 (13区2号掘立柱建物跡)

1～5：高瀬山遺跡B地区

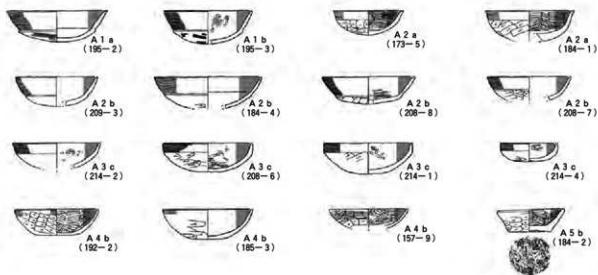


6 川前2遺跡S B600

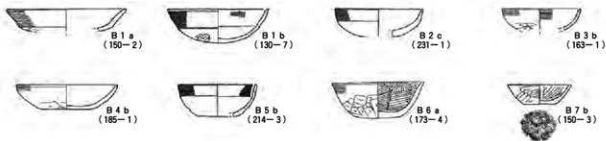
0 (1:100) 3m

第27図 出入口と推定される施設を有する掘立柱建物跡

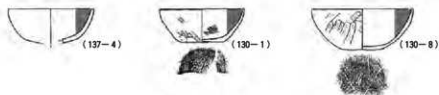
土師器 (I類・非ロクロ) 坏-黒色地埋



土師器 (I類・非ロクロ) 坏



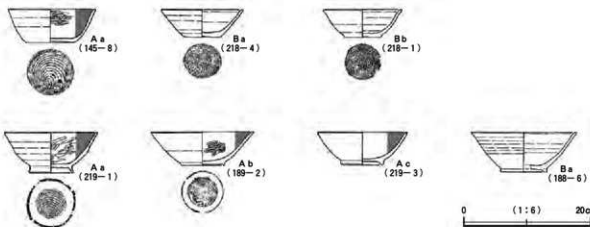
土師器 (I類・非ロクロ) 埴



土師器 (I類・非ロクロ) 高坏



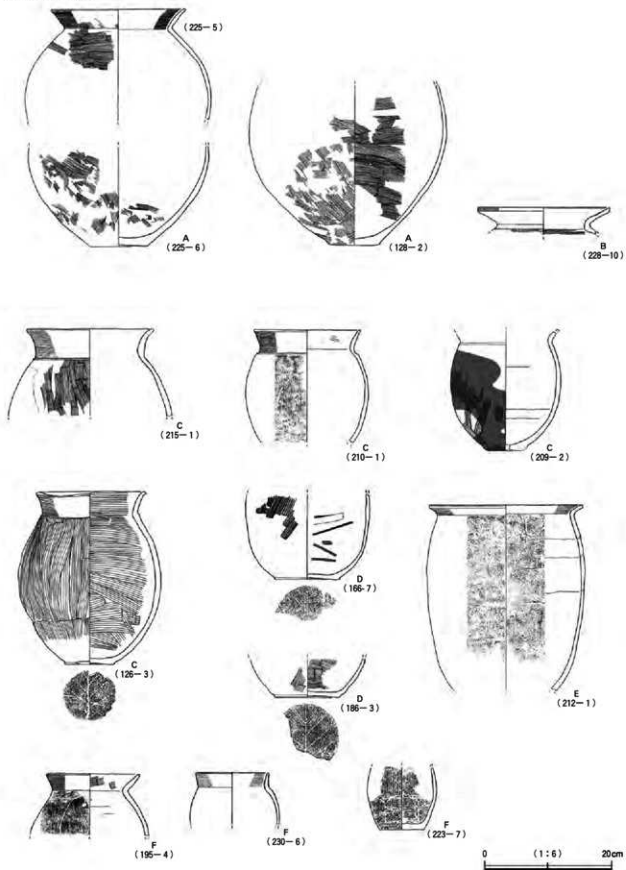
土師器 (II類・ロクロ) 坏・高台坏



0 (1:6) 20cm

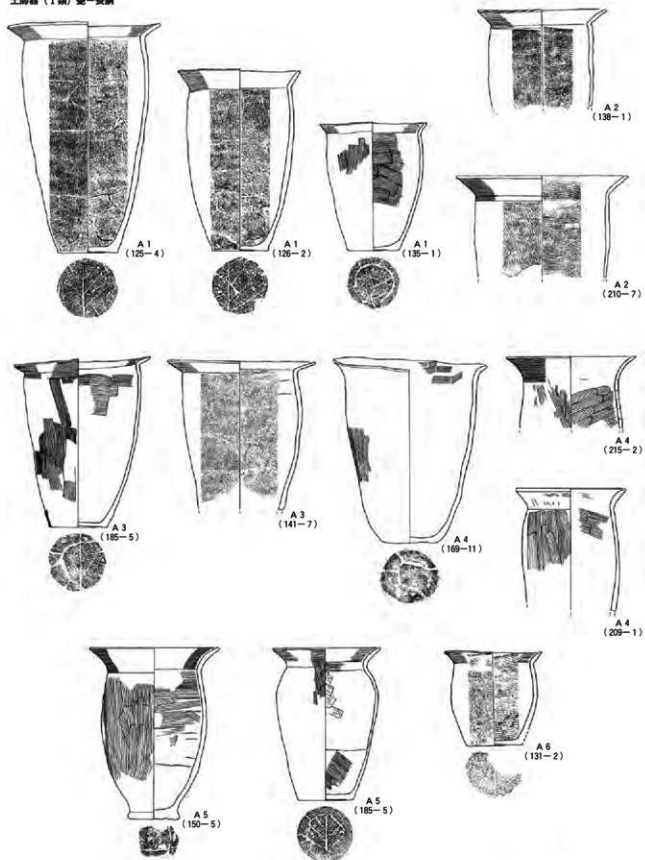
第28図 土器分類集成図 (1)

土師器 (I類) 壺・球罎



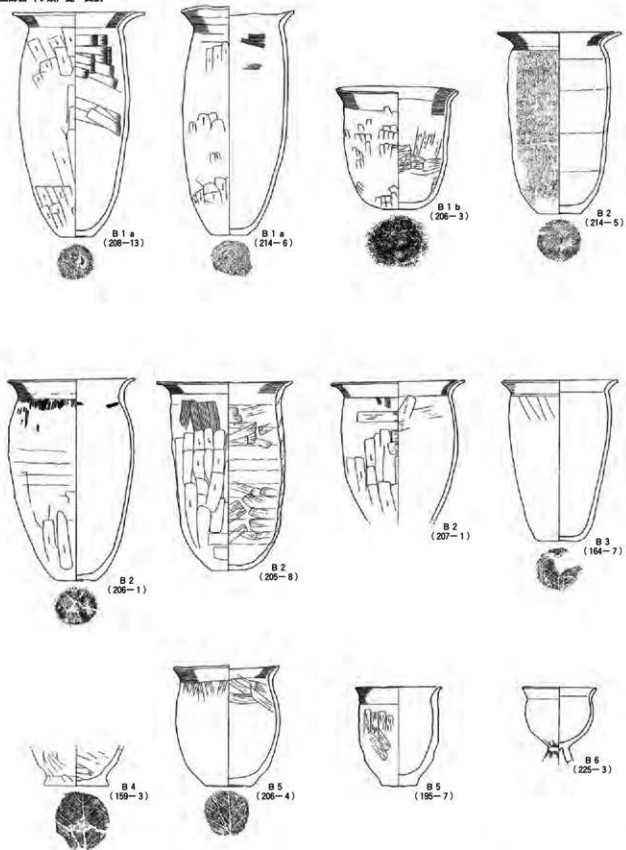
第29図 土器分類集成図 (2)

土器器 (I類) 第一長脚



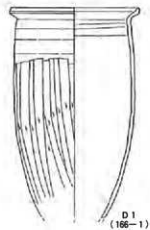
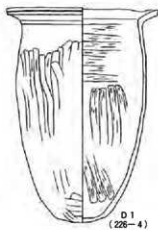
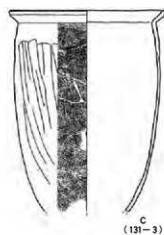
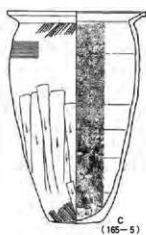
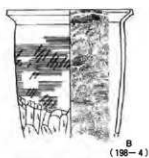
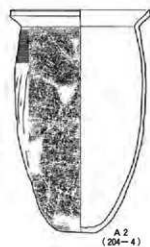
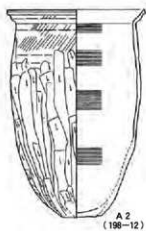
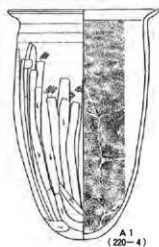
第30図 土器分類集成図 (3)

土師器 (I類) 壺一長脚



第31圖 土器分類集成圖 (4)

土器 (Ⅱ類) 壺—大型

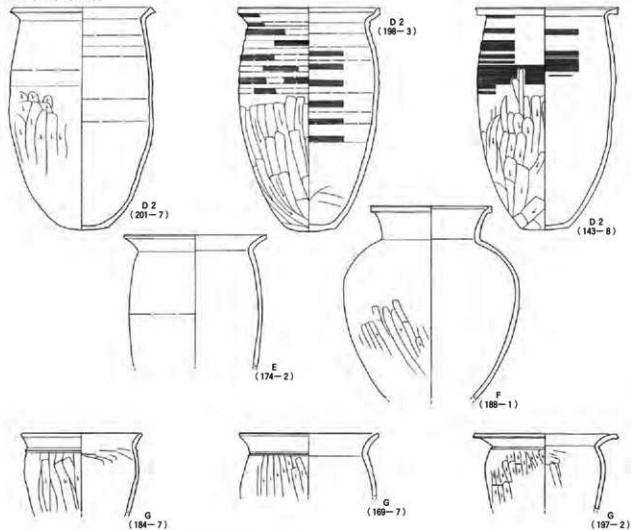


0 (1:6) 20cm

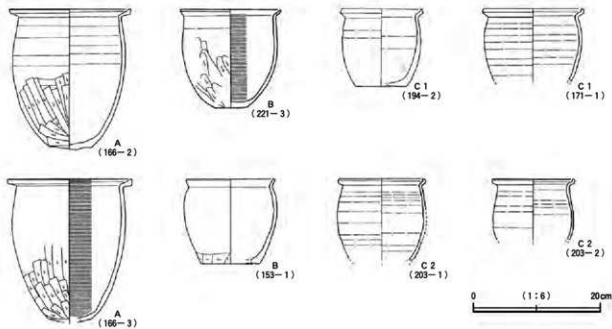
第32圖 土器分類集成圖 (5)



土師器 (Ⅱ類) 壺—大型

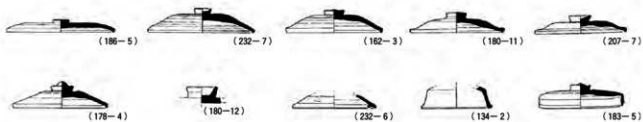


土師器 (Ⅱ類) 壺—小型

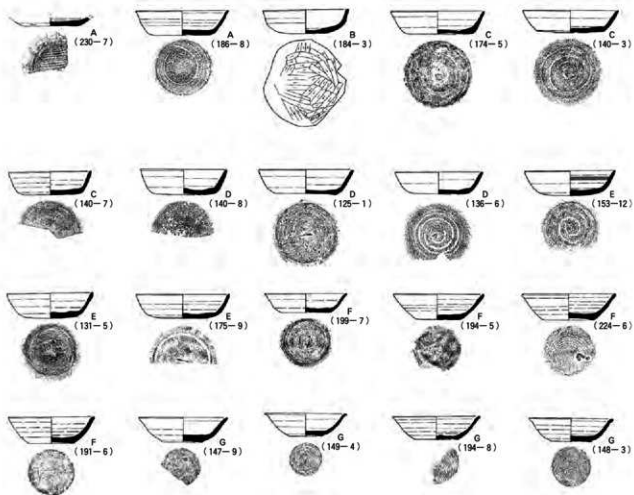


第33图 土器分類集成图 (6)

須惠器 蓋



須惠器 環



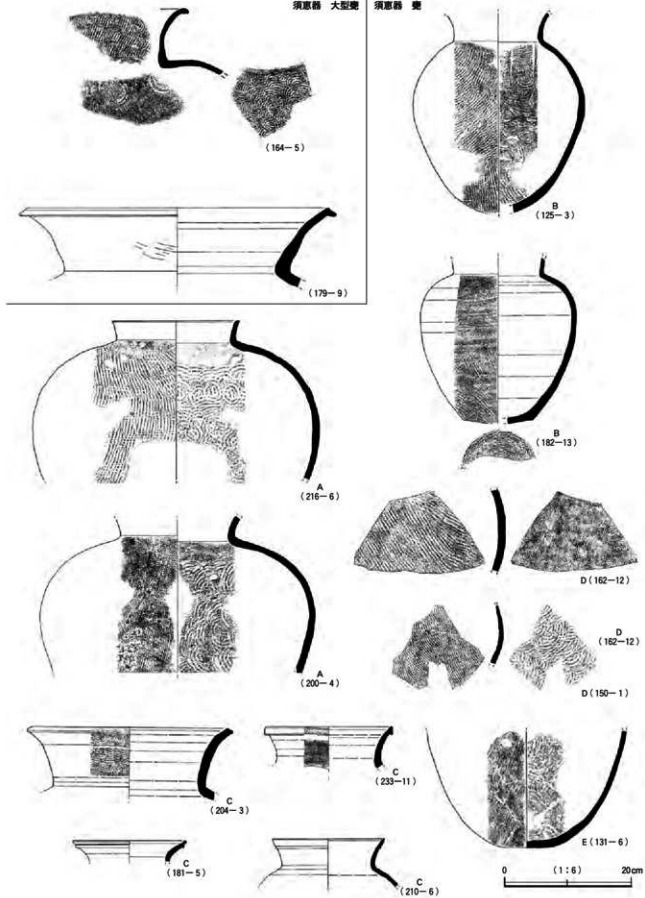
須惠器 高台環



第34図 土器分類集成図(7)

須惠器 大型甕

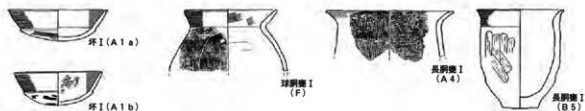
須惠器 甕



第35図 土器分類集成図(8)

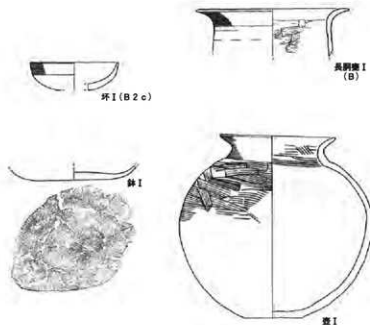


7世紀後半



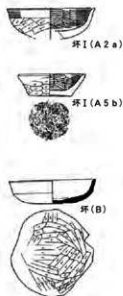
ST 549

7世紀後半



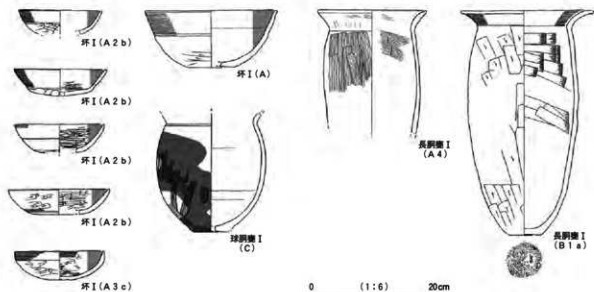
ST 686

7世紀後半



ST 66

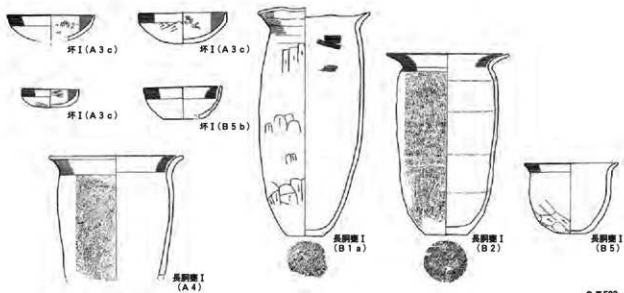
7世紀後半



ST 615

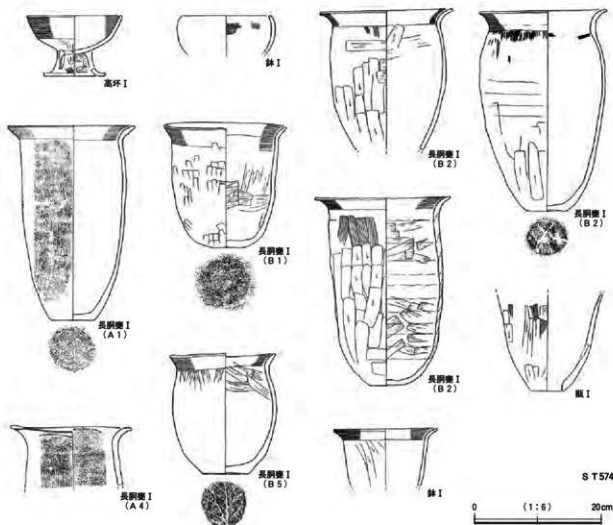
第37図 住居跡出土土器の変遷(1)

7世紀後半



S T 583

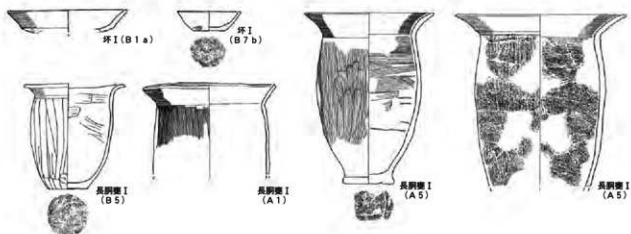
7世紀末~8世紀初頭



S T 574

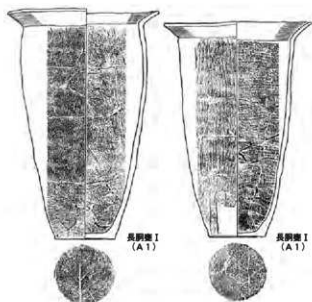
第38図 住居跡出土土器の変遷(2)

7世紀末～8世紀初頭



ST 15

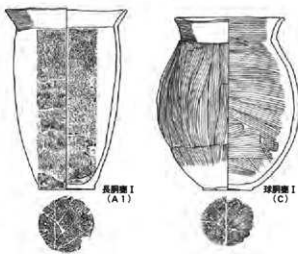
8世紀前半



8世紀前半



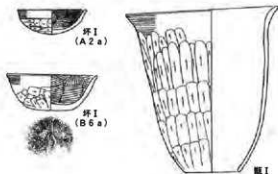
7世紀末～8世紀初頭



ST 1 0 (1:6) 20cm

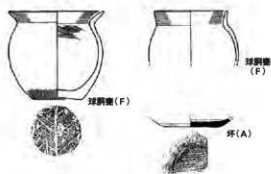
第39回 住居跡出土土器の変遷 (3)

8世紀前半



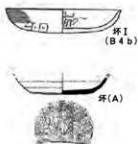
ST 121

8世紀前半



ST 181

8世紀前半



ST 3

8世紀前半



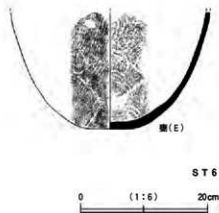
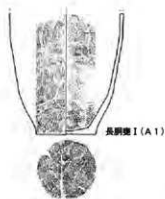
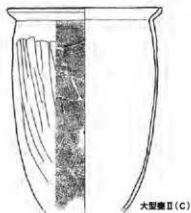
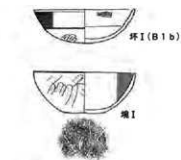
ST 589

8世紀前半



ST 684

8世紀中葉

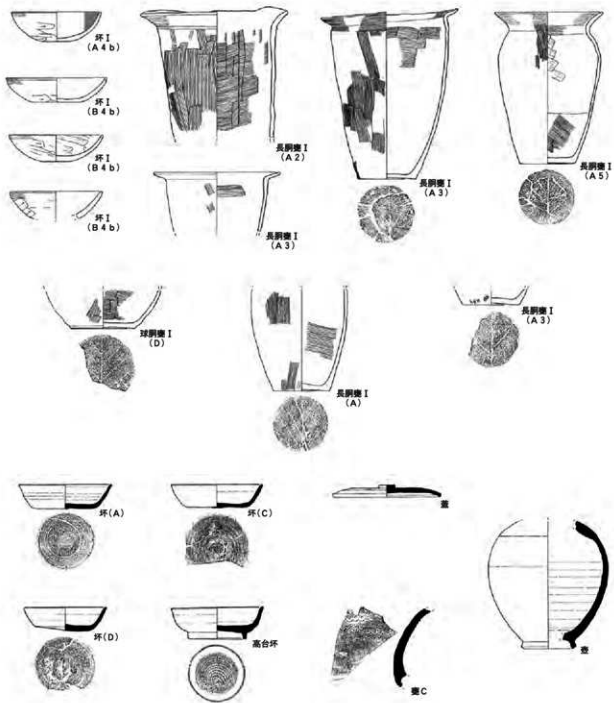


ST 6

第40図 住居跡出土土器の変遷(4)



8世紀中葉



S T 186

8世紀中葉

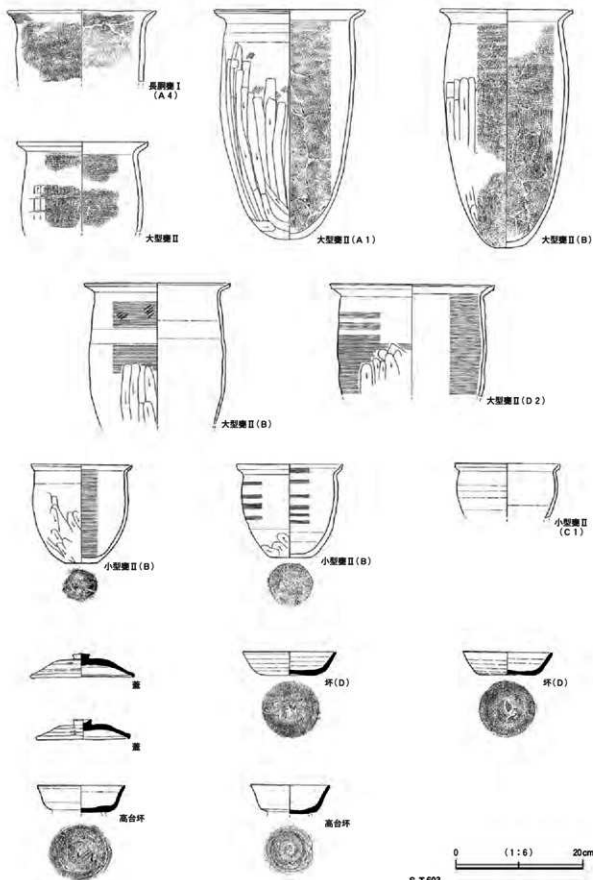


0 (1:6) 20cm

S T 130





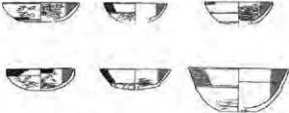
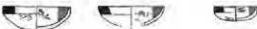





第41図 住居跡出土土器の変遷 (5)

8世紀後半



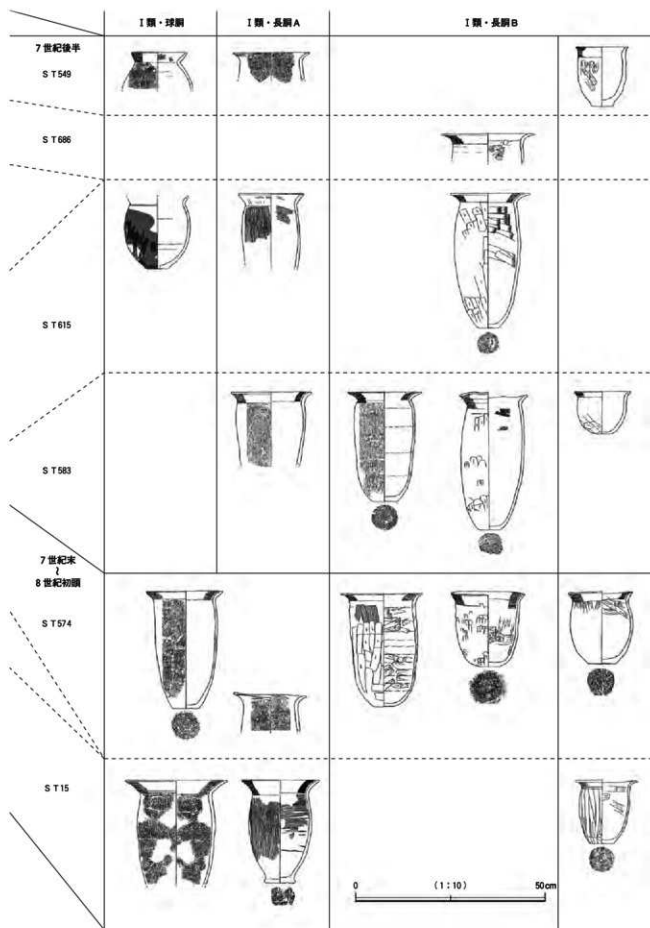
S T 603

第42図 住居跡出土土器の変遷 (6)

	I類・A	I類・B	須恵器
7世紀後半 S T 549			
S T 686			
S T 66			
S T 615			
S T 583			
7世紀末 8世紀初頭 S T 574			
S T 675			
S T 15			
8世紀前半 S T 18			

0 (1:8) 20cm

第43図 食膳具の変遷(1)

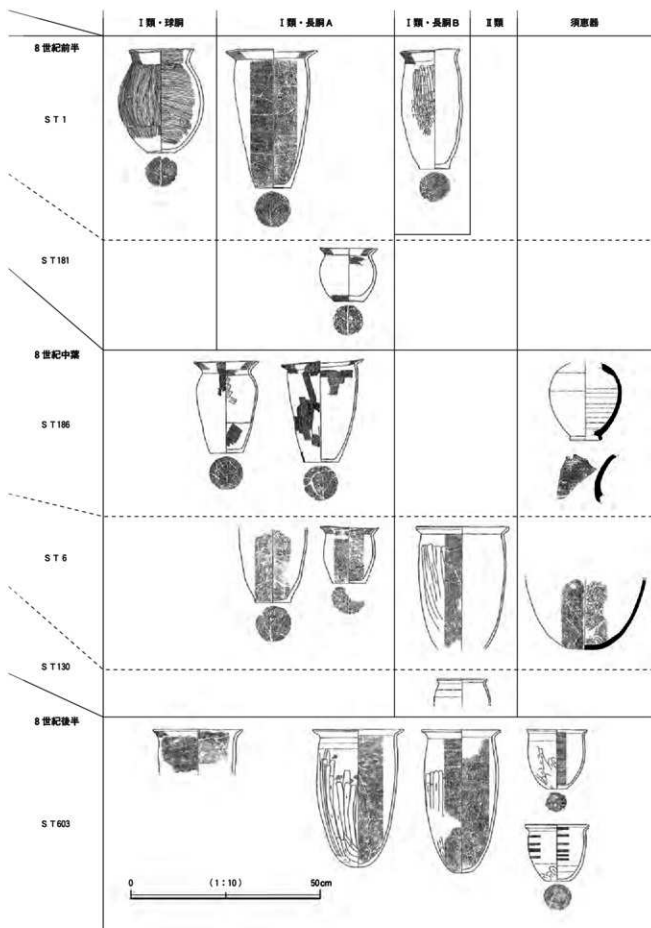


第44図 煮炊具の変遷 (1)

	I類・A	I類・B	須恵器
8世紀前半		ST 3	ST 3
ST 509			
	ST 121	ST 121	ST 181
8世紀中葉			
ST 186			
ST 6			
ST 130			
8世紀後半			
ST 603			

0 (1:8) 20cm

第45図 食膳具の変遷(2)



第46図 煮炊具の変遷(2)

表16 1次遺物観察表(1)

図面 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種類	器種	計測値(mm)	口徑	底径	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考
125	1	S T99		須恵器	杯		150	96	38	ロクロ	ロクロ	回転へう切後 ケズリ調整	中砂	
	2	S T2	125	須恵器	差	146			26.5	ロクロ,ヘラケズリ	ロクロ		海綿骨針,中砂	胴部にヘラ着 有
	3	S T2F, T5S T		須恵器	差				(314)	ロクロ,タタキ	ロクロ,アテ			
	4	S T1, S X89	128	土師器	差	240	94	364.5		ハケム,ナデ	ハケム,ナデ	木葉痕	長石,中砂	
126	1	S T1-E L付近		土師器	差	233	90	340		ハケム,ナデ	ハケム,ナデ	木葉痕	雲母,中砂	
	2	S T1		土師器	差	192	86	286		ハケム,ナデ	ハケム	木葉痕	長石,中砂	
	3	S T1-E L付近	128	土師器	差	173	79	273		ハケム,ナデ	ハケム	木葉痕	細砂	
127	1	S T1	129	土師器	差	156	80	315		ナデ,ヘラナデ	ナデ	木葉痕	長石,金雲母,中砂	
	2	S T1, S X89	130	土師器	差	224		(248)		ナデ,ヘラケズリ	ナデ		長石,石英 雲母,中砂	
	3	S T1	129, 143	土師器	差		84	(179)		ハケム	ハケム	木葉痕	細砂	
	4	S T3	133	土師器	杯	182			38	ナデ,ヘラケズリ	ナデ		長石,雲母,中砂	
	5	S T3		須恵器	杯		86	(25.5)		ロクロ	ロクロ	回転へう切後 回転へうケズリ	中砂	底部切離痕有
	6	S T3	121	須恵器	杯	134	50	38		ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針,細砂	
128	1	S T8		土師器	差	68		(204)		ハケム	ナデ		長石,雲母,中砂	
	2	S T8		土師器	差	80		(251.5)		ハケム	ハケム		長石,細砂	スス痕有
	3	S T5-E L		土師器	差	171.5		(119)		ロクロ,ホキメ	ロクロ		雲母,海綿骨針,細砂	
	4	S T5	151	須恵器	杯	140	90	40		ロクロ	ロクロ	回転へう切後 ナデ調整	細砂	
	5	S T5-E L		須恵器	杯	158	95	41		ロクロ	ロクロ	回転へう切後 ナデ調整	細砂	
	6	S T5	148	須恵器	高台杯	93	(17)			ロクロ	ロクロ	回転へう切後 ナデ調整	細砂	高台に砂付着
129	1	S T4-E L, 7.88, 粗刷		土師器	差	206		(197)		ハケム,ナデ	ハケム,ナデ		長石,中砂	
	2	S T4	135	土師器	差	97	(59)			ハケム	ハケム	木葉痕	長石,石英 雲母,中砂	
	3	S T4,粗刷		土師器	差	332		(150)		ロクロ,ヘラナデ	ロクロ		金雲母,細砂	
	4	S T4		土師器	差	257		(94)		ロクロ	ロクロ		金雲母,雲母 海綿骨針,細砂	
	5	S T4	124	須恵器	碗	144	78	87		ロクロ	ロクロ	回転糸切	石英,海綿骨針,細砂	
	6	S T4	134	須恵器	押鉢	134		(111)		ロクロ	ロクロ		石英,細砂	
130	1	S T7		土師器	碗	134	70	52.5		ナデ,ヘラケズリ	ヘラミガキ	網代痕	長石,石英,細砂	内黒
	2	S T7	122	土師器	碗		86	(60)		ナデ,ヘラケズリ	ヘラミガキ	網代痕?	長石,細砂	内黒
	3	S T7		土師器	差	208		(171)		ロクロ,ホキメ ヘラケズリ	ロクロ,ホキメ		長石,金雲母 海綿骨針,細砂	
	4	S T7		土師器	差	222		(80)		ロクロ	ロクロ		長石,石英,金雲母 海綿骨針,中砂	
	5	S T7,4		土師器	差	148		(70)		ロクロ	ロクロ		長石,石英 金雲母,中砂	
	6	S T7	154	須恵器	杯	148	66	40		ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針,細砂	
	7	S T6	408	土師器	杯	160		53.5		ナデ,ヘラケズリ	ハケム		長石,石英,金雲母 海綿骨針,中砂	
	8	S T6		土師器	碗	160	68	65		ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	石英,細砂	内黒
	9	S T6	113	土師器	差		92	(192)		ハケム	ハケム	木葉痕	細砂	
131	1	S T6	112	土師器	差		98	(115)		ハケム	ハケム	木葉痕	石英,金雲母	
	2	S T6	120	土師器	差	153	86	151		ハケム,ナデ	ハケム,ナデ	木葉痕	中砂	
	3	S T6	113	土師器	差	243		(318)		ロクロ,ホキメ ヘラケズリ,タタキ	ロクロ		石英,海綿骨針	

表17 1次遺物観察表(2)

図録 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考		
						口径 底径								
131	4	S T 6	2	須恵器	蓋		(24)	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ		細砂			
	5	S T 6		須恵器	坏	136	82	40	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	石英、海綿骨針		
	6	S T 6	112	須恵器	蓋	70	(183)	タチキ	アテ			長石、金雲母、細砂		
132	1	S T 83-E L	118	土師器	蓋	50	(187)	ヘラケズリ	ハケメ			長石、金雲母 海綿骨針、細砂		
	2	S T 83-E P 246		土師器	蓋		183.5	ヘラケズリ	カキメ			長石、金雲母、細砂		
	3	S T 83-E L	118	土師器	蓋	62	(113)	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ			長石、石英 海綿骨針、細砂		
	4	S T 83	117	須恵器	蓋	154		27	ロクロ	ロクロ		長石、細砂		
	5	S T 83		須恵器	坏	90	(39.5)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		雲母、海綿骨針、細砂		
	6	S T 83		須恵器	高台坏	132	86	49	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		細砂	
	7	S T 83		須恵器	高台坏	128.5	94	43	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切		細砂	
	8	S T 82-E P 242		土師器	甗	147	81	77	ヘラケズリ	ヘラシガキ	木敷直		長石、石英、細砂	内黒
	9	S T 82-E P 242		土師器	蓋		(224)	ハケメ	ナデ			長石、石英 雲母、中砂		
133	1	S T 82		土師器	蓋	250	(103)	ロクロ、カキメ タチキ、ヘラケズリ	ロクロ			長石、金雲母、細砂		
	2	S T 82		土師器	蓋	131	86	107	ロクロ	ロクロ		石英、金雲母 海綿骨針、中砂		
	3	S T 82		須恵器	坏	136	90	31.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切		細砂	
	4	S T 82		須恵器	高台坏	136	86	45	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切		細砂	
	5	S T 82		須恵器	双耳坏	118	60	52	ロクロ	ロクロ	回転糸切		海綿骨針、細砂	
	6	S T 85	109	須恵器	高台坏	122	60	51	ロクロ	ロクロ	回転糸切		海綿骨針、細砂	
	7	S T 10	55	土師器	蓋	212		(78)	ロクロ	ロクロ			長石、石英、金雲母 海綿骨針、中砂	
	8	S T 10	72	土師器	蓋	78	(196)	ヘラケズリ	ナデ			長石、石英 金雲母、中砂		
	9	S T 10	71	土師器	鉢	200	(75)	ロクロ、カキメ	ロクロ、カキメ			長石、金雲母、細砂		
134	1	S T 10	74	土師器	蓋	88	(31)	ロクロ	ロクロ	回転糸切		長石、金雲母、細砂		
	2	S T 10		須恵器	蓋	112	(33)	ロクロ	ロクロ			細砂		
	3	S T 10-E K 226		須恵器	坏	132	96	34	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		海綿骨針、細砂	
	4	S T 10	74	須恵器	坏	140	74	33	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		細砂	
	5	S T 10	56	須恵器	坏	140	66	35	ロクロ	ロクロ	回転糸切		長石、金雲母 海綿骨針、細砂	体部黒着
	6	S T 10	58	須恵器	坏	140	60	35	ロクロ	ロクロ	回転糸切		海綿骨針	体部黒着
	7	S T 10	57	須恵器	高台坏	140	88	47	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		長石、中砂	灯明皿 ヌス付着
	8	S T 10	59	須恵器	高台坏	134		(63)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		細砂	
	9	S T 10		須恵器	高台坏	65	(30.5)	ロクロ	ロクロ	回転糸切		海綿骨針、細砂	底部黒着	
	10	S T 10		須恵器	双耳坏		(26)	ヘラケズリ				細砂		
	11	S T 11	155	須恵器	坏	139	65	36	ロクロ	ロクロ	回転糸切		海綿骨針、細砂	
	12	S T 11		須恵器	双耳坏	66	(35)	ロクロ	ロクロ	回転糸切		細砂		
135	1	S T 12-E L	107	土師器	蓋	169	80	203	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	木敷直	石英、雲母、細砂		
	2	S T 12	340, 343 344	土師器	蓋	234		(144)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ		長石、雲母 海綿骨針、中砂		
	3	S T 12	162	土師器	蓋	225		(125.5)	ハケメ、ナデ	ハケメ		石英、海綿骨針 細砂	輪積直	
	4	S T 12-E L 217		土師器	蓋	222		(87)	ハケメ、ナデ	ハケメ		石英、雲母 海綿骨針、細砂		



表18 1次遺物観察表(3)

図面 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm) 口径 底径 器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考
135	5	S T12-E1		土師器	甕	96 (55)	ハケメ	ハケメ	木葉痕	中砂	
	6	S T12	341	土師器	瓶	106 (70)	ヘラナデ	ヘラナデ		長石、雲母、金雲母 海綿骨針、粗砂	
	7	S T12-E L217		土師器	甕	214 (111)	ロクロ、カキメ ヘラナデ	ロクロ、カキメ		長石、石英、金雲母 海綿骨針、粗砂	
136	1	S T12-E L217		土師器	甕	236	ロクロ、カキメ タタキ	ロクロ		長石、石英 金雲母、粗砂	
	2	S T12-E L217		土師器	甕	232 (54.5)	ロクロ	ロクロ		長石、金雲母 海綿骨針、粗砂	
	3	S T12-E L217		土師器	甕	(171)	ヘラナデ	ヘラナデ		長石、金雲母 海綿骨針、粗砂	
	4	S T12-E L217		土師器	甕	142 (73.5)	ロクロ	ロクロ、カキメ		長石、金雲母 海綿骨針、粗砂	
	5	S T12		須恵器	蓋	152 (14)	ロクロ	ロクロ		粗砂	
	6	S T12		須恵器	坏	138 92 35	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	粗砂	
	7	S T12-E L217.10		須恵器	坏	147 86 41	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	石英、海綿骨針、粗砂	
	8	S T12-E L217		須恵器	坏	144 92 42	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	長石、石英 海綿骨針、粗砂	
	9	S T12		須恵器	坏	106 (54)	ロクロ	ロクロ		粗砂	
	10	S T12	75	須恵器	液	(157)	ロクロ 回転ヘラナデ	ロクロ		長石、中砂	
137	1	S T12-E L,11-13G		須恵器	甕	(97)	タタキ	指オサエ		中砂	
	2	S T84	106	須恵器	坏	136 78 45	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、粗砂	歪み大
	3	S T91		土師器	甕	146 (65)	ナデ、ヘラナデ	ヘラシガキ		長石、粗砂	内黒
	4	S T91		土師器	甕	135 (53.5)	ナデ	ヘラシガキ		石英	内黒
	5	S T91		須恵器	蓋	158 (31)	ロクロ 回転ヘラナデ	ロクロ		中砂	
	6	S T91		須恵器	坏	147 88 39	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	雲母、海綿骨針、中砂	
	7	S T91,12-16G		須恵器	坏	80 (9)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	長石、中砂 海綿骨針	底部線刻
	8	S T91		須恵器	高台坏	138 72 45.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	長石、海綿骨針 中砂	底部黒着
	9	S T91	164	須恵器	高台坏	(16)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	長石、海綿骨針 中砂	
	10	S T91	144,145	須恵器	長頸瓶	90 (190)	ロクロ	ロクロ		海綿骨針、粗砂	
138	1	S T77-E K336, E L	79,127	土師器	甕	204 (153)	ハケメ、ナデ	ハケメ		雲母、金雲母、粗砂	
	2	S T77,14-13G		土師器	甕	170 (100)	ナデ、ヘラナデ	ナデ、ヘラナデ		雲母	
	3	S T77-E L216	82	土師器	甕	220 (94)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ		長石、石英、粗砂	
	4	S T77,14-13G		土師器	甕	130 (59)	ナデ	ナデ		粗砂	
	5	S T77	127	土師器	甕	102 (169)	ハケメ	ハケメ	木葉痕	長石、石英 粗砂、中砂	輪縁痕
	6	S T77,14-13G		土師器	甕	79 (46.5)	ヘラナデ	ヘラナデ	木葉痕	雲母、粗砂、中砂	
139	1	S T77	77,84, 127	土師器	甕	233 70 330	ロクロ、カキメ ヘラナデ	ロクロ ヘラナデ		長石、石英、雲母 粗砂、中砂	
	2	S T77,76	89,90	土師器	甕	210 (115)	ロクロ、カキメ タタキ、ヘラナデ	ロクロ		金雲母、粗砂	
	3	S T77-E L216 14-13G		土師器	甕	(220)	ハケメ、タタキ ヘラナデ	ハケメ、カキメ		長石、石英 金雲母、粗砂	
	4	S T77-E L216	84	土師器	甕	168 (105)	ロクロ	ロクロ		長石、金雲母 海綿骨針、粗砂	
	5	S T77	84	土師器	鉢	92 (78)	ロクロ	ロクロ		長石、石英、金雲母 海綿骨針、粗砂	
	6	S T77,76		須恵器	蓋	144 27.5	ロクロ	ロクロ		海綿骨針、粗砂	
	7	S T77,76	127	須恵器	蓋	179 38	ロクロ 回転ヘラナデ	ロクロ		石英、中砂	
140	1	S T77-E L216		須恵器	坏	143 98 38	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針、中砂	

表19 1次遺物観察表(4)

図録 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考	
						口径	底径						
140	2	S T 77	78	須臾器	坏	148	100	39	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切 ケズリ調整	長石、海綿骨針、中砂	
	3	S T 77-E L	84, 127	須臾器	坏	150	106	35	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	雲母、中砂	
	4	S T 77	85	須臾器	坏	148	104	41.5	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	長石、石英 海綿骨針、中砂	
	5	S T 77	126	須臾器	坏	139	100	37	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	長石、石英 海綿骨針、粗砂	
	6	S T 77	81	須臾器	坏	145.5	101.5	37	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針、中砂	
	7	S T 77	83	須臾器	坏	130	90	36	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針、中砂	
	8	S T 77		須臾器	坏	136	107	40	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切	長石、中砂	
	9	S T 77		須臾器	坏	146	90	42	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切	石英、海綿骨針 中砂	
	10	S T 77		須臾器	坏		90	(18)	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切後 回転ヘラケズリ	石英、中砂	
	11	S T 77	87	須臾器	高台坏	149	96	48	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針、粗砂	底部磨書
	141	1	S T 77	89	須臾器	高台坏	136	94	51	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切	海綿骨針、粗砂
2		S T 77	91	須臾器	高台坏	120	70.5	42.5	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切	海綿骨針、中砂	
3		S T 77	80, 88	須臾器	高台坏	135	89	47	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切	長石、中砂	
4		S T 77	88	須臾器	高台坏	117	74	44.5	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切	石英、海綿骨針、粗砂	
5		S T 77		須臾器	壺		(71)	ナデキ	ナデ			石英、粗砂	
6		S T 74-E L 213		土師器	坏	140		(54)	ナデ	ヘラミガキ		石英、海綿骨針	内黒
142	7	S T 74-E L 213	101	土師器	壺	233.5		(235)	ハケメ、ナデ	ハケメ		石英、雲母、粗砂	
	8	S T 74	101	土師器	壺	230		(154)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ		石英、雲母 海綿骨針、粗砂	
	1	S T 74	103	土師器	壺	76		(39)	ハケメ	ハケメ		石英、雲母 海綿骨針、粗砂	
	2	S T 74-E L 214, E K 262 14-15G	131, 106	土師器	壺	231		(360)	ワケロ、カキメ ナデキ、ヘラケズリ	ワケロ		長石、金雲母 海綿骨針、粗砂	口縁部
143	3	S T 74	97	土師器	壺	236		(255)	ワケロ、カキメ ヘラケズリ	ワケロ、カキメ		長石、金雲母、粗砂	
	4	S T 74-E L 214	102	土師器	壺	236		(139)	ワケロ	ワケロ、カキメ ヘラナデ		長石、金雲母 海綿骨針、粗砂	
	5	S T 74-E L 213-214 14-15G		土師器	壺	232		(225)	ワケロ、カキメ	ワケロ、カキメ		長石、石英、金雲母 海綿骨針、粗砂	外面準托
	1	S T 74-E L 213		土師器	壺	162		(129)	ワケロ	ワケロ		長石、金雲母 海綿骨針、粗砂	
	2	S T 74	105	土師器	壺	127	86	86.5	ワケロ	ワケロ		雲母、金雲母、中砂	
144	3	S T 74		須臾器	蓋			(22.5)	ワケロ	ワケロ		粗砂	
	4	S T 74-E L 213	104	須臾器	坏	130	90	34	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針、粗砂	
	5	S T 74-E L 213		須臾器	坏	136		42.5	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切	粗砂	
	6	S T 74		須臾器	坏	146	84	44	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切	海綿骨針	転用機?
	7	S T 74	99	須臾器	高台坏	146	84	49	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切	長石、海綿骨針 中砂	
	8	S T 76-E L 215	92	土師器	壺	223	74	351	ワケロ、カキメ ヘラケズリ	ワケロ、カキメ		長石、石英、金雲母 海綿骨針、粗砂	
	1	S T 76 14-14G	96	土師器	壺	206		(219)	ワケロ、カキメ ヘラケズリ	ワケロ、カキメ		石英、雲母、金雲母 海綿骨針、中砂	
	2	S T 76	92, 95	土師器	壺	210		(150)	ワケロ	ワケロ		石英、金雲母 海綿骨針、粗砂	
145	3	S T 76-E L 215	94	土師器	壺		100	(211)	ヘラケズリ	ナデ		長石、海綿骨針、中砂	
	4	S T 76		土師器	壺	285	138	165.5	ワケロ、カキメ ヘラケズリ	ワケロ、カキメ		雲母、海綿骨針、粗砂	
	5	S T 76	35, 93	須臾器	坏	142.5	79	36	ワケロ	ワケロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	粗砂	
	6	S T 13, 78		土師器	壺	160	100	89	ヘラケズリ	ヘラミガキ		雲母、粗砂、粗砂	

表20 1次遺物観察表(5)

図録 番号	採出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm) 口径 底径 器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考
144	7	S T 13		土師器	甕	102 (61)	ロクロ	ロクロ		雲母、金雲母 海綿骨針、細砂	
	8	S T 13, S X 507		須恵器	蓋	132 30	ロクロ	ロクロ		海綿骨針、細砂	
145	1	S T 13		須恵器	坏	140 88 38	ロクロ	ロクロ	回転・ヘラ切後 ナゲ調整	海綿骨針、細砂	
	2	S T 13		須恵器	高台坏	81 (21.5)	ロクロ	ロクロ		石英、細砂	
	3	S T 13		須恵器	高台坏	68 (49.5)	ロクロ	ロクロ		石英、細砂	
	4	S T 13		須恵器	甕	60 (40)	ロクロ	ロクロ		長石、石英 海綿骨針、細砂	
	5	S T 13		須恵器	甕	(147.5)	タタキ	アテ		石英、細砂	
	6	S T 78		土師器	埴	150 (68.5)	ヘラケズリ	ヘラミガキ		石英、雲母	内黒
7	S T 78		土師器	蓋	158 (22)	ロクロ 回転・ヘラケズリ	ロクロ		石英		
8	S T 78	76	土師器	坏	138 76 53	ロクロ	ヘラミガキ	回転糸切	長石、海綿骨針、細砂	内黒	
9	S T 78		土師器	坏	68 (38)	ロクロ	ヘラミガキ	回転糸切後 回転ケズリ	海綿骨針、細砂	内黒	
10	S T 78-E L	60, 61	土師器	甕	220 (215)	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ、カキメ		長石、金雲母 海綿骨針、細砂		
11	S T 78-E L	60	土師器	甕	213 (95)	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ、カキメ		長石、金雲母 海綿骨針、細砂		
12	S T 78		土師器	甕	226 (58.5)	ロクロ	ロクロ		長石、金雲母 海綿骨針、細砂		
146	1	S T 78		土師器	甕	242 (60.5)	ロクロ	ロクロ		長石、金雲母 海綿骨針、中砂	
	2	S T 78	68	土師器	甕	194 (54)	ロクロ	ロクロ		金雲母、細砂	
	3	S T 78, 15-16G		土師器	甕	118 (183.5)	タタキ、ヘラケズリ	ハケメ、カキメ		長石、石英、金雲母 海綿骨針、細砂	
	4	S T 78		土師器	甕	60 (214)	ヘラケズリ	ヘラナゲ		長石、金雲母、細砂	
	5	S T 78-E L	61	土師器	甕	72 (145)	カキメ、ヘラケズリ	ハケメ、カキメ		長石、石英 雲母、細砂	
	6	S T 78-E L	61, 63 64	土師器	甕	196 84 97	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石、金雲母 海綿骨針、細砂	
	7	S T 78-E L	64	土師器	甕	72 (63)	ロクロ	ロクロ	回転糸切後 ケズリ調整	石英、雲母 金雲母、細砂	
	8	S T 78-E L	61	土師器	甕	76 (34.5)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石、石英 金雲母、細砂	
147	1	S T 78		土師器	埴	270 (77.5)	ロクロ	ロクロ		長石、金雲母 海綿骨針、細砂	
	2	S T 78		土師器	埴	240 (92)	ロクロ	ロクロ		長石、石英、雲母 海綿骨針、細砂	
	3	S T 78-E L	62	須恵器	蓋	152 37	ロクロ	ロクロ		細砂	
	4	S T 78		須恵器	蓋	142 (32)	ロクロ	ロクロ		細砂	
	5	S T 78	70	須恵器	坏	136 82 35	ロクロ	ロクロ	回転・ヘラ切後 ケズリ調整	細砂	
	6	S T 78		須恵器	坏	144 85 33.5	ロクロ	ロクロ	回転・ヘラ切後 ケズリ調整	海綿骨針、細砂	
	7	S T 78	68	須恵器	坏	140 62 38.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂	底部黒痕
	8	S T 78		須恵器	坏	140 72 37.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	石英、海綿骨針、中砂	底部黒書?
	9	S T 78	65	須恵器	坏	139.5 62 39	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石、石英 海綿骨針、細砂	底部黒書「若」
	10	S T 78		須恵器	坏	146 72 38.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂	底部黒書
148	1	S T 78		須恵器	坏	138 66 38	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂	
	2	S T 78, 15-14G	69	須恵器	坏	132 75 38.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂	
	3	S T 78		須恵器	坏	132 63 36	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、白粒	
	4	S T 78	67	須恵器	坏	131 60 39.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、白粒	
	5	S T 78		須恵器	坏	138 66 45	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、白粒	

表21 1次遺物観察表(6)

図録 番号	探査 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考		
						口径	底径							
148	6	S T 78		須臾器	坏	134	56	38.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、白粒		
	7	S T 78		須臾器	高台坏	138	82	47.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切 ケズリ調整	細砂	底部に塗着 らしき物付着	
	8	S T 78		須臾器	高台坏	142	90	46	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	石英、海綿骨針		
	9	S T 78		須臾器	高台坏	136	100	43	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切 ナデ調整	細砂		
	10	S T 78		須臾器	高台坏	72	(38)	ロクロ	ロクロ			細砂		
	11	S T 78		須臾器	高台坏	68	(39)	ロクロ	ロクロ		回転糸切	石英、細砂		
	12	S T 78		須臾器	甕	150	(69)	ロクロ	ロクロ			海綿骨針、細砂		
	13	S T 78		須臾器	甕		(75.5)	タチキ	アテ			長石、石英、細砂		
	14	S T 78		須臾器	甕	96.5	60	102	ロクロ、カキメ ヘラケズリ	ロクロ	回転糸切	中砂		
	149	1	S T 14	32	土師器	甕	74	(349)	ロクロ、カキメ ヘラケズリ	ロクロ、ハケメ			長石、石英、金雲母 海綿骨針、細砂	
		2	S T 14	25	土師器	甕	215	(64)	ロクロ	ロクロ			石英、金雲母 海綿骨針、細砂	
		3	S T 14	23	須臾器	坏	130.5	60	43	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石、細砂	
		4	S T 14	28	須臾器	坏	130	51	37	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂	
5		S T 14	27	須臾器	高台坏	80	(23)	ロクロ	ロクロ		回転糸切	海綿骨針、細砂		
6		S T 14		須臾器	甕		(47)	ロクロ	ロクロ			海綿骨針、細砂		
7		S T 14	24	須臾器	甕		(127)	ロクロ、カキメ	カキメ			海綿骨針、細砂		
8		S T 14	33	須臾器	甕		(147)	カキメ、ヘラケズリ	カキメ			海綿骨針、細砂		
150	1	S T 14		須臾器	甕	(92)	タチキ	アテ				長石、細砂		
	2	S T 15	34	土師器	坏	190	(35)	ナデ、ヘラケズリ	ナデ					
	3	S T 15	29	土師器	坏	100	48	31	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	長石、石英、雲母 中砂、細砂		
	4	S T 15-E P 16-17G		土師器	甕	270	(273)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ			長石、石英、雲母 海綿骨針、中砂		
	5	S T 15	30	土師器	甕	204	80	272	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	木葉痕	中砂		
	6	S T 15	36	土師器	甕	210	(146)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ			長石、石英、金雲母 粗砂、細砂		
151	1	S T 15	31	土師器	甕	162	62	167	ナデ、ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	長石、雲母、中砂		
	2	S T 15		須臾器	蓋	(14.5)	ロクロ	ロクロ				細砂		
	3	S T 15		須臾器	高台坏	(36)	ロクロ	ロクロ				長石、細砂		
	4	S T 15		須臾器	甕	100	(27)	ロクロ	ロクロ			細砂		
	5	S T 72		土師器	坏	80	(32.5)	ナデ、ヘラケズリ	ヘラケズリ			長石、石英、中砂	内黒	
	6	S T 72		土師器	坏		(39)	ナデ	ヘラケズリ			長石、中砂	内黒	
	7	S T 72-E L		土師器	甕	247	(201)	ハケメ、ナデ	ハケメ			長石、石英 金雲母、中砂		
	8	S T 72-E P 239-235 E K 390		土師器	甕	222	(164)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ			長石、細砂		
	9	S T 72-F	54	土師器	甕	204	(136)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ			長石、石英 雲母、中砂		
	10	S T 72	52	土師器	甕	223	(142.5)	ハケメ、ナデ	ハケメ			長石、石英、中砂		
152	1	S T 72-E K 240		土師器	甕	110	(139)	ナデ、ヘラケズリ	ヘラケズリ			長石、石英、細砂		
	2	S T 72		土師器	甕	95	(101)	ハケメ	ヘラケズリ	木葉痕		長石、石英、中砂		
	3	S T 72-E P 232		土師器	甕	124	(71.5)	ハケメ	ハケメ			石英、雲母 海綿骨針、細砂		
	4	S T 72		土師器	甕	304	(126)	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ、ハケメ カキメ			長石、石英、金雲母 海綿骨針、細砂		

表22 1次遺物観察表(7)

図面 番号	検体 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	計測値 (mm)	計測値 (mm)	外面	調整 内面	底部	胎土	備考
						口径	底径	器高					
152	5	S T72	53	土師器	瓶		80	(21)	ナデ	ナデ		長石、石英、金雲母 中砂、細砂	底部に穴 (焼成前)
	6	S T72	44	土師器	甕	256	(106)		ロクロ、タタキ	ロクロ、ハケメ		長石、雲母、細砂	
	7	S T72-E L		土師器	甕	216	(108)		ロクロ、タタキ	ロクロ		長石、石英、雲母 海綿骨針、細砂	
	8	S T72-E P 230, E K 260		土師器	甕	234	(55)		ロクロ	ロクロ、オキメ		雲母、海綿骨針、細砂	
	9	S T72-E K 229		土師器	甕	186	(58)		ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ、オキメ		長石、金雲母 海綿骨針、細砂	
	10	S T72, 73		土師器	鉢	170	(48)		ロクロ、オキメ	ロクロ、オキメ		長石、雲母、金雲母 海綿骨針、細砂	
153	1	S T72-E P 245, E K 240	47	土師器	甕	140	92	134	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ		石英、雲母 海綿骨針、細砂	
	2	S T72-E K 227		土師器	甕	160	(96)		ロクロ、オキメ	ロクロ		長石、海綿骨針 粗砂、中砂	
	3	S T72, 73		土師器	甕	162	(84.5)		ロクロ	ロクロ		長石、雲母、金雲母 海綿骨針、細砂	
	4	S T72	47	土師器	甕	140	(43)		ロクロ	ロクロ		石英、金雲母、細砂	
	5	S T72-E K 233		土師器	甕	80	(50)		ヘラケズリ	ナデ		長石、石英 雲母、中砂	
	6	S T72	53	土師器	筒型 土器		(52)		ハケメ、ナデ	ハケメ		長石、中砂	
	7	S T72-E P 230, E K 229		須恵器	蓋	160	(21)		ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		石英、細砂	
	8	S T72	119	須恵器	蓋		(27)		ロクロ	ロクロ		海綿骨針、中砂	
	9	S T72	42	須恵器	杯	143	92	47.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	長石、石英 雲母、細砂	
	10	S T72, 19-19G	403	須恵器	杯	143	95	43	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針、細砂	内外面火傷
	11	S T72	47, 50	須恵器	杯	138	103	33	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	細砂	
	12	S T72	48	須恵器	杯	142	100	39	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	石英、中砂	内面スス付着
	13	S T72-E L		須恵器	杯	141	90	36.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	細砂	
154	1	S T72	45	須恵器	杯	140	102	32.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	細砂	
	2	S T72-E K 227		須恵器	杯	138	90	34	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	細砂	
	3	S T72		須恵器	杯	140	98	32	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	細砂	
	4	S T72	49	須恵器	杯	140	80	32	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	細砂	
	5	S T72-F, E L, E K 240		須恵器	杯	150	110	42.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	金雲母 海綿骨針、細砂	
	6	S T72-F	47	須恵器	杯	138	97.5	34	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	細砂	
	7	S T72-E K 233		須恵器	杯	146	90	33	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針、細砂	
	8	S T72		須恵器	杯	142	(38)		ロクロ	ロクロ		石英、細砂	
	9	S T72		須恵器	杯	152	(31.5)		ロクロ	ロクロ		長石、海綿骨針 細砂	
	10	S T72, 19-19G		須恵器	杯	82	(20)		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	雲母、細砂	
	11	S T72		須恵器	杯	86	(28)		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	長石、金雲母、細砂	
	12	S T72	41	須恵器	高台杯	116	72	48	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	細砂	
	13	S T72, 75		須恵器	高台杯	148	(38)		ロクロ	ロクロ		石英、中砂	
	14	S T72	50	須恵器	高台杯	134	(41)		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切 後調整	石英、海綿骨針、中砂	
	15	S T72		須恵器	高台杯		(36)		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	長石、海綿骨針、粗砂	
155	1	S T72-E L		須恵器	高台杯	100	(31)		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	石英、細砂	黒痕有り
	2	S T72-E K 233		須恵器	高台杯	70	(33)		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針、細砂	
	3	S T72	46	須恵器	椀	152	87	41.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	長石、海綿骨針、細砂	

表23 1次遺物観察表(8)

図録 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考	
						口径	底径						
155	4	S T 72, 19-22 G		須恵器	残塊	155	(50)	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ	回転ヘラ切	長石, 海綿骨針, 中砂		
	5	S T 72		須恵器	碗	164	(48)	ロクロ	ロクロ		石英, 粗砂		
	6	S T 72-F		須恵器	蓋		(57)	ロクロ	ロクロ		中砂		
	7	S T 72		須恵器	蓋		(78)	タタキ	アテ		粗砂		
	8	S T 73		土師器	蓋	82	(76)	ハケメ	ハケメ	木炭痕	長石, 粗砂		
	9	S T 73		須恵器	蓋		(22)	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		長石, 粗砂		
	10	S T 73, 19-19 G		須恵器	坏	142	88	42.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ケズリ調整	石英, 海綿骨針, 粗砂	内面火摩
	11	S T 73, 19-19 G		須恵器	坏	136	86	34.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針, 粗砂	内外面火摩
	12	S T 73		須恵器	坏		(33)	ロクロ	ロクロ		中砂		
	156	1	S T 20-E L	37	土師器	蓋	100	(51)	ヘラケズリ	ナデ		石英, 金雲母, 粗砂	
		2	S T 20-E L, 75, 184	37, 40 418	土師器	壺	424	(150)	ハケメ	ハケメ		長石, 粗砂	
		3	S T 20		土師器	壺	(41)	(21)	(23)	ナデ	ナデ		把手
4		S T 20, 72	37	須恵器	蓋	180	(20)	ロクロ	ロクロ		海綿骨針, 粗砂		
5		S T 20		須恵器	蓋	170	(14.5)	ロクロ	ロクロ		石英, 海綿骨針, 粗砂		
6		S T 20	39	須恵器	坏	148	100	37.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	粗砂	
7		S T 20		須恵器	坏	138	(33)	ロクロ	ロクロ		粗砂		
8		S T 20		須恵器	坏	146	(30.5)	ロクロ	ロクロ		粗砂		
9		S T 20	38	須恵器	坏	94	(30)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ケズリ調整	粗砂		
10		S T 20		須恵器	坏		(8)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 回転ヘラケズリ	長石, 粗砂		
11		S T 17		土師器	蓋	266	(54)	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ		長石, 粗砂		
12		S T 17	12	土師器	壺		(138)				長石, 海綿骨針, 粗砂		
157	1	S T 17	11	須恵器	坏	136	80	34.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	長石, 粗砂	火摩
	2	S T 17		須恵器	坏	136	101	32.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	粗砂	
	3	S T 17		須恵器	坏	138	90	32	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ケズリ調整	粗砂	
	4	S T 17		須恵器	坏	76	(21)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ケズリ調整	粗砂		
	5	S T 17		須恵器	坏	94	(10)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 回転ヘラケズリ	中砂	底部黒痕有	
	6	S T 135	275	土師器	坏	158	64	ヘラケズリ	ナデ		石英, 金雲母, 粗砂		
	7	S T 135		土師器	不明	101	(50.5)	ヘラミガキ	ヘラミガキ		長石, 海綿骨針 金雲母, 粗砂	内黒	
	8	S T 135		土師器	坏	149	(30)	ヘラミガキ	ヘラミガキ		石英, 海綿骨針, 粗砂		
	9	S T 135-E K315	350	土師器	坏	124	(30)	ヘラミガキ ヘラケズリ	ヘラミガキ		長石, 雲母 海綿骨針, 粗砂	内黒	
	10	S T 135	276	土師器	碗	147	66	97	ヘラナデ	ヘラミガキ	長石, 石英 中砂, 粗砂	内黒	
	11	S T 135, 182	276, 282 271, 279 286	土師器	蓋	206	(120)	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ		金雲母 海綿骨針, 粗砂		
	12	S T 135, 182	271, 316	土師器	蓋	94	(164)	ハケメ	ハケメ	木炭痕	海綿骨針, 粗砂		
158	1	S T 135	263	土師器	蓋	202	(132.5)	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ		海綿骨針, 粗砂		
	2	S T 135	280, 317	土師器	蓋	95	(161)	ハケメ	ハケメ	木炭痕	海綿骨針, 粗砂		
	3	S T 135	212, 267	土師器	蓋	229	91	304	ハケメ, ナデ	ナデ	木炭痕	海綿骨針, 粗砂	
	4	S T 135-E L	285	土師器	蓋	216	(200)	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ		長石, 中砂		

表24 1次遺物観察表(9)

図面 番号	探検 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	計測値 (mm)	外面	調整 内面	底部	胎土	備考
						口径	器高					
158	5	S T 135	277	土師器	甕	218	(131)	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ		長石, 中砂	
159	1	S T 135		土師器	甕	230	(120)	ハケメ, ナデ	ハケメ		長石, 細砂	
	2	S T 135-E L	284, 286	土師器	甕	83	(138)	ハケメ	ハケメ	木炭灰	中砂	
	3	S T 135	311	土師器	甕	100.5	(59)	ヘウナデ	ヘウナデ	木炭灰	長石, 雲母, 海綿骨針	
	4	S T 135		土師器	甕	86	(46)	ヘウナデ	ヘウナデ	木炭灰	石英, 雲母, 海綿骨針, 細砂	底部モミ灰
	5	S T 135		土師器	甕	100	(33)	ヘウナデ	ヘウナデ	木炭灰	海綿骨針, 細砂	
	6	S T 135		土師器	甕	144	(99)	ヘウナデ	ナデ		石英, 海綿骨針, 細砂	
	7	S T 135		土師器	コシムナデ 土器	62	30 48	ハケメ	ナデ		長石, 中砂	
	8	S T 135, 19 23-30G	283, 289 273	土師器	甕	234	76 356	ロクロ, ヘウナデ	ロクロ		金雲母, 細砂	
160	1	S T 135		土師器	甕	209	(300)	ロクロ, タタキ ヘウナデ	ロクロ, カキメ ヘウナデ		長石, 石英, 金雲母, 海綿骨針, 中砂	
	2	S T 135-E K344 178	285	土師器	甕	252	(212)	ロクロ, カキメ ヘウナデ	ロクロ, カキメ		金雲母, 細砂	
	3	S T 135	286	土師器	甕	212	(136)	ロクロ, カキメ ヘウナデ	ロクロ		石英, 雲母, 海綿骨針, 細砂	
	4	S T 135	285	土師器	甕	218	(188)	ロクロ, タタキ ヘウナデ	ロクロ ヘウナデ		長石, 金雲母, 細砂	
	5	S T 135, 178	272	土師器	甕	200	(167.5)	ロクロ, カキメ タタキ, ヘウナデ	ロクロ, カキメ		長石, 金雲母, 海綿骨針, 中砂	
	6	S T 135	283	土師器	甕	196	(126)	ロクロ, カキメ	ロクロ, カキメ ヘウナデ		長石, 金雲母, 細砂	
161	1	S T 135	262, 330	土師器	甕	220	(89)	ロクロ, タタキ	ロクロ		長石, 雲母, 海綿骨針, 中砂	
	2	S T 135	261, 280	土師器	甕	80	(158)	タタキ, ヘウナデ	ハケメ		長石, 海綿骨針, 細砂	
	3	S T 135		土師器	甕	72	(90)	ヘウナデ	ナデ		長石, 石英, 海綿骨針, 中砂	
	4	S T 135, 178 182		土師器	甕	130	76 118	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石, 金雲母, 海綿骨針, 細砂	
	5	S T 135	284	土師器	甕	72	(90)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	金雲母, 海綿骨針, 中砂	
	6	S T 135	309	土師器	甕	327	(205)	ロクロ, カキメ タタキ, ヘウナデ	ロクロ, カキメ ハケメ		長石, 金雲母, 細砂	
	7	S T 135	274	土師器	甕	194	84 108.5	ロクロ, ヘウナデ	ロクロ	回転ヘウ切後 手持ヘウナデ	長石, 石英, 雲母, 細砂	
162	1	S T 135	269	須恵器	蓋	138	38	ロクロ	ロクロ		長石, 細砂	底部黒青
	2	S T 135	278	須恵器	蓋	145	46	ロクロ 回転ヘウナデ	ロクロ		長石, 細砂	
	3	S T 135	268	須恵器	蓋	150	36.5	ロクロ 回転ヘウナデ	ロクロ		長石, 中砂	
	4	S T 135	287	須恵器	坏	124	74 30.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘウ切後 ケズリ調整	細砂	
	5	S T 135		須恵器	坏	140	86 35.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘウ切後 ナデ調整	中砂	
	6	S T 135		須恵器	坏	140	82 35	ロクロ	ロクロ	回転ヘウ切後 ケズリ調整	海綿骨針, 細砂	
	7	S T 135		須恵器	坏	76	(13)	ロクロ	ロクロ	回転ヘウ切	細砂	底部黒灰
	8	S T 135	314	須恵器	高台坏	130	90 46.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘウ切後 ケズリ調整	中砂	
	9	S T 135	264	須恵器	棧橋	139	82 50.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘウ切	長石, 海綿骨針, 中砂	
	10	S T 135-E K315	349	須恵器	棧橋	136	83.5 53	ロクロ	ロクロ	回転ヘウ切	長石, 中砂	
	11	S T 135		須恵器	塊	164	(53)	ロクロ	ロクロ		長石, 中砂	
	12	S T 135	331	須恵器	甕		(129)	タタキ			細砂	
163	1	S T 19		須恵器	坏		(13)	ロクロ	ロクロ	回転ヘウ切	細砂	底部黒青
	2	S T 19		須恵器	甕		(40)	タタキ	アテ		長石, 細砂	
	3	S T 18-E L		土師器	坏	128	33	ヘウナデ	ナデ		石英, 海綿骨針, 細砂	関東系土師器

表25 1次遺物観察表 (10)

図録 番号	採出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考
						口径 底径						
163	4	S T 18		土師器	坏		(31)	ナデ	ヘアミガキ		長石、石英、細砂	
	5	S T 18		土師器	甕	250	(208)	ハケム、ナデ	ハケム、ナデ		長石、粗砂	
	6	S T 18	130, 140	土師器	甕	205	(260)	ハケム、ナデ	ハケム、ナデ		石英、中砂	
	7	S T 18-E L	138	土師器	甕	132	90	142	ハケム、ナデ	ハケム、ナデ	本葉痕	石英、雲母 海綿骨針、粗砂
	8	S T 18	139	土師器	甕	220	67	324	ロクロ、ヘアケズリ	ロクロ、カキメ ハケム		長石、細砂
164	1	S T 18		土師器	甕	206	(95)	ロクロ、ヘアケズリ	ロクロ、カキメ ハケム		長石、金雲母 海綿骨針、中砂	
	2	S T 18-E L		土師器	甕	80	(71)	ヘアケズリ	ナデ		長石、金雲母 海綿骨針、中砂	
	3	S T 18	141	須恵器	坏	140	85	45	ロクロ	ロクロ	回転ヘア切後 ナデ調整	雲母、海綿骨針、粗砂
	4	S T 18		須恵器	坏	151	102	42.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘア切	長石、海綿骨針、粗砂
	5	S T 18-E L	142	須恵器	大甕		(156)	クサキ	アテ			細砂
	6	S T 113, 25-22G	178, 180	土師器	甕	202	82	301	ナデ、ヘアケズリ	ナデ	本葉痕	長石、細砂
	7	S T 113	185	土師器	甕	182	70	255	ナデ、ヘアケズリ	ナデ	本葉痕	長石、細砂
165	1	S T 113	179	土師器	甕	194	(104)	ナデ、ヘアケズリ	ナデ			雲母、海綿骨針、粗砂
	2	S T 113	392	土師器	甕	240	(70)	ヘアナデ、ナデ	ナデ			長石、雲母 海綿骨針、粗砂
	3	S T 113	184	土師器	甕	240	(60)	ハケム、ナデ	ハケム			長石、石英、細砂
	4	S T 113	184	土師器	甕	244	78	368	ロクロ、クサキ ヘアケズリ	ロクロ、カキメ ハケム		長石、金雲母 海綿骨針、粗砂
	5	S T 113	179, 180	土師器	甕	219	82	338	ロクロ、クサキ カキメ、ヘアケズリ	ロクロ、カキメ ハケム		長石、金雲母 海綿骨針、中砂
	6	S T 113	183, 184 295	土師器	甕	254	(158)	ロクロ、カキメ ヘアケズリ	ロクロ、カキメ			長石、海綿骨針、粗砂
166	1	S T 113-E L	182, 185	土師器	甕	204	(333)	ロクロ、ヘアケズリ	ロクロ			長石、雲母 海綿骨針、粗砂
	2	S T 113	186	土師器	甕	188	67	221	ロクロ、ヘアケズリ	ロクロ	ケズリ	長石、金雲母 海綿骨針、粗砂
	3	S T 113-E L 付近	182, 185	土師器	甕	195	60	223	ロクロ、ヘアケズリ	ロクロ、カキメ		長石、金雲母 海綿骨針、粗砂
	4	S T 113-Y	393	須恵器	蓋	136		29	ロクロ 回転ヘアケズリ	ロクロ		細砂
	5	S T 113-Y	394	須恵器	坏	147	100	39	ロクロ	ロクロ	回転ヘア切後 ケズリ調整	長石、細砂
	6	S T 113-Y	396	須恵器	坏	145	84	47	ロクロ、ヘアケズリ	ロクロ	回転ヘア切後 ナデ調整	長石、海綿骨針、中砂 火礫
	7	S T 112-E L		土師器	甕	102	(133)	ハケム	ハケム	本葉痕		石英、海綿骨針、粗砂
167	1	S T 111		土師器	甕	200	(71)	ハケム	ハケム			石英、海綿骨針、粗砂
	2	S T 111-E L		須恵器	坏	110	78	39	ロクロ	ロクロ	回転ヘア切	中砂
	3	S T 111	193	須恵器	坏	137	80	41	ロクロ	ロクロ	回転ヘア切後 ケズリ調整	長石、海綿骨針、中砂
	4	S T 114	7, 8	土師器	甕	237	110	359	ハケム、ナデ	ハケム	本葉痕	長石、石英、細砂
	5	S T 114	7, 8	土師器	甕	226	62	373	ロクロ、カキメ クサキ、ヘアケズリ	ロクロ、カキメ ハケム		長石、石英、金雲母 海綿骨針、粗砂
168	1	S T 114	7, 8 337	土師器	甕	230	(278.5)	ロクロ、カキメ クサキ、ヘアケズリ	ロクロ、カキメ			長石、海綿骨針、粗砂
	2	S T 114	7, 8	土師器	甕	174	(137)	ロクロ、ヘアケズリ	ロクロ			長石、石英 海綿骨針、粗砂
	3	S T 114	7, 8	土師器	甕	82	(113)	ロクロ	ロクロ			粗砂
	4	S T 114	7, 8	土師器	甕	142	68	130.5	ロクロ	ロクロ		石英、雲母 海綿骨針、粗砂
	5	S T 114	8	土師器	甕	80	(102)	ロクロ	ロクロ	回転糸切		金雲母 海綿骨針、粗砂
	6	S T 114	7, 8	土師器	甕	100	70	72	ロクロ 手持ヘアケズリ	ロクロ	回転ヘア切後 ケズリ調整	長石、海綿骨針、中砂
169	1	S T 115	334	須恵器	蓋	155		32	ロクロ	ロクロ		海綿骨針、粗砂



表26 1次遺物観察表 (11)

図面 番号	採出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	計測値 (mm)	計測値 (mm)	外面	調整 内面	底部	胎土	備考
						口径	底径	器高					
169	2	S T 115	335	須恵器	坏	140	78	33	ロクロ	ロクロ	回転へう切後 ナデ調整	長石、細砂	
	3	S T 115-E L	335	須恵器	坏	140.5	66	42.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂	
	4	S T 115	336	須恵器	甕			(127)	タタキ	アテ		細砂	
	5	S T 117		土師器	甕	84	(44.5)		ハケメ	ハケメ	木葉痕	中砂	
	6	S T 117		土師器	甕		(43.5)		ナデ	ナデ		長石、石英、細砂	
	7	S T 127-F		土師器	甕	221			ロクロ へうケズリ	ロクロ		長石、海綿骨針 細砂	
	8	S T 127-F		土師器	甕			(143)				金雲母、細砂	
	9	S T 127-F		須恵器	蓋	148		(26.5)	ロクロ 回転へうケズリ	ロクロ		海綿骨針、細砂	
	10	S T 127-F, 117		須恵器	坏			(35.5)	ロクロ	ロクロ	回転へう切後 ケズリ調整	石英、海綿骨針、細砂	
	11	S T 116	207	土師器	甕	242	88	295	ハケメ、ナデ	ハケメ		石英、雲母 海綿骨針、細砂	
170	1	S T 116-E L	206	土師器	甕	240		(69)				長石、石英 海綿骨針、細砂	
	2	S T 116-E L 184	206	土師器	甕			(243.5)	ロクロ、カキメ へうケズリ	ロクロ、カキメ		長石、金雲母、細砂	
	3	S T 116	210	須恵器	坏	110	77	40	ロクロ	ロクロ	回転へう切後 ケズリ調整	長石、石英 海綿骨針、細砂	
	4	S T 116		須恵器	坏	108	60	38.5	ロクロ	ロクロ	回転へう切後 ケズリ調整	海綿骨針、細砂	
	5	S T 116		須恵器	坏	139	92	30	ロクロ	ロクロ	回転へう切後 ケズリ調整	長石、石英、細砂	
	6	S T 116	208	須恵器	坏	133	90	38	ロクロ	ロクロ	回転へう切	細砂	
	7	S T 116	209	須恵器	坏	94	(25)		ロクロ	ロクロ	回転へう切後 ケズリ調整	長石、細砂	
	8	S T 118	205	土師器	甕	244		(134)	ロクロ、カキメ タタキ、へうケズリ	ロクロ、カキメ		金雲母 海綿骨針、細砂	
	9	S T 118	201	土師器	甕	224		(73)	ロクロ	ロクロ		長石、細砂	
	10	S T 118-E L	201	土師器	甕	220		(79)	ロクロ	ロクロ、カキメ		長石、金雲母 海綿骨針、細砂	
	11	S T 118		土師器	甕	232		(81)	ロクロ、カキメ	ロクロ、カキメ		金雲母 海綿骨針、細砂	
171	1	S T 118-E L	202	土師器	甕	156		(113)	ロクロ	ロクロ		長石、金雲母 海綿骨針、細砂	
	2	S T 118		土師器	罎or鉢	266		(90)	ロクロ、カキメ	ロクロ		長石、雲母 海綿骨針、細砂	
	3	S T 118		須恵器	蓋			(17.5)	ロクロ	ロクロ		長石、細砂	
	4	S T 118-E K		須恵器	坏			(36)	ロクロ	ロクロ		細砂	
	5	S T 118		須恵器	双耳坏			(19)				海綿骨針、細砂	
	6	S T 118		須恵器	甕			(44)	タタキ	アテ		長石、石英、細砂	
	7	S T 118		須恵器	甕			(83)	タタキ	アテ		細砂	
	8	S T 119		土師器	甕	66	(67)		ロクロ、へうケズリ	ロクロ、カキメ へうナデ		長石、金雲母、細砂 海綿骨針、中砂	
	9	S T 119-Y	177	土師器	甕	152		(124)	ロクロ	ロクロ		金雲母 海綿骨針、細砂	
	10	S T 123		土師器	甕	138	72	122	ハケメ、ナデ	ハケメ	木葉痕	石英、中砂	
	11	S T 123-E L	169	土師器	甕	226		(153)	ロクロ、タタキ へうケズリ	ロクロ、カキメ		金雲母 海綿骨針、細砂	
172	1	S T 123-E L	171	土師器	甕	84	(68)		へうケズリ	へうナデ		長石、石英、金雲母 海綿骨針、細砂	
	2	S T 123-E L	172	土師器	甕	139	66	135.5	ロクロ	ロクロ、カキメ		長石、石英 海綿骨針、細砂	
	3	S T 123	168, 170	土師器	甕	150	90	109	ロクロ	ロクロ		長石、海綿骨針、細砂	
	4	S T 123		須恵器	坏	142	98	42	ロクロ	ロクロ	回転へう切後 ケズリ調整	長石、石英、細砂	
	5	S T 123-E L	170, 171	須恵器	坏	143	72	40	ロクロ	ロクロ	回転へう切	長石、石英、細砂	

表27 1次遺物観察表 (12)

図録 番号	採掘 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考	
						口径	底径						
172	6	S T123		須恵器	坏	114	(41)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切長 ナデ調整	細砂	底部平肌	
	7	S T120-E K263	167	土師器	甕	240	(121)	ハケメ, ナデ	ハケメ		長石, 石英, 細砂		
	8	S T120-F, Y	167, 173	土師器	甕	236	(312)	ロクロ, カキメ ヘラケズリ	ロクロ		長石, 金雲母 海綿骨針, 粗砂		
	9	S T120	167	土師器	甕	204	(118)	ロクロ	ロクロ		長石, 金雲母 海綿骨針, 粗砂		
173	1	S T120-E K263	167	土師器	甕	76	(68)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石, 海綿骨針, 粗砂		
	2	S T120	167	土師器	甕		(85)	ロクロ	ロクロ		長石, 雲母, 細砂		
	3	S T120	174	須恵器	双耳坏	104	64	50	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針, 粗砂	
	4	S T121	176	土師器	坏	144	74	56	ナデ, ヘラケズリ	ヘラミガキ	手持ヘラケズリ	長石, 石英 雲母, 中砂	
	5	S T121	176	土師器	坏	110		49	ナデ, ヘラケズリ	ヘラミガキ	ケズリ	石英, 中砂	内黒
	6	S T121	175	土師器	甕	234	87	259.5	ナデ, ヘラケズリ	ナデ		長石, 石英, 粗砂	外面スス付着
	7	S T70		土師器	甕	156	(61)	ハケメ, ナデ	ナデ		細砂		
	8	S T70-E L, 31-31G	194	土師器	甕	426.5	(103)	ハケメ	ハケメ		石英, 中砂		
174	1	S T70	196	土師器	甕	284	(302)	ハケメ	ハケメ		長石, 石英, 雲母 海綿骨針, 粗砂		
	2	S T70, 69	196	土師器	甕	222	(207)	ロクロ	ロクロ		長石, 石英 海綿骨針, 粗砂		
	3	S T70-E L, 130, S D158		土師器	甕	240	(110)	ロクロ	ロクロ		長石, 金雲母, 粗砂		
	4	S T70		土師器	甕	231	(136)	ロクロ, ヘラケズリ	ロクロ		長石, 金雲母 海綿骨針, 粗砂		
	5	S T70	197	須恵器	坏	146	104	36	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切長 ナデ調整	細砂	
175	1	S T70	198	須恵器	坏	144	102	40	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切長 ナデ調整	細砂	
	2	S T70	199	須恵器	坏	146	76	44.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切長 ケズリ調整	海綿骨針, 粗砂	
	3	S T70-E L		須恵器	高台坏	113	76	41	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	海綿骨針, 粗砂	
	4	S T70-E L	195	須恵器	高台坏	118	(45)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	細砂		
	5	S T70, 69		須恵器	高台坏	100	(17)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	細砂		
	6	S T70		須恵器	甕		(56)	タチキ	アテ		細砂		
	7	S T130, 70		土師器	坏	140	95	43	ナデ, ヘラケズリ	ヘラミガキ		長石, 粗砂	内黒
	8	S T130		土師器	甕	133	(63)	ロクロ	ロクロ		長石, 海綿骨針, 粗砂		
	9	S T130	214	須恵器	坏	147	90	38	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切長 ケズリ調整	長石, 粗砂	
	10	S T133		須恵器	蓋	153	(14)	ロクロ	ロクロ		海綿骨針, 粗砂		
	11	S T133		須恵器	坏	102	(20)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	長石, 粗砂		
	12	S T63	245	土師器	甕	78	(61)	ハケメ	ハケメ		長石, 石英, 粗砂		
	13	S T63	242	土師器	甕	216	(125)	ロクロ, ヘラケズリ	ロクロ		金雲母 海綿骨針, 粗砂		
	14	S T63	236, 246	須恵器	蓋	143		31	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		長石, 粗砂	
	15	S T63	233, 234	須恵器	蓋	166		32	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		粗砂	
176	1	S T63	243	須恵器	蓋	152		31	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		長石, 粗砂	
	2	S T63	244	須恵器	蓋	155		26	ロクロ	ロクロ		石英, 海綿骨針, 中砂	
	3	S T63		須恵器	蓋	148	(25)	ロクロ	ロクロ		細砂	灯明皿に転用 か?	
	4	S T63	240	須恵器	蓋	151	(22.5)	ロクロ	ロクロ		細砂		
	5	S T63		須恵器	蓋	170	(27.5)	ロクロ	ロクロ		粗砂		

表28 1次遺物観察表 (13)

図面 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	計測 口径	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考	
176	6	S T63	234	須恵器	蓋	160	(22)	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ			細砂		
	7	S T63	239, 241	須恵器	坏	143	90	37	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針, 細砂		
	8	S T63	235	須恵器	坏	144	90	34.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	長石, 海綿骨針, 細砂		
	9	S T63		須恵器	坏	132	100	35	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ケズリ調整	海綿骨針, 細砂		
	10	S T63		須恵器	坏	142	84	37	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ケズリ調整	長石, 粗砂		
	11	S T63	237	須恵器	坏	130	102	42	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針, 細砂		
	12	S T63	238	須恵器	坏	148	80	40	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ケズリ調整	長石, 粗砂		
	13	S T63		須恵器	坏	146	80	45.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ケズリ調整	海綿骨針, 細砂		
	14	S T63		須恵器	坏	140	88	38	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	海綿骨針, 細砂		
	15	S T63	233, 240	須恵器	坏		80	(33.5)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針, 細砂		
	16	S T63		須恵器	坏		(43)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切		細砂		
	17	S T63	232	須恵器	高台坏	85	(25)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切		細砂		
	18	S T63		須恵器	甗	98	(50)	ロクロ	ロクロ			細砂		
	19	S T63		須恵器	甗		(32)	ロクロ	ロクロ			長石, 石英 海綿骨針, 細砂		
177	1	S T68-E L, 33-31G	221	土師器	甗	86	(235)	ハケメ	ハケメ	木炭痕		石英, 雲母, 細砂		
	2	S T68	218, 219	須恵器	横瓶	95	(205)	タタキ, カキメ	アテ, カキメ			細砂		
	3	S T68-E L	222	須恵器	甗	44	60	90	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針, 細砂		
	4	S T64-E L292, F	226	土師器	甗	142	84	134.5	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ	木炭痕か?	長石, 石英 雲母, 中砂		
	5	S T64-F		土師器	鉢	156	(66)	ナデ, ヘラケズリ	ヘラミガキ			長石, 雲母 海綿骨針, 細砂	内黒	
	6	S T64-F		土師器	鉢		(56)	ナデ, ヘラケズリ	ヘラミガキ			海綿骨針, 細砂	内黒	
	7	S T64-E L	225, 227	土師器	甗	192	(172)	ロクロ, タタキ ヘラケズリ	ロクロ, カキメ			石英, 金雲母 海綿骨針, 細砂		
178	1	S T64-E L	227	土師器	甗	110	(252, 5)	ロクロ, タタキ ヘラケズリ	ロクロ, カキメ			長石, 雲母 海綿骨針, 細砂		
	2	S T64-E L292	225	土師器	甗	80	(266)	ロクロ, ヘラケズリ	ロクロ, カキメ ハケメ		ヘラケズリ	石英, 金雲母 海綿骨針, 細砂		
	3	S T64-E L292	226	土師器	鉢	102	66.5	70	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ケズリ調整	石英, 雲母 海綿骨針, 細砂		
	4	S T64	223	須恵器	蓋	148	41.5	ロクロ	ロクロ			海綿骨針, 細砂		
	5	S T64-E L	247	須恵器	蓋	152	25	ロクロ	ロクロ			細砂		
	6	S T64-E L	224	須恵器	蓋	132	32	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ			海綿骨針, 細砂		
	7	S T64	228	須恵器	蓋	149	32	ロクロ	ロクロ			細砂		
	8	S T64-E L292		須恵器	蓋	149	34	ロクロ	ロクロ			細砂		
179	1	S T64-E L292	289	須恵器	坏	140	78	45	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ケズリ調整	石英, 雲母 海綿骨針, 細砂	内部指ナデ 調整	
	2	S T64	290	須恵器	坏	125.5	74	33	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ケズリ調整	長石, 石英 海綿骨針, 細砂		
	3	S T64		須恵器	坏	144	100	38	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	細砂		
	4	S T64		須恵器	坏	96	(27)	ロクロ	ロクロ			回転ヘラ切後 ケズリ調整	石英, 細砂	外面全面スス付着 石英塵混入か?
	5	S T64-E L292		須恵器	坏	86	(32)	ロクロ	ロクロ			回転ヘラ切後 ナデ調整	石英, 海綿骨針, 細砂	
	6	S T64		須恵器	坏	88	(25)	ロクロ	ロクロ			回転ヘラ切後 ナデ調整	細砂	
	7	S T64	230	須恵器	高台坏	130	72	44	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	細砂		
	8	S T64	231	須恵器	高台坏	102	66	53	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	細砂		

表29 1次遺物観察表 (14)

図録 番号	採出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考	
						口径 底径							
179	9	S T 64	229	須臾器	大甕	476	(124)	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ		長石、石英、細砂		
180	1	S T 65-E L 309, F	253	土師器	甕		(271.5)	ロクロ、タチキ ヘラケズリ	ロクロ、ハケメ カキメ		長石、石英、細砂		
	2	S T 65, 66		土師器	鉢	214	(120)	ナデ、ヘラケズリ	ヘラヒガキ		石英、雲母、中砂		
	3	S T 65	258	土師器	甕	240	(123)	ロクロ、カキメ ヘラケズリ	ロクロ		石英、金雲母 海綿骨針、細砂		
	4	S T 65	253	土師器	甕	236	(115)	ロクロ、カキメ タチキ、ヘラケズリ	ロクロ、カキメ		長石、金雲母 海綿骨針、細砂		
	5	S T 65-F	253	土師器	甕	248	(50)	ロクロ	ロクロ		金雲母、細砂		
	6	S T 65	252	土師器	甕	187	(108)	ロクロ	ロクロ		雲母、細砂		
	7	S T 65	257	土師器	甕		(83)	ロクロ	ロクロ		金雲母 海綿骨針、細砂		
	8	S T 65	252	土師器	甕	92	(40)	ナデ	ナデ		石英、細砂		
	9	S T 65	255	土師器	鉢	103	(66)	ロクロ	ロクロ		長石、石英 金雲母、細砂		
	10	S T 65	254	須臾器	蓋	132	32	ロクロ	ロクロ		細砂		
	11	S T 65	333	須臾器	蓋	151	25	ロクロ	ロクロ		細砂		
	12	S T 65		須臾器	蓋		(25)	ロクロ	ロクロ		石英、海綿骨針、細砂		
181	1	S T 65		須臾器	坏	130	76	40	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切 ナデ調整	海綿骨針、細砂	
	2	S T 65-E P 307	306	須臾器	坏	144.5	84	42.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂	底部黒着
	3	S T 65		須臾器	桃碗	134	88	47	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	細砂	
	4	S T 65		須臾器	高台坏	76	(27)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	海綿骨針、細砂		
	5	S T 65		須臾器	甕	178	(32)	ロクロ	ロクロ		細砂		
	6	S T 129, P 9		土師器	甕	76	(39)	ハケメ	ヘラナデ	本業直	長石、石英 雲母、細砂		
	7	S T 129, P 18	300	土師器	甕	200	(84)	ロクロ	ロクロ		金雲母 海綿骨針、細砂		
	8	S T 129-E L 293 P 18	299	土師器	甕	158	72	116	ロクロ	ロクロ	長石、金雲母 海綿骨針、中砂		
	9	S T 129	248	土師器	甕	146	(119)	ロクロ	ロクロ		長石、石英、金雲母 海綿骨針、細砂		
	10	S T 129	248	土師器	甕	147.5	(50.5)	ロクロ	ロクロ		金雲母 海綿骨針、細砂		
	11	S T 129	299	土師器	甕	76	(84)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石、石英 金雲母、細砂		
	12	S T 129	251	土師器	甕	78	(43)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石、石英 金雲母、中砂		
182	1	S T 129	324, 326	須臾器	坏	152	100	44	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	長石、石英 海綿骨針、細砂	
	2	S T 129	299	須臾器	坏	151	92	39	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切 タチキ調整	細砂	
	3	S T 129	299	須臾器	坏	136	67	42.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂	
	4	S T 129, P 1		須臾器	高台坏	84	(21)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂		
	5	S T 129	250	須臾器	双耳坏			ヘラケズリ			海綿骨針、細砂		
	6	S T 129		須臾器	長頸甕		(44)	ロクロ	ロクロ		細砂		
	7	S T 61		土師器	甕	116	(36)	ハケメ、ナデ	ナデ		雲母、細砂		
	8	S T 61		土師器	甕	158	(43)	ロクロ	ロクロ		海綿骨針、本粒		
	9	S T 61	372	須臾器	蓋	145	32	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		本粒		
	10	S T 61	371	須臾器	坏	146	100	38.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切 ナデ調整	海綿骨針	
	11	S T 61	373	須臾器	坏	146	84	41	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切 ナデ調整		
	12	S T 61	359	須臾器	坏	90	(26)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	海綿骨針		

表30 1次遺物観察表 (15)

図面 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考
						口径 底径						
182	13	S T61, 145, S P144	292	須恵器	甕		112 (256)	ロクロ, タタキ	ロクロ		硬	
183	1	S T16	15	土師器	甕	230	(128)	ロクロ, カキメ ヘラケズリ	ロクロ, カキメ ハケメ		海綿骨針, 白粒	
	2	S T16	20	土師器	甕	62	(105)	ヘラケズリ	ハケメ ヘラナデ			
	3	S T16-E L	14, 15	土師器	甕	137	68 117	ロクロ	ロクロ		雲母	
	4	S T16-E L	17	土師器	甕	156	(115)	ロクロ	ロクロ		雲母, 長石, 石英	
	5	S T16-E L	16	須恵器	蓋	131		ロクロ	ロクロ			
	6	S T16	21	須恵器	蓋	150		ロクロ	ロクロ		海綿骨針	
	7	S T16-E L	22	須恵器	蓋	142.5		ロクロ	ロクロ			
	8	S T16, T5, S T2F		須恵器	坏	132	88 32	ロクロ	ロクロ		回転ヘラ切	
9	S T16-E L	16	須恵器	高台坏	137	83 48.5	ロクロ	ロクロ		回転ヘラ切		
10	S T16	21	須恵器	甕		(42)	タタキ	アテ				
184	1	S T66-E L	320	土師器	坏	138	(48)	ナデ, ヘラケズリ	ヘラミガキ		赤粒	内黒
	2	S T66-E P310, E L		土師器	坏	105	66 36	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	赤粒	内黒
	3	S T66-E P311, F	322	須恵器	坏	136	40 37	ロクロ	ロクロ		回転ヘラ切後 手持ヘラケズリ	
	4	S T87		土師器	坏	170	(50)	ナデ, ヘラケズリ	ヘラミガキ			内黒
	5	S T87		土師器	甕	230	(141)	ハケメ, ナデ	ナデ			
	6	S T87		須恵器	甕		(147)	タタキ	アテ, オキエ			赤粒
	7	S T178	262, 312	土師器	甕	191	(125)	ロクロ, ヘラケズリ	ロクロ		雲母, 石英	
	8	S T178-E K344		土師器	甕	212	(48)	ロクロ	ロクロ, カキメ			
	9	S T178-E K315	360, 361	須恵器	棧椀	145	84 56	ロクロ	ロクロ		回転ヘラ切	
185	1	S T186		土師器	坏	160	80 39	ナデ, ヘラケズリ	ナデ			関東系土師器
	2	S T186	426	土師器	坏	150	42.5	ナデ, ヘラケズリ	ヘラナデ		石英	関東系土師器
	3	S T186, 16-19G		土師器	坏	142	47	ナデ, ヘラケズリ	ヘラミガキ			内黒
	4	S T186		土師器	坏	146	(43)	ナデ, ヘラケズリ	ナデ		石英	関東系土師器
	5	S T186	409, 410 412	土師器	甕	217	90 266	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ		木葉痕	
	6	S T186, 17-18G	423	土師器	甕	170.5	86 240	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ		木葉痕	輪結
	7	S T186	411, 417	土師器	甕	230	(205)	ハケメ, ナデ	ハケメ			
186	1	S T186	428	土師器	甕	200	(94)	ハケメ	ハケメ		石英	
	2	S T186-E L	422, 423 424	土師器	甕	89	161.5	ハケメ	ハケメ		木葉痕	
	3	S T186	380	土師器	甕	102	(60)	ハケメ	ハケメ		木葉痕	
	4	S T186	381	土師器	甕	88	(24)	ハケメ	ナデ		木葉痕	
	5	S T186	387	須恵器	蓋	170	20	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		白粒	
	6	S T186	420	須恵器	坏	144	96 36.5	ロクロ	ロクロ		回転ヘラ切	
	7	S T186, 17-19G		須恵器	坏	130	90 37.5	ロクロ	ロクロ		回転ヘラ切	
	8	S T186	379	須恵器	坏	146	88 39	ロクロ	ロクロ		回転糸切後 回転ヘラケズリ	
	9	S T186	378	須恵器	高台坏	145	92 51	ロクロ	ロクロ		回転糸切	白粒
	10	S T186		須恵器	甕		(124)	ロクロ, 流状文	ロクロ			

表31 1次遺物観察表 (16)

図録 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	口徑	底径	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考
186	11	S T186	390,382	須恵器	壺		85	(201)		ロクロ		ロクロ		
187	1	S D125, 29-26G	192	須恵器	蓋	150		(20.5)		ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		海綿骨針	
	2	S D125	192	須恵器	高台坏	118	64	49		ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針	
	3	S D126		土師器	蓋	230		(117)		ロクロ, カキメ ヘラケズリ	ロクロ			
	4	S D126		土師器	蓋	152		(40)		ロクロ	ロクロ			
	5	S D126	204	須恵器	坏	154	83	40		ロクロ	ロクロ	回転糸切		灯明皿転用?
	6	S D126		須恵器	蓋			(85)		タチキ	アテ			
	7	S D158	295	須恵器	高台坏	146	97	47		ロクロ	ロクロ	回転糸切		
8	S E80-F2		須恵器	高台坏		88	(17)		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切			
9	S H179	345	土師器	蓋	240		(383)		ハケメ, ナデ	ハケメ				
188	1	S H179	346	土師器	蓋	192		(305)		ロクロ, ヘラケズリ	ロクロ			
	2	S H179	347	土師器	壺	340		(100)		ロクロ, ヘラケズリ	ロクロ		海綿骨針	
	3	S K90, 粗製		土師器	坏	126	52	39		ロクロ	ロクロ	回転糸切		
	4	S K90, 粗製		土師器	坏	128	56	45		ロクロ	ロクロ	回転糸切		
	5	S K90		土師器	坏	128	60	40.5		ロクロ	ロクロ	回転糸切		
	6	S K90, 粗製		土師器	高台坏	166	73	63		ロクロ	ロクロ	回転糸切		
	7	S K90, 4-4G, 粗製		土師器	高台坏	154		(67)		ロクロ	ロクロ	回転糸切		
189	1	S K90, 3-3G, 粗製		土師器	高台坏	65	(69.5)		ロクロ	ロクロ	回転糸切			
	2	S K90		土師器	高台坏	162	69	53		ロクロ	ロクロ	回転糸切後 ナデ調整		内黒
	3	S K90		須恵器	坏	134	54	45		ロクロ	ロクロ	回転糸切		底部黒書
	4	S K90, 粗製		須恵器	坏	140	61	42.5		ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針	
	5	S K90, 3-3G, 粗製		須恵器	坏	130	56	40		ロクロ	ロクロ	回転糸切		底部黒肌
	6	S K90		須恵器	坏	138	60	49		ロクロ	ロクロ	回転糸切		
	7	S K90, 粗製		須恵器	高台坏	154	69	60.5		ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針	
	8	S K90, 粗製, 4-4G		須恵器	高台坏	136	68	68.5		ロクロ	ロクロ	回転糸切		
	9	S K160	294	須恵器	高台坏	152	96	53		ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針, 赤粒	
	10	S K309	406	須恵器	高台坏	134	85	56		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切		全体に 輪かかる
	11	S K309	406	須恵器	高台坏	125		(41)		ロクロ	ロクロ		海綿骨針	
190	1	S X79		土師器	高台坏	90	(25.5)			ヘラミガキ			内黒	
	2	S X79		土師器	蓋	173		(137)		ロクロ, ヘラケズリ	ロクロ			
	3	S X79		須恵器	坏	132	68	40		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切		
	4	S X89		土師器	壺	420		(159)		ハケメ, カキメ	ハケメ, カキメ			
	5	S X307		土師器	坏			(23)		ナデ	ナデ			
	6	S X307	435	土師器	蓋	70		(17)		ナデ	ヘラミガキ	木製肌		内黒
	7	S X307, 15-16G		土師器	蓋	162		(35)		ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ ヘラミガキ			内黒
	8	S X307		土師器	双耳坏			(23.5)		ヘラケズリ				
	9	S X307	439	土師器	蓋	42		(73)		ヘラケズリ	ハケメ			

表32 1次遺物観察表 (17)

図録 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	計測値 口径	計測値 底径	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考
191	1	S X507	434	土師器	甕	106	66	82	ロクロ	ロクロ			石英	
	2	S X507		須恵器	坏	137	78	30	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切			底部黒青
	3	S X507	433	須恵器	坏	144	78	49	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切			底部黒青
	4	S X507	437	須恵器	坏	138	80	36	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切			
	5	S X507		須恵器	坏	150	84	42	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切			
	6	S X507, 14-16G	440	須恵器	坏	136.5	72	41.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切		白枝	
	7	S X507, 14-15-16G		須恵器	坏	128	65	35.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切			
	8	S X507		須恵器	坏	140	72	43.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切			海綿骨針
	9	S X507, 15-16G		須恵器	坏	136		(36)	ロクロ	ロクロ				海綿骨針
	10	S X507		須恵器	甕			(47)						
192	1	11-13G	156	土師器	坏	202		56	ナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ			内黒
	2	25-23G		土師器	坏	132	70	41	ナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ			海綿骨針	内黒
	3	28-29G	339	土師器	甕	142.5	20	160	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ				底部外面 火はね
	4	10-14G	158	土師器	甕	162		(55)						折返口縁
	5	38-37G		土師器	甕			(36)	ハケメ	ナデ				
	6	46-37G		土師器	台付鉢	110		(63)	ヘラミガキ	ヘラミガキ				
	7	粗甕	329	土師器	甕	106	70	78	ナデ	ナデ	木葉肌			
	8	43-36G		土師器	ニナメア 土器	61	30	23	ヘラミガキ	ヘラミガキ			海綿骨針	
	9	粗甕		土師器	高台坏	158	74	71	ロクロ	ヘラミガキ	回転糸切			内黒
	10	26-23G		須恵器	蓋	144		32	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ				
	11	14-13G		須恵器	坏	138	98	32.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切			
	12	14-13G		須恵器	高台坏	93	72	30.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切			海綿骨針
	13	52-30G	3	須恵器	甕	53		(74)	ロクロ	ロクロ	回転糸切			

表33 1次土製品観察表

図版番号	神図番号	出土地点	登録番号	種類	長さ	計測値 (mm)		胎土	備考
						幅	厚さ		
193	1	S T 186	383	土鉢	40	14.5	14.5		
	2	X O 粗瓶		土鉢	38	12.5	13	海綿骨針	
	3	42-38G		土玉	33.5	33	28	海綿骨針	
	4	42-38G		土玉	34	36	29		
	5	42-38G		土玉	30	35	27		
	6	16-15G		羽口	43	33.5	16		
	7	S T 85		羽口	95	49	41		

表34 1次石製品観察表

図版番号	神図番号	出土地点	登録番号	種類	長さ	計測値 (mm)		備考
						幅	厚さ	
193	8	8-10G		砥石	(102)	46	25.5	
	9	57-43G		硯	(31)	(30)	10	

表35 1次金属製品観察表

図版番号	神図番号	出土遺構	登録番号	器種	長さ	計測値 (mm)		重量 (g)	備考
						幅	厚さ		
193	10	S T 5	150, 150B	鉢	180	38	3	41.0	
	11	S T 5	149	鉄芥	113	40	14	121.2	
	12	50-38G		鉄鏃	167	15	5	10.6	
	13	S T 182	369	鉄鏃	94.5	12	5	3.8	
	14	S T 6		鉄鏃	26		3	2.1	
	15	S T 135	288	鉄鏃	85	14	4	4.8	
	16	S T 4	136	鉄鏃	93	15	8	10.9	
	17	15-16G		不明	89	6.5	3.5	3.2	
	18	7-10G		不明	89.5	6	5.5	4.8	
	19	S T 18		環状金具	22.5	36.5		2.2	
	20	S T 129	296	鉄滓	39	48	14.2	35.8	



表36 2次遺物観察表(1)

図面 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	計測値 (mm)	外面	調整 内面	底部	胎土	備考
						口径	底径					
194	1	S T 535-E L		土師器	甕	84	(172)	ロクロ,ヘラケズリ	ロクロ			
	2	S T 535-F 1	464	土師器	甕	126	80	122	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
	3	S T 535-E L 北, Y		土師器	甕	90	(86)	ロクロ,ヘラケズリ	ロクロ	回転糸切		
	4	S T 535-F 1	463	須恵器	蓋	142		ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ	回転糸切	石英,海綿骨針	
	5	S T 535-E L, F 1		須恵器	坏	143	72	40.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針,粗砂
	6	S T 535-E L, F 3, Y	503	須恵器	坏	136	86	34	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	長石,石英,粗砂
	7	S T 535-F 1	466	須恵器	坏	144	59	40	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針,粗砂
	8	S T 535-F 1	468	須恵器	坏	138	68	36	ロクロ	ロクロ	回転糸切	中砂
	9	S T 535-F 1	469	須恵器	坏	134	62	40	ロクロ	ロクロ	回転糸切	石英,海綿骨針
	10	S T 535-F		須恵器	高台坏	143	88	54	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	
	11	S T 535-F 1	467	須恵器	高台坏	126	74	43	ロクロ	ロクロ	回転糸切	中砂
195	1	S T 535-E K 6		須恵器	甕	90	(93.5)	ロクロ	ロクロ			長石,海綿骨針,粗砂
	2	S T 549-Y	460,505	土師器	坏	158		49	ハケメ,ナデ	ヘラミガキ		長石,石英,金雲母 内黒
	3	S T 549-Y	505	土師器	坏	140		52	ハケメ,ナデ	ヘラミガキ		長石,石英,中砂 内黒
	4	S T 549-Y	461	土師器	甕	147		(97)	ハケメ,ナデ	ハケメ		石英,雲母,粗砂 輪楕痕
	5	S T 549-Y		土師器	甕	202		(71.5)	ハケメ,ナデ	ハケメ		長石,石英,粗砂
	6	S T 549-Y, Y 2, E K, I F		土師器	甕			(197.5)	ハケメ	ハケメ		長石,石英,雲母 金雲母,中砂
	7	S T 549	439	土師器	甕	136	54	157	ナデ,ヘラナデ	ナデ		長石,石英 雲母,粗砂
	8	S T 558-E L, F, Y, E K 6, E K 6 Y	449	土師器	甕	136.5	84	124	ハケメ,ナデ 指サエ	ナデ	木葉痕	長石,石英,粗砂
	9	S T 558-E L	449	土師器	甕	224		(147)	ロクロ,ヘラケズリ	ロクロ		長石,金雲母,粗砂
196	1	S T 558-Y	456	土師器	甕	54	(287)	ロクロ,ガキメ ヘラケズリ	ロクロ			長石,金雲母,中砂
	2	S T 558-E L, F, Y E K 6, E K 6 Y	449	土師器	甕	130	62	127	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石,石英,雲母 金雲母,中砂
	3	S T 558-E K 6 Y, E K 5	449,307	土師器	甕	84	(103)	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	回転糸切	長石,金雲母,中砂	
	4	S T 558-F E P 2, E K 3 F		土師器	甕	75	(73)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	金雲母,海綿骨針	
	5	S T 558-E P 1	457	須恵器	高台坏	138	76	78	ロクロ	ロクロ	回転糸切	石英,海綿骨針 中砂
	6	S T 558	451	須恵器	高台坏	126	72.5	48	ロクロ	ロクロ	回転糸切	石英,粗砂
	7	S T 558-F		須恵器	甕	66	(82)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石,海綿骨針	
	8	S T 558	450	須恵器	小甕	52	(56)	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針,中砂	
197	1	S T 551-E P 1		土師器	甕 or 鉢	140		(71)	ナデ,ヘラナデ	ナデ,ヘラナデ		長石,粗砂
	2	S T 551-F, E P 1		土師器	甕	224		(121)	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ		長石,雲母 海綿骨針
	3	S T 551-F, Y		須恵器	坏	130	78	33	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	長石,海綿骨針 火輝
	4	S T 551-F		須恵器	甕		(142)	ロクロ,ガキメ	ロクロ,ガキメ			長石,石英 海綿骨針
	5	S T 550-E L	506	土師器	甕	216		(220)	ハケメ,ナデ	ハケメ,ナデ		雲母,金雲母,粗砂
	6	S T 550-Y, E P 1, E L, F	507	土師器	甕	223		(147)	ハケメ,ナデ	ハケメ,ナデ		雲母,金雲母
198	1	S T 550-E L, E P 1	544,607	土師器	甕	88	(275)	ハケメ	ハケメ	木葉痕		長石,雲母,金雲母
	2	S T 550-E L, E P 1	542	土師器	甕	218	60	327	ロクロ,タタキ ヘラケズリ	ロクロ ガキメ		長石,金雲母,粗砂
	3	S T 550-E L	543	土師器	甕	223	75	352	ロクロ,ガキメ ヘラケズリ	ロクロ ガキメ		長石,金雲母 海綿骨針,粗砂

表37 2次遺物観察表(2)

図録 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考	
						口径 底径							
198	4	ST550-E L	541	土師器	甕	198	(198)	ロクロ, タチキ カキメ, ヘラケズリ	ロクロ, カキメ		長石, 石英 雲母, 金雲母, 細砂		
199	1	ST550-E P1, Y, E L		土師器	甕	153	78	135	ロクロ	回転糸切	長石, 石英 金雲母, 中砂		
	2	ST550-E P1, E L, Y		土師器	甕	162		(93)	ロクロ	ロクロ	雲母, 金雲母, 細砂		
	3	ST550-F1		土師器	直径30								
	4	ST550-F	547	須恵器	蓋	140		33	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針, 中砂	
	5	ST550-F, Y	548	須恵器	坏	156	84	46.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 十字調整	長石, 石英, 中砂	
	6	ST550-F		須恵器	坏	148	86	35	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 十字調整	中砂	
	7	ST550-F	550	須恵器	坏	130	76	30	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 十字調整	細砂	
	8	ST550-F	546	須恵器	坏	134	74	33	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 十字調整	長石, 中砂	
	9	ST550-F	545	須恵器	坏	146	71	38.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	底部胎土 転用磁土	
	10	ST550-F, Y, E L	539, 540	須恵器	坏	141	71	38.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石, 粗砂	底部胎土
	11	ST550-F, E L		須恵器	坏	134	72	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	粗砂	
200	1	ST550-F	538	須恵器	坏	140	60	39	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂	
	2	ST550-F		須恵器	坏	140		(36.5)	ロクロ	ロクロ		海綿骨針	
	3	ST550-F, Y	549	須恵器	甕			(68.5)	カキメ, タチキ	アテ		中砂	
	4	ST550-F, Y		須恵器	甕			(250)	タチキ	アテ			
	5	ST635-F	512	土師器	坏	128	50	47	ロクロ	ロクロ	回転糸切	石英, 雲母	
	6	ST554-F		土師器	甕	218		(128)	ロクロ, タチキ	ロクロ, カキメ		金雲母, 海綿骨針	
	7	ST554-F		須恵器	坏	130	59	35	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針	底部胎土
201	1	ST554-F, 535-F		須恵器	坏	142	78	39.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	石英, 海綿骨針	
	2	ST554-F		須恵器	坏			(10.5)			回転糸切	底部胎土	
	3	ST554-F, Y		須恵器	甕			(28)					
	4	ST554-Y, F, 539-F		須恵器	甕			(63)	タチキ	アテ			
	5	ST555-E P5, E P3 Y	616	土師器	甕	225		(55)	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ		細砂	
	6	ST555	509	土師器	甕	222	83	337	ロクロ, ヘラケズリ	ロクロ		長石, 金雲母 海綿骨針	
	7	ST555-F, E L539	510, 524 528, 529	土師器	甕	218	77	352	ロクロ, ヘラケズリ	ロクロ		金雲母	
202	1	ST555-F, 554-F, E L	510, 524 525, 527	土師器	甕	220	85	288	ロクロ, ヘラケズリ	ロクロ		金雲母, 長石	
	2	ST555-E L, F, 554-E L	510, 524 528, 527	土師器	甕	228		(309)	ロクロ, ヘラケズリ	ロクロ, 指痕		金雲母, 長石	
	3	ST555-F, 554-E L	511	土師器	甕	214		(199)	ロクロ, タチキ カキメ, ヘラケズリ	ロクロ, ハケメ		長石, 石英 金雲母, 海綿骨針	
	4	ST555-F	510, 529	土師器	甕	260		(97)	ロクロ	ロクロ		長石, 金雲母 海綿骨針	
	5	ST555-F, 554-F		土師器	甕	224		(70)	ロクロ	ロクロ		金雲母	
	6	ST555	511	土師器	甕	82		(115)	ヘラケズリ	ハケメ		金雲母, 海綿骨針	
203	1	ST555-F, E L539 554-E L	510	土師器	甕	133		(130)	ロクロ	ロクロ		金雲母, 細砂	
	2	ST555-F, 554-E L, X O	511	土師器	甕	130		(96)	ロクロ	ロクロ		長石, 金雲母	
	3	ST555-E L539F		土師器	甕	318		(123)	ロクロ, カキメ ヘラケズリ	ロクロ, カキメ		長石, 金雲母	
	4	ST555-E P2	614	須恵器	坏	148	80	56	ロクロ	ロクロ			
	5	ST555-E L, F, 554-E L		須恵器	甕	187		(57)	ロクロ	ロクロ			

表38 2次遺物観察表(3)

図面 番号	探検 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値(mm)	計測値(mm)	外面	調整 内面	胎土	備考		
						口径	底径						
203	6	S T 555-E L 539	530	須恵器	甕		(115.5)	タナキ	ナデ	中砂			
	7	S T 618-F		土師器	坏	163	(43)	ナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ	金雲母、海綿骨針	内黒		
	8	S T 618-F		須恵器	蓋	142	(27)	ロクロ	ロクロ				
	9	S T 618-F		須恵器	横瓶		(99)	ロクロ	ロクロ	長石	閉鎖部分		
	10	S T 651-Y, 555-Y		土師器	坏	110	37	ヘラミガキ、ナデ	ヘラミガキ		内黒		
	11	S T 651, 555-E P 5, F	616	土師器	甕	208	(187)	ハケム、ナデ	ハケム、ナデ	長石、石英、中砂			
204	1	S T 651	617	須恵器	坏	140	88	42.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針、中砂	底部火押
	2	S T 651		須恵器	坏	130	68	33.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	長石	
	3	S T 651		須恵器	甕	308	(113.5)	ロクロ、波状文	ロクロ				
	4	S T 553-Y	531	土師器	甕	220	57	355	ロクロ、タナキ カキメ、ヘラケズリ	ロクロ		長石、粗砂	
	5	S T 553-E L, Y	533	土師器	甕	224	(218)	ロクロ、タナキ カキメ	ロクロ、ハケム カキメ		雲母、金雲母、石英		
	6	S T 553-E L		須恵器	蓋	132	(24)	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		中砂		
	7	S T 553	532	須恵器	坏	130	78	39	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	長石、海綿骨針	底部線刻
206	1	S T 648-Y		土師器	甕		(48.5)	ロクロ、カキメ	ロクロ		長石、金雲母 海綿骨針		
	2	S T 584-E L, F 40-36G, 40-37G		土師器	甕	149	65	131	ハケム、ナデ	ヘラナデ			
	3	S T 584-Y		土師器	甕	246	(120)	ハケム、ナデ	ハケム		雲母、粗砂		
	4	S T 584-Y	486	土師器	甕	230	(67)	ロクロ	ロクロ		金雲母、海綿骨針 粗砂		
	5	S T 584-E L, Y, F		須恵器	高台坏	133	89	43.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	中砂	
	6	S T 584-F	455	須恵器	甕		(146.5)	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、粗砂		
	7	S T 574-Y	554	土師器	高坏	150	98	95	ハケム、ナデ ヘラケズリ	ヘラナデ ヘラミガキ		長石、石英、粗砂	内黒
	8	S T 574 42-36G	520	土師器	甕	214	50	298	ハケム、ナデ ヘラケズリ	ヘラナデ		長石、石英 金雲母、中砂	輪線痕
206	1	S T 574-E L	556	土師器	甕	201	64	317	ナデ、ハケム ヘラケズリ	ハケム、ナデ		長石、石英、粗砂	
	2	S T 574	521	土師器	甕	200	68	310	ハケム、ナデ	ナデ	木葉痕	長石、石英 雲母、金雲母	
	3	S T 574-E L	557	土師器	甕	198	60	189	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヘラナデ		長石、粗砂	
	4	S T 574-E L	555	土師器	甕	167	72	192	ナデ、ヘラナデ	ナデ、ヘラナデ	木葉痕	石英、粗砂	
207	1	S T 574-F	522	土師器	甕	211	(219)	ナデ、ハケム ヘラケズリ	ナデ、ヘラナデ		粗砂		
	2	S T 574-Y	552	土師器	甕	191	(93.5)	ハケム	ハケム		長石、雲母		
	3	S T 574-Y	552	土師器	鉢	140	(90)		ナデ		中砂		
	4	S T 574-Y	522	土師器	鉢	164	(94)	ナデ、ヘラケズリ	ナデ		長石、金雲母、中砂		
	5	S T 574-F		土師器	瓶	52	(152)	ハケム ヘラケズリ			長石、雲母 金雲母、中砂		
	6	S T 612-Y, E L		土師器	甕	248	(92)	ハケム、ナデ	ハケム		石英、海綿骨針	輪線痕	
	7	S T 612-Y	537	須恵器	蓋	144	28	ロクロ	ロクロ		海綿骨針、粗砂		
	8	S T 612-Y	536	須恵器	蓋	141	25	ロクロ	ロクロ		粗砂	割書	
	9	S T 612-F	560	須恵器	坏	146	100	35	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	長石、海綿骨針	
	10	S T 612-Y	535	須恵器	坏	150	110	38.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	石英、海綿骨針	
208	1	S T 614-E L	633	土師器	甕	136	70	136	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石、雲母、粗砂	煤
	2	S T 614-F		須恵器	坏	140	74	33.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	中砂	

表39 2次遺物観察表(4)

図録 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考	
						口径	底径						
208	3	S T 614-F, 615-F, 617		須恵器	坏	142	66	36	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	海綿骨針	
	4	S T 614	632	須恵器	坏	132	60	36.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂	
	5	S T 614	630	須恵器	坏		76	(29)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂	
	6	S T 615-F, E K, E K 5	703	土師器	坏	142		45	ナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ		長石、石英、中砂	内黒
	7	S T 615-F		土師器	坏	132		(38)	ナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ		長石	内黒
	8	S T 615-F		土師器	坏	148		(43)	ナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ		長石、石英 雲母、金雲母	内黒
	9	S T 615-F		土師器	坏	160	100	39.5	ナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ		細砂	内黒
	10	S T 615-F		土師器	坏	142		(45)	ナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ		細砂	内黒
	11	S T 615-Y		土師器	坏			(41)	ナデ	ヘラミガキ			内黒
	12	S T 615	561	土師器	坏	210	74	90	ナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ		長石、石英、中砂	内黒
	13	S T 615	565	土師器	甕	210	52	355	ナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ、ナデ		長石、石英、中砂	間取系土師器
209	1	S T 615-F	564	土師器	甕	170		(194)	ハケメ、ナデ	ハケメ		粗砂	
	2	S T 615-E P 1, F	716	土師器	甕		68	(186.5)	ハケメ	ナデ		石英、雲母	輪楕痕、煤
	3	S T 589-E L		土師器	坏	130		46	ナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ		金雲母	内黒
	4	S T 589-E L		土師器	坏	132		(39)	ナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ		長石、雲母、細砂	内黒
	5	S T 589 F, 614 F		土師器	坏	140		(36)	ナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ		細砂	内黒
	6	S T 590	658	須恵器	高台坏	158	56	74	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針	
	7	S T 588-F		土師器	甕	250		(88.5)	ロクロ、ホキメ ヘラケズリ	ロクロ、ホキメ ハケメ		長石、雲母、中砂	
	8	S T 588-F		須恵器	不明	98		(59)	ロクロ	ロクロ		石英、粗砂	
	9	S T 586-F, Y		土師器	甕	248		(307)	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ		石英、雲母、細砂	
210	1	S T 586-E L 1		土師器	甕	169		(178)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ		長石、金雲母	
	2	S T 586-E L 1, Y	508	土師器	甕	136		(137)	ハケメ、ナデ	ヘラナデ		長石、雲母、中砂	
	3	S T 586-F		土師器	甕	107		(53.5)	ハケメ、ナデ	ナデ		長石、石英、金雲母	
	4	S T 586-Y		土師器	ニナフ 土器		38	(20.5)	ナデ	ナデ		石英、雲母	
	5	S T 586	559	須恵器	坏	152	86	37	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	石英、雲母	底部黒書
	6	S T 586-Y		須恵器	甕	176		(74)	ロクロ	ロクロ		中砂	
	7	S T 582-F	483	土師器	甕	270		(160)	ハケメ、ナデ	ハケメ		中砂	
	8	S T 582		土師器	甕		(287)	ハケメ	ハケメ			雲母、中砂	輪楕痕
211	1	S T 582-F	484	土師器	甕	94		(232)	ハケメ	ハケメ	本葉痕	雲母、細砂	
	2	S T 582, 42-36G 43-36G		土師器	甕	154		(125)	ナデ	ナデ		長石、雲母、粗砂	輪楕痕
	3	S T 582-F, 44-36G		土師器	ニナフ 土器		(34)	ナデ	ナデ			中砂	
	4	S T 582-E P 2	509	須恵器	坏	140	70	41	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針	
	5	S T 582-F		須恵器	坏	150	78	49	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂	
	6	S T 582-F		須恵器	坏	142	80	39.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂	
	7	S T 582-E P 1	498	須恵器	高台坏	140	86	49.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	石英、海綿骨針 細砂	
	8	S T 616-F, Y	603, 618	土師器	甕	254		(193)	ハケメ、ナデ	ハケメ		粗砂	
	9	S T 616-F S X 649-F		須恵器	坏	146	80	35	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	細砂	

表40 2次遺物観察表(5)

図面 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考	
						口径 底径							
211	10	S T616	606	須恵器	壺		105 (87)	ロクロ		ロクロ	細砂		
212	1	S T617-F, E L	591	土師器	甕	240	(293)	ハケム, ナデ	ハケム, ナデ		長石, 細砂	輪痕直	
	2	S T617	602	土師器	坏	136 64	47	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石, 石英 海綿骨針, 細砂		
	3	S T621		須恵器	坏	50	(26)	ロクロ, ナデ	ロクロ	回転ヘラ切	海綿骨針, 細砂		
	4	S T621		須恵器	高台坏	72	(26)	ロクロ	ロクロ		細砂		
	5	S T619-F, 43-40G	570	土師器	甕		(257)	ヘラケズリ	ハケム			長石, 石英, 中砂	
6	S T619-E L		須恵器	高台坏	150	(43)	ロクロ	ロクロ	回転糸切		長石, 中砂		
213	1	S T619	592	土師器	甕	284	(186)	ロクロ, ナデ ヘラケズリ	ロクロ			長石, 石英 金雲母, 細砂	
	2	S T620-F		土師器	甕	230	(84)	ヘラナデ	ヘラナデ			石英, 雲母, 細砂	
	3	S T620-Y, 616	677	須恵器	蓋		(20)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針, 細砂		
	4	S T620-F		須恵器	蓋	142	(26)	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		海綿骨針, 細砂		
	5	S T620-E L	595	須恵器	坏	135 72	35	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石, 海綿骨針 細砂	底部黒青	
	6	S T620-E L, F	594	須恵器	坏	150 70	38	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針, 細砂		
	7	S T620-F		須恵器	坏	146 74	40.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針, 細砂		
	8	S T620-F		須恵器	坏	140 74	43	ロクロ, ナデ	ロクロ			細砂	
	9	S T620-F, 621		須恵器	坏	136 77	37.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切		中砂	
	10	S T620-Y	678	須恵器	高台坏	72	(32)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針	底部黒青(足)	
214	1	S T583-F, 591-F		土師器	坏	140	49	ナデ, ヘラケズリ	ヘラシガキ			長石, 石英 雲母, 中砂	内黒
	2	S T583F		土師器	坏	138	(39.5)	ナデ, ヘラケズリ	ヘラシガキ			石英, 中砂	内黒
	3	S T583-E K7		土師器	坏	124 64	51	ナデ	ナデ			石英, 雲母, 細砂	
	4	S T583-E K		土師器	坏	90 22	29	ナデ, ヘラケズリ	ヘラシガキ			石英, 海綿骨針 中砂	内黒
	5	S T583-E L	494, 496	土師器	甕	194 66	287	ハケム, ナデ ヘラケズリ	ナデ			長石, 石英, 粗砂	関東系土師器
	6	S T583-E L, E P4, Y 472, 493		土師器	甕	177 56	363	ナデ, ヘラケズリ	ハケム, ナデ			長石, 石英, 粗砂	関東系土師器
	7	S T583-E L, E P4	583	土師器	甕	213	(191)	ハケム, ナデ	ナデ			長石, 石英 金雲母, 中砂	
	8	S T583-E L	494	土師器	甕	147.5	112	ナデ, ヘラケズリ	ナデ			長石, 雲母, 中砂	
215	1	S T610-F	620	土師器	甕	200	(137)	ハケム, ナデ	ナデ			長石, 石英, 雲母 金雲母, 中砂	ヌス(黒炭)
	2	S T610-F, Y	569	土師器	甕	202	(113)	ハケム, ナデ	ハケム			長石, 石英 雲母, 中砂	
	3	S T610	600	須恵器	坏	139 100	39.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	細砂		
	4	S T591-F, Y	667	土師器	甕	182 76	215	ハケム, ナデ	ハケム, ナデ			長石, 粗砂	
	5	S T591-F, Y	657	須恵器	蓋	151	31.5	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ			海綿骨針, 細砂	
	6	S T591-Y	670	須恵器	蓋	137.5	33	ロクロ	ロクロ			海綿骨針, 細砂	
	7	S T591	658	須恵器	坏	140 70	40.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	石英, 海綿骨針 中砂		
	8	S T591	668	須恵器	高台坏	125 72	42.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		長石, 中砂	
	9	S T591	669	須恵器	高台坏	137	(41)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		石英, 海綿骨針 中砂	
	10	S T591	656	須恵器	高台坏	138 79	71	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	海綿骨針, 細砂		
216	1	S T592-Y, F 597-E L1	642, 645	土師器	甕	218	(288)	ロクロ, カキメ ナデ, ヘラケズリ	ロクロ, カキメ ハケム			長石, 雲母 金雲母, 細砂	
	2	S T592-E L2	646	土師器	甕	220	(189)	ロクロ, カキメ ヘラケズリ	ロクロ, カキメ			長石, 石英 金雲母, 細砂	

表41 2次遺物観察表(6)

図録 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考		
						口径	底径							
216	3	S T 502-Y, 684-E L	617, 648 <small>502-E L, F, 307-Y 602-Y, 604 S B 600, 45-20G</small>	土師器	甕	150	(126)	ロクロ 回転ヘラナズリ	ロクロ		長石、石英、金雲母			
	4	S T 502-F, Y		須恵器	蓋		(24.5)	ロクロ 回転ヘラナズリ	ロクロ		細砂			
	5	S T 502-F, 46-40G Ⅱ		須恵器	高台坏	150	96	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂		
	6	S T 502-Y, 604		須恵器	甕	200	(250.5)	クサキ	アテ			細砂		
	7	S T 503-F		740	土師器	甕	238	(230)	ナデ	ナデ		長石、石英、雲母 金雲母	外面摩滅	
	8	S T 503-F		741	土師器	甕	188	(92.5)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ		長石、石英、雲母 中砂	輪積痕	
217	1	S T 503-F		須恵器	高台坏	126	70	42	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	海綿骨針、細砂		
	2	S T 503-F		須恵器		(40)	ロクロ	ロクロ		海綿骨針				
	3	S T 684-Y	759	土師器	仏器	46	(50)	ナデ	ナデ		石英、細砂			
	4	S T 680-Y, E L, E P 7		土師器	甕	204	(313)	ハケメ、ナデ	ハケメ		石英、雲母			
	5	S T 680-F		土師器	甕	150	(50)	ナデ、ハケメ	ナデ		中砂			
	6	S T 680-E P 6	783	土師器	甕	150	(104)	ナデ、ハケメ	ナデ		長石、石英、雲母 中砂			
	7	S T 680-Y, F	727	土師器	坏	126	56	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂		
	8	S T 680-Y, F		土師器	坏	135.5	46	48	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂		
218	3	S T 680-F, Y	724	土師器	坏	138	56	49	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂		
	4	S T 680-F, E P 4		土師器	坏	130	59	43.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石、石英、細砂	内部スス有り	
	5	S T 680-E P 8	735	土師器	坏	131	54	42	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂		
	6	S T 680-E P 7		土師器	坏	140	50	47.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	金雲母、海綿骨針		
	7	S T 680-E P 6	748	土師器	坏	137	55	52	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石、石英、粗砂	全体的に摩耗	
	8	S T 680-F	714	土師器	坏	50	(36)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	金雲母、海綿骨針			
	9	S T 680	722	土師器	坏	124	52	43	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針		
	10	S T 680-Y, E L	747	土師器	坏	137	50	49	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂		
	11	S T 680	734	土師器	坏	125	50	43.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	石英、海綿骨針		
	12	S T 680-E L	747	土師器	坏	130	50	52.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石、石英、細砂		
	13	S T 680	726	土師器	坏	127	45	46	ロクロ	ロクロ	回転糸切	金雲母、海綿骨針 細砂	底部に穴	
	14	S T 680-F, Y	727	土師器	高台坏	140	64	56	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂		
	219	1	S T 680	723	土師器	高台坏	148	71	64	ロクロ	ヘラミガキ	回転糸切	海綿骨針、細砂	内黒
		2	S T 680-F		土師器	高台坏	142	(57)	ロクロ	ヘラミガキ	回転糸切	海綿骨針、細砂	内黒	
3		S T 680		土師器	高台坏	141	65	52	ロクロ	ヘラミガキ		海綿骨針	内黒	
4		S T 680 Y 680-E L	747	土師器	甕	158	74	116	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石、石英、金雲母 海綿骨針、中砂		
5		S T 680 F		須恵器	蓋		(24)	ロクロ	ロクロ		中砂			
6		S T 680-E P 7	784	須恵器	蓋	143		33	ロクロ	ロクロ		中砂		
7		S T 680	725	須恵器	坏	143	60	41	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂	底部磨書 「百乃」	
8		S T 680 F		須恵器	坏	126	41	42	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針		
9		S T 680-E P 1, F		須恵器	高台坏	158	54	54	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂		
10		S T 680 Y		須恵器	高台坏	91	(38)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針	底部縁割 スス有		
11		S T 680-E P 8		須恵器	仏器	54	(35)	ロクロ	ロクロ		海綿骨針、細砂			

表42 2次遺物観察表(7)

図号 番号	探検 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm) 口径 底径 器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考
219	12	S T602-F	705	土師器	甕	141 66 114	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石、金雲母 海綿骨針、細砂	
	13	S T602-Y		須恵器	坏	68 (19.5)	ロクロ	ロクロ		海綿骨針、細砂	底部線刻
	14	S T602-F		須恵器	坏	130 60 35.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂	
	15	S T602-F, 604-F, X0		須恵器	坏	128 64 41	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針、細砂	内外面火傷
	16	S T602, 46-40G		須恵器	板蓋甕	106 (53.5)	ロクロ	ロクロ		中砂	
220	1	S T602-F		須恵器	甕	(70)	ロクロ	ロクロ		中砂	
	2	S T603	779	土師器	甕	236 (114)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ		長石、石英、金雲母 粗砂	
	3	S T603-F	754	土師器	甕	208 (140)	タタキ、ヘラケズリ	カキメ		石英、雲母	
	4	S T603-F, Y	776	土師器	甕	240 362	ロクロ、タタキ ヘラケズリ	ロクロ、ハケメ		石英、金雲母 海綿骨針	
	5	S T603-F	755	土師器	甕	208 379	ロクロ、タタキ ヘラケズリ	ロクロ、ハケメ カキメ		長石、金雲母 粗砂	
221	1	S T603-F, Y, E L	756, 757 777	土師器	甕	260 (175)	ロクロ、カキメ ヘラケズリ	ロクロ、カキメ		長石、雲母 海綿骨針、中砂	
	2	S T603-E L, F, Y	777	土師器	甕	230 (222)	ロクロ、カキメ タタキ、ヘラケズリ	ロクロ		長石、石英、金雲母 海綿骨針、中砂	
	3	S T603-E L, F, E L Y	777	土師器	甕	160 52 156	ロクロ、カキメ ヘラケズリ	ロクロ、カキメ		長石、石英、金雲母 海綿骨針、中砂	
	4	S T603-E L	789	土師器	甕	168 68 148.5	ロクロ、カキメ ヘラケズリ	ロクロ、カキメ		長石、石英、細砂	
	5	S T603-F		土師器	甕	164 (86)	ロクロ	ロクロ		長石、金雲母 海綿骨針、中砂	
	6	S T603	752	須恵器	蓋	163 38	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		長石、中砂	
	7	S T603-Y	778	須恵器	蓋	145 31	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		海綿骨針	
	8	S T603	753	須恵器	坏	148 90 37	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切戻 ケズリ調整	粗砂	
	9	S T603-Y	755, 788	須恵器	坏	141 88 36	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切戻 ナデ調整	長石、粗砂	
	10	S T603-Y	775	須恵器	高台坏	138 (42)	ロクロ	ロクロ		中砂	
222	1	S T603-Y	787	須恵器	高台坏	125 (45)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	中砂	
	2	S T604-E L	751, 729	土師器	甕	218 92 362	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ		長石、石英、金雲母 海綿骨針、中砂	
	3	S T604-Y, F		土師器	甕	128 (78)	ロクロ	ロクロ		長石、石英、金雲母 細砂	
	4	S T604-E K1		須恵器	坏	150 84 41	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	海綿骨針、細砂	
	5	S T604-F, Y	728	須恵器	甕	(244)	ロクロ カキメ、タタキ	アデ		長石、中砂	
223	1	S T607-F, Y	700	土師器	甕	213 (335)	ロクロ、カキメ タタキ、ヘラケズリ	ロクロ、カキメ		雲母、金雲母、中砂	
	2	S T607-F	699	須恵器	高台坏	138 80 43.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂	
	3	S T607, 46-40G	739	須恵器	高台坏	58 (40)	ロクロ	ロクロ		細砂	
	4	S T607-F	708	須恵器	甕	(160)	ロクロ、ヘラケズリ 回転ヘラケズリ	ロクロ、カキメ			
	5	S T597-E L	642	土師器	甕	147 76 132	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	木葉痕	長石、石英、粗砂	輪轆痕
	6	S T597-E K4,5		土師器	甕	200 (122)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ		細砂	
	7	S T597-Y, 7F, E K4F		土師器	甕	70 (90)	ハケメ	ハケメ		中砂	
224	1	S T597-F, E K1-6, E L1, Y		土師器	甕	214 (332)	ロクロ、カキメ ヘラケズリ	ロクロ、カキメ		長石、石英、金雲母	
	2	S T597-F, 592-F	641	須恵器	蓋	150 30	ロクロ	ロクロ		海綿骨針、中砂	墨書
	3	S T597-Y		須恵器	蓋	146 (28)	ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		中砂	
	4	S T597-E K4		須恵器	坏	148 80 41	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石	
	5	S T597, 602-F 45-39G III	639	須恵器	坏	76 (30)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切戻 ナデ調整	海綿骨針、中砂	

表43 2次遺物観察表(8)

図録 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考		
						口径	底径							
224	6	ST307-Y	610	須恵器	坏	148	80	41	ロクロ	ロクロ	回転糸切	長石、海綿骨針 中砂		
	7	ST307-Y		須恵器	坏	92	(33)	ロクロ	ロクロ	手持ヘラケズリ		長石、海綿骨針 細砂	火焼 底部黒書(百)	
	8	ST631		土師器	甬	120	(87)	ナデ	ナデ			長石、雲母、中砂		
	9	ST631-Y		須恵器	鉢		(64)	ロクロ	ロクロ			細砂		
225	1	ST305	622	土師器	甬		(101)	ナデ、ヘラミガキ	ナデ			石英、雲母、細砂	内面黒色処理	
	2	ST305-F		土師器	甕	162	(74)	ハケメ、ナデ	ナデ			長石、粗砂		
	3	ST305	623	土師器	台付甕	116	(117)	ナデ	ナデ			石英、海綿骨針		
	4	ST622-F		土師器	甬	142	(105)	ハケメ、ナデ	ナデ			長石、石英、粗砂	輪積直 観合口縁	
	5	ST622-F, Y	664	土師器	甕	214	(174)	ハケメ、ナデ	ナデ			石英、雲母、細砂		
	6	ST622-F, Y	664	土師器	甕	90	(156)	ハケメ	ハケメ			石英、雲母、細砂		
	7	ST622-F		土師器	甕	180	(55)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ			石英、細砂		
	8	ST622-F		土師器	鉢		(37)	ナデ	ハケメ			長石、細砂		
226	1	ST627-E L	732	土師器	甕	210	(270)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ			石英、雲母、細砂		
	2	ST627-F	684, 685 731	土師器	甕	205	(124)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ			長石、石英、中砂		
	3	ST627-E L	684, 690	土師器	甕	222	91	166	ハケメ、ナデ ヘラケズリ	ハケメ、ナデ			長石、石英、中砂	
	4	ST627-F, Y, E L	684, 733	土師器	甕	240		340	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ ヘラナデ			長石、雲母 海綿骨針、中砂	
	5	ST627-E L	731	土師器	甕	224		(192)	ロクロ、カキメ ヘラケズリ	ロクロ			金雲母、雲母 海綿骨針、細砂	
227	1	ST627-F, Y, E L	682, 730	土師器	甕	237	84	368	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ ヘラナデ			長石、石英、中砂	
	2	ST627-E L	686, 688	土師器	甕	236		(315)	ロクロ、カキメ ヘラケズリ	ロクロ			金雲母、雲母、細砂	
	3	ST627-E L, F, Y	682, 684 719	土師器	甕	197	94	263	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ、カキメ			長石、石英、金雲母 雲母、中砂	
	4	ST627-E L	687	土師器	甕	154	80	141	ロクロ	ロクロ	静止糸切		金雲母、海綿骨針 細砂	
228	1	ST627-F, E L	719	土師器	甕	131		(106)	ロクロ	ロクロ			長石、金雲母 海綿骨針、細砂	
	2	ST627	691	須恵器	坏	140	80	36	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		細砂	底部黒書
	3	ST627-Y	675	須恵器	坏	140	77	41	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		細砂	
	4	ST627	5	須恵器	坏	140	90	36	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切		海綿骨針、細砂	
	5	ST627	4	須恵器	坏	142	80	34	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		細砂	
	6	ST627	681	須恵器	坏	131	70	42	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		細砂	
	7	ST627-Y, E L	674	須恵器	高台坏	130	81	48	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		長石、細砂	
	8	ST627-Y	672	須恵器	高台坏	138	81	48	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		細砂	
	9	ST628-Y	713	土師器	甬	137	66	245	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ			長石、石英、細砂	
	10	ST628-F		土師器	甕	208		(42)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ			中砂	
	11	ST628-F	715	土師器	甕	146	30	124	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ			長石、石英 海綿骨針、中砂	
229	1	ST632-F	768	土師器	鉢	206	80	145	ロクロ、カキメ ヘラケズリ	ロクロ			長石、海綿骨針 細砂	
	2	ST632-F, E L1, E L2	767	土師器	甕	223		(200)	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ ヘラナデ			長石、海綿骨針 細砂	
	3	ST632-F, E L	767	土師器	甕	180		(164)	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ			長石、海綿骨針 中砂	
	4	ST632-F, E L2, Y	764	土師器	甕	142	72	149.5	ロクロ	ロクロ			金雲母、海綿骨針 細砂	
	5	ST632- E L1, F, E L2, Y, EP2	770	土師器	甕	154	75	139	ロクロ、カキメ	ロクロ、カキメ			石英、金雲母、細砂	



表44 2次遺物観察表(9)

図面 番号	検出 番号	出土遺構	登録 番号	種別	器種	計測値 (mm)	計測値 口径	器高	外面	調整 内面	底部	胎土	備考
229	6	S T632F, E, L	766, 767	土師器	甕	150	(94)		ロクロ, カキメ ヘラケズリ	ロクロ		長石, 石英, 金雲母 海綿骨針, 粗砂	
230	1	S T632F, E, P, 2	768	土師器	甕	332	(205)		ロクロ, カキメ ヘラケズリ	ロクロ カキメ, ハケメ		長石, 雲母, 金雲母 粗砂	
	2	S T632E L1, 632F	769	土師器	甕	262	120	139	ロクロ, カキメ	ロクロ, カキメ	回転ヘラ切	長石, 石英, 金雲母 粗砂	
	3	S T632F	737	須恵器	坏	142	86	40	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針, 粗砂	
	4	S T632-E L	786	須恵器	坏	136	87	33	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	海綿骨針, 粗砂	内外面火摩
	5	S T181F		土師器	甕	151	78	140	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ	木葉痕	長石, 金雲母, 粗砂	
	6	S T181-F, E, P1		土師器	甕	116	(81)		ナデ	ナデ		長石, 粗砂	
	7	S T181		須恵器	坏	89	(14)		ロクロ	ロクロ	静止糸切後 回転ヘラケズリ	粗砂	
231	1	S T686-Y	762	土師器	坏	140	(43)		ナデ, ヘラケズリ	ナデ		中砂	
	2	S T686-F, Y, 687Y	760	土師器	甕	181	94	288.5	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ	木葉痕	石英, 粗砂	
	3	S T686-F		土師器	甕	243	(75)		ナデ	ナデ		石英, 粗砂	
	4	S T686-Y	761	土師器	鉢		(20)					金雲母, 粗砂	
232	1	S B600-E B7		須恵器	坏	136	66	35	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整		外面火摩
	2	S B600-E B5, 46-41G Ⅱ 47-43G F		須恵器	坏	70	(21)		ロクロ	ロクロ	回転糸切		
	3	S B600-E B8		須恵器	坏		(40)		ロクロ	ロクロ		粗砂	
	4	S B600-E B6		須恵器	甕		(29)		ロクロ	ロクロ		海綿骨針, 粗砂	
	5	S B701-E B3		須恵器	甕		(73)		ロクロ	ロクロ		長石, 粗砂	
	6	S D675		須恵器	蓋	133	(21)		ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ			
	7	S K546, 36-35G	736	須恵器	蓋	164.5	(38)		ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		中砂	
	8	S K608-F		土師器	甕	200	(59)		ハケメ, ナデ	ナデ		長石, 中砂	
	9	S K608-F, 44-41G		土師器	甕	190	(56)		ハケメ, ナデ	ナデ		長石, 石英, 中砂	
	10	S K658-Y	638	土師器	甕	263	(116, 5)		ロクロ, ヘラケズリ	ロクロ, カキメ		長石, 金雲母, 粗砂	
	11	S K658	663	須恵器	坏	150	96	39.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切		
	12	S K658	662	須恵器	高台坏	132	86	45.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	中砂	
	13	S K658-Y		須恵器	甕	143	(49)		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	中砂	
	14	S K630		須恵器	坏	138	78	44	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 回転ヘラケズリ	長石, 海綿骨針 中砂	
233	1	48-42G Ⅱ		土師器	坏	152	44		ハケメ, ナデ	ヘラミガキ		粗砂	
	2	40-38G	447	土師器	甕	202	(104)		ハケメ, ナデ	ナデ		石英, 雲母, 粗砂	
	3	47-38G Ⅱ		土師器	甕	140	(130)		ハケメ	ハケメ		長石, 雲母, 中砂	
	4	40-36G Ⅱ		土師器	鉢	180	54	91	ハケメ	ハケメ		海綿骨針, 粗砂	
	5	43-39G	661	須恵器	蓋	142	38		ロクロ 回転ヘラケズリ	ロクロ		石英, 海綿骨針 中砂	
	6	53-43G		須恵器	坏	130	76	44	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	粗砂	
	7	43-4G2-F		須恵器	坏	70	(19)		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切後 ナデ調整	粗砂	
	8	42-39G Ⅱ	627	須恵器	坏	150	56	46	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針, 粗砂	
	9	45-42G-F 46-42G-F		須恵器	坏	132	66	40	ロクロ	ロクロ	回転糸切	海綿骨針, 粗砂	底部黒青
	10	46-40G Ⅱ	445	須恵器	高台坏	134	82	48.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	中砂	
	11	46-40G Ⅱ		須恵器	甕	201	(64)		ロクロ, タタキ	ロクロ		粗砂	

表45 2次土製品観察表

図版番号	神図番号	出土遺構	登録番号	種類	長さ	計測値 (mm)	備考
						幅 厚さ	
234	1	S T573F	481	土鉢	56.5	17	15
	2	S T591Y	650	土鉢	53	19	16.5
	3	S T591Y	651	土鉢	58.5	19.5	16.5
	4	S T591Y	652	土鉢	51	19.5	17.5
	5	S T591Y	653	土鉢	51.5	29	17
	6	S T591Y	654	土鉢	55	19.5	18
	7	S T591Y	655	土鉢	48	21.5	19.5
	8	S T591F		土鉢	55	20	17
	9	S T651-E K1	621	土玉	34	29	25.5
	10	S T615Y	599	土玉	35	42.5	36
	11	S T615	693	土玉	33.5	35	29.5
	12	S T615	692	土玉	30	37	28.5
	13	S T615	694	土玉	39	38	28
	14	S T589	710	土玉	30	31.5	24
	15	S T583F	472	土玉	34.5	36	27
	16	S T583F	473	土玉	34	34.5	33.5
	17	S T602F	680	土玉	32.5	34	38
	18	S T552F	566	土玉	34.5	34	32
	19	S T610Y		紡錘車	28.5	42	24
	20	S T622	679	羽口	78	90	36 輪蓋
	21	S T610Y	568	支脚	47.5	57.5	58

表46 2次土製品観察表

図版番号	神図番号	出土遺構	登録番号	種類	長さ	計測値 (mm)	重量 (g)	備考
						幅 厚さ		
234	22	S T632	738	勾玉	48.5	28	17	29.1
	23	S T632	750	勾玉	31	19	7.5	6.1
	24	S T680Y		砥石	76	50	38	
	25	S T583Y		砥石	62	27	20	
	235	1	S T552	563	砥石	44.5	40	17
2		S T592-F		砥石	42	27	13	
3		S T615	702	砥石	138	67	74	
4		S T632	749	砥石	119	87	87	
236	1	S T574	572	石念子	50.5	22.5	23	38.0
	2	S T574	573	石念子	54.5	27.5	16.5	35.2
	3	S T574	574	石念子	64	32	14	42.4
	4	S T574	576	石念子	59	27.5	18	42.1
	5	S T574	577	石念子	58	27	14.5	36.1
	6	S T574	578	石念子	63	26.5	13.5	34.2
	7	S T574	579	石念子	53	30	18	33.9
	8	S T574	580	石念子	55	26	17	35.5
	9	S T574	575	石念子	48	29.5	18	37.1
	10	S T574	581	石念子	58	28	14.5	35.3
	11	S T574	582	石念子	62.5	21	16	27.2
	12	S T574	583	石念子	68.5	29.5	13	39.7
237	1	S T574	584	石念子	68	30	15	45.4
	2	S T574	585	石念子	59.5	29	13.5	28.8
	3	S T574	586	石念子	60.5	31.5	12	56.4
	4	S T574	587	石念子	64	28	21	44.8
	5	S T574	588	石念子	66.5	32.5	16	42.7
	6	S T574	589	石念子	64.5	32	16.5	41.4
	7	S T614-E L1		支脚	149	71	52.5	

表47 2次金屬製品観察表

図面 番号	検査 番号	出土遺構	登録 番号	器種	長さ	計測値 (mm)			備考
						幅	厚さ	重量 (g)	
237	8	S T 555	504	鏝	216	46	10	121.8	
	9	S T 632	746	鉄線?	127	19	7	8.5	
	10	S T 680	721	鉄線?	60	18	3	3.9	
	11	S T 181		青銅板	31	60	5	20.9	
	12	S T 574	518	鉄線?	110	28	5	15.9	
	1	S T 550-E L		鉄線	54.5	16	5.5	5.4	
238	2	S T 632	746	不明	45	12.5	8	3.9	
	3	S T 632	771	鉄線	48	12	4.5	3.6	
	4	S T 615	598	鉄線	65	15	6	8.0	
	5	S T 615	598	不明	44	12	5.5	3.7	
	6	S T 533	534	鉄線	72	30	6	7.3	
	7	S T 535	513	銅	85	29	12	28.3	
	8	S T 620	562	環状金具	62.5	26	12	16.2	
	9	S T 586		環状金具	28.5	7	6.5	1.5	
	10	S T 586		環状金具	32	7	5.5	2.0	
	11	S T 586		環状金具	29.5	5	4.5	2.0	
	12	S T 603	774	不明	71	70	5	3.9	
	13	S T 615	571	不明	78.5	8	6	5.0	
	14	S T 680	782	不明	49	7	5	2.4	
	15	S T 627	671	鉄線	72	13	4	3.9	
	16	S T 591	628	不明	65	8	5.5	4.8	
	17	S T 549	491	不明	80	8	6.5	4.6	
	18	S T 574	517	不明	88	7.5	5.5	5.1	
	19	S T 549	471	不明	84.5	8	5.5	4.3	
	20	S T 591	628	不明	50.5	11	8.5	6.7	
	21	S T 181	717	不明	37	9	6	1.5	
	22	S T 574	519	不明	74	29	13	20.0	
	23	S T 181	717	不明	43.5	19	9.5	6.5	
	24	S T 181	717	不明	38	14	7	3.5	
	25	S T 583	707	釘	46.5	15.5	9.5	6.8	
	26	S T 586		不明	29.5	10	5.4	2.1	